
drop

池本いつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

drop

【Nコード】

N4224G

【作者名】

池本いつき

【あらすじ】

主人公は三姉妹の末っ子。初恋とも呼べないモノしか経験したことない彼女が出会ったのは、タバコ片手の理科教師。口止めにもらったのは桃色のドロップ。そこから始まるのは切ないだけの、恋？王道を走りつつ、『切ない』を合言葉にやっています。本編完結しました。ちよこちよこ短編更新中。

第一話 『桃色ドロップ』（前書き）

長いので、中々進展がありません。頑張って書きますので、長い目で見てやってください。

第一話 『桃色ドロップ』

「藍華？ 学校いくよ？」

少女は肩より長い髪を鬱陶しげにかき揚げ、階段の下から叫んだ。艶やかな真つ黒の髪と白い卵型の顔、意思の強そうな瞳を除けば、可愛らしい顔立ちである。

しかし少女の持つ雰囲気は可愛らしいというよりも、むしろ凛々しかった。

「お姉ちゃん、先行つて！ ？さん待ってる」

それに対し藍華と呼ばれた少女は部屋の中から返す。こちらは少し明るめの髪で、軽く癖がある。可愛らしいというよりは、美人と表現するのがふさわしいかった。

「そう？ 先行くよ？」

「いつてらっしやい」

バタバタと、階下から音がして、玄関のドアが閉まったのを藍華は確認した。すっかり支度はしていたので、あと五分もすれば出て行けるだろう。

そして、窓から外を見て、仲良く歩いていく二人を目で追う。

「いつてらっしやい……」

部屋の中、その声だけが響いた。

「平田さんって、三年生にお姉さんいるよね？ 二人姉妹？」

まだ少し慣れていない友人が藍華に話しかける。

「ううん。三人姉妹。大学生のお姉ちゃんがいるの。朔華が上のお姉ちゃん、春華が一コ上のお姉ちゃん」

へえ、と感心したような友人の声を聞き、藍華は続けた。

「でも、どうして？」

「あのね、藤田先輩とはどんな関係なのかな、と思って……」
さつと顔を赤くして、その子が言うので、藍華は眉を下げて言った。

「恋人　かな？」

苦笑いのような顔をする。

『くつつくままでに時間がかかったんだけどね』

というと、友人は残念そうに肩をすくめた。藤田^{ふじた}？也^{そりや}は下級生には人気であるということが、ここで初めて藍華の耳に入る。

「そっか。じゃあ、仕方ないかなあ。かつこよかったのに」

そういう友人に笑顔を返しつつ、呟いた。

『くつつくままでに、時間がかかったから……多分離れないよ』

小さな声で、少しだけ、苦しそうな笑い方だった。

二年生に上がったばかりの四月。

今日はたまたま理科準備室に用があり、美術室に行く前によらなければならぬ。……正直に言うと、宿題ができていなくて、休憩時間中にやっと終わったのだ。

言い訳を付け足しておくなら、宿題の量が半端なく多く、春休み後半から始めていては間に合わなかった。決して、一昨日、昨日から始めたわけではない。

「めんどくさい」

そうは言っても、前半を遊んでいたのは自分なのだから仕方がない。自分に言い聞かせて藍華は扉の前に立った。

コンコン、と古びた扉を叩くが返事がない。

いないのならさつさと置いて帰ってしまえばいい、そう思い直し、扉に手をかけ思いつき横にスライドさせた。

「失礼しま……」

言いかけて止まる。少々広い準備室の中、一人だけ人がいたからだ。

しかも、タバコ片手に。

「「あ……」」

お互いに、目を合わせて呟く。ノートを思わず落としそうになり、慌てて握りなおした。あまりの驚きに、一瞬自分が何をしにきたのかも忘れた。

「えっと、失礼します？ 先生」

少しよれてしまった白衣と、だらしなく緩められたネクタイ。机に上げられた足……。どれをとったって見えない。印象が、違いすぎる。

「平田。ノックぐらいしろよ」

さわやかで、優しいよね。菊池先生って、と生徒に言われる先生に。

どごがだよ、とつつこみそうになる自分を抑えて、無理矢理笑顔を作る。

「失礼しました」

見なかったことにするしかない。いや、私は何も見ていない。

藍華はそう自分に言い聞かせて回れ右をする。

しかしその瞬間。

「平田」

思いのほか強く名前を呼ばれて止まる。この人、さっきからあなたの名前呼んでるけど、知ってるのか？ そう思いながら、振り返った。

担任でもない。……確かに理科の担当教諭ではあれど、よく覚え

てるな、生徒の名前。藍華は思いなおした。一年生のときの理科総合の担当が違ったので、この先生に授業を受け持つてもらったことはないはずなのに。

怒られる？ 口止めされる？ いや、成績片手に脅される？ 頭の中でたくさんの可能性が浮かんでは消えていく。

何しろ、理科は苦手だ。

先生の心証さえも悪くなってしまえば、成績はどうなるのだろうか……。想像したくもない、そんなもの。

「先生」

「手、出せ」

誰にも言いませんから、と言い終わる前に言われ、藍華は渋々手を出す。何をされるのか分からないので、若干腰が引けている。

「口止め料な？」

にやり、と『爽やかで、優しい』先生とは正反対の笑みを浮かべている先生を見て、藍華は驚く。

慌てて、手のひらを見るとアメが一つ。

「餌付け……ですか？」

「そんなもんかな？」

ノート出して早く行け、と言われたので、ノートを差し出し、扉を開く。

「失礼しました」

トン、と扉を閉めると美術室に向かう階段に足をかけた。

包み紙を開けると、そこには小さい頃によく食べていたドロップが一つ。

ピンク色の、ドロップ。

「菊池先生……か」

「藍華のクラスの理科を担当して、隣のクラスの担任だ。」

若い担任だというのが第一印象だった。クラスメイトや隣のクラスの人たちからも好感をもたれていた。

縁がないので顔もまじまじと見たことはなかった。

「先生……ぼくない」

それが第二の印象。

第一話 『桃色ドロップ』（後書き）

遅々としか進みませんが、愛だけはつめてますので、よろしく願
いします。

第二話 『青色絵の具』

美術室には誰もいなかった。

そのことに若干の寂しさを覚えつつも、一人でいる気楽な部活が好きなのであまり気にもならない。

藍華はかばんを隣のイスに置くと、いくつも立ててあるキャンバスから少し小さめの物を取り出した。

二人の男女の絵だ。少女が右で、少年が左の背中合わせ絵。とても丁寧に描かれている。

触れ合っているのは背中だけで、それが友人関係かどうかなんて分からない。

ただ、雰囲気だけで、恋人同士だと見る者に知らせていた。色も塗られていない、黒と白だけの寂しい絵だった。

藍華はしばらくその絵をじっと見た後、パレットと筆を取り出した。アクリル絵の具と呼ばれるものをパレットに出し、人物から塗っていく。

肩より少しだけ長い髪の少女は上を見上げていた。その頭は少年の肩に乗っている。その少年は下を向いていた。

少女の髪は濡れたような黒、頬は対照的な白。制服はこの学校の制服だ。膝を抱え込んでいるせいで、少し捲れたスカートから素肌が見えていた。

そしてその左足には、薄い線が走っている。

他の皮膚とは違つと一瞬で分かる　古い傷跡だった。

そこだけは違つ生き物のように、薄い桃色の傷跡。

内側から外側へ斜めに走る線がやけにはっきりと描写してある。少女を全て塗り終わると、藍華はその足の傷を撫でた。

「もう、諦めてるんだよ……」
水を含みすぎた筆から、涙の代わりに雫が一つ　零れ落ちた。

どれくらい時間が経ったのか、藍華さえ分からなくなったとき、美術室の扉が開いた。

「もう下校時間だ。さっさと帰れ」

どこか不機嫌さを含んでいる声に、もうそんな時間かと思うと同時に席を立った。しかしすぐさま、その声がいつもの先生ではないことに気がつき、慌てて振り返る。

「「あ……」」

二回目だ、と心の中で呟く。

「菊池先生。どうしていらっしゃるんですか？　え、あの坂野先生がいつも鍵を閉めてくださってるんですけど」

顔見知りの……というか、部活をまったく見に来ない顧問の名前を口に出す。未だにあちこちの賞に応募しては入賞する美術講師だ。しかしかなりの変わり者で、やる仕事といえば、とっくに生徒のいなくなった美術室に鍵を閉めるだけ。

美術の時間は教材のビデオをセットし、プリントを配るとさっさと部屋へ帰ってしまうのだ。

「その先生、外国の賞に入選して旅行中。ついでにあっちで少し勉強して帰るんだと」

早く出る、と冷たく言われて、急いでキャンパスを片付ける。そしてかばんを片手で掴むと、頭を下げてすぐさま教室から出ようとして、捕まった。

右手をがっしりと掴まれる。

「何か言うことは？」

意地悪そうな声が聞こえる。ぎくりと肩をこわばらせた後、おずおずと声を出す。

「先生の秘密は、しゃべりません。……アメの分は」
ほう、とわざとらしく聞き返されたので、慌てて言い直す。

「言いません！ 絶対に」

そう言うのが早いか、手を振り払って外へ出た。

「おかえり。あいちゃん。今日はちょっと早いね」

玄関を入ると、部屋から足音がして、腰まで伸ばした髪が艶やかな少女が出てきた。真っ黒な髪と少々幼い顔は次女である春華とそっくりだ。

藍華は少し明るめの髪をしているし、くせつ毛で大人びた顔立ちをしている。

長女と次女は母親似、三女は父親にだというのが周囲からの評価だ。

「ただいま。早く美術室から追い出されちゃったから」

着替えてこようと階段に向かう。しかしその途中で声がかかった。

「藍華？ やっぱりわたし、藍華が終わるまで学校で待とうか？」

部屋着にエプロンをして、お玉片手にこちらへ来るのは春華だ。

その後ろには、同じくエプロンをつけた^{ヤシキ}也がいる。

藤田 ？也

藍華たちの幼なじみ兼春華の恋人。
数年前に引越したが、去年帰ってきてめでたく春華と恋人同士
になった。

藍華の初恋の人。

「いいよ。お二人さんの邪魔をするほどあたしヤボじゃないもん」
からかい半分の言葉を出すと、『わたしと？は別に』と言いつ返し
てきた。

そして春華は決まりが悪くなったのか、台所へと帰っていく。

「あいちゃん。はるちゃんは心配してるんだから、からかつちゃだ
めだよ？」

容姿は似ているのに、おっとりとしている朔華とはきはきしてい
る春華では性格が全く違う。

朔華がやんわりと注意したので、藍華はにこつと笑ってうなづい
た。そして春華の後を追おうとしている？也に声をかけた。

「お姉ちゃんをよろしくお願いしますね」

他人行儀な言葉に眉を寄せた後、少しだけ笑った？也を見て、藍
華は笑った。

見たこともないくらい大人びた、さびしい表情だった。

第三話 『黒色秘密』

それからだ。

度々菊池に藍華が遭うようになったのは。会う、というよりは、本当に『遭う』と表現したほうが正しい。遭遇したくないものに、遭ってしまうのだから、その表現も当然だろう。

それは部活をし始めてすぐだったり、美術室を閉めに来るだけだったり。しかし毎回変わらなかったのは、アメを一つくれること。

『口止め料』それが決まり文句のように毎回言われた。

「先生、ここ禁煙ですよ。……学校全体が禁煙ですけどね」

「いいんだよ。口止めしてんだから」

「あたしまで共犯だと思われたらどうするんですか？」

「え、共犯、でないと言い張るのか？ 平田」

ムリだろ、それは。

菊池が笑う。授業中にするような、優しい笑顔ではない。どちらかというと、悪人の笑みだと藍華は思うようになっていた。

「先生。下の名前は何ですか？」

「優斗^{ゆうと}。優しいに北斗七星の『と』」

「先生の名前は嘘つきですね」

「何が言いたい、平田」

ゆったりとした空気だった。めったに来るはずのない部員たちは、コンテストに出すようなものを描くわけでもない。

幽霊部員で構成されているといってもおかしくないほど、活動はない。顧問が顧問なだけに、生徒もやる気がないのだ。

活動しているかさえ怪しく、部活勧誘も美術部だけはやけに消極

的だった。

「よし。できた。入学して三枚目」

トン、と机に立てかけると、少し離れて自分の絵を見る。そして納得したように一回頷くと、その絵を風通しのよさそうな机の上に置いた。少し乾かせば完全に完成する。

「なあ」

「何ですか？」

「これ、誰と誰を描いてんの？」

その言葉に、藍華の表情が固まった。

「少女と少年ですよ。名前もない」

「名前もない、ね」

確かめるような口調ではなかった。

どこか確信めいている、それでいて藍華の嘘に付き合おうとしているようだった。

「先生は、誰と誰だと思っんですか？」

小さな声で、藍華が問う。

何かを、恐れているような声だ。真実を、知られたくない。だけど本当のことを誰かに気づいてほしい。

きゅつとスカートの裾を握り締めて、藍華はまっすぐと菊池を見た。

「知らないけど、でもモデルはいると思う。ネクタイが二年の色だし」

再び藍華の肩が揺れた。何かを恐れるように、下を向く。そしてしばらく視線をさまよわせた後、唇をかみ締めた。

「愚痴になりますよ」

「生徒の愚痴を聞くのも、教師の役目だって校長が言ってたよ」

冗談めかしのその言葉に藍華は笑う。

「その校長先生ですよ？ 校内前面禁煙にしたの」

無理矢理に笑顔を作ると、イスに座った。そしてふつと息を吐くと、思い切ったように顔を上げた。

「その二人は、あたしの姉とその恋人ですよ」

菊池は何も言わず、眉を少しだけ上げた。そして視線を絵に向ける。この人は、授業中はメガネだ、と藍華はふとそんなことを思った。

「姉の恋人は、あたしの初恋の人……なんです」

だから、その絵には青がたくさん使われてて、哀しいものになっちゃうんです。

もともと、初恋って呼べないくらいのもななんですけど。

苦々しく笑い、藍華は言った。

「前の二枚も、同じ二人ですよ」

口角だけを上げて、藍華は笑った。

まるで、自分をあざ笑うかのような笑い方だ。

「その男の人のモデル……藤田 ？ 也さんって言うんですけど。あたしたちの幼なじみなんです」

藍華はそつと机の上の絵に指を滑らせた。

「小さい頃から、お姉ちゃんしか見えてなくて。年下のあたしが見ても、好きなんだなあって分かった」

泣き出しそうな笑顔を作り、菊池と向かい合う。

「でも、お姉ちゃんの足に傷を作ったんです。……？ さんのせいじゃないんですけど、？ さんは自分のせいだと思ってるみたいでした」
それで、そのまま引越しちゃったんです。お姉ちゃんにだけ、引越すことを言わないまま。

少女の足についた傷を撫でると、くすりと笑った。

「そのとき、一瞬思ったんです。このまま、二人がもう出会わなければいいのって」

嫉妬って、言えないくらい、幼い考えです。

藍華が笑ったまま、涙をひとつ流した。まるで、幼かった自分を笑うかのように、まるで、愚かだった自分を後悔するように。

「そうすれば　もしかしたら、？さんの心は変わるかもしれない。あたしに向かなくても、春ねえ以外の人に向くかもしれない、って。浅ましいですね」

自分が思ったことが許せなかった。嫉妬とも名づけられないくらい幼稚で、誰のためにもならない考え。

姉の手に入らなくなると同時に、自分の手にも入らなくなるということさえ知らずに。大好きな姉と、大好きな人の幸せを祈れない自分が悔しくていけなかった。

「でも、春ねえの悲しそうな顔を見るのは耐えられなかった。無理矢理作る笑顔も見たくなかった」

どうしてあんな人に、あんな感情を持ったんだろうと、笑う。笑わなければ、自分が壊れてしまおうとも言うように。

「だから二人が再会して、付き合うようになって。仲良くしてるのを見ると……少し嬉しいんです」

今度は優しく微笑んだ。

本当に、そのことが嬉しいんだと分かるような、笑顔だった。あるいは、自分の罪が少し薄れたと感じたからかもしれない。

「嫉妬なんて……。もうとっくに感じなくなってたんだって、そのときに分かりました。むしろ、あの感情は、嫉妬じゃなくて。ただの姉を取られそうになった妹が感じた、拗ねるような感情じゃなかったのかって」

だから、少しだけ悲しくても、祝福はできた。二人が寄り添っているのを、見るのは嫌いじゃなかった。

「何で……描くんだ？」

唐突に菊池が口を開く。今まで黙っていたので、藍華は驚いて菊池を見た。

「自分の心が、憧れだって、確かめるためです」

あの二人のような恋がしたかったという憧れなんだと、そう自分

に言い聞かせるように。

「?さんへの気持ちも、すべては憧れだったんだって」
だから絵を描く。

「でもさ。お前としては、まだ吹っ切れてないんだろ」

どこから出してきたのか、以前の二枚の絵も加え、三枚を並べる。
「どれも、この二人目を合わせてない」

どれも二人はどこか違うところを見ていた。触れているのは体の一部で、手を繋いでいることもなかった。

恋人同士だと分かる雰囲気なのに、恋人同士だと思えない触れ合い方をする。ただただ、隣にいるだけ、寄り添うだけ。

そんな二人しか、いなかった。

「二人の関係は、そんなものですから」

目を合わせなくても、体の一部しか触れ合っていないなくても。

「二人が……二人でいることが当たり前で、自然すぎるんです」

そう言って、もう一度だけ、きれいに笑った。

「お前さ」

菊池が口を開く。

「泣くぐらい辛いんなら、本物の恋してみる」

ぼんぼんと藍華の頭をたたいた。

必死に抑えていたことを見破られた気がして、顔が熱くなった。

「もしかしたら、一番最初に見た同世代の少年だから、そいつのことが好きだと思ってるかもしれないし」

懐からタバコを出し、ライターで火をつけた。伏し目がちにタバコに火をつける菊池の顔が、ライターの火によって陰影がつけられる。

するとそこそこ整っているように見えた容貌がより一層きれいに見える。

「鳥のすりこみですか……」

「そんなもん」

またにやりといつも顔で笑う。タバコの煙が藍華のほうへ向かないように、よそを向き、ゆっくりと吐き出した。

「ほかのやつ好きになれば、『好き』ってことが分かるんじゃない？」

「先生が、先生らしいこと言ってます」

「俺、一応教師だから」

つつこみつつ、ポケットから包み紙に包まれたアメを出す。

「ほれ、口止め料」

ぼんと手の上に乗せられて、藍華は苦笑する。

「すっかり餌付けされました」

帰れ、もう閉めるぞ、と言われ、三枚の絵を片付けた。そこでふと藍華は頭に浮かんだ質問を口に出す。

「先生、つかぬ事をお伺いしますが……」

言っているのかな？ という疑問が浮かぶが、気にせず口に出す。「先生は、したことあるんですか？ その……『本物の恋』??」

菊池は驚いたように目を見開き、そして肯定とも否定とも取れぬ笑顔に向けた。

授業中に向けるような笑顔とも、藍華に向ける笑顔とも違う、不思議な笑顔だった。

「下校時間だ。さっさと帰れ。門閉まるぞ」

肩に手を乗せられ、扉まで向けられる。

さっきの質問の答えは、得られないままだった。

「先生」

「本当に門閉まるぞ」

質問をさえぎるように言われたので、藍華はおとなしく部屋から出た。がちやりと背後で鍵をかけられるのを確認してから向き直る。

「えっと、ありがとございました？ 愚痴聞いてもらって」

そしてそれだけ言うと、藍華は階段を下りていった。

少しだけ、軽くなった？
それとも、なおのこと重くなった？

気持ちの重さは量れないから、いつもいつも、気分によって重さが変わる。

「重くは、ない」

それが本当かどうかなんて知らない。その気持ちの、その他を知らないから。

その他の感情と比べようがない。

どうだろう、だけど聞く人もいないから、相談だつてできないから。

だから、また、気持ちはたまっていくだけ。

第四話 『茜色虚言』

少しだけ暑さを含んだ風は肩にもつかない髪を揺らした。
日が長くなりつつあるため、六時でも十分明るい。なんの気なしに空を見上げると、雲が茜色に染まっていた。

茜色は嫌いだ。

いつもいつも遊んでくれるのは春華と？也で、でも結局二人は真剣になってしまふのだ。だから茜色は相手にしてもらえずに、一人見上げていた空の色。

茜色は孤独な色。寂しい色、悲しい色。

失ってしまった、恋とも呼べない幼い憧れの色。

「憧れ、ね」

呟いて、馬鹿らしいと思った。

「あたしは、それしかしたことないんだから、それが『本物の恋』でしょ？」

憧れでも、何でも、それしかしたことがない。それ以外の、恋と呼べる感情なんて持ったこともない。

「あいちゃん？」

そのとき、藍華は誰かに呼びかけられて振り向いた。もともと、『あいちゃん』と自分のことを呼ぶ人は限られていたから、すぐに誰かはわかってしまった。

「朔もとねえ」

少し小さめの花束を持って現れたのは、朔華だった。

「今帰り？」

その花束に視線を移すと、『うん』とうれしそうな答えが返って

くる。優しくて、のほほんとしていて。

それでいて姉妹一頑固者の長女。

「で、それ智ともさんにもらったの？」

朔華の彼氏はいかにも女遊びしていそうな花屋さん（失礼）だったのを思い出す。

「そうだよ。きれいでしょ？」

頷いた姉の長い髪がふわん、と浮かんで沈んだ。

それを見ると、唐突に疑問が浮かんできた。藍華自身も気がつかず、その問いは口からこぼれた。

「朔ねえ、何で、智ともさんのの？」

少し前まで、春華が言っていた言葉だった。春華の同級生で、絶対に近づいてほしくないと言ったのだ。

『どうして、あんな遊びそうな男なの？！ 男ならほかにいるでしょ？ あいつじゃなくなつて、お姉ちゃんを好きになつてくれる人はきつといるよ』

それに対して、朔華は少しだけ笑っただけだった。どこまでも柔らかに、頑固者の笑顔。

「だって、好きなんだもん。それにあいちゃんやはるちゃんたちが言うほど遊んでないよ？ 智君」

花屋の息子で、年下で、妹の同級生。

「それに、いくら私を好きでいてくれても、私が好きじゃないとだめでしょ？」

幼子に言い聞かせるような、諭すような言葉だった。

「それは、あいちゃんだって分かってるでしょ？ 好きになろうとして、好きになるんじゃないんだよ」

びくりと肩が揺れるのにも気がつかず、藍華は朔華をかえりみだ。「朔、ねえ？」

声が震えるのにもかまわず、藍華は朔華を見る。

「どういう、こと？ それ、どういう……」

言葉が、切れた。

「あいちゃんは、？くんが好きだって、知ってたよ」

ひどくきつぱりと、朔華は言った。

「ずっと、知ってた」

朔華は寂しげに言う。

「どうにかしてあげたくても、私じゃ、どうにもならなかった」
何もかもを、知っている顔で語る。

「あいちゃんの気持ちをも？くんと言つのは簡単だよ？」

でもそれは、はるちゃんを傷つける。それを、あいちゃんは望んでいないでしょ。

傷つけてまで、手に入れたかったの？ その恋は。

違うでしょ？ あいちゃんはそう思わないよね。知ってるよ。知ってたよ。

「あいちゃんも、はるちゃんも、幸せになってほしいって言うのは、お姉ちゃんのエゴだね」

藍華の頭をそつと撫でながら、朔華は言う。

「どっちかを、とらなくちゃ……」

「やめてよ！」

藍華が叫ぶ。

胸の奥にふつふつと湧き上がってきたのが、怒りなのか苦しみなのか分からないまま、外へ出す。

「どうせ、どうせ分かってるもん」

下を向いて、でも朔華の手は振り払えず。どうしていいのか分からず、泣いているのかと思うくらい、悲痛な声を出している自分に気がついた。

「朔ねえだって、分かってたはずだよ。どっちか、じゃないって」
どっちか、なんてあいまいなものじゃなかった。

想像できない結末ではなかった。

誰が見たって、分かる結末だった。

「あたしじゃないって、分かってたよ……」
そんなこと、小さい頃から分かりきってた。

だから、二人が付き合うと分かったとき、藍華は何も感じなかった。一抹の寂しさは、どちらかと言えば、大好きな姉を奪われる気分だった。

「だから、あれは恋じゃなかったんだよ」

すると朔華は少しだけ首をかしげてたずねる。

「辛い？ 悔しい？ 悲しい？」

「どれでも、ないよ」

二人に、そんな感情を持つ時期は、もうとっくに過ぎていたから。

「そう？ 本当に、そう思ってる？」

そう思っていないことを知りつつ、『思っていない』とは言えなかった。

言葉にできない感情が何か分からないと思ったとき、一番最初に浮かんだ言葉は『嫉妬』だった。それは嫉妬なのだろうか、自分は嫉妬しているのだろうか。

嫉妬とはこういうことを言うのだろうか。

激しい火のようなものではない。少しだけ、針でついたような、小さな、小さな痛みだった。

「ただの、憧れだったよ。すりこみだったんだよ。きっと。絶対いなくならない、優しいお兄さんに憧れただけなんだ」

菊池が言った言葉を思い出し、答えた。そう、あれはただの『すりこみ』。

愚かなほどに、恋だと信じて疑わなかった小さい頃ではない。

自分の感情を恋なのかと疑って苦しんだ、数年前ではない。

「そっか。なら、これから初恋をするんだね」

当たり前のように、朔華が言った。優しく微笑んで、藍華のほほを撫でて、それから手を繋いで歩き始めた。

「初、恋……」

繰り返すようにそう言うと、朔華は振り返る。藍華を引っ張って

いた右手で二回慰めるように藍華の手を叩いた。

「そう。だって、？くんへの気持ちは『憧れ』でしょう？ なら、まだ初恋じゃないよ」

初恋は、『憧れ』じゃないよ。照れるように、まるで自分を思い出すように朔華は言った。

「少なくとも、私も、はるちゃんも、憧れなんかで言い表せない気持ちを知ったよ」

そう言っつて、自分が左手に持っている花束を見つめた。その視線は、いとおしむようだった。

「憧れ、じゃない気持ち」

一つ一つの言葉を、噛みしめるように呟く。

「そう。憧れなんて……きれいなものじゃないんだよ」

どこかおどけるように言っつてから、朔華は再び歩き出す。

その視線はもう茜色の空へ向かっていた。切なそうに見えたのは一瞬で、次の瞬間にはいつもどおりの姉だった。

「帰ろつか。今日はお父さんもお母さんも早く帰るつて」

任される仕事が増えたらしく、最近めつきり会わなくなった二人を思い出す。

「え、帰つてくるの？ 何日ぶりだろ」

「仕事が好きだからね。あの二人は」

「春ねえ、はりきつてるでしょ？ 今日の夕ご飯」

「うん、何かやる気に満ち溢れてた」

二人は笑いながら影を踏むように歩いた。

玄関では春華が一人、外で待っていた。

心配そうに携帯をちらちらと見ている。心配で仕方がなく、じつとしていられないらしかった。

「お帰り。……藍華も、一緒だったの？」

少しだけ驚いたように聞く。

「帰りに会ったの」

「繋いでいた手を上げながら、朔華は言った。

「そっか。なかなか帰ってこないから、『プティ』に行こうかと思
つてたの」

『Le petit fleuriste』（ル プティ フル
リスト）

フランス語の店名で、日本語訳は『小さな花屋』

それが朔華の行きつけの店であり、彼氏の家でもある。小さいな
がらきちんと掃除の行き届いた部屋は落ち着くたたまいで、おし
やれで町で有名なお花屋さん。

花を選び、包むのもうまい女主人は明るく好感が持てた……と春
華はそっと思う。

あいつさえ、いなければの話だが。

「池平がね……、何かしかしたんじゃないかと思って！」

目下智を敵視する春華らしい言い方だった。

「智くんが何かしかす？ 何かって、何？」

きよとん、と首をかしげる朔華を見て、春華はバツの悪そうな顔
をした。少しだけ眉をひそめて、苦虫を噛み潰したような顔をする。
どう言って聞かそうか迷うように視線をさまよわせた。そしてや
がてあきらめたように息を吐く。

何を言っても、無駄だと悟ったらしい。

「うん、そこまで無防備だと、池平も手が出せない気がしてきた。

なんかガードがゆるるそうに見えて、一番固そうだよね」

言ってから自分の言葉に納得したらしく、うんうんと頷いてから
家へ入る。

「早く作っちゃわないと、父さんと母さん帰ってくるよ」

玄関へ入る直前、にこりと笑った春華を見て藍華は何かがストン
と落ちた気がした。

その笑顔を、曇らせなかったのが正解だという、確かな感触を感

じた。

『大丈夫。もう、大丈夫だよ』

自分に言い聞かせるように、心の中で何度も唱える。

簡単には、しこりは取れてくれない。それはここ数年でいやというほど知っていた。

だが、ずっとこの気持ちがあだかまるだけだとも思わなくなった。それは確かにいい方へ向かっている証拠。

この気持ちは、いつかは思い出になっていくのだろうかと、ぼんやりと思い、玄関へ入った。

第五話 『無色感情』

昼休憩後の五時間目。満腹感と、六月下旬の少し暑い風でまぶたが下がりそうになった。授業も苦手な化学なので、教科書の文字はもはや未知の暗号と化している。

「だから、この塩酸との化学反応によりイオンが……」

塩酸？ イオン？ マイナスイオンしか知らない……。

「イオンをつくるには電子が最外殻に……そして閉殻の形を作ることによって」

ぐにやりと視界がゆがんで、頭が揺れている。揺れたら寝てる、と分かってしまうと思っているのに。

その意思に反して藍華の頭は揺れる。コン、と頭をたたかれ、あわてて頭を上げた。

「平田」

呼ばれて、声の方を見ると渋い顔をした菊池がいた。

「菊池、先生……？」

「寝ぼけてるな」

呆れたように言つと、クラス中が爆笑する。その笑い声によって完全に覚醒した藍華は顔を赤らめた。

「ね、寝てませんでした」

嘘つけ、寝てただろ。

美術室のような声で言われて、びくりと体が震えた。見れば、顔のすぐ横に、少しだけ腰を折った菊池がいる。

耳より少し離れたところで出しているにもかかわらず、その声はやけに近くに感じる。

さわやか、と呼ばれる声ではなかった。優しいという口調でもなかった。今ではそれが普通になっている藍華にとってみても、その変容は著しい。一瞬のうちに変えてしまうのだから。

「ということ、居眠りした生徒は俺の準備室の片づけを手伝って

もらおうかな？」

そう言う菊池は『クラス』での菊池先生だった。

「で、何を手伝うんですか先生」

もう慣れっこになってしまったタバコ片手の菊池に聞く。

しっかりと結ばれていたはずのネクタイは緩められ、一番上のボタンは開いている。授業中に行っているメガネを外せば、女生徒にもう少し人気が出ると思わせるような顔立ちだった。

今はもうコンタクトに変えているので、華やかではないが整っている顔が見える。

「そのダンボールの中身の整理」

指差されたのはダンボールから零れ落ちた書類もそのままな、紙の山。何が書いてあるのかは、理科が苦手な藍華にはほとんど理解できなかった。

「これを、どうしろと……」

一冊十枚ほどの紙がまとめられている冊子。ダンボールは持ち上げられないくらい、詰まっている。

「内容ごとに分別して」

言われて、ぺらぺらとめくってみるが、何がどうなるのかさっぱりだ。

「えっと、無理です。日本語なのに、英語のほうが日本語に近い気さえしてきます」

事実、そうなのである。物理なのか化学なのか、あるいは生物なのか……。

「無理だよなあ」

こちらを見て、にやり、と笑った。この笑い方をするときには悪い兆候だと、最近になるまで気がつかなかった自分を恨む。

机に右ひじを突き、手の上に顔を置いている。何がうれしいのか、

その笑顔を崩さぬ今ままこちらを見ているので、ちよつと怖い。

「大丈夫。無理だつて知つてたから。平田の場合」

その言い方が、とつても

『平田にはできないよな』

と言つているように聞こえたので、いらりとする。が、本当のことなので、言い返すこともできず何も言えなかった。

「タバコのこと、ばらしてやる」

苦し紛れに言い訳すると、より一層笑みを深くして席から立つた。すぐさま身の危険を感じて、一步下がる。

「平田」

藍華が一步下がるたびに、菊池も一步前が出る。追い詰めるさまを楽しんでいるかのようにだった。そして藍華は今になって気がつくのだ。

低くて、落ち着いている声は……いつも聞いている男子の声より耳に心地よい。

あまつさえ、甘いとさえ感じてしまう声だった。

追い詰められてる。そう分かつてはいるのに、どうすればいいかは分からない。

「えっと、先生……。嘘ですから」

「平田は嘘でそういうこと言うんだ」

笑いを含んでいる菊池の声が怖くなる。藍華はまた一步、下がった。すぐ後ろは教材置き場だ。

めつたに使わないような道具が所狭しと並べられてあつて、かなり狭い部屋だつたと思ひ出す。

「誰にも言いませんよ。黙認したあたしも怒られるし」

扉の取っ手に手をかける。急いで入って閉めてしまえばいいと思ひついたので。

しかし。

「でも、逃げようとしてるのは何でかな？」

にこつと笑って、扉を押さえられた。タバコを持っていない左手が、扉を力強く押さえているのを横目で確認する。

「えっと、先生の笑顔が怖いからですね、多分」

「俺の授業を寝てたやつに、何で俺が優しくしなくちゃいけないんだ」

扉を押さえられ、逃げ場がない。

四面楚歌……。今日授業に出てきた単語が唐突に浮かんだ。

むしろ、周りを敵で囲まれているほうが、逃げ場があるかもしれないとさえ思ってしまう。と、そのときだった。

「菊池先生、って、いない」

ちよつと自分たちが立っている位置より扉側に、掃除道具入れが置いてあった。そのせいか、教材置き場の入り口の前は扉から死角になっている。なので呼びに来た先生には見えないのだ、と思うよりも早く、藍華は教材置き場の中にいた。

機械が乱雑に置かれてある部屋に二人が入ると、必然、距離は近い。声を出そうにも、耳元で

『静かにしてろよ』

と囁かれてしまえば、黙っている他なかった。

しばらくして、ガラガラと扉を閉める音が聞こえた。

「やばかった……」

タバコ片手の菊池は藍華を離し、教材置き場から出る。

「ばれるかと思った」

藍華は床にへたり込んだまま、ぼやいた。いきなり密着するし、耳元で囁かれるしで、心拍数が一気に上がる。

「悪い。ほかに隠れるところなくて」

そう言うと、菊池は藍華に手を差し出した。藍華はそれを見た後、

自力で立ち上がる。パンパンと、スカートをはたいた後、深呼吸をして落ち着けようとした。

「先生のせいで、どうしてあたしまで隠れなきゃいけないんですか」
顔の赤みをごまかそうと、恨めしげに菊池を睨む。

「そりゃ、共犯者だからだろ」

菊池は嬉しそうに笑って、言った。

「やっぱいいわ。平田。また今度、手伝うことができたら呼ぶ」

一人で段ボールの中身を片付けながら、菊池は藍華を見やる。

「ならなんで呼んだんですか。帰ります！」

怒り半分、妙な気持ち半分扉へと向かった。失礼しますという言葉も出ずに、藍華は外へ出る。暑い風は頬を冷やしてくれはしなかった。

その気持ちは、いまだに無色。

名前が、つくこともない。

第六話 『ページユ色緋創書』

「お前、本当に絵を描くことが好きなんだな」

スケッチブックにあたりをつけながら、窓から見える風景を描いていく。黒と白で彩られている風景はそれでも、鮮やかに見えて不思議な感じがした。

自然の多くないこの町をよく見れば、とろこどろで意図的に植えられた木々に気づく。

「でも、風景画は、あんまり好きじゃないんですよ」

鉛筆の濃さを変えながら、今度は校舎を描き入れる。藍華は自分を不思議そうに見つめている菊池に向き直った。

「だって、変わらないように見えて、すぐに変わっちゃうんですから」

ページを変え、今度はすばやく窓際に置かれている石膏像をデッサンする。

「ほら、これはどうやったって形は一緒でしょ？ あとは光の当たり具合。でも、風景はほとんど毎日違うから」

風とか、天気とか、成長とか……。大まかながらも、デッサンは正確で、その白い像にはない、薄い色さえ感じてしまいそうになる。「美大でも受けるのか？」

菊池が問うと、一瞬ぼけつと首をかしげた後、笑った。

「まさか、あたしにそんな才能ないし。勉強し始めちゃうと、絵がきらいになりそうで」

自由に描いて、文句も何も言われないから絵を描くのが好きなのに。

好きなものを、好きなように描く。そこに上手、下手は存在しない。ただ描きたいから、描く。それがとても好きなのだから。

「それに芸術関係の大学って、授業料高いじゃないですか」

藍華は笑いながら、鉛筆を置いた。すっかり磨り減ってしまった

鉛筆を削るつと、筆箱からカッターナイフを出す。放課後、美術室にいたることが多くなった菊池を見ながら、藍華は言葉を続ける。

「それより、そろそろ期末ですけど、いいんですか？ 最近、ここにいた時間長くありません？」

「仕事サボってることも秘密ですか？ 笑いながら、そう言った。

「それはさすがにばれますよ。あたしは餌付けされちゃってますけど」

カッターナイフの刃を出して、鉛筆に当てた。机の上にはさまざまな濃さの鉛筆が並ぶ。絵画に疎い菊池には2Bくらいしか身近でないので、触らずに眺めているだけだった。

「シャツシャツと小刻みに聞こえる音は危なくない程度に軽快だ。

「サボってるつと年配の先生に嫌味言われるんじゃないんですか？」菊池に話しかける藍華の視線は鉛筆のほうで、菊池の表情がどんなものか知りもしない。

「まあ、俺、ここの副顧問だし」

「はあ？ って、っ」

「かしゃん、とカッターナイフを落とす。左手の人差し指の付け根を押さえ、藍華は舌打ちした。痛みで眉をしかめ、それでも『先生が、副顧問？』と小さく問う。

「おい！」

ぐいっつと手を引かれ、水道のところまで引きずられる。そして容赦なく水道水をかけられた。

「っ……」

「声を出さないようにしながらも、傷にしみて涙まで出そうになった。

「馬鹿か、お前は！ カッター扱いながら、よそ見する馬鹿がどこにいる！！」

怒鳴られて、びくりと肩をそびやかせば、菊池は慌てて言った。

「悪い。声が大きかった。でも、どうかしてる。カッター使いながらこっつち向くとか。しかも指切るし。傷は深くないけど、これは保

健室に行つといたほうがいいだろ」

「え、嫌です。絶対嫌。帰れって言われますもん。ならバンソーコ張りますからいいです」

引つ張られている左手を菊池の手から抜き取り、かばんを探る。小さなポーチからは絆創膏がいくつか出てきた。

しかしそれはぱつと取られ、取った人間に視線を向ければ苦い顔をした。

「早く行つて来い。荷物置いたままでいいから」

「いやです」

「平田」

「こんな時間に帰りたくないんですってば!!」

苛ついたように出された言葉に、菊池は目を丸くした。

「何だつて?」

聞きなおすと、藍華ははつと目を見開いた。その後に、自分が口に出したことを恥じるように、下を向く。

「だから……絵をもつと描きたいだけです」

「違うだろ」

怪我をしてない右手を掴めば、ぱつと振り払われた。

「こんな時間に帰ると……。やっと吹っ切れた思いが持ち上がりそうな気がして怖いんです!」

泣き叫ぶような声だった。

「まだ分からないんです。完全に吹っ切れたかどうか。お姉ちゃんが、春ねえが幸せになることは確かに願いました。でも、それが恋愛まで全部応援できるか、自信ないんです」

怖いんです。

冷たい水のせいでとまっていた血は、あっけないほど早く流れ出した。

これと一緒になんだろうかと、藍華は傷口を見ながら思う。何度も何度も、『憧れ』だったと言い聞かせた。

何度も何度も、諦めたんだと思うようにした。

何度も何度も、忘れようとして涙を流した。

なのに……、結局、まだ諦め切れてないんじゃないかと思う。どこかに燻ってるんじゃないかと考えてしまう。

いつか、姉の幸せも願えないような。そんな自己中人間になっ
てしまふんじゃないだろうかと思う。

「あたしは、確かに、？さんに恋にも似た感情を抱きました。でも、春ねえに嫉妬するようにはなりたくないんです」

もう、嫉妬をする時期は過ぎたと思っただけ。それが本当かどうかなんて、今は分からない。

「嫉妬、しないだろ。お前は」

「へ？」

「嫉妬しないって言うてんの。俺が」

血が流れ出した指を捕まえて、自分の手の高さまで引つ張りあげようとする。しかし身長差が大きいせいで、うまくいかず、菊池は自分が膝を折った。

そつと藍華の手を握り、藍華を見つめた。

「お前はもう吹っ切ってる。だから、あの絵をもう描かないんだろ
う？」

どこまでも、確信めいていて、自身ありげな目で藍華を見つめる。二人の会話でだけ通用する『あの絵』……。

「ただの、気分転換かもしれないじゃないですか」

「あ、そうかもな」

傷口を眺めていた菊池が、顔を左手に近づけるのを感じ、藍華は手を引いた。

「な、何でももう吹っ切ったって思うんですか？」

手を引いたものの、完全にとらわれたままの藍華は苦し紛れに会話を続ける。

「絆創膏、貸せ。貼るから」

藍華の言葉に答えず、絆創膏を受け取る。男にしては細くて、長

い指が絆創膏をはがし、自分の指に貼り付けていく。どこかそれを他人事のように見つめながら、しかし我に返って、慌てる。

「質問に答えてください、菊池先生」

そう言うと、面白そうに口角を上げ、意地悪く笑った。

「実を言うと、お前はそいつに恋自体してないように思う。吹っ切れたとか以前の問題」

唐突だった。

「どう、してですか」

確かに恋というには、稚拙な感情だったかもしれないけれど。

「本当に恋してるやつは、嫉妬を嫉妬って気がつくまで結構時間がかかるんだよ」

当然のことのように言う。

「嫉妬じゃない、感じがする。ただぼんやりと、『いやだ』と思ったり、イライラしたりする」

それである日突然気がついて、自分の嫉妬深さに驚く。

「恋の自覚と一緒」

突然気がつく人もいる。それが『恋』なのだ。

気が付かない人もいる。他から何かない限り。

そして後悔する人がいる……あのとき、気がついていたら何か変わっていただろうか。

「お前は、自分の嫉妬のせいで姉が傷つくんじゃないか、と心配した」

普通はしないんだよ、そんな先のこと考えるなんて。

「できないんだな。多分。そんな先のこと考えるなんて」

俺の考えてる恋は、そんなもんだけど？

最後は、半ばおどけるように言ってから、折っていた膝を伸ばす。

一気に広がる身長差を見つめながら、ぼんやりと言われた言葉を反芻していた。しかしよく理解できず、首をかしげる。すると『や

「つぱりお前は恋してないんだよ」と笑われた。

「先生つて、意外にロマンチストですね」

笑われた意趣返しにそう口に出すと、菊池は苦笑いした後答えた。
「恋愛つて、持つ感情の中で一番きれいなもんだろ？」

「だからみんな、夢を持つんだよ。」

「そんな、もんですか？」

「そんなもんです」

からかうようにそう言われて、理解できない自分の感情は何だったのだろうかと考えた。

自分は、子供だから理解できないんだろうか、とも思った。

ただの憧れだった？

少し幼い恋だった？

それとも、家族の情だった？

「ただいま」

「……おかえり」「」

三つの声はいつも通り聞こえてきて、それがそんなに嫌ではなくなっている。

貼られた絆創膏を見て、触れられた左手がやけに熱く感じたのを思い出した。頭を慰めるようにたたかれたときには何も感じなかったのに。

教材置き場で耳元に声を感じたときも、体に別の体温が近づいたときも……。

何かを感じた気がした。

その気持ちの色は、まだ分からないまま。

何にでも染まりそうで、だけど何にも染まらない色。

一番静かで、綺麗で、優しくて、寛容な色。

そう、たとえるなら、いまだ見ぬ感情の色は、何色にでもなってしまう。 だけど何色でもない透明。

そのココロに、色が来る日が来るのだろうか。

第七話 『赤色答案』

「これから化学の解答を返す」

クラス中から『え〜』と言う声が聞こえるが、さほど嫌そうではない。これさえ終われば、受けたテストは全部返ってくる。そして、その後に待ち構えるのは夏休みだけだから。

「夏休みだからって浮かれて受けたやつ、夏休みは、『補習』な」
一旦切ってから、満面の笑みでそういう先生。その顔は、少しだけ美術室と重なる。

加虐趣味でもあるんじゃないだろうか……。気のせいということにしとくけど。

「平田」

理科は苦手だから、勉強したし。さすがに補習はないだろう。しかし、その考えは、菊池を見た瞬間に砕けた。

「平田、お前勉強した？」

口調はいつもどおり、だけど声はクラスモード。

「し、しましたよ、もちろん」

みんなに聞こえないようにか、声を潜めているのに、その声は耳につく。

「それで、この点が……」

がく、という効果音でも付くんじやないかと、藍華が思うくらい肩が落ちる。

「どつという意味ですか」

そう問うと、菊池の手から解答用紙を受け取った。嘘でしょう？

……28点。

「……補習……」

言えない。二人の姉にも両親にも、言えるわけない。したことな

いいし、これからするなんて思いもしなかった。

「ほら、藍華ちゃん。たまにはそんなことあるよ。化学以外は全部平均点以上だったし、国語と英語はよかったんでしょ？」

「化学よりはね……」

慰めてくれる友人の言葉も、入ってこない。

「どうしよう、補習、あたし一人とか」

「いいよ、菊池先生かっこいいし。人気だよ」

フォローにならない言葉をかけられても、元気になるわけない。

「体育の有田先生とか、数学の森野先生とかには劣るけど、でも人
気」

「へー、地味だから知らなかった」

つい本音が出るが、友人はその言葉に気がつかぬまま、話を続けた。

「でも先生、うまいの。告白に行く子は、みんな見つけられずに帰ってくる。放課後、何してるのかな？」

ほやん、と一番上の雰囲気に似た友人 詩織。何でも話したくなる雰囲気を持っているが、さすがに言えなかった。いつも美術室にいるなんて。

「理科準備室にいないの？」

「いないんだよね。どこに隠れるのかな？」

でも、まあ、やっぱり難しいのかなあ。先生と生徒って。相手にしてくれなさそうだね、菊池先生って。なんでもない言葉がちくりと刺さったことを、まだ感じていない。

感じるには少し、経験が少なかったのかもしれない。

「で、お前は試験期間ぎりぎりまで絵を描いて。試験終わった日も絵を描いて。補習だって分かっても絵を描くのか」

あきれたような声を出され、少しだけ肩をすくめる。

「努力はしたんです。国語とかにかけた時間と比べたら、二倍ぐら
いですよ。理科にかけた時間」

「何勉強してたんだ」

そんなに時間をかけて、何を勉強する？ そう聞かれている気が
して、言葉につまる。何って……基本的なことから。

「化学記号……とか」

「そこからか」

がくん、と肩を落とされた。

「お前さ、それ、中間だろ」

「ごもつともです」

ぐうの音もせず、ただうつむく。

「計算も全くできてなかったな」

努力はしていたらしく、何となくできている問題もあったが、壊
滅的ではあった。

「意味分かんないんですもん」

唇を尖らせるように言うと、ふっと菊池が笑った。

「俺は国語とかができるほうが意味分かんないけどな」

「できなかつたんですか？」

ぱつと顔を上げると、にやり、と人の悪そうな笑顔があった。

「いいや？ 俺、結構優等生だったから。だけど、まあ、理系に比
べたら分かんなかったな。古典とかとにかく文法暗記だった。自分
が何やってんのか分かんなかったし」

笑いながら言うが、そんなこと藍華にとっては慰めでもなんでも
なかった。

「結局先生も、春ねえタイプだ」

机に突っ伏すと、涙が出そうになる。もちろん、自分の不甲斐な
さに。

「ああ、上の平田は賢そうだよな」

「理科は？さんが得意なんですよ」

小さい頃は教えてもらってました。笑った藍華を見れば、もう吹

っ切れたのが分かった。

「吹っ切れたか？」

そう聞かれれば、藍華は不思議そうに首をかしげる。

「まだ、分かりません。見るたびに、うづく感情が何なのか。でも、前からなんですけど、きゅっとなるような感情は、持ちません」
一つ一つの言葉を区切って言う藍華。自分の言葉にさえ自信がもてないようだった。

「元々、恋かどうかさえ、分からない感情でしたけど。……皆が言う恋を聞くと、少しあたしの持っていた感情は、違ったのかもしれない」

先生が言うように。

「本当に、ただのすり込みだったのかも」

自らに言い聞かせたのが無駄だったように。あれだけ悩んだのが、馬鹿だったのかもしれない。少しだけ、寂しそうに。少しだけ、嬉しそうに。藍華は言った。

「よく、分からないんです。だって、恋なんてしたことないから。でも、あれだけ考えて、でもあたしの持っていた感情が恋じゃないなら」

それなら、あの辛い気持ち以上に痛い経験をするくらいなら。

「あたしは、恋なんて、したくないです」

あれ以上酷い感情は、持ちたくない。何回、この人の前で泣いただろうと、思う。しかし泣き出してしまったのは一回だけだと、意外な気持ちで思い出した。何回も、何回も、この人の前では泣いた気がしたのに。

自分が泣くと、家族みんなが心配するのをしてきた。だから泣きたくても、泣かなかった。強くなるんだ、と思っていた。

「恋は、したくなくてもするんだよ。そのうち」

菊池は、藍華のほうを見て笑った。いつものような、意地の悪い笑顔ではない。

クラスでする さわやかな笑顔でもない。そして……この前」

本物の恋』を聞いたときの微笑みでもなかった。

すごく、優しい笑顔だった。この人でもこんな顔をするのかと、
そう思うほど、優しい笑み。

「あたしにも、そんなときがあるんでしょっか」

呟くように聞くと、菊池は少しだけ目を見開いて、笑った。今度
はいつものような意地の悪そうな笑顔だったが。

「あるんじゃないですか？ そんなときが」

そうかもしれないと、思わないわけではない。皆がするような、
恋をしたいと思わないわけではない。ただするのなら、静かな恋が
いい。

でも今は、もう少しだけは、恐れていてもいいんじゃないんだろ
うかと思う。

傷つきたくはないから。傷つくには少し、前の傷が痛むときを脱し
ていないから。

だから今はまだ……。

何も知らないままでいさせて。

第八話 『淡色便箋』

暑い……。暑い、アツイ、あつい……。むしろ熱い……？

「先生、おわったあ」

「はい、お疲れ」

あたしより遅く来た人が、あたしより先に終わるってどういうこと。

そう思いながら、藍華はシャーペンを握っている手に力を入れる。パキン、とシャーペンの芯が折れただけで、他には何も変わらない。一番初めに来てもらったはずのプリントは、未だに四分の三しか終わっていない。『所要時間は十五分』と菊池に言われていたが、一時間は裕に過ぎていた。

「俺も」

「宿題忘れるなよ」

また一人、教室から生徒が消える。残るは藍華と少女が二人。

「違っって言ってるでしょ。ここはその公式を使うんじゃないの。」

あんた彼氏に何教わってるのよ」

長い髪をすつきりと結び上げ、制服も折り目正しく着用している少女。

少しきつそうな目をしていたが、それでも十分美人の範囲に入る少女だった。むしろ、その我の強そうな瞳が、その少女の意志の強さを映し出すような、そんな印象を与える。

その少女は、隣に座っている幼げな女の子のプリントを覗き込んでいた。

「帰っていい？ 私、これから生徒会なんだけど」

その言葉でぼんやりと、少女が書記だったことを思い出した。そしてまたその隣にいる少女も、会計ではなかっただろうか。

「待って。真紀。あたしもだし。もうすぐだから」

「いや。あんたを待ってるだけで、私、補習組みじゃないもの」

真紀と呼ばれた少女は女の子の言葉に答え、席を立った。

「菊池先生。担任なんだから、佳奈美におまけしておいてください。そろそろ行かないと、会長がうるさいんで」

女の子　佳奈美は慌てて書き込み、『できた』とプリントを差し出す。

真紀はそのプリントをざっと見渡した。そしてその後、真紀はシヤーパーンで何事か書き込んで、菊池に渡した。多分入っていないかった欄の答えだろう。

「ああ、池平智な」

今年の生徒会長が長女の彼氏だと知り、どこまで自分は学校のことに鈍感なのだとあきれる。

春華がそんなことを言っていた気もしないでもないが、あまり聞いていなかった。

興味も無いので、別段意識していなかったが、少し外へ目を向けなければいけないかもしれない、と思う。

「まあ、池田のことだから、こんなもんか。行っていいぞ」

最後の言葉だけ、少し、美術室の口調だった。

さつきまで優しくかったのに。優しくかったのに……。

「さて、どうして一番最初に来た平田はできてないのかな？」

にこつと、一見して邪気のない笑顔が妙に怖い。どうして、こんなに早く豹変するんだろうと、心のどこかで首をかしげた。いや、いつものことなので疑問に思っても仕方がないのだが。

「夏休みに、こんなことしたくないから、ですかね」

「素直だけど、化学ができないお前が悪い」

教卓から離れ、こつりとこちらに歩いてくる。藍華は先日のこととを思いだし、体をこわばらせる。よく分からなくなっていた。

菊池と自分の正しい距離感が。

「化学式、違う」

「え？」

プリントを覗き込まれ、指摘される。

「どうやってたら、こんなことになるんだ」

呆れ返られると、居心地が悪くなった。

「いいか、左側の酸素と右側の酸素の数がそもそも違うから……」

藍華の手から、シャーペンが取らる。藍華が書いた式の下に正しい式が書かれていく。サラサラと何の迷いもなく、書かれていく式を藍華は見つめた。

まったく持って、意味が分からないので大人しく成り行きを見守る。

「先生」

「は？ 何」

返事をしつつも、手は止まらなかった。

「最近、思うんですけど。先生はあたしの弱味握りっぱなしですよ
ね」

菊池が怪訝そうな顔をした。

「ずるいと思うんです。あたしばかり、嫌なところ見られて。人に知られたくないところ、見られて……不公平です」

拳を握り締め、藍華は力説する。しかし、菊池の反応はそっけなかった。

「俺は教師、お前は生徒。教師が生徒の相談にのるのは、当たり前だろ？」

ほら、とプリントを渡される。そこには正しい式と、導かれ方が書かれていた。それを不満げに見たあと、眉をひそめた。

「あたしが嫌なんです。だから、先生の失敗談を聞かせてくれたら、おあいこです」

そしたら、あたしも先生も誰にも秘密を言えないでしょう。

「お前、俺のタバコのこと知ってて、それを言うか」

「言いますよ。だって、あたしがもし、先生がタバコを吸っていたなんて言っても、信じる人いないじゃないですか」

『あの』さわやかで優しい菊池先生がですよ？ 可笑しげに笑って見せると、藍華は言う。

「いいんですよ、嘘でも。とりあえずは、恥ずかしい過去を知っているっていう、あたしの心境が大切なんですから」

「嘘でもって」

「失恋話がいいなあ」

菊池の話も聞かず、藍華は勝手に話を進めた。

「恋のような、恋じゃないような……。あたしがしたような感情は持ったことないんですか？」

何のためらいもなく、藍華は聞いた。その瞬間、一瞬だけ、菊池の顔が強張ったことを藍華は知らない。

「嘘なんですから、適当にしゃべってください」

菊池からいつの間にかシャーペンを取り返し、クルリと指の間を回す。

「あたしだけじゃないっていう、証明がほしただけかもしれませんね」

あんな馬鹿な感情を持ったのは、あたしだけではないという。

「嘘でもいいのか……？」

「いいですよ。先生、振られたことなさそうな、顔してるし」

実際、振られたことがなさそうな顔なのだ。振ったことはたくさんありそうな顔だが。

「へえ。じゃあ、昔話をしてやるよ」

嘘でも、まことでも……。それはただの失恋話。

実際起こったのかどうかなど、知るすべてを藍華は持っていない。

だからそれが、どういうことを意味しているのか、藍華には分からない。

「最後まで気がつかなかった気持ちを、気づかされたときの話」
それが誰の、とも言わない。
それが本当の話、とも言わない。

ただ、それは 昔話。

数年前、タバコをすっているところを見つけた。目を丸くする
女子生徒が面白くて、たまたま持っていた飴玉をやった。

そのときは、気まぐれで、別に告げ口をされたって乗り切る自信
はあった。伊達に、いい子の顔をして教師をし続けていない。

『先生が、そういう人だとは思いませんでした』

苦笑った少女は、いかにも真面目そうな優等生顔だった。スト
レートの、真つ黒な髪。フレームの付いたためがね。いまだき珍しい
くらい、規則を守っている生徒だった。

『餌付けしたって、騙されませんから』

ただ、にっこり笑った化粧気のない顔が、いやに印象に残った。
特別美人というわけでもない、特別……何かが抜きん出ているわ
けではない。本当に、どこにでもいそうな、クラスでも地味な、少
女だったのに。

「先生は、その女の子に、恋したんですか？」

遠慮という言葉を知らないのではないかと、菊池は一瞬思う。あ
まりにも、直球で聞かれて、返事に困った。

「いや、……恋じゃなかった」

お前みたいな感情だったのかもしれない。

だって、可愛いとも思わなかった。

キスしたいとも……なんとも思わなかった。

「ただ……、自分と違うあいつが、面白かった」
そう、思い続けていた。

「あたしも、そんな感情は持ったことないですね」
自分が、あの人と手を繋ぐ姿も、寄り添う姿も、想像できない。
ありえなさ過ぎると、分かっていいるからかもしれないけど。

そういう関係は望んでいなかった。

ただ、ただ、あの混じりけのない視線が、いつまでも、たった一人に注がれている視線が、少しでもこちらに向けばいいと思うだけだった。

それは、恋を知らないあたしが、恋を知りたくて持った感情なのかもしれない。それでも、唐突に思うことがあるのだ。

「でも、もし……この視線があたしにだけ向けられたらいいのについて。春ねえじゃなくて、あたしだけだったらって」

だから、恋と間違える。それは確かに、恋とはかけ離れた感情だ
というのに、そのことを見失う。

それは、嫉妬の表れではないだろうか。

それは、恋ではないだろうか。

「それを、恋だと疑うこともなかった。そう考えることさえなかった」

それは、お前とは違う。だから余計、後悔したのかもしれない。

少女が時々、不意にこちらを見つめることも。

何か言いたげに、自分を見つめることも。

突然、泣き出しそうな顔をして、外を見つめることも。

全てに気がつかないふりをした。それは年上に抱く、憧れの感情だと気がついていたらから。

「じゃあ先生は何で……」

どうして、辛そうな顔をして、あたしにそのことを話すの？

「どうして、失恋話をしてって、恋愛感情に似た感情を持ったとき

の話をしてって、そう言ったあたしに、その話をするの？」

「気がついたから」

あのとき、卒業式の後 何も言わずに手紙を渡されたとき。

「恋愛感情じゃなくても、あっちが憧れの感情を抱いていたとしても、俺はあいつを結構構ってたなって」

日直日誌を出しにきた少女をからかい、たった一年しか担任ではなかったのにいろいろな事情に踏み込み、少女に話しかけることを楽しんでいた。

「だから正直、動揺したよ。手紙を読んで」

手紙の中で、『先生が好きでした』と告白されて。

「『俺は教師で、君は生徒だ』とか、言う暇もないくらい、あっさり俺の前を去ったから」

それは恋ではないと知っていたのに。でも何も言えなくなるくらい、はつきりと告白されたから。

「それが先生の、失恋話？」

できた、と藍華が声を上げた。プリントにはきちんとした文字で解答が書かれている。多分、合ってると思うんですけどね、と笑った藍華はすばやく筆記用具を片付けて、かばんを持った。

「せっかくの夏休み、補習だけで終わるの嫌だから遊びます」

にこつと言いつつ切った生徒は、早々と教室を抜け出した。それは、びっくりするくらい早い、行動だった。

第九話 『紺色言葉』

「何であいつなんか、話したりしたんだろう……」

一人になった化学講義室で、菊池が一人呟いた。他の、適当に作った話でもよかったにもかかわらず。

「よりにもよって、何であの話……？」

一番知られたくない、一番自分が情けないと思う話。

彼女に答えを、求められているわけではなかった。だけど、何も答えを出さないまま、自分だけあやふやな感情を抱いたまま、卒業された。

学校からも、自分からも。

「どっちが大人かわかんないな」

彼女はきちんと、見切りをつけていた。この恋は、かなわない恋だときちんと分かっていたのだ。

『クラスの中で唯一、最後まで敬語だった私を、先生はどう思っているのでしょうか？ ちゃんと理由があるんですけど、ここには書けません。びっくりするだろうから。』

手紙の一節が頭をめぐる。

『本来の目的を書いておきます。いまさらながら緊張している自分がいて、目の前に先生がいなくてよかった、と心から思っています。私は先生のが好きでした。』

驚いてますか？ それとも結構、バレバレだったかな？ でもそれも最後です。先生、今まで本当にありがとうございました。』

彼女の告白は、『過去形』だった。もう、終わってしまった気持ちを書いていた。もう、何を言っても、無駄だということが分かつ

てしまったから。

そして、何もできなかった自分に対し、お礼を言った彼女は最後まで、彼女らしかった。

この気持ちは、恋じゃない。まして、憧れでもない。

それは……名づけようもないくらい、淡くて、苦い感情。

深い悲しみさえもたたえていて、そして、その奥は窺い知ることができない。

紺色の言葉。

そのことをどうしたら、彼女に伝えられたらだろうか。

「無駄だって、知ってるっての」

誰にともなく呟いて、彼女のことを忘れるように、首を振った。もう、終わってしまった、伝えられない、言葉が消える。

「バカみたい」

急に教室から出た自分に向けた言葉。藍華は震える声で呟いた。

「バカみたい」

後悔はしていないのに、それは分かるのに、悲しそうな菊池の横顔。その横顔に向けた言葉。

「何で、あたしが出てくのよ」

今日は美術室に行く予定だったのに。夏休みに入っても、一人でいる美術室の感覚が忘れられない。だから、学校にも来ているのに。なぜだか、今は菊池の顔が見たくなかった。なぜだか、今自分は泣きそうな顔をしている。

「バカみたい」

もう一度だけ、自分に向けて言った言葉。それはゆっくりと広がって、本来の感情を上書きする。

自分に言い聞かせる。これは同情だと。自分に言い聞かせる。あの話に感化されただけだと。自分が持っていた感情も、菊池が持っていただろう感情も、結局は名前のない感情だった。

すりこみではない、恋愛感情でもない。憧れでは軽すぎて、かといって愛情では重すぎる。

薄い、薄い色の感情。

普段は気づかないほど薄く、他の感情の影だと間違える。しかしふとした瞬間に存在に気がついてしまうと、なかったことにはできない。

見なかったことにはできないのだ。

でもいざその感情の正体を知ろうとすると、他の色にまぎれてしまう。だから、いくら探しても、正体を掴むことはできない。なのに、いつもいつも、存在はしっかりと感じている。

気がつけば、心の奥に染み付いて取れなくなる。

掴んだと思うのに、手を開くと中には何も無い。するりと手の間から抜け出して、逃げていく。

そしていつかは、消えてなくなってしまう。それから気がつくのだ、あの感情も、かけがえがなかった感情なのだ。

だから。

「あたしは今、何も思っていない」

もう憧れまがいの恋はしないと、決めたから。

「あいちゃん？ ご飯できたよ」

朔華が下の階から呼ぶのが聞こえる。料理はそこそこできるが、片付けの才能が皆無のため、家事は春華が担っている。

それでも時々こうして、朔華が料理をすることもあるのだ。その献立は、カレーか、シチューか、お鍋。今日はシチューだな、と勝手に予想してベッドから起き上がった。

「今行く」

ずつと横になっていたせいで、扉を開けると廊下の光がまぶしく感じた。

「藍華？ 先食べちゃうよ？」

ひよこり、とダイニングルームから顔を覗かせた春華は、肩までの髪を揺らして言った。

「？さん、今日いないの？」

いつもこちらで夕食を食べている？也が見えず、春華に聞く。

春華は気まずそうに、『ケンカしてるの』と答えた。今回は春華が悪いのだろう、さもなければ『？が悪い！』の一点張りなのだから。

「？くん、すつごく、困った顔してたよ？ どうして、ケンカなんてしたの？」

朔華が嗜めるように言うと、春華が小さく眉を寄せた。

「ちよつと」

春華は話したくないときに、よくこの言葉を使う。そして家族はその『ちよつと』が出ると決まって追求しないようにしていた。

それは春華からの『話したくない』という意思の表れであるとともに、『話さない』という意志の表れでもあるからだ。

「そう。早く仲直りしてね？ 私、寂しくなっちゃうから」

「うん、時間は少しかかるけど、よく話してみる」

そう言つて、笑うとお腹がすいた、と呟いた。

「あたしも！ 今日、シチューでしょ？」

「え、何で分かったの。あいちゃん、エスパー」

「いやいや、匂いで分かるから」

三人の姉妹が部屋に入ると、一気に騒がしくなった。

「ねえ、藍華。化学の菊池先生つて、どんな人？ 来月から、化学が本格的に始まつて、クラス編成が変わつただけで、わたしの人知らないんだよね」

唐突に、思わぬところから、聞きたくなかつた名前が出てきて一瞬間まる。しかし次の瞬間には笑顔を作り、聞き返していた。

「え？ 受け持つてもらつたことないの？」

「うん、私のクラス、化学はずつと桜井先生だったから」

いかにも文系そうな顔の、化学教師の顔を思い出しながら藍華は答える。そうか、今の二年生は桜井先生だったのか、と心の中で勝手に納得した。

「えつと、結構生徒から人気がある先生で、授業も分かりやすいつて評判」

他人事のように観察していた自分がいることに、藍華自身が驚いた。

「それは、知ってる。私と同じ化学クラスの人には『ラッキー』つて言つてたから。かつこいい、つていう友達もいたけど、そこらへんどう？ 性格いいの？」

珍しく、姉が男性のことを話題に出したので、驚いた。

「？さんと、智さん以外の男の人の話をするなんて、どうしたの？」
そう言つと、春華はあつと、口を押さえた後、眉を顰めた。自分
のうかつさを呪っているようだ。

「クラスの友人が、好きだつて言うから……どういう人なのかと思

って」

名前は出さずに、しかしはつきりと言ってしまふ。元々隠し事が下手な次女のことだ、変に隠し事をしてしまうのが嫌なのだろう。

「分かった！ それで？くん、ご機嫌斜めだったんだ」

ぼん、と手をたたく朔華に、藍華と春華は首をかしげた。朔華と春華にあまり似ていない藍華だったが、その仕草は驚くほどよく似ている。

「だからね？ はるちゃんがあまりにも、菊池先生を気にするから焼もち焼いたのよ」

「あ、だから、しつこく聞いてたんだ」

「それではるちゃんのことだから『あんたには関係ないでしょ！』とか言つたのね？」

さすがは長女、凶星だったように春華が目をそらせた。

「だって、その子、他には誰にも言わないで……って」

言つてたから仕方ないじゃない……、という声は小さくてよく聞こえなかった。

「それで、はるちゃんは協力するつもりなんだ」

「ううん、わたしは 今のところ反対だよ。聞く限り、その先生は生徒と恋愛するタイプじゃないよ。諦めるなんて言わないけど、表立って協力はしない」

その言葉に、ずきりと痛んだ心は見ないふりをする。いつかの菊池と同じように。

「先生がもてるって知らなかった」

「かつこいい先生は他にいるけど。菊池先生を好きになる子は、みんな本気らしいよ」

他の先生には、本当の恋をしないみたい。

「だって、その子たちは『先生、かつこいい』とかでしょ？

でも、あの先生を好きになる子は、そのことを隠してる」

その子の目は、辛い恋をする子の目だったよ。

心の中の痛々しさを、罪悪感を、押し殺しているような表情の目。

押し殺してさえ、外にもれ出る感情の止め方を知らず、戸惑う目。
「正直、『諦めて』って言いそうになった。あんな瞳め見たくない」
「やれるだけ、やればいいよ。それでダメなら、彼女も切り替えられる。可能性は0ゼロじゃないならやってみるべきだよ。あとできつと後悔するから」

どうして味方したくなるのか分からなかった。

どうしてか、その感情は無駄ではないと言いたかった。

「知ってる。だけど、可能性は0に近いの。わたしは、お姉ちゃん
のときもそうだけど、大切な人は、傷ついてほしくないよ。身勝手
って、分かるけど。傷ついて、『もう恋なんてしない』って、言わ
せたくない。始めから、そんな恋に落ちないのが一番だけど。それ
がもう遅いなら、早く諦めてほしい」

春華の思いは、間違いもなく、その友人を思つての言葉だった。

「恋は、簡単にはやめられないって、朔ねえが言つてた」

「そうだね。やめられるんなら、わたしは　？が行つたときにや
めてたよ」

春華に傷を負わせ、その自責の念を持った？也。そして引越した。
自分を許さないために。

『春華といったら俺はきつと、自分を許すよ。春華が、俺を許すか
』ら

『俺はあの後悔を忘れたくない、だから、引越したんだ』

それは、？也が引越したとき、春華が知らなかった気持ち。

『後悔を忘れず、それでも、春華を守りたいと思つたら、帰って
これる気がした』

恋は、簡単にやめられない。

だけど、やめなくちゃいけないときもある。わたしは、？が帰ってきたとき、そう思った。

「多分、？がきちんと話さなかったら、泣きながらも、その恋は諦めてた」

姉の声が、耳の奥にこだました。

「そういうことを、しなきゃいけない恋だって、きつとある。たまたま、わたしもお姉ちゃんも違っただけで」

「そうだね……」

結ばれる恋だけじゃないということを、知っている。だって、小さい頃に、何度も考えてきたことだから。まだ恋か憧れかも分からない、幼いときに。幾度も、幾度も考えたから。

「だから……、多分、春ねえには分からないね。諦める恋が、とても大切で、なくしたくないと思う気持ちなんて」

そのときの、春華の顔を、藍華は多分忘れないだろうと思った。

どこまでも儂く、優しいげに笑ったのだ。いつだって、はつきりと口に出す姉の、何も言えない笑顔を見たのは初めてだった。

眉をそっと下げ、苦笑いの表情を作りつつも、それは笑顔だと分かる。口角を上げ、こちらを見る春華を見て、藍華は何も言えなかった。

「そつだよ。わたしは、分からない……。そんな気持ち、知らない」ゆるゆると首を振って、春華は言った。

「ねえ、藍華。藍華は、諦めなきゃいけない恋を、したことがあるんだね？」

それは、誰？

第十話 『秘色笑顔』

春華は、その表情をした春華はもう、分かっているはずだ。でなければ、こんな寂しげな表情をするはずがない。罪悪感にまみれた、傷ついた表情をするはずがない。

春華は知っているのだ、藍華が、そういう気持ちを持ったことを。そして、その相手を。

そうでなければ……説明がつかない。

藍華はそつと唇をかんだ。できれば、知ってほしくなかった。一生知らないままでも良かった。一番知られなくなかったのは？也でも、誰でもなく 春華だった。

この事実を知って、一番傷つくと分かっていたから。

「あたしは」

恋なんて、したことないよ。

そう言いたかったのに、その言葉は出なかった。ただ一言。

「違うの」

そう出ただけだった。

「わたしは、本当に駄目なお姉ちゃんだね。お姉ちゃんみたいに、妹の気持ち分からない。妹が辛い思いをしてるのに、それにさえ気がつかなかった」

何年も、一緒にいたのにね。

「違うよ、あたしのは違う感情だった。お姉ちゃんたちが羨ましかっただけだよ。そんな恋がしたいと思っただけだもん」

嘘じゃない、本当にそう思うんだから。

そう言いたいのに、上手く言葉は出てきてくれなかった。何かがつつかえたように、ただただ意味の無い言葉を紡ぐだけ。

「確かに、恋かもしれないと思っただよ。でも違うの。お姉ちゃんを

傷つけてまで、傍にいたいとも思わなかった。多分、あたしは」

お姉ちゃんに恋をしていた、？さんが好きだったんだ。

「お姉ちゃん一人を見続ける、？さんが好きだった。お姉ちゃんを傷つける人なんて、好きになれるわけないよ」

だから、きつとその感情は、結ばれた瞬間に終わる恋だ。

「お姉ちゃんをどこまでも好きな？さんを含めて、あたしは？さんが好きだった」

涙が出た。分かったから。口に出してそうなんだと、納得したから。ああ、そうなんだって。

スツと心に落ちて、そして掴みきれなかった淡い感情は消えていった。その淡い感情が消えていく感覚が、少しだけ寂しかった。

なくなってしまうばいど何度も思ったのに、いざ消えていくとなるととても切なくなった。涙が出そうになるほど、いつもあった感情が消えていくのが悲しかった。

「うん、分かってる。知ってる。藍華は、そういう子だね？だから余計、わたしは嫌だったよ。初恋でないにしても、そんなあやふやな感情を藍華に持たせて」

どんなに、悩んだんだろうって、気づいたとき……涙が出たよ。

「だって、始めから、それが恋じゃないなんて、分かるわけないでしょ？ どんなに藍華は悩んで、わたしの前で無理して笑ってたんだろうって。そう思ったら、痛くて、仕方なかった。でもね、でもこれだけは言わせて」

わたしは、？に恋をしたことを後悔してないよ。藍華を、傷つけたとしても、それを知ってたとしても、

「わたしはきつと、何回でも、恋をしちゃうんだろうね」

それはなんて、愚かな恋だろう。

なんてバカげた感情だろう。

誰よりも近くにいた藍華いもつとを傷つける感情なのに。

「それで、いいと思う」

それが二人の恋だと、藍華は知っていたから。

「だから、あたしも、そんな恋をするよ。諦めたくても、辛くても、後悔はしない恋をする」

そう言つと、泣き出しそうだった春華の顔が、っただけ笑顔になった。

「わたし、藍華の初恋を見た気がするよ。相手も……、分かる気がする」

「私も、そう思うなあ。あいちゃんの初恋の人」

そして姉二人は、顔を見合わせて笑うのだ。

「お姉ちゃん、何ですつと黙ってたの？」

「あいちゃんとはるちゃんの邪魔しないほうがいいかと思ってから。あいちゃんの初恋の人は分かったし」

「初恋、の人？ まだだよ。あたしの初恋」

「うん、気がつかないうちは、まだ恋じゃない」

そして二人は、少しだけ寂しそうに笑うのだ。

「苦しくても、悲しくても、諦めないでね？ それはきつとあいちゃんの力になるから」

「わたしたちだけの、藍華もいつか……誰かに取られちゃうんだね」

「いい恋が、訪れますように」

容姿のよく似た姉二人は、少しだけ首をかしげて笑った。ふわりと、優しく、優しく、笑うのだ。

まるで、これから起こることが分かるように。その結末さえ、知っただけで、それを知らせるように。

苦しいかもしれない恋が、諦めなければいけないかもしれない恋が、決して無駄ではないと、妹に知らせるように。

「変なお姉ちゃんたち」

「まあ、お姉ちゃんは池平選ぶくらいには変人よね」

「はるちゃんも中々だと、思うけどな」

三人で笑いあいながら、話していた。

「はるちゃん。何で、あいちゃんにあんなこと言ったの？」

朔華の口調に、非難の色が少しだけ混ざった。藍華が部屋へ戻ってしまい、今では二人しかいなかった。

「なんとなく、わたしも藍華も、そういうことを話す時期が来た気がしたから」

対して、春華の口調はそっけない。あっさりとその後、食器を持って席を立ち上がる。

「何も、二人ともが傷つくことないと思うけど」

もつといい方法があったはず、と朔華は呟く。春華は勢いよく蛇口から水を出し、食器を洗い始めた。

「これが、一番よかったよ。わたしも、藍華もきちんと話さなきゃいけないかったんだよ。きつと」

ジャーツと勢いのよかった水が急に止まり、あたりが静まり返る。

朔華は少し奥にあるキッチンへ回り込み、春華に話しかけた。

少しだけ眉を顰めて、春華を心配するように覗き込んだ。

「傷ついてる？」

「ううん。辛いのは、きつと藍華だから」

「恋じゃない、よ？」

「知ってる。あの子は、そんな恋をする子じゃない」

朔華はポンポン、と優しく春華の頭を叩いた。しっかり者の次女

は、時々我慢しすぎることもある。姉妹が大好きだから、唇をかみ締めてまで涙を堪えることがある。

こぼれる限界まで、泣いていないと言い張ることがある。

「はるちゃん、泣いていいよ」

「な、……かないよ」

泣けないよ。藍華が泣かないんだから。

「わたしは、気づけなかった。いつも近くにいたのに。もっとうまく、恋じゃないって気づけたかもしれないのに。きつとわたしが、藍華を傷つけた」

「いいじゃない。もう。あいちゃん、次の人見つけたみたいだし。

はるちゃんがそんなに自分を責めると、あいちゃんも自分を責めるよ」

本当に二人は、相手のことを思いすぎるんだから。

「姉妹なんだから、もっと傷つけあつて生きてもいいんじゃない？

私たち、ともにケンカしたこともないね」

いつだって仲のよい姉妹だったから。大きなケンカは起こったことがない。

何かが起こったとしても、どうにかして穏便に解決することになっていた。優しい姉と、しっかりモノの真ん中、そして素直な末っ子で。

「お姉ちゃんが、優しいからだよ」

「はるちゃんが、しっかりしてるからだね」

結局のところ、この三人は自分の姉妹が大切で仕方がないということ。

「ねえ、はるちゃん。もし……あいちゃんが本当に失恋したら、どうする？」

朔華の言葉は、真理をついているだけに、痛かった。

「何も、できないよ。わたしたちは失恋した人の気持ち、経験してないんだから」

わたしたちからの慰めを、藍華はきつと望まないだろうから。

「でもあいちゃんの心を揺さぶる人は、いつも少し遠い人だね」

「今回のほうが、遠い気がするよ」

相手は教師である。

しかも告白するタイミングさえ計らせない。

恋なんて、しない。そんな教師。

子供なんて相手をしない、そんな大人。

「手強い気がするなあ」

「何で、好きになったのかな……」

ポツリと、春華は呟いた。

「わたしは勝手だね。お姉ちゃん。どうしてもっと、好きになってもらいやすい人に恋しないんだろっかかって思った。よりもよって、どうして、初恋があの人なんだろっか」

食器を洗い終わり、いつの間にかきれいに乾燥機に入れた春華は、席に座った。そして腕を組み、おでこをその上に乗せる。

悩みが、悩みを呼んで、もう絡まって解けなくなる。

「失敗してほしいとも思わない。だけど、成功するとは思わないよ」

また、あの子は傷つくんだろっか。

また、一人で泣いてしまっんだろっか。

「でも、後悔しない恋、なんだから」

それでも朔華は諭すように、春華に声をかけた。春華の隣に座り、背中をあやすように撫でる。

「大丈夫。私とはるちゃんの妹だよ？ 簡単に傷つくわけない」

「わたしの妹でも、藍華の方がきつと強いからね」

自らに言い聞かせるように春華は言い、そして顔を上げた。

「?くんに、全部話す?」

「うん。隠しても、ばれるから。あいつには」

あいつには何も隠せないから。

昔から、そうだったから。隠そうとして、失敗して、そして相手を傷つける。

「少し、ゆっくりと話してくる。泣いちゃいそうだから」

「昔から、泣かないはるちゃんの唯一の泣く場所だもんね」
決まって泣きたいとき、春華は蒼也のもとに行くから。

後悔しない恋をする。

それはきつと、何にも変えがたい力になるでしょう。

そしてその人を、より強くする。

傷ついても、決して折れない芯の強い人になる。

傷つかずに、強くなんなれない。

第十一話 『黄色絵画』

「藍華ちゃん。文化祭、どうする？」

「ああ。美術室で展示をするから、そこで待機してなきゃいけないの」

「そっかあ、じゃあ、他の子達と回ろうかな」

「二日目は一緒に回れるから」

「じゃあ、二日目は一緒に回ろう」

一学期から仲のいい詩織の誘いを惜しげに断り、さて、と腰を上げた。

「美術室に行くてくるね。もう時間ないし」

「大丈夫？ 美術部の人、ほとんど手伝ってないのに」

何を展示するの？ と聞かれたので、少し迷った後口に出す。

「美術の……坂野先生がいるでしょ？ その先生の絵と、先輩が残っていた絵と、あとポスターとか」

「藍華ちゃんのは？」

そこを聞かれるとは思っていなかったのか、藍華はぎょっと目を見開いた。

「えっ？」

「だから、藍華ちゃんの絵はいくつ出すの？」

改めて聞かれると、どう答えていいか分からなくなった。

「二つとか」

「少ないじゃん！」

もっと出しなよ、見に行くから。という友人を尻目に、半ば逃げるように教室から出た。

出す絵は二つ。

一つ目は、背中合わせに座っている春華と？也を描いた絵。そしてもう一つは……今現在描いている絵。

それが、藍華の作品になる。

一つ目は、青色が多く使われた、少し悲しい絵。判断できない、淡い感情を表した、失恋の気配さえ漂わせる絵。

なら 二つ目の作品はどんな絵だろうか。

「もう、終わったんだから大丈夫」

あの感情は、消えてしまった。いや、もしかしたらもう消えてしまったものを、ここ数ヶ月、探してただけかもしれない。

泣きたいほどの切なさもなく、心を握られるような動悸もしない、ただそれは、見つめるだけで満足してしまう、なんとも、幼く、淡い思い。

「大丈夫だよ」

あたしは、恋をしたことがない。そして、当分することもないだろう。だから大丈夫。もう何かに惑わされることもない。

「もう、誰かを……」

春ねえを、傷つけることもない。名づけることもできなかった感情の最後の欠片が、涙となって一粒だけ流れた。

今流行の歌が学校中に流れている。外で違う音楽と、歌声が流れる。みんなの……笑い声が聞こえてる。

「なのに、何であたし一人だけここにいるの？」

独り言に答えてくれる声があるはずもなく、受付の机に突っ伏した。

「ずるい……。交代してくれるって言ったのに」

交代するはずの美術部員はまったく来ない。すでに二人目が来るはずなのに、それも来ない。

『さあ、やってまいりました。我が南ヶ丘高校の煌祭きんめい。今年もどうぞ、楽しんでください。なお、午後六時からミス・コンもありますので、そちらもお楽しみに』

明るい、朔華の彼氏の声が聞こえてくる。智さんだ、と思いながら、先ほどの放送を反芻していた。

『ミス・コン』

この高校のものは少し変わっていることで有名だった。

「ミス・コン……だけじゃないでしょ。智さん」

ミス・コンテスト

通称ミス・コン は通常、女性を対象としている。そのため、女性側から『女性の商品化』と呼ばれ、反対も数多くあるのだ。

が、しかし、こここの高校のものは一味も二味も違う。（代々の会長が変人だからだという噂が実しやかに囁かれている）

この学校のミス・コンの中には『ミスター・コンテスト』つまりは男性のコンテストも含まれているのだ。しかも……男装、または女装の出場。（女装はミス・コンテスト、男装はミスター・コンテストに出場する）

なので、生徒からは『裏ミス&ミスター・コンテスト』裏ミス と呼ばれている。今年も例外なく、開催されるらしい。

智が家へ来たとき

『今年は期待できるよ。うちの生徒会から出したしね』

と、自身有り気になっていた。確かに、今年生徒会に所属する人間は、すごくきれいな人たちばかりだった気がする。

「真紀」。そろそろミス・コンの準備」

「はいはい。もう少しね」

そんなことを考えていると、その生徒会の人間が二人、こちらに

歩いてきた。この間の補習にいた二人組み。

「ごゆっくり見ていってください。パンフレットはご自由にお持ち帰りください」

機械的に言葉を紡ぎ、頭を下げた。そして頭を上げた瞬間、真紀と呼ばれる少女と目が合う。

「あ、やっぱり。この間……夏休みの補習で化学室にいたよね？」

長い髪を今日は下ろし、メガネをかけていた。この間の姿より地味だったが、それでもなお、美人だと思う。

「あ、はい」

「初めまして。私、黒田真紀。生徒会執行部で書記をしています。智先輩　会長をいつも注意してくださるお姉さんに助けてもらっています」

にこり、と彼女は笑った。藍華もなんとなく笑うと、真紀は視線をもう一人の少女へと移した。

「え……っ！　あ、あたし、池田佳奈美です。生徒会で会計をやっています。同じく、春華さんにいつもお世話になってます」

ぺこり、と頭を下げると、二つにくくっている髪も揺れた。

「さっそくですけど、会長からの伝言をお伝えしなければいけないんです」

そう前置きして、真紀は胸ポケットから紙を出した。

「えっと、」

『藍華ちゃん、智です。朔華さんがこちらへ来ました。本当は美術室まで案内したいところなんですけど、できないからこっちへ着てくれるかな？　忙しいのなら、僕の仕事が終わるまで待ってもらうことになるんですけど』

だそうです」

「え、朔ねえ、ここの卒業生ですから、これですよ？」

「ええ！　そうなんですか?!」

佳奈美が答える。しかし真紀は『知ってます』とさりりと言った。

「じゃあ、何で……」

「心配なんでしょう？ 一人で歩かせるのが」

おっとりとして優しくそんなお姉さんだし、お祭り気分ですら浮いてる校内を歩かせたくないのよ。一人。と、同い年の人間とは思えないほど、大人びた顔で笑う。

「だから、あなたを呼んだ、と。智先輩、意外と心配性」
くすりと笑う姿も、妙に大人びていた。

「私たち、これから少し用事があるから、手伝うことはできないんだけど。ここ、少しの間だけ、空けられない？」

真紀がこちらを見た。

「む、無理です。ここにいないと、中説明する人いないし」

「そうか。じゃあ、あ……！！ 菊池先生！」

真紀が一人の教師の名を呼ぶ。ここ数週間、まったく話さない人話したくなかった人。

「何？ 黒田。俺忙しいんだけど」

「どうせ、告白する人たちから逃げてるんでしょ？ ちょっとこっぴど頼めませんか？ 彼女、これから用事があるんで」

「え、いいです。あたし、ここに残りますから」

菊池と向かい合い、話し始める真紀を止めようと前に身を乗り出す。

「まあ、いいけど。ここ、人少なそうだし」

暑かった、と菊池はネクタイを緩めた。そのついでにボタンもあける。

「だらしないですねえ。それでも先生ですか？」

からかうように言うと、菊池は真紀の顔を見つめた。

「お前頭いいけど、先生への対応がなってない」

「大丈夫です、先生だけですから」

にこっと笑う。が、目は笑ってない。

「お前、今回のテスト0点な」

「得点ですか？ その前に10が付きますよ、先生」

二人の、なんとも言えない会話が怖かった。

「真紀〜」

「ああー、もう、分かったわよ。出ればいいでしょ？ 出れば！

裏ミス・コン」

そう言うのと、『よろしくお願いしますよ』と菊池に念を押し、藍華と向かい合った。

「智先輩の伝言、確かにお伝えしました」

とだけ言い、くるりと踵を返した。

「えっと、じゃあ、先生、いいですか？」

「ああ、いってらっしゃい」

さすがにタバコは吸えないらしく、受付のイスに座りふわりと手を振った。

「いってきます」

その顔を見るのが、少しだけ、怖くなった。

菊池の顔をまともに見ることができずに、足早にその場を後にした。

「って、言われてもなあ」

もともと人が来ないんだから、ここに自分があるのがいいのかどうか分からない。客が来ないのに、受付に座る自分が、少しバカらしい。

「見て回るか」

絵などに興味はない。もともと、抽象的なものは苦手だ。だから数字で表されるものが好きだった。考えなくても、数字は正しく答えを示してくれるから。

コツリ、コツリと靴がなる。一つ一つの絵を見て回るうち、菊池の足がある場所どまった。

「これ……」

二つ並べられた絵は、ここ数ヶ月で見慣れたタッチだった。優しく、丁寧な筆遣い。正確さが少ししかけたデッサン。それでも高校生が描く絵にしては、十分すぎるほど見事な絵。

一つは以前、見た絵だった。秘密を知ったときに見た絵だ。聞かなくてもよかった。少女の秘密。

あの絵を見たとき。彼女の顔を見たとき。聞かずにいられなかった。聞いては、いけなかったんだろうと今にして思う。

触れられたくない過去、それは誰にでもあるものだ。

「もう一つ」

もう一つの絵は、見たことがない絵だった。

「いつの間に描いたんだ……？」

夏休みが終わって以来、美術室にめつたに姿を現さなかった。文化祭の準備に追われている時期になると、絵をばかりを描いてもいられないだろう。そして一つだけ、思い当たった。

「あのキャンパス……」

昨日、大きな荷物を抱えていた彼女が思い出された。少し見えたそのかばんから見えたのは……キャンパスだった気がした。

「家で描いてきたのか」

その絵は、黄色。茜色を使っているにもかかわらず、イメージは黄色。二人が自転車に乗っている姿が小さく、描かれていた。

少年が前で自転車をこぎ、少女はその少年に掴っている。小さく、描かれている二人は楽しげに笑っていた。夕暮れの道を走り、ぴたりと寄り添った二人はとても仲がよさ気に見える。

題名は『夕暮れは黄色』

それはイメージでしかない。二人の……笑顔の。それでも、菊池は笑顔を浮かべて、受付へ帰っていった。

彼女の気持ちも、彼の気持ちも……。

まだまだ発展途上。

第十二話 『クリーム色仕切り』

「お姉ちゃん、これからどうするの？」

「あいちゃんの絵を見たら、また智くんところに帰ろうかな。一人でうるうるしちゃダメ、って言われちゃった」

エヘヘ、と小首を傾げながら笑う朔華に、『智さん過保護すぎるだろ』とつつこむ藍華。たぶん朔華は気がついてない。そして藍華も言うつもりはなかった。

「一人で智くんところに帰れるから、もうあいちゃんは受付に戻っていいよ。ごめんね。わざわざ迎えに来てもらって。」

智くんがどうしてもだめだって言って、放してくれなかったの」

どうしてだろうね、と不思議そうに呟くが、理由が分かっていないのはたぶん本人だけだ。生徒会メンバーは苦笑いで送ってくれたから。

特にさっきここへ来た真紀という少女は『智先輩の弱点』を見てけて随分と嬉しそうだった。

「それにしても、今年の生徒会の人、きれいだったねー。私、黒田真紀さんっていう女の子が好きだった。美人さんだったね」

確かに、美人だったし、その他のもう一人の書記と副会長もかっこよかった。（男二人）

「智くんが言うにはね、ファンクラブだってできちゃう勢いなんだって」

『美人さんたちはいいね』と邪気もなく、笑う。その『ファンクラブができる勢いの人気』は智にまで及んでいると知っているのだろうか。

まあ、知っていても朔ねえには関係ないな、と藍華は勝手に思っていた。

朔華が智が好き、というのも分かるが、どちらかと言えば朔華のことが好きでしようがないのは智、というのが藍華と春華の見解だ

った。

「ほら、もうお姉ちゃん見るから、受付に行っていよいよ」

そう言うが、ついでなので、受付がないもう一つの入り口から入る。

もしかしたら、菊池が女子に捕まっているかもしれないので、受付から離れたところを案内する。どうせ妹のことしか頭にないので、その絵以外は素通りなのだ。しばらく二つの絵を見比べたあと、朔華は藍華のほうを見て笑った。

『大丈夫だね』

何が、かはよく分からなかったが、とりあえず姉が笑ったのでよしとする。対して追及されたくないのは、自分なのだから。

「お姉ちゃん、もう出るね？ だから早く、受付に戻って」

入ってきた扉から出て行こうとする姉を不思議に思った。いつもの姉なら、

『あいちゃんとはるちゃんがお世話になっている先生に挨拶する』
くらいは言いそうなのに。不思議そうにしているのがばれたのか、朔華はふふ、と小さく笑った。

「また今度の楽しみにしておくの。だってほら、そのほうが、わくわくするし」

よく分からなかったが、とりあえず頷いておいた。今日の姉の発言は、意味が分からないものが多いと思う。

「じゃあ、あいちゃん。頑張つてね」

何に對しての『頑張れ』かは確かでないけれど、とりあえず菊池と顔を合わせるところから始めなければならなかった。

朔華が階段を降りていくのを見送ってから、よしとこぶしを握り締める。くるりと踵を返して、正しい入り口から顔を覗かせる。

姉との会話が漏れているので、帰ってきたのが分かっているだろ

う。

「先せ……」

呼ぼうとして、途中で止まった。

「寝てる……？」

確かめるようにそう言うとき藍華はそつと教室に踏み込んだ。受付の机につつぷし、珍しく上に白衣を着ていないスーツが皺になつて
いる。

きれいに整えられているはずの髪も乱れ、ついでにメガネもした
ままだ。意地悪そうな目が閉じられているせいか、なかなか女性受
けしそうな顔が目立つ。

「先生。帰ってきましたから、寝るんなら自分の教室じょうむいしつに帰ってくだ
さい」

そう言つても、返事は返つてこなかった。目が閉じられているせ
いで、気まずかつた雰囲気もない。いや、あたしが勝手に気まずが
つていただけなのだが、と藍華は一人ごちる。

どうしてか、あの失話を聞いて以来、話をすることがためらわ
れた。自分が頼んで、話してもらつたくせに、どうしても、気まず
かつた。

「先生の、アレも、あたしの思いと、一緒、ですか？」

本当に？ 自分のはもう吹っ切れた気がする。朔華と話してから、
少し軽くなった気がする。だから改めて、憧れだと実感した。だけ
ど。

「先生、もう、何年もそれが忘れられないのなら……吹っ切れない
のなら、それはもう、立派な恋じゃないんですか？ あたしの持つ
ていた感情と、先生が持っていた感情は、もしかしたら」

もしかしたらと、そうずっと考えていた。あの日、話を聞いてか
ら。春華と話してから。

「違うのかもしれないよ」

どうして、何も語らないの……？ そのときだ。いきなり足音が
聞こえてきたのは。ここは四階。

四階で何かをしているのは、美術部だけ。つまり、四階に来ているということは、目的は絶対美術部の展示。

どうしよう。なぜかこの現場を見られてはいけない気がした。しかし、隠れる場所は見つからない。少し離れたところに教務室に繋がる扉があるが、そこへ言っている時間はもうないと分かる。開けっ放しにしていた扉から、人が入ってくる。

思わず、絵を飾っている移動式の仕切りの後ろに隠れた。丁度大きな仕切りだったので、足元も見えないはずだろう、と希望の入った予測をする。

入ってきたのは一人の女生徒だった。ネクタイの色から、春華と同じ二年生だと分かる。そしてなぜか、この前春華が話していた『菊池先生のことが好き』女生徒のことを思い出した。

「先生……？」

か細い声で、女生徒は聞いた。

「どうして、ここにいますか」

それでも、菊池は起きなかつた。

「先生、先生は……、恋をしますか」

声が、わずかに震えていた。藍華の手も、知らず震えていた。

「私は、先生のこと、好きです」

起きていないのに、届かないのに、あなたは、その人に思いを告げるのですか？

「先生が、どう思おうが、関係ないんです。生徒にしか、思われなくても。でも、先生を、そういう目で見る生徒もいるんだって知ってください。知るだけで、いいんです」

それは、なんて齒痒い想いだろう。

「返事をくださいとも言いません。付き合ってくださいとも言いません」

「ただ、どうか、知っておいてください。」

「私は、あなたが好きです」

藍華は何も言わず、立っているままだった。自分が知る限り、菊池に対しての二度目の告白は、まだ、現在形の告白だった。『まだ』好きだと、彼女は言った。

目をつぶる。クリーム色の仕切りに身を任せ、耳をふさぐ。何も考えるな。何も感じるな。あたしには何も、関係ない。

先生に誰が告白しようが、その想いがどんな種類であろうが、あたしには関係ない。それでも、耳をふさいでも、入ってくる音がある。

彼女が去っていく、足音が聞こえる。でも、彼はまだ起きないまま。そつと、仕切りの後ろから出てくる。そして受付のところまで行くと、まだ菊池は寝ていた。

何も知らないまま……、あの女生徒がどんな思いで告白したか知らぬまま。

「先生」

起きてください。

「先生」

お願いだから起きて。そうしないと、あたしは何かを自覚してしまいそうになる。

「先生は……どうしてみんなに優しくして、そして」

みんなに冷たいの？

心に、何かが形作られていく。こんな感覚、知らない。

コンナカンジョウ……シリタクナイ。

「先生！！」

思わず出した大声に、菊池はやっと身じろぎした。

「ん、平田？」

寝起きの声は、いつもより低くて、そして少しだけ甘い。腕をつかまれて、とっさに振り払った。何かが、体を流れた。電流のよう

なものが、流れた。

「何、してるんですか?! 誰か、来たんじゃないんですか?」
気まずさを、紛らわせるための言葉は、裏返った声でゆれた。

「お前、親切にしてやった俺に向かってなにその口調」

「ありがとうございます」

「うわ、棒読み」

そう、これでいい。このままが、あたしたちにとって一番いい雰
囲気。どうか、このまま……進んで。

第十三話 『竜胆色車内』

「あいちゃん。今日、傘いるよ」

「へえ？ 何で。雨？」

雨マークなんてあつたかなあ、とついさつき見ていた天気予報を思い出す。

「今日雪降るんだって」

綺麗だよな、そう言つて朔華は笑う。

「何でも、一番の寒気らしいよ。積もるかもね」

つて、もう、降ってるよ。外を見ると、もうすでにちらちらと雪が降り始めている。それも積もりそうな粉雪だ。

「春ねえは？」

「はるちゃんは大丈夫。？くんがもう持つてつてたから」
相合傘でも、ぬれるより良いでしょう？ と正論を言う。

いや、姉の場合、ぬれてでも一人で帰りそうだけど。そう呟くと、朔華はにこりと笑った。

「大丈夫。結局はるちゃんは？くに勝てないから」

確かに、と思わず頷いてしまった。いつも大抵のことは春華の言うとおりになるが、本当にダメなときは？也が譲らない。

そういうときは、春華が折れるのだ。

「だから、はるちゃんにはあえて言つてないの。？くんへのサービ
ス？」

首をかしげると、朔華は笑った。

「積もる？」

「うん、ちよつと積もってるかも」

窓から見える道路は、もうすでに白くなり始めている。

「まあ、太陽が昇れば少しは溶けるでしょ」

「滑らないように気をつけてね」

朔華は人事のように言う。—コマ目が休講のため、自分が家から

でるのは太陽が昇ってからだと知っているからだ。

「うん、行って来るね」

「いつてらっしゃい」

靴箱の隣から傘を出すと、傘の留め金を外す。ぱつと少し開いた傘を少し振り、玄関の扉に手をかける。チラチラと降る雪が目にし痛く、足早に家を出た。

寒そうで、でも雪が降ると少しだけわくわくする。いつもと違う風景が好き。

はぁ、と息を吐くと、白い吐息は空気に溶けてなくなってしまった。このもやもやとした実感も、少し痛くなる感情も……。

「こんなふうに……溶けてなくなっちゃえばいいのに」

雪のように淡く、白い吐息のように儂く、触れればその体温で溶けてしまうもののように、時間がたてばなくなってしまふもののように、

「全部」

全部　　なくなってしまうばい。跡形もなく、消えてしま

えばいい。

そんな感情、持っていたことさえ、忘れてしまえばいい。

そんな感情　　それは、何？

「って、変な感傷に浸ってる場合じゃないんだよね」

足を早くし、感覚のなくなっている足先に力を込める。早くしないと頭の上に、雪が積もってしまいそうだ。

「さむっ」

最後に一息だけ、白くなって、溶けた。

雪のように、吐息のように、白く溶けていく……声。

「はい、これで終わり。各自解散」

放課後、ショート・ホーム・ルーム S H Rも終わり、藍華は教室を出た。もちろん、ちらりと外を見ていないので、どうなっているか知る由もない。

歩けないほどいつの間にか積もっているとか、このままだと帰るのに苦労しそうだとか、そんなこと露ほども知らない。

「積もってるねー」

「帰れるかな」

「部活できなくない？」

そんな会話が、繰り広げられていることも、知らないままだった。タツ、タツ、タツ。軽快な足音が、階段に響く。ガラガラと扉を開けると、いつもと変わらない美術室が目に入った。

「ちよつと寒い」

教室なのにもかかわらず、息が白くなり思わず身を振るわせた。慌ててストーブのスイッチをいれ、一番近い席に座る。

すぐ温まるわけではないので、コートは着たまま、マフラーは巻いたままだった。

スケッチブックに描かれた絵から、本格的に描く絵を選ぶ。人物に飽きた気がして、校舎のスケッチを取り出した。

ちょうど部屋も程よく暖まり、キャンバスを出すついでに、コートを脱ぐ。防寒具を全て取り去り、下書きしていった。

そして、ふと、不明瞭なところがあり、窓から校舎を見ようとした。

「何……これ」

外を見た瞬間、出た言葉はこれだけだった。いつもより、寒かった。いつもより勢いよく雪が降っていた。

しかも積もりやすい、粉雪が。

チラチラと、細かい雪が風に乗る。そんなに降っていないようにも見えるのに、粉雪は積雪量が多くなるらしい。

くらりとめまいを覚えた。いったいあたしにどうしようと、という悲鳴が心の中で聞こえる。

「どうしよう……これ、帰れるの……？」

そんな疑問が浮かび、慌てて行動に出た。キャンバスをしまい、コートを掴み美術室から出る。そのまま階段を下りて、靴箱まで走った。

人気はまつたくない。

まあ、こんなに雪が降ってて残ってるやつのほうが少ないか。

小さくため息をつき、二年の靴箱へ向かう。当然、姉の靴ももうなかった。靴を履き、一步踏み出すが、不安定で仕方がない。

もともと雪が少ない地方で、年に一、二回積もる程度なのだ。しかも、積もってもすぐ溶ける。足元がどうしても頼りなく、尻込みしてしまう。

薄く積もっているなら、珍しくて、少し嬉しい。いつもと違う風景は、それだけで綺麗だと思っから。

でもここまで積もられると逆に怖いのだ。こけないだろうか、車が出っ込んでこないだろうか、それが心配になる。自分だけでなく、この町の人みんな雪に慣れていないから。

「帰らなきゃ」

いつまでもここにいと、本当に帰れなくなってしまっ気がして、足を踏み出した。

……が。

「うわあっ」

ツルリ、とすべり、思いつきりこけた。受験生じゃなくってよかった、と思わないでもない。

「サイテー」

あちこちについた雪を払い、立ち上がるが、それさえも苦勞する。立ち上がるうと足をつくの、すべる。

「もうっ！」

立ち上がれずに、声を出すと、さっと目の前が暗くなった。いきなりこんな暗くなるわけがないと思い、ひざと手をついて下を向いていた顔を上げた。

「お前、まだ残ってたわけ？」

聞き覚えのある声にはっとして顔を上げた。

「先生……」

文化祭以来会っていない、菊池がそこにいる。手を差し出されるが、なぜか掴む気になれず、一人で立とうとする。

「きゃっ」

そして再びこけた。情けなくなり、顔がまともに上げられない。

「おい」

差し出される手を取ろうか取るまいか迷っていると、勝手に腕を掴まれる。そしてぐいっと力強く引つ張られた。

「素直に取れよ、手」

「すみません」

どうして、素直に取れなかったのか分からない。だけど、取りたくないのは確かで、しぶしぶ謝った。

「ちよつと来い」

そして腕をとられたまま、引つ張られた。

「あ、ちよつと。菊池先生」

抗議の声を上げるが、菊池は一向にかまう様子はない。

「先生、痛い……」

痛い、と言うとほんの少しだけ手の力を緩められる。しかしそれ

だけで、掴まれていることは変わらなかった。
掴まれたまま、引つ張られるまま藍華は菊池に従った。

しばらくして、菊池が止まったのは職員室の前。そして扉を開けて、中に入る。

「すみません、生徒が残ってたので送っていきます」
「えっ」

声が漏れた。すると職員室の向こうから、担任が出てきて眉をかめた。

「平田、俺、すぐ帰ってSHRで言ったよな？」

「え、そうですね？」

もうその頃は、何を書こうか考え始めていて、先生の言葉なんて聞いてなかった。

「俺が送っていきましょうか？」

担任が言うので、慌てる。

「そんな、いいです！ 一人で帰れますから」

先生方に迷惑をかけるなんて、いくらなんでも気が引ける。

「無理だから、これで帰るのは」

先生が二人して、窓の外を指差した。先ほどより勢いのある雪、それに職員室に残っている先生も少なかった。

「もう、みんな帰ってるの」

言い聞かせるように言われる。だけど納得できずに言葉を紡ぐようにすると、耳元で先生が笑った。

「また、こけたいわけ？」

ぼつと顔が赤くなる。もしかしたら、一人で立てずに悪戦苦闘しているところも見られていたのかもしれない。いや、この様子なら間違いなく見られていただろう。

「というわけで、瀬戸先生。俺が送っていきますから」

「いいですか？ よろしくお願ひします。まだ仕事が残ってるもので。早く帰りたいんですけどね」

勝手に先生同士で話が進んでいた。どうすればいいのか分からず、藍華は途方にくれていると、菊池は話を終え、再び藍華の手を掴む。

「じゃあ、お先に失礼します」

「あ、先生……」

有無を言わずに引つ張るので、引きずられる形で職員室を出る。

「気をつけてな」

「はい……、さようなら」

担任にもそう言われるので、もう諦めた。

「先生……」

無言。

「先生……？」

返事がない。

「菊池先生、怒ってらっしゃいますか？」

「怒ってる」

そう言うだけで、菊池はまた外を向いてハンドルを切った。車に詳しくはない藍華なので、自分が乗っている車がかかるうじで日本車だと分かるだけだった。

しかし流れるようなボディも、走りも、それなりに高いんではないだろうかと思わせる。音楽もかけず、ラジオもかけず、車の中は実に気まずい雰囲気満たされていた。

「何を、怒ってらっしゃるんですか？」

何を怒られているのか分からず聞くと、菊池は藍華のほつを見て、また不機嫌そうな顔をした。

「お前が……」

お前が？

「雪が降ってるのに残ってたり、こけたのに意地でも俺の手を取らなかつたり、一人で帰ろうとしたりすること」

怪我でもしたらどうするんだ、と怒られて、ほんの少しだけ肩をすくめた。

「大丈夫ですよ、こけるだけならケガしないし」

そう返すも、菊池は怒ったままで、藍華は首をかしげた。

「大体、雪が降ってたら普通すぐ帰るだろ」

あきれたような声がする。少しだけ、嬉しいのはどうしてだろうと自問自答するも、菊池に会うのが嫌だと思っていたことを忘れることができた。

シートに体を預けると、かすかにタバコと他の匂いがした。たとえるなら、少し薄い紫色。落ち着いていて、神秘的で、謎めいた男の人。

それはまるで、先生みたいな……？

「先生……」

何の、香水つけていらっしやるんですか？その問いに、菊池は目を丸くした。

「は？」

「タバコと、それとは少し違う匂いがしたから」

ああ、と菊池は頷くと、答えを返す。

「多分、ムスク系統の香り。この前家でアロマ焚いて、気に入って時々してるから、その残り香だろ」

先生が、アロマ焚いてるなんて、意外。

そう藍華が笑つと、菊池がむっとしたように返した。

「お前みたいな成績悪い人間に悩まされてるんだよ。ストレスがたまってるじゃない」

落ち込むせりふだったが、冗談の色を残していたので、笑った。
「先生、みたいな匂いだなって思ったんです」
その色は 自分には似合わない色だけれど、少しだけ今度焚いてみようかと思った。

先生の香りは、ムスク。

色で表現するなら、薄紫色。綺麗な、花の名前を持つ……

竜胆色。

第十四話 『翠色教室』

あつという間の一年だったという気がしてならない。気がつけば二年生で、クラス替えがあつて……そして。

担任が、変わった。

「今日から君たちのクラスの担任をします。菊池優斗です。二年生とはいえ、受験を意識する頃だと思えます。相談があれば、言ってくるください」

型どおりの挨拶をして、菊池は頭を下げた。いつもどおり、メガネをかけ、地味なスーツを身に着けている。

そのせいか、女子からは『あー、隣のクラス有田なのに』という声漏れる。菊池も『こら、そこ。俺に失礼だから』と笑いながらつつこむ。

藍華は関心のないまま窓の外を向いていた。クラスが変わろうと学年が変わろうと、少し周りの空気が違うだけだ。

自分には大差ない。ただ少しだけ周りの雰囲気が変わってしまっただけ。

それに。

「藍華ちゃん。また同じクラス！ しかも隣だよ。よろしくね」
にこりとこちらを笑ってくる詩織は一緒なのだから、あまり変わらないのだ。

「よろしく詩織。丁度いい具合に隣だね。出席番号順なのに」

苗字が平田の藍華と、美浦の詩織はうまい具合に隣同士だった。そう、あまり変わらない、はずなのだ。

「平田、こっち向け」

この担任さえ、他の人間だったならば。

「……」で、この運動は等加速度運動なので……」
ここは一年の復習だ、と言いながら菊池は黒板に文字を書いていく。はつきり言うと、藍華には何を書いているのかさっぱり分からない。

物理なのだろうが、実際自分が何をしているのかはさっぱりだ。
コンコン、とシャーペンの後ろで頭を叩き、ノートはとる。帰ったら春ねえに聞くしかないな、と一人で思った。

聞いても大して変わらないけれど、聞かないよりはましだろうと結論付けた。

そもそも物体の動きなんて、見たままなのだし、それをわざわざ数字に表す必要があるだろうか！ いや、ない。

藍華一人の言い分が、心の中で語られる。しかしテストでそんな言い訳は通じないので、意味が分からない教科書とにらめっこしなければいけないのだ。

赤点になれば進級さえ危ぶまれる。さすがにそれでは姉たちから怒られる。

「……、それではここでの物体の運動速度を、美浦」

「え、と。13 m/sです」

「よろしい」

メートル毎秒……。1秒当たり、13m進んでるってことであつてますよね？

「では物体が停止していたときから、現在までの加速度は？ 平田」

「え」

加速度って何ですか……。 (A・メートル毎秒毎秒)

「ひーらーた。去年、やったよな？ 補習でもやったし」

結局学期末試験もうまくいかず、補習をした藍華には痛い話だ。

しかも菊池の笑顔が異様に怖い。

「えっと、物体が停止したときから、現在までの時間が5秒なので……なので？」

分かるわけないだろ！！ と、思うが、それを口に出してしまえば笑顔で『補習』と言つに決まっている。これ以上補習をして、もし姉などにばれた場合……とくに春華の反応が怖い。

「そうそう、それで速度が変わってるんだから。公式に当てはめて菊池もヒントを出しているようだが、そもそも出し方が分からないのだから解けるはずもない。公式の文字に何を入れればいいのかも分からない。

そのとき、クンクンと袖口を引っ張られた。

見れば詩織とは反対側の隣の人がノートに数字を書いている。

「2m/s & amp; sup2;」

「正解」

菊池は笑って、言ったあと、また説明に戻った。

「ありがとう……答え」

隣の少年にそう言つと、にこりと笑って返された。

「いや、いいよ。苦手そうだったから」

染めていなさそうな髪は黒。規則正しく着られた制服。笑った顔は少し幼く、なんとなく誰かに似ている気がした。

「ねえねえ、藍華ちゃん。日下部くん、絶対藍華ちゃんに気があるよね？」

詩織の言葉に驚き、慌てて隣を見る。幸い、少年は授業に集中しているようだ。

「詩織、何言ってるの。困ってるから、助けてもらっただけじゃない」

そう言つと、詩織はフッフと柔らかく笑つたあと、藍華のほうを見た。

「ばかだなあ。藍華ちゃん。日下部くん、地味だけど顔はいいし、優しいから結構人気なんだよ？ それなのに特定の彼女は去年も今年もない！ なのに、藍華ちゃんに優しいって、何かあるのかなって思わずにはいられないじゃない」

穏やかな詩織にしては珍しく、こぶしを握り締め、小さく力説し

た。

「女の子が苦手なのかと思ってたけど、そうか、日下部くん、藍華ちゃんみたいなのがタイプなんだ」

ふーんと詩織がまた小さく笑った。

「ないから、絶対」

「どーしてよ」

「恋になりえないから」

「ええ〜、じゃあ、藍華ちゃんは好きな人が他にいるの？」

詩織が小首をかしげる。肩までの柔らかい髪がうねった。とつさに何も言い返すことができない。

「なッ……!!」

そこで止まってしまったのが、藍華の敗因だと自ら悟る。

「いるの？」

「い、いない！」

どうしてここまであせっているのか、自分でもよく分からない。だけど『好きな人』と言われて、何かが一瞬、浮かんだ気がした。

「怪しい〜」

「あ、やしく、ない！」

ふいっと、詩織の視線から逃げるように反対側を向いた。そのとき日下部駿介と目が合い、気まづくくなる。

かと言って、詩織の方を向き直るのもイヤなので、大人しく下を向いた。

「美浦さん、照れてるんじゃない？」

「あ、そっかあ。照れてるのか。可愛い」

二人で勝手なことを言っているのに、まともに顔が上げられない。あげたが最後、どんな目に遭うか分かったものではないのだから。

「そこ、三人。しっかり聞く」

菊池の声はやけに大きく響き、藍華は小さく肩をそびやかせた。次当てられたら、絶対に答えられない自信がある。

今言っている、問題の意味さえ理解できていないのだから、当た

り前ではあるが。

そのとき、チャイムが鳴った。

まさに天の助けである。そそくさと筆記用具を片付け、ノートを閉じた。これ以上あんな記号みたいなのを見ていると、気が狂ってしまうのではないかと思う。

大体、何度も言うようだが、物体の運動の速度なんて、普通の間は使わない。

『時速40kmの車が壁に激突しました。壁にかかる力はどれだけでしょ』

そんなの、壁が大破するぐらいに決まってる！ っていうか、使わないから、そんなの。そう思った瞬間だった。

「平田」

名前を呼ばれて、肩が跳ねた。名前を呼んだのは、菊池で、そんなこと呼ばれた瞬間に分かった。

「教科書p.23の問題、お前に解いてもらっから」

「えっ！ どうしてですか……！」

思わず噛み付くと、菊池は思いつきりかっこよく破願した。

首を絞めてもいいですか……。

「できなさそうだから」

「こんな教師嫌いだ。」

「だからね、ここはこの加速度を使って移動距離を出すの。公式はコレ」

よって、この『a』というのは加速度で……。

春華による講義は続く。

「だから移動距離は36mってこと。分かった？」

「うーん」

「分かってない、ね……」

春華が苦笑いして、勉強机から離れた。後頭部を叩きつつ、教科書を見る。その顔には『何が分からないのか、分からない』とはつきりと書かれている。

「だから、この『x』は移動距離なの。それで、これが時間」

一個一個の数字が何を示しているのか、ノートの隣にある紙に書いていく。ついでにどのような運動だったのか、図も描かれているわけ。

そこまでして分からないのは、『苦手だから』と形容するしかない。

いや、むしろ『苦手だから』では済まないほど壊滅的である。

「ごめん、春ねえ。三年生なのに」

肩を落とすと、春華が笑った。

「三年生って言っても、まだ夏前だし、大丈夫よ」

それよりやっぱりに頼むべきかな、わたし、人に教えるの苦手だし。

「？は何かにつけて、教えるの上手なんだよねえ。何、聞き分けのないわたしに付き合ってたから？ だから教えて、諭すことが上手に？」

それはそれで、気分悪いかも、と春華は呟いた。呟いたあと、春華は窓を開けて、数字の書かれた紙を丸める。

そしてその紙の塊を、隣の家の電気がついている部屋に向かって投げた。紙はほとんど音を立てることなく、だきつちりと窓に当たった。

「それじゃあ、？さん、気がつかないよ？」

「え、気づくよ」

わたしが投げたんだもん。

変に自信に満ちた言葉に何も言えなくなった。

耳を澄ませていれば聞こえたかもしれない。しかし、しょせん紙が窓に当たっただけ。人に聞こえるはずもない、と思った。

なのにカーテンが開き、中から人影が見えた。

「嘘」

「あ、今メールしたから」

春華がひらりと携帯を翻す。『送信完了しました』の文字を見つめ、驚いた顔のまま藍華は春華を見つけた。

「春ねえはあ！」

「聞こえるわけないよ」

それでも、姉の声なら、行動なら、どんなに些細なことでも？也には通じるのではないだろうかと思ってしまうのだ。

「いくら？でも、それは無理。一応人間だから」

それにわたしは『愛の力』なんてものを信じるほど、乙女じゃないんです。

無理だって知って、携帯にメールを打ったの。だから？がカーテン開けたのよ。そうじゃなきゃ、聞こえるわけないじゃない。

「あんだ、？に夢持ちすぎ。いくら？でも、動物並みの耳を持つてるわけないでしょー」

笑いながら春華は言い、ベランダへと続くドアの鍵をあげ、扉を開いた。

隣との距離が近いせいか、？也は屋根に乗り、そこへ降り立った。

「さむ……」

「ごめん。何か持ってくる」

あ、これでも肩にかけておけば？ そう言っつて、春華が？也に渡したのは、黒色のカーディガンだった。飾りが少なく、大き目のを買ったせいか、春華の膝下ほどまで隠してしまう。

春華はそれを受け取ったまま着ようとしなない？也を見て、業を煮やしたらしくばつと奪い取ると強制的に肩に羽織らせた。

「？さん、顔、赤いですよ」

「風呂上がりって、聞いてないし」

苦労しますね、とだけ、藍華は答え、笑った。その瞬間、完全に

吹っ切ったのを感じた。これが、憧れの終わり。

第十五話 『白色時計台』

「いや、昨日、ここの顧問から電話がかかってきて」

「え、先生から電話がかかってきたんですか!」

あの絵のことしか考えていない先生が、まさか生徒の心配をしているのだろうか。

「なんか、毎年恒例の『美術館へ行こう』みたいな行事があるらしくって、その引率よろしくお願いしますって」

「やっぱり、絵か……」

「そういえば」

「何ですか、先生」

いつもどおりの放課後で、いつもどおりのクラブをしていた。

そしていつもどおり菊池がいて、タバコと携帯灰皿を持ち、窓辺でタバコを吸っていた。よくばれないものだ、と思うがいつも見ないふりをする。

「それで、今年新入生の部員一人しかいないし、俺まだここの部員お前しか見たことないからどうしようかと思っただけ」

「行きましよう!」

美術館、いいなあ、行きたいなあとは思っていたが、さすがに一人で行くのは気が引ける。かといって姉たちに頼むのも……少し気が引ける。

誰も興味ないし、せつかくのデートを邪魔するのもどうかと思う。なので行かないまま何年か過ぎていた。

学校の社会見学で行って以来だろうか。いや、そのあと、一回だけ一人で行った。寂しさに耐えられず、一時間もいなかった苦しい思い出がある。

「行くのか?」

「イヤなんですか?」

質問を質問で返すと、菊池は微妙な表情を作り、『美術関係は苦

手』と言った。

「印象派とか言われてもわかんないんだけど」

「普通に楽しめばいいじゃないですか」

描いた人間のことを知らなくても、絵を見ていればどんな人か分かる。何かの本にそう書いてあったが、それはそのとおりだと思う。

どんな人が描こうが、そこにはテーマがあり、伝えたいことがある。それが愛だったり、平和であったり、家族であったり……。
さまざまだが、見ているうちになんとなく分かるものだ。

「コレだから、芸術関係の肌はわかんない……」

菊池は飽きたように、言った。

「あたしに言わせれば、理科の問題といてる先生のほうがよほど分かりません」

そう言い返すと、お互い分かんないものが多いな、と菊池は笑った。

『じゃあ、土曜午後二時。集合場所は駅前の噴水な』

って、言ったじゃないですか、先生。

「今、午後二時、十五分なんですけど」

他の美術部員に声をかけたが、ほとんど行かないと言われた。さすがに三年生を誘うのは気が引けたので、言わなかったが。

しかも新加入部員でさえ『え、美術部は部活動がないって聞いたから入ったのに』と言っていた。どうやら本当に廃部寸前であるらしい。

まあ、あの顧問と副顧問では仕方がないか、と藍華はため息を吐いた。

唯一行くと言っていた友人も『ごめん、バイト入った』の二行で来なくなった。

駅前……デートの待ち合わせの定番場所に、制服着た少女が一人さすかに声をかけられることもなく、藍華は空を見ながらぼんやりと空を見ていた。

「こういうとき、物語とかだったら」

だったら。

「声かけられて困ってる女の子を助けに来るよねえ」

その人がヒーローなら。

「ヒロインに待ちぼうけ食らわせるヒーローはいないか」

しかも先生だし。

こんなことなら、窮屈な制服で来るんじゃないかった。

「これなら無理矢理、春ねえ連れて来たほうがよかった気がする」

先生とは少し気まずいから。その気持ちがどこから来るのかも分からず、藍華は一人で空を見上げる。

「遅い」

ちらりと携帯を取り出して見ると、二時三十分を超えていた。

先生、忘れてたりして、という思いが藍華の中に広がるが、すぐに打ち消した。

「先生、律儀なところあるし」

何か用があつて遅れているのかもしれない。そう自分を言い聞かせて、背筋を伸ばした。

こういうとき携帯の番号を知らないというのは不便だと思う。メールアドレスでも良いけど。

「電話番号だけでも聞いとけばよかった」

そう思いつつ、知らなくていいとも思ってしまう。その番号を見てもしまえば、自分は何か分からぬ衝動に突き動かされそんな気がする。

携帯電話を手中で弄びながら、先ほどから変わらない空を見上げた。雲ひとつなく、少し肌寒い春にしては十分な陽気を出してい

る春。

「あ」

空に何かが散り、反射で目で追いかける。見上げる先に桜が咲いていた。

「きれい」

誘われるように一歩踏み出す。

しかし次の瞬間、強い力で腕をつかまれ引つ張られた。

「見つけた……」

吐息交じりの声が、妙に色っぽく藍華はおびえる。

「先、せい」

どうして遅れてきたんですか？

何があつたんですか？

約束、忘れてたんですか？

聞きたいことはたくさんあつたのに、藍華の口から出た言葉は一言だけ。

「遅い、です」

そんなことが言いたいわけじゃないのに。

「……、お前こそ、何で、こんなところに」

途切れ途切れの声と、荒い息で走っていたことが分かった。そしてその声がとても心配そうだったのも分かった。

「だ、だって、先生噴水前集合って」

「俺、お前の家に集合場所変更って、伝えただけ」

嘘、と携帯を確かめると確かに着信履歴十五件……。美術館に入るのだから、と前もって切っておいたのが失敗だった。

藍華の表情を見て、伝言が伝わっていなかったことを知った菊池はふつとため息を吐いた。

「よかった。何かあつたのかと思った……」

「忘れてた、だけかもしれないじゃないですか」

そう言うと、菊池が小さく笑った。

『それは、なぜか出てこなかった』

「約束時間より余裕をもつてくるだろうな、と思ってた」

事実藍華は約束時間の十五分前にはここへ来ていた。

「一回美術館に行つて、それからやっと、伝言が伝わってなかったんじゃないかと思つて戻つてきた」

だから息が切れていたのか。美術館からここまで歩いて十分の距離だ。走つたとしても五分はかかる。

十分間走りっぱなし、はさすがにきついだろう。

「あー、ダメだな。運動不足。昔はもつと走れたのに」

年取つたー、と菊池が呟くのを聞き、藍華は笑つてみている。

「先生、携帯番号教えてください」

また迷うのはイヤですから。するり、と言葉が出るのを、他人事のように感じながら藍華は言った。

「それ、俺も思つてた」

もう、あんな思いはこりこりだ。

そう言つた菊池をまた藍華は笑顔で見つめていた。

が、さすがに生徒の携帯番号を持つことに抵抗があつた菊池は、結局携帯番号を教えただけだった。

「あたしのケータイ」

「あー、いいわ。誤解されると、こつこつと面倒だから」

美術館の中は適度な温度に調整されていた。薄暗いのは油絵への配慮だろうか。

「お前に電話番号を覚えておけば、困らないだろ？俺からの連絡は……また、家に電話する」

今日の出来事を思い出してか、少し苦い顔をした。藍華は小さく首をかしげ、聞き返す。

「誤解つて、どんな誤解ですか？」

「教師と生徒の禁断の恋、とかなんとか」

一瞬だけきよとんとした藍華はついで顔を赤く染め上げた。

「そ、そんな!!」

「いや、誰もお前がそんな大それたことしようなんて考えてないから」

赤くなつて否定する藍華を見つつ、菊池はフォローの言葉を口にする。

「先生が、生徒の相手をするわけないじゃないですか」

「あー、まあな」

ちくり、と最近よくある痛みを感じて、わずかに藍華は眉をひそめる。そして絵のほうに視線を向けた。

「印象、派」

「はい？」

わけが分からない、というように菊池が聞き返す。目の前にあるのは一つの絵だった。

鮮やかな色彩、柔らかな光が少女の肌を照らしていた。

温かな笑顔を浮かべた幼い少女だったが、ドレスのふくらみが少女から女への過程を表しているようにも感じた。

「この画家、印象派なんですよ。ほら、ルノワールとか、モネとかと一緒に」

あたし好きなんですよね、と笑いながら絵に見入る藍華を隣で見つつ、菊池は首を傾けた。

「よく、分からないけど……明るい色で俺も好きだな
そう言つと、藍華はにこり、と笑う。

「絵の趣味が一緒の人と回るのっていいですね」

「趣味っていうほどたいそうなものじゃないけどな」

菊池が言うので、藍華は少しだけ怒ったように言った。

「感じ方が似てる人って、大切なんですよ」

味覚がまったく違う人と食べるのはイヤでしょう？

「印象派が嫌いな人と見たって面白くないじゃないですか」

絵画の勉強をするのなら、そんな視点もありかなって思いますが、今は純粹に楽しんでるんですから。

「そんなもんか？」

そうまだ納得しないように菊池が言うので、藍華は今度こそむっとしたように返した。

「そうですね。先生だって、理科が大嫌いなあたしみたいな生徒より、得意な生徒のほうが、理科の話してて面白いでしょ？」

そう言って、それで藍華が自分の言葉に一瞬だけ傷ついた。言わなくていいことを言ってしまったような気がした。

「いや」

そして菊池の言葉を聞いて、驚いたように目を瞬かせる。

「違うからその違いの面白さを知らせたくなるし」

お前の発想は本当に面白いから、話してて飽きない。

「価値観が違う人間といっても、純粹に楽しめるけど？」

それに芸術家肌のお前の感性についていけるやつとか、中々いいと思うぞ、俺は。

そう言って、菊池は笑う。

「人を、勝手に変人扱いしないで下さい」

「いや、かなりの変人だと思う。芸術家肌の人間って、面白いよな」

しばらく続いていた、印象派画家たちの絵を抜ければ、近代が現れた。しかもあまりなの知られていない、新人が多いようだった。

「あ」

吐息のような声を漏らし、藍華はある一点で静止する。

「どうした？」

そう声をかけてみても、藍華には通じない。一つの絵を見つめ、藍華はじっと止まってしまった。

一つの、暗い色調の絵だった。

少女が一人、涙を流している。抑えきれない嗚咽が聞こえてきうなくらい、悲痛の伝わる絵だった。

黒いドレスを着た少女が一人、顔を両手で覆っていた。その手から、一粒、二粒涙がこぼれる。

少女の座り込んでいる床は水で覆われていて、涙は水に溶け込んでいる。

その波紋は少女を包み、まるで悲しみが広がっているように見えた。その水は、涙が溜まったものなのかと思ってしまう。

それくらい、少女は永遠と泣き続けているように見えた。

「嗚咽さえ……漏らせない悲しみ」

自分の発言だと分かっているのか、藍華は一言呟いた。

「声を出すことが許されない、この女の子は……どんなことをしたんですかね？」

ポツリと呟いて、そしてそれ以上の興味を失ったのか、藍華はその絵の前から動いた。

「平田？」

「気にしないで下さい。時々、こういう気分になるんです」

感情移入しちゃうんです。絵に。

「画家が何を思って描いたのか、分からないのに」

それが何への悲しみか分からないまま、ただその悲しみを感じてしまう。

「きっと、あの画家さん。何か許されないことをして、自分を責めているんですね」

本当は涙を流すことさえ許されないのかもしれない。

だけど我慢できないから、涙を流し、そして戒めを守れなかった自分を責める。

「声を出すことを禁じ、ただ涙を流して」

やがて足元に涙の海ができる。

「お姉ちゃんたちには……少し、可哀想な目で見られるんです」

あいちゃんは、少し感性が豊か過ぎるね。きっとそれは優しさになるし、自分や他人を傷つける諸刃の剣になる。

藍華。それはいつか、他人と、あんたを傷つける。今のうちに、覚悟しなよ。あんたにしか分からないことが、きつとあつて、絶望する。

「あたしにしか、分からないことが出てきて……、そしてそれが他の人に理解されなくて、あたしが傷つくことが、この先あるんですって」

藍華は人の気持ち分かりすぎる。それは辛いね。人の心が分かりすぎるのは、痛いね。

「確かに、事実だと思えます」

「？也への憧れを自覚したとき、それと同時に絶望したから。」

「あー、それ分かるかも」

お前、苦勞人っぽいもん。

「あれだな。人に気を遣い過ぎて、胃とか壊しそうなやつ」

お前の周りのやつら、氣遣わなさそうだしな。

少し違うような気もしたが、自分がそうとう落ち込んでいたらしいことを知り、藍華は無理矢理笑った。

「ほら、そうやって無理矢理笑う」

子供がそんなこと覚えてどうするんだよ。

「今のうちに泣いとかないと、後で後悔すると思う」

そう言って笑い、菊池は藍華の髪をぐしゃりと撫でる。藍華は気まずげに髪を手櫛で整えながら、『先生はズルいです』と呟いた。

この人は、一番ほしい言葉をくれる人。

第十六話 『灰色コンクリート』

「……で、この前の美術館で刺激を受けたからこんなところで絵を描くわけ？」

「ダメですか？」

がちやり、と扉を開けると真つ青な空が目の前に広がる。雲がゆつくりと流れているのを見つめながら、藍華が笑った。

春といえど、まだまだ風が強くびゅつと強い風が時折藍華の髪を揺らす。

「一回、ここ来たかったんですよー」

ケガ防止のためか屋上はめったなことでは開放されないのだ。少し黒ずんだコンクリートにスケッチブックを投げ出し、藍華は空へと手を伸ばした。

「届きそうですよね。空に」

これだけ空が近いと錯覚してしまいそうになる。

「手を伸ばせば、届いちゃいそうです」

「太陽は掴めるもんだと思ってたよ」

小学校のときまで、菊池の言葉に『あたしは小学生ですか?!』

と藍華が怒る。

「雲も、太陽も、月も星も……高いところに上れば掴めるんだって思ってた」

今ではどうやったって思いつかない発想だよな、あの頃の考えって。

「そういう意味では、お前が羨ましいよ。俺は」

「そうですかね」

菊池の言葉に返し、藍華はコンクリートに座り込んだ。

「お前……」

制服汚れる。

菊池の言葉に、初めてそれを自覚したのか藍華はあー、と呟いた。

しかし藍華は言葉の意味をとつても、コンクリートから立ち上がるうとはしなかった。

「そんなこと気にするんですね、先生」

「お前、女だろ……」

菊池は飽きたように返し、ハンカチを差し出した。淡い緑色のきちんとアイロンがかけられたハンカチが目の前に広がった。

そのハンカチの意味を図りかねたように藍華が首をかしげると、菊池は苦笑いしてハンカチを広げた。がらも何もないハンカチが風に揺らされる。その動きは藍華の髪の毛の動きと重なった。

「この上に座れば、少しはマシだろ？」

お前じゃなくて、お前の姉さんが困るぞ、制服汚したら。

「あ。春ねえが怒る」

姉の名前を出され、そこでやっと藍華は腰を上げた。そして翻るスカートの後ろを二回、三回叩いて汚れを落とし、藍華は菊池の顔をじっと見つめた。

「何？」

一瞬だけ、菊池はその視線から逃れるように体をそむける。その後、ハンカチを再び藍華に差し出した。

「先生つて」

藍華はそのハンカチを受け取らずに菊池に笑いかけた。

「紳士ですよ。いまだきそんな気障なこと誰もしませんよ」
ハンカチ汚れるから良いですよ？」

そう言つて、藍華はそばに投げ出していた鉛筆などを拾い上げ扉へと向かった。

「おい」

どういう意味だ、と問いたいのか菊池は眉を寄せる。

「お前、ここで絵、描くんだろ？」

「え、そんなこと言いましたっけ？」

藍華に呼びかけると、藍華はにこりと笑った。

「あたしはただ、『美術のために屋上開けてください』って言った

だけです」

誰も屋上からの風景を描くなんて言ってます。

「だって、さつき俺の質問に……」

「ダメですか？ って聞いただけじゃないですか」

重要なのは、ここの風景じゃないんです。

藍華は青空を見上げて言った。

「ここにいて感じる風とか、光とか……そんなものを感じたかったです」

だから今日の目的は果たされましたよ。ありがとございます。いたずらっぽく呟いて、藍華はパタパタと屋上から姿を消した。

「平田」

呼んでももう返事は返ってこなかった。菊池はふう、とため息を吐いた後、自分も扉へと向かう。

自分でも、不思議なくらい自然に、ハンカチを差し出していた。自分の行動に驚いてしまって、しばらく思考回路が停止してしまっていた。

だからだろうか、少女の瞳をまっすぐに見つめ返せなかったのは。

赤くなつた頬を隠すのが精一杯で、美術室に入ったとたん腰が抜けた。ここまで走ってきて、慌てて美術室の扉を閉める。この顔は誰にも見られなくなかった。

「心臓に、悪い……あの先生」

あんなに優しく、ハンカチを差し出されたら気の迷いで受け取ってしまいそうになる。

「先生が、先生らしくなかったから」

だから変に動揺してしまって、おかしなことを口走って、逃げてきたのだ。

「あー、屋上の風景描きに行ったのに」

何回も頼めないではないか。同じ内容で。

「諦めよう……」

再びあんなことをされたらこちらの心臓が持たない気がした。

「そろそろ中間だよ……」

「今回は赤点から逃げられるといいね」

さらに、と友人が言った一言に傷つく。

「詩織、それ、気にしてるから言わないで」

呟くように訴えると、少女は目を大きく見開いて、そして首をかしげた。

「じゃあ、日下部くんに教えてもらったら？」

日下部くん、藍華ちゃんのこと気になるみたいだし。それにこの前の休み明けでも高得点たたき出してたじゃない。理系のクラスの中では一番だよな。

「詩織」

少し怒ったように名前を呼べば、『気に障った？』と不思議そうに聞く。

「いいじゃない。教えてもらえば。友達、なんでしょ？」

つまりは意識していないのだから、勉強を教えてもらってもいいだろう、という話だ。

「そういう問題じゃない。大体、日下部くんの都合も考えずに……」
「俺なら別にいいけど？」

ひよこり、と横から地味ながら端整な顔を覗かせる。

「日下部くん」

「物理だけならそれなりに役に立つと思うよ？」

理系だし。と付け加える少年の顔を見て、藍華は心の中のため息を吐いた。

『無理なんだって。先生が教えてもダメなんだから』
しかしそんなこともなかなか言えない。

「あたしも教えてほしいな」

「美浦さんは結構、得意な方じゃなかったっけ？」

勝手に進んでいく話に瞠目しつつ、もうここまで話が進んでしまえば自分に抗うすべは残されていないことを知った藍華は黙っている。というか、姉たちで身を持って体験している。

「放課後、教室でいい？」

そう二人が聞いてくるので、頷くだけで答えた。

「怒ってる？」

二人そろって同じ事を聞いてくる。それに苦笑いで応じた。

「ううん。ただあたしの才能のなさって折り紙つきだから」

結局、蒼也さえも苦笑いで『基礎部分さえ取れば、赤点はないから……』とフォローしたのを思い出す。

姉の風呂上りを見て動揺したくせに、ちゃんと先生として教えてくれるんだから律儀としか言いようがない。

「大丈夫だよ！」

この二人は姉たちに似ている、とふと思った。

「だから基本は、この公式を覚えることからだね」

「えつとV……」

公式を書いた紙を隣に置き、練習問題に取り掛かる。

「そこ。そこは運動の向きが反対だから、数字はマイナス」

「う……さっきも間違えたよね」

まったく進歩していない自分を感じ、若干ブルーになる。藍華は

ペンを口元に当てて唸った。自分の才能のなさは十分感じているはずだったが、ここに来て一段と酷いのではないだろうかと考え始めた。

「焦らない、焦らない。公式に当てはめられるようになったんだから、前進でしょ？」

褒めるのがうまいな、と思いつつ、それでもやはり嬉しくてペンを走らせた。となりで『そうそう』と言われると、自分が進歩しているようにも感じる。

自分は単純で、褒められれば伸びるらしい。

「できた」

「はい、正解」

横から手が伸びてきて、ノートに丸が書かれる。

「日下部くんって教えるのうまいよね」

菊池が見てるとプレッシャーでペンが動かないのだ。間違えたら怖いし。

そう思いつつ、それでも補習の最後にはきちんとドロップをくれるのを思い出した。

「いや、平田さんが苦手だって言いつつ努力家だから」

教え甲斐があるんだ、そう言われて少しくすぶつたくなった。

「日下部くんが、褒めてくれるから。あたし、単純だからね」

昔から褒められればやる気が出た。ずっと絵を描いているのも、姉たちが『天才、才能あるよ』と言い続けてくれたからだ。

朔華の彼氏である智には『意外に、褒められて木に登るタイプ？』

と言われてしまった。

「菊池先生は褒めないの？」

「いや、褒められる前にいっぱい怒られるから」

苦笑いすると、少しだけ怪訝な顔をされる。その顔の意味を問おうとしたとき、横から詩織が入ってきた。

「日下部くんって、下の名前駿介だよな？」

「うん」

「日下部くん、って呼びにくいから下の名前で呼んでいい？」
舌噛みそうなんだよね。

「いいけど」

「じゃあ駿くん、よろしく」

にこり、と邪気のない笑顔につられたように日下部も笑った。

「よろしく」

それが何の始まりか、それはまだ分からない。

「この前の中間返すぞー」

教室に菊池の声が響き、藍華はそっと胸の前で手を組む。今回は問題がとても難しかった、気がする。

「安倍」

平田、が苗字なので、呼ばれるのは半ばなのに、どうしても緊張してしまう。藍華は手を組んだまま、肩をこわばらせた。

「藍華ちゃん、大丈夫だよ」

「そうだよ、大丈夫」

両サイドから励まされるが、前回、前々回と赤点続きだったので、不安にしかない。むしろ赤点だという自信さえある。前日まで勉強したが、分からないものは分からないのだ。

「日下部」

ずっと立ち上がり、テストを受け取ると少しだけ解答用紙に視線を這わせた。表情を変えないので、良かったのか悪かったのか想像がつかなかった。

いや、いつものことを考えれば、いいに決まっているのだが。

「どうだった？ 駿くん」

「うーん、まあまあって言いたいところだけど、あんまり、かな？」
詩織に聞かれ、解答用紙を差し出した。出した解答用紙には『9
0』と書かれており、十分ではないだろうかと思ってしまう。その
とき。

「平田」

菊池に呼ばれたので、慌ててがたりと席を立った。藍華は緊張を
押し殺すことなく、教卓に歩み寄る。いつもの数十倍緊張している
ような気がしていた。何しろ、足が震えている。

「はい」

小さく返事をして向かえば、菊池はピラピラと紙を振っている。
その顔から、赤点なのか否かは量れない。

「お前今回、頑張ってた」

励ますようにそう言われて、テストが返される。右上には赤い文
字で『56』と書いてあった。高校入学してから最高点ではないだ
ろうか……理科関係で。

「赤点じゃ、ないですよね？」

「違いますよ」

恐る恐る聞く藍華に、わざとらしく敬語で返してくるので小さく
睨むと、『冗談だよ』と菊池は笑った。

「よく頑張りました」

一瞬だけ、菊池の手が上がったが、すぐに下ろされて耳元で囁か
れた。

『「褒美は放課後、な」』

甘い声で、そして意地悪そうな口調で言われているのにカツと顔
がほてった。顔が赤くなっただのにも気づかず、踵を返して席に帰る
と、二人に『顔が赤い』と指摘された。

「え、？」

動揺したように返すと、二人はテストを取り上げて点数を見た。

「藍華ちゃん、やった！ 赤点じゃないよ」

「うん、よく頑張ってる。今回、少し難しかったのに」

上出来、そう二人に言われると、藍華はほんのりとまた赤くなつた。

熱中して描く。

それは本当に気持ちのいいこと。

何もかも忘れて、自分の世界には自分と目の前の絵しかないので、錯覚する。

煩わしいことは何もなく、自分を傷つけることも何もなく。

ただただ、楽しいことに熱中する。

時間さえ、忘れて、いつの間にか何も聞こえなくなる。

「おい！」

後ろから肩を引っ張られて、初めて自分が熱中していたことに気がついた藍華は振り向いた。ここに来る人物は決まってきたているが、顔を確認するまでは定かでなかった。

いつもなら……声で分かるのに。

「先生？」

ぼつりと名前が口からこぼれ、そしてそれと一緒に鉛筆が落ちた。細長く削られた鉛筆は芯が折れ、ころりと転がる。それは転がり続け、菊池の足元で止まった。

菊池はそれを拾い、藍華に返す。

「名前呼んでんだから、返事位しろよ」

飽きたような、怒っているような声で言われたので、肩をすくめると、菊池はふうとため息を吐いた。

最近、菊池のため息を聞く回数が増えた気がする、と藍華はどこかで思った。

「お前が、一瞬別次元の人間に感じた」

ここにいるはずなのに、どこかとても遠いところにいる感じがして、嫌だった。

「ごめんなさい、熱中してて……夢中でした」

素直にそう言うと、『そうだろうと思った』と苦笑いされる。

そして後ろからスケッチブックを覗き込まれた。そして苦い顔をされる。先ほどの苦笑いとは違い、本当に苦い顔をしている。

「お前」

また描いてるのか、ということとは省略された。

藍華も、何がいたいのか何となく分かった。

淡い、青い色調の絵だった。最近の絵はたいてい暖色を使っていたので、菊池には不思議に映る。この色使いはどちらかと言えば、入学してしばらくたったときのものに似ている。

一人の少女が少年を　それが春華と蒼也だと菊池には分かった
後ろから抱きしめていた。少年の右肩に頭を乗せ、その少し長めの髪が少年の肩に流れている。

イスに座っている少年を、イスをはさんで後ろから抱きしめ、少女は少年の首に顔を摺り寄せていた。両手を少年の胸に回し、上から包み込むような形で立つ少女は涙をこぼしている。

うつろな視線、小さく開いた唇、そして固いくらいに握られた両手。

逃がさないともいうように、少女は強く、自分の手を握り締めていた。この手を離せば、少年が逃げていくともいうように、強く強く握り締めていた。

何を表しているのか、菊池にはよく分からなかった。

どこかいとおしささえ含んだ、それでも狂気を秘めている瞳が、こちらを見ているのだ。少女がまっすぐとその潤みつつ、虚ろ気な瞳をこちらに向けている。

少年は下を向き、何を思っているのか分からない。ただ、嫌がっているように見えなかった。捕らえられているわが身を悲嘆しているのか、それとも自分で望んで捕らえられているのか、それは分からない。

「何を描いてる？」

菊池はそう聞くと、藍華は笑った。

「昔の……二人を」

一番見ていて辛かった、あの頃を
描いています。

藍華の笑顔が、優しかった。

「どっつして……」

菊池はこぼれるような声でそう問うと、藍華は困ったように笑った。質問された意図が分かったようだった。

『まだ吹っ切れていなかったのか？』

そう問われた気がしたのか、藍華は静かに首を振った。

「あの頃の二人があるからこそ、今があると思うんです」

だから、そのときのこととも描いておこうと思って。小さく、小さく藍華は言った。そこに、どんな思いが入っているのだろうか。菊池は少し気になった。

「二人の全てが、いつかは思い出になるから」

描いていて損はないと思うんです。

そう言って笑い、次いで菊池の顔を見て何かを思い出したように瞬きした。そして今度は何の含みもなく、優しく笑った。その笑顔

が臉裏にも写り、菊池は少しだけ動揺する。

しかしその動揺を押さえ込むと、菊池は藍華を見る。

「先生、そういえば……」

「ご褒美、下さるんですね？」

きらり、と笑顔がまた輝いた。年相応の、いたずら好きの少女の顔だった。そういえば、こういう顔を見ることがなかったと、二年目になって気がついた。

いつも、どこか大人びた、世界を知っているような顔をしている少女の素顔を垣間見た気がした。

「え……？」

呆けたようにそう言って、菊池は藍華を見た。先ほど一瞬見た、何か狂気めいた瞳の光はなくなり、ただ温かく笑っている。藍華は席を立ち、スケッチブックを閉じた。

自分の心を、菊池に対して閉じたようにも見えてしまう。スケッチブックに描かれるのは何も、彼女の思ったこと全てではない。むしろ他人に見せるために描くことから、どちらかといえば、自分の心の中でもキレイなところだろう。

しかし彼女にとってのスケッチブックは感情をぶつけるところだと、この一年間で知ってしまった。

「何ですか？」

「これ」

何かが褒美なんだろう、と教室で感じた菊池の声に含まれる笑いも忘れて、藍華は菊池に聞いた。すると菊池からぽいつと何か投げられた。カードのようなものだと思い、藍華はとっさに宙で掴む。見てみるとこの間行った美術館で売られていたポストカードだった。あの日見た様々な絵画が印刷されており、藍華は目を輝かせた。住所を書けばポストカードだが、部屋にでも飾れるようにか土台も付いている。

「先生、コレ」

「昨日、お前の点数見てびっくりして、その帰りにたまたま美術館

が目に入ったから」

いらぬなら、捨ててもかまわないし。俺に必要なから。そう言つて、菊池は横を向いた。その横顔が、かすかに赤くなつてい理由を本人も、藍華も知らない。

「え、いえ。嬉しいです」

ありがたくいただきますね。勿体なくて使えないと思いますけど。藍華はそう言つて、笑いながら封を切り、数枚捲つていく。一枚一枚を丁寧に捲り、そのたびに笑顔がこぼれた。

それを見る菊池は少しだけ顔を緩めた。自分の目論見が当たったことへの満足感からか。

藍華はしばらく見て、そして一点で数秒と待った。横から見れば美術館でも藍華が止まった、少女の絵だった。それを静かに見つめ、しかしそれも本当に数秒で、また次のポストカードへと映る。

「あ……、あたし、先生に報告がありました」

ポストカードを袋に仕舞い、菊池に向き直る。菊池はその真剣な瞳に気圧され、藍華を見つめた。

「あたし、吹っ切れました」

まだ、先生に言つてなかつたから。恥ずかしそうに、照れくさそうにそう言つと、『相談に乗つていただいて、ありがとございまして』と頭を下げる。

菊池はそれを聞き、『納得したのか』と小さく呟いた。

それは、憧れの終わり。では……これは何の始まり？

第十七話 『空色言霊』

何とかして乗り切った中間が過ぎ、期末は思ったよりもあっけなく過ぎた。もちろん、赤点はない。

「先生！ あたし、今年も赤点なんですけど！」

同じクラスである佳奈美は今年も赤点らしく、菊池に抗議している。

「そうかー、大変だな。でもお前の勉強見る俺はもつと大変だということを肝に銘じておけよ」

「補習なくせばいいんじゃないですか？ これであたしも先生も大

……」

「どの口が言ってるのか教えてもらおうか？」

にこり、と菊池の柔らかな笑みが佳奈美の発言をさえぎった。佳奈美はにこり、と引きつった笑みでそれを返すとすかさず回れ右をした。

「今年は黒田がいないから大変だなー」

「真紀がイギリスなんかに行っちゃうのがいけないんです」

ドアのところまで逃げてそれから、うーと佳奈美が唸り、眉を寄せた。黒田真紀は両親の都合で、外国に行ってしまったらしいと聞いたのは去年のことだった。

随分と驚いたものだったが、すぐに『あつちでの経験が役に立つたらしいと思う』という彼女の気持ちがおほんの少し分かってしまった。

「一人ですか？」

「うん、真面目に勉強して赤点取ったのはお前だけだな」

去年のお仲間である平田は、今年余裕で赤点なしだった。

「えー、また仲間減ったんですか?!」

あたしの勉強方法のどこが間違ってる?! そう叫ぶ佳奈美の声が聞こえ、藍華は思わず噴出した。

「そうだな。お前の場合、その他の教科は悪くないんだから……」
多分、理解できてないのに練習問題とかするのが悪いんだろう。
「それで式の立て方が分からないから、式を丸暗記してさらに苦手意識……コレの繰り返しだな。悪循環もいいところだ。まずは理解して、それから公式の暗記。それでやつと計算の入る練習問題」
「そうしないことには、点数取れないぞ。」
「頑張ります……。悠くんも教えてくれるし」
「彼氏も大変だな。要領の悪いやつを彼女に持つと」
「先生、ひどっ」

その二人のやり取りを見つめつつ、藍華は胸の中にわだかまる何かを感じていた。その正体を掴むより早く、夏休みはやってきた。

随分と、藍華にとって長い夏休みが始まった。

去年から時々訪れる奇妙な感覚の正体を知ろうとするのに中々うまくいかない。それなのに夏休みが訪れた。

まるで『夏休みの間に考えなさい』と誰かに言われているみたい、と藍華は思った。宿題の山は見ないふりをして、今年受験の姉たちの邪魔をしないように二階では静かに過ごすことを心がける。しかしそれにも飽きて、下の階へと降りていく。

「あいちゃん、私、少し出るからお客さん来たらよろしくね」
行き先は彼氏の家である花屋だろう、と勝手に解釈し『いつてらっしやい』と見送った。

姉も、姉の彼氏もこの夏遊びっぱなし……というわけでもなく、姉の行っている大学に行きたいらしく姉の彼氏 智も勉強している。

もつとも、もともと要領のよく、できの良い智なので心配ないだろう、というのが平田一家の予想だ。ただ一人、『希望を言えば、落ちて欲しいんだけど』と言ったのは、もちろん春華である。

「早めに帰ってくるねー」

「ごゆっくり」

嫌味にならない程度にそう言い、藍華は下りるときに持っていたスケッチブックを振る。何もすることがないのなら、絵を描いているほうがましだった。

「さて」

姉の姿が見えなくなるまで玄関先で見送っていたが、見えなくなると玄関から家へと入っていく。外に比べると、日陰というだけなのにかなり涼しく感じる。

額に浮かんだ汗を小さくぬぐうと、藍華はクーラーの効いた部屋へと入った。コップ、お椀、机、家族の写真が入った写真立て……。描くものはたくさんある。何から描こうか迷っていると、いきなり玄関のチャイムが鳴った。

「はい」

返事をしながら、玄関のドアについている覗き穴から外を見る。

外に女が二人、外に立っていた。

「お嬢さん、少しお話しませんか？」

いかにも胡散臭い話しかたである。

「結構です……間に合ってますんで」

手早く会話を打ち切ろうとすると、帽子を目深にかぶった女は口だけを妖艶に引き上げた。

「そんなこと言わないで、五分でいいから」

「結構です！」

閉めようとする、スツとその間に靴が差し込まれた。がたん、とドアがなる。

「随分と、手荒な歓迎の仕方ですね。久しぶりの再会なのに」

女が笑うと、隣にいた女は慌てた。

「真紀！ そんな言い方」

「あんたを誘ったのは、ただ単に平田藍華さんのお宅を知りたかったから。帰りたいんなら帰っていいわよ？ デートでしょ。十五分後、駅前で待ち合わせ、だったわよね？」

女が帽子を取り去った。さらり、とまとめて帽子に入れられてあつたらしい髪が散る。

暑い日差しにも負けけない、真つ白な肌が姿を現し、女の顔をあらわにした。しかし……女は、いやまだ少女と呼べるその顔は確かに見覚えがあつた。

「真紀！」

「うるさい。数ヶ月ぶりにあつた友人にその態度は何？ 早く行ってらっしゃい」

「どうして、デ、デートのことを知ってるのよ！」

もう一人の女も帽子を取った。こちらは完全に少女の顔で、いつもクラスで見かけている顔だ。菊池と話をしていた、池田佳奈美だつた。

「池田さん……。黒田さん」

藍華は目を見開いた。自分の家にこの二人が来ることは、まったく予想できなかったのだ。

黒田真紀……外国に行ってしまったこの少女は、この数ヶ月でぐつと大人びた。

前々から整った顔立ちこそしていた。

しかし目立とうとする意思と、自覚がなかったために少し地味な印象を周りに与えていた。

今は 前とあまり変わらないのに、何かが決定的に違ふと思つた。

何が彼女を変えたのかは分からない。だけど、何かが彼女を変えたのは分かつた。

「知ってるわよ。あんたと悠くんの顔を見れば。あとは脅して問いただすだけ。何て簡単なんでしょ」

おどけたように言った後、真紀は佳奈美の背中を押した。
「遅れてもいいの？　ここから駅まで少し距離があるわよ」

やばい、と佳奈美の顔に文字が浮かんだ。そして携帯を取り出して、時間を確認するとこちらを一瞬見た。

「平田さん。ごめんなさい。真紀に言われて断れなくて……。前ここ通ったときに、智先輩から聞いたんです」

ぺこり、と一回頭を下げて、佳奈美は走って駅のほうへ向かった。思いのほか早く、あつという間に見えなくなってしまうた。

そして、二人が残された。

「えっと、どういったご用件でしょう？」

話の意図が見えなくて、藍華は首をかしげた。すると今度は真紀が慌てたように頭を下げる。態度が豹変した。

「ごめんなさい、気になることがあつて。失礼だと思ったんだけど、学校が始まるまではさすがにいられないから」

「いえ、それはいいんですけど」

そう言つて、藍華は大きくドアを開けた。

「どうぞ。片付いてないですけど、よければ」

「ありがとうございます。コレ、お詫びの品」

ひょい、と差し出された箱には有名な洋菓子店の名前が書かれていた。

「え、でも……」

「いいの。無理矢理来ちゃったの、私のせいだしね」

にこり、と笑つと、美人だと思っていた顔が可愛らしく変化した。

「どうぞ。お茶、淹れますから」

「お構いなく」

その次に見せた表情は、どこか何かを企む顔だった。予想に反し

て、この人は性格が悪いのではないかと思ってしまう。
そう　たとえばあの人のように。外見はさわやかで、優しくて……いい人のように見える。だけど中身は真っ黒、と藍華は心の中で呟いた。

「それで、話って言うのは……？」

紅茶とケーキがテーブルに揃い、二人が席に着くと藍華は尋ねた。
「うん。まあ、ちょっと気になって、そのままイギリス（あっち）に行っちゃったから、その後の様子を見に來ただけ、なんだけどね」
苦笑いをしつつ、真紀は紅茶のカップを持った。そっと口をつけると少しだけ目を見張り、藍華の方を見る。

「すごく、おいしい……」

「ありがとう」

藍華は笑って紅茶に口をつける。そして小さく頷いた。うまくできている、と自分も思った。

「話って言うのは、何て言うか……」

小さく迷ったように、真紀が言った。藍華はその心にほんの少しの迷いと、決意が宿っていることを感じる。

「あなたと、菊池先生のことなの」

真紀の言葉に、藍華の笑顔は固まった。

「えーっと？」

藍華が首をかしげると、真紀も首をかしげた。

「私、平田さん、菊池先生のことが好きだと思ってたんだけど」
遠慮がちに、だが確信を含んでいるその言い方に驚いた。

「え、どうして？」

思いも寄らないことを言われたからだろうか、まったく口が回らない。

「何となく、そんな感じがしたから」

まあ、関係ないって言われればそれまでなんだけどねー、と真紀は笑う。

ついで、いたずら気に笑った。コロコロと変わる表情は多彩かつ、キレイで……この人も恋をしているのだろうかと思ってしまう。

来たときの大人びた表情。先ほどのほっとして見せたような柔らかい表情。少しだけ何かを企んでいるような口を引き上げる表情。

そのどれもが彼女であって、ありのままの彼女だった。

「なんていうか……。こういうのって、見てるほうが面白いでしょ？」

「だけどねー、と真紀は髪をかき上げた。

「何度もあなたのお姉さんから相談されたから、様子を見に来たの。あつさりと今日来た理由を明かし、コレはお姉さんに内緒ね？」

と付け加える。あつさりと先程来た理由を翻したのは怪しかったが、姉ならありえる気がした。

「あなたには言わない約束で、相談にのってるの。妹が恋してるのかどうか、って」

恋愛経験のない私に言われてもねえ、と眉を下げる。

「まあ、聞く限りでは恋してるかどうか微妙だから、直接聞いてみようと思ってる。本人に聞くのがいいんじゃないかな、と思ったのよね」

苦笑いしつつ、真紀は再度カップを傾けた。流れるような仕草に一瞬だけ目を奪われて、藍華は我に返る。

「そんな、んじゃないの……。ただ」

失恋を共有しているだけ。そう答えると、真紀は一瞬だけ目を見張った。

「先生の、失恋。聞いたの？」

「少しだけ」

ふうん、と意味ありげに真紀は目を細めた。

「『あの』菊池先生がねえ」

ニコニコと、何かを面白がるように笑うと席を立った。

「あんまり心配なさそうで良かった。どう春華さんに話そうか迷ってたの。……恋してないんじゃないですか？ って言っても、『そんなわけない』って言われそうだし。恋してるんじゃないですか？ って言っても、『あの教師に恋するわけないでしょ！』って言われそうだし」

どっちにしても怒られそうだったんだよね。

「それは、失礼しました」

春華さんに言っちゃダメよ。私が怒られるんだから。

そう言つて、真紀は笑いつつかばんを手にとってから、帽子をかぶった。そのせいか、表情が少しだけ翳った気がする。

「でも、まあ、一つだけ忠告しとくよ。春華さんからの相談料金分は働かないとね」

亮の様子見てもらってるから。

その『亮』が真紀の幼馴染であることは知っていた。『ただ』の幼馴染らしい。

「その人のことを思って離れるのも、私は恋だと思ってる。まあ、辛い区分だけど。で、どうせするなら、楽しい恋のほうがいいですよ？」

恋つて、もとはそういうものだと思うから。

「今先生に恋をしてないなら、もう引き上げるときだよ。これ以上深入りしちゃダメ。あの先生はたちが悪いからね」

だけどね。もう、手遅れなら。

「もう手遅れなら、一回ぶつかってみるのもいいかもよ？ 意外にあっさり落ちるかも」

最後の言葉は冗談の色が前面に押し出されていた。なのに、隠しきれていない感情が見え隠れする。

「まあ……。経験のない私にはコレぐらいかな。あ、あとお姉さんたちに頼るのも一つの手だよ。経験者なんだし」

玄関に行き、真紀は自分の手で扉を開ける。外を見て、一瞬だけ

驚いた顔をしたあと、静かに扉を閉めた。

「最後に」

どうしても、もうダメだと思って、それでお姉さんたちにも相談できなかつたら。

「電話かメール、私にして」

ここにいない分、安心でしょ。私もとやかく首突っ込みたくはないし、安全な相談場所だと思うけど？

「どうして、わたしに、そこまでしてくれるの？」

藍華がそう言うと、真紀は笑った。

「だって、似てるんだもん」

誰に、と言わなかつたけれど、きつと真紀自身にだろう。

「よく分からなくて、混乱してて……でもそれが恋じゃないって確信はしてる」

恋なんてものを知らないくせに、その存在は否定する。

「すつごくバカらしいくらいに、妄信してる」

自分がバカだって、分かっているのに。

「だからかな。春華さんに相談されたとき、少しでも上手くいけばいいなって思った」

その想いが何か見定めるのが、いいのか悪いのか分からないけれど。

「何がいいのか、悪いのかはあなたが決めることではあるけどね」

私は少しお節介を焼きたかつただけ。そう言って、真紀は笑った。今まで見た中で一番明るく、優しい笑顔だった。

「案外自覚すると、軽くなるかもね」

今度こそ、真紀は玄関の扉を大きく開けた。自分の連絡先を書いたメモを渡しつつ、かばんを持ち直す。

「じゃあ、お邪魔しました」

藍華が外を見ると、長身の少年がこちらを見ていた。

鋭そうな瞳が、真紀を捉えると柔らかく細められる。愛想の少なさそうな顔はそれでも、かっこいいという部類だろう。黒い髪と瞳

がひどく印象深い。真紀はそれを見るとわずかに眉を上げて、不機嫌そうにそちらへと向かう。

「どうして来たの？」

藍華と話しているときは違う、厳しささえ含んでいる声だった。

「お前、明日帰るんだろ？」

「だから？ 私、今回、亮に会わずに帰る予定だったんだけど」

冷たい言い方に、黒髪の少年は少しだけ寂しそうに眉をよせ、それでも歩いていく真紀についていった。

「私と一緒にいると、母さんがまた何か言ってくるわよ？ 亮は関係ないって言ってるのに……」

そんな声が聞こえて、先ほどの言葉を思い出した。

『その人のことを思って離れるのも、私は恋だと思ってる』

それは、自分自身のことですか？

自覚し始めるきっかけは、もしかしたら人の言葉からかもしれない。

はたまた、人の行動からかもしれない。

思いもよらないところから、自覚は突然やってくるかもしれない。あるいは、じわじわと理解するのかもしれない。

しかし、それはまだ少しだけ先の話。

第十八話 『飴色秋風』

「やってまいりました。体育祭。今年も皆さん頑張ってください！」

行事恒例の……というか、もう慣れてしまった智の放送を聞きつつ、藍華はため息を吐いた。

お祭り人間だと思わずにはいられない、楽しそうな声は藍華の気分を寄り一層滅入らせた。自分がやる気がないときに、やる気がある人間の言葉を聞くとついつい反発したくなる。

文系人間、もとい室内大好き人間にとって体育祭は一種の拷問だ。秋という分類はあれど、まだ暑いこの日差しの中、何が楽しくてグラウンドに出なければいけないのか、と藍華は首を振る。

毎年この行事がある度に、体力が根こそぎ奪われていく気がする。実際そうなのだからやりきれない、と藍華はため息を吐いた。

先程から一切テントの中から動いていない。むしろ、動けない。強い日差しから逃げるようにタオルで顔を覆い、俯いていた。

「藍華ちゃん大丈夫？」

心配して聞いてくる詩織にも返事ができないほどに疲弊している。首を縦に振るだけにとどめておいた。

「暑い……」

「まだ九月下旬だしね」

苦笑いしながら詩織は言い、ペットボトルから水を飲む。

「それにしても、よく晴れてるね。ここ最近、雨ばかりだったのに」

秋雨前線がまともに当たってしまったせいで、最近はずっと雨続きだった。

「雨でつぶればよかったのに」

中止はあるけれど、延期は無いのだ。一回中止になってしまえばそれで終わり。藍華はそれを望んでいた。

……文系人間はそうだろう、と思う。

「まあまあ。そんなこと言わずに」

駿くん、あれで結構運動神経いいんだね。

詩織が言うので、つられたように藍華もグラウンドに目を向けた。

「百米ートル走、次、駿くんだよ」

見ればスタートラインにいた。

体操服をすっきりと着こなしていて、野暮ったい感じが見られない。隣にいる男子と笑いながら話しつつ、合図を待つ。

ここから見ると、なるほど、女子からの人気が高いことも頷ける。

「何か、場慣れしてる？」

「運動部だからね」

藍華の呟きに、詩織が答えた。

「さてさて、お手並み拝見。あんな人畜無害そうな人がどれだけ走るのが」

楽しみにしているのだろうかということは分かるが、暑さに負けて再びうなだれる。じりじりと太陽の熱気が、テントをつきぬけ直接入ってくるようだ。

ちりちりと肌を焼かれている感覚は消えなかった。

「あっつー」

小さく声を出すと、いきなり後ろから声をかけられた。

「若い人間が、よくもまあ……」

気に障る言い方だったので、動かない体を動かしてその人物へと向く。顔を上げれば、声から予想していた人物がそのままいた。

「菊池先生」

「平田、お前は今年で何歳だ」

からかい半分、呆れ半分、そんな視線で菊池は藍華を見ていた。

『パン』

そのときピストルの音が聞こえ、藍華は思わずそちらへと振り返った。

低い体勢からのスタート。そして加速しつつ、体を上げる。足の

運びも、手の振り方もすごくスムーズで思わず見とれた。

『描きたい』

無意識のうちにそう感じてしまう。

「平田はまた自分の世界に入ってる」

気づけば百メートル走なんてとつくに終わっていて、日下部

駿介は一位の札を持って立っていた。

「描きたくなっただ？」

確信を秘められた問いに頷く。すると隣でかすかに笑われた気がした。

「すごい」

あの動きを描きたいと思った。人間とは思えないほどスムーズに、風を切る姿を描きたいと思った。

「お前、本当に絵のことしか考えてないな」

「そんなことないですよ」

現にこの夏は色々考えさせられました、と口には出さずに思う。

あのあと色々考えてみたけれど、やはり答えは出ず、そして誰にも相談できなかった。そもそも人にする質問ではないと思った。

自分の問題だ、と言い聞かせた。

「あたしにだって、色々考えるべきことはあつたんです」

「へー」

にやり、と笑う。相変わらず、睨みつけたくなるような笑顔だった。そのくせ、とてつもない魅力がある笑顔だとも思う。

どこか人を惹きつける笑顔だった。

「先生、その笑顔は人が悪いです」

「もともとこんな顔」

その笑顔を崩さないまま、言う。こどもっぽい、というよりむしろ大人気ない顔だった。

「あ、……次職員対抗戦だった」

何のためにテントから出たんだ……。

菊池はそう呟いて、入場門に向かった。

しかし何かに気がついたのか、藍華の方を向くとまた人の悪そうな笑顔を浮かべる。ぞくり、と小さく震えた。

それが何から来るものなのか、藍華は分からない。ただ、本能が感じるまま『危険だ』と思った。

「日下部に負けないように頑張らないとな」

その言葉の真意を、藍華は知らない。本当の真意など、菊池さえ知らないのかもしれない。しかし藍華は何かを感じてか、かっと顔を赤らめた。

暑さのせいでもなく、日差し of せいでもなく……一人の言葉のせいで。

『位置について』

『ヨーイ』

『ドン』

一瞬一瞬が、とてもゆっくりに見える。掛け声に応じて低くする姿勢。よく響くピストルの音と同時に力強く動く足。

見とれていた、というのかもしれないと思った。

あんなふうに、いつも走るのだろうか。

藍華はふとそう思う。美術館へ行った日も、あんなふうに走っていたのだろうか。百メートルなどあつという間で少し惜しい気もした。

いつも見る白衣とスーツではない姿も珍しく、『一位』の旗を持って体育科の先生と話す姿も見慣れないものだった。

「描きたい、な」

自分でも気がつかず、藍華は呟いた。

そして言ってしまった自分に気がつき、とっさに口元を覆った。ぐっと体温が高くなっていくのを感じる。

『どうかしてる』

駿介を描きたいと思っていたときとは違うものが藍華にあった。しかしそれに目を向けられないようにして、ただ『描きたい』という願望だけを見つめる。

『描きたい』

その純粹な思いに混じる、かすかな思いに気がつきそうで……しかしまだ気づかない、気づかないふりをする藍華。

「バカみたい」

自分の中に宿る感情を予想し、しかしそれがありえないと思い首を振った。自分の考えを否定するように、はっきりと口に出した。

「そんなことありえない」

だってそうなんだから。

絶対にありえない。ない。そんなことない。

「ただ描きたかっただけ」

自分に言い聞かせるような言葉とは裏腹に、その頬はわずかに朱色に染まっていた。

「平田どうだった？」

「お年のわりには結構な早さでした」

それを隠すために、少しだけ意地の悪い返事をした。その返事に菊池は気分を害したのか、ぐいっところちらへ顔を向ける。

「何だつて？」

追い詰められている感覚、気のせいではない。

「だから」

繰り返そうとした瞬間、ピン、と額をはじかれた。

「いたっ」

「性格の悪いヤツにはこれくらいしないな」

少しだけ、バカにしたように笑った。藍華は自分の心が読まれているのではないだろうかという不安を押し殺した。

「先生、だつてこの前はっ」

「お前は、この前二人で美術館へ行ったことをクラス中に知らしめたいのか」

この前は体力落ちたつていったじゃないですか！

そう反論しようと思つて口を開いた藍華だったが、菊池の言葉を聞き慌てて口を閉じた。

「べ、別にばれたつて」

「誤解ほど厄介なものは無いんだよ」

釘をさすように言い、眉を顰める。

そのとき、藍華の胸によぎつたのは。

迷惑なんだ

その思いだけだった。単純なまでにそう思うだけだった。誤解されることが迷惑なんだと、思うだけだった。

悲しいとか、寂しいとか、そういう感情は微塵も無くただただ『

ああ、迷惑なんだな』とそう思うだけだった。そして、そう思うことによつて、小さく心に傷がついた。

何のための傷か分からない。それがどう藍華に影響を及ぼすのかも分からない。

だけど傷ついたことは分かった。自分が傷ついたのだと、そういう自覚があった。涙も出ない、苦しいという思いもない……ましてや胸を締め付けられる切なさもない。

そんなもの感じない。

そう、だから藍華はまた思うのだ。

この気持ちもまた、憧れなのだろうか。ただの幻影に過ぎない感情なのかと。

第十九話 『オレンジ色携帯』

週五日しか会えなくて、長期休暇なんて……こうしてみれば本当に多くて。どこまでもあたしは学生なんだと思い知らされた。

そしてあの人は、先生なんだと思い知らされた。当たり前のことを、突きつけられた。

「で、何かに気がついた、と」

電話の向こうでは、大人っぽい口調の声 flowed。国際電話が高いことを百も承知でかけている。

冬休みに入った。時間があつという間に過ぎていつてしまう。

少しだけ気ますぐくなればすぐに休みに入って、そして休みが明けたら、休み前自分が何を思っていたのか分からなくなってしまふ。

「藍華は少し、鈍感なんじゃない？」

電話をしているうちに『平田さん』から『藍華』へと名前の呼び方が変わってきた。

それと同時に、大人っぽく滅多なことでは動じなさそうな黒田真紀が意外に打たれ弱いということを知った。

「真紀に言われたくない」

藍華が小さく電話の向こうの人物に抗議すると、『確かに』と返ってくる。真紀は小さく笑い、話題を元へ戻した。

電話をすればするほど、賢い人間だということが分かった。人の心を読むのが上手いんだろう。そして自分と違い、それを相手へあまり分かせない。藍華はそれを少しだけ羨ましく感じる。

「藍華はさあ。多分、初恋の負い目があるからだよ。……初恋じゃなかった、ごめん」

『初恋』と言つて、慌てて訂正する。蒼也への気持ちのことは既

に知らせていた。

「自分で、もう恋じゃないって思ってるわけでしょ？ でも正直その感情、あやふやだと思うのよね」

そう言っつて真紀は続けた。菊池が『恋ではない』と言い切った感情を、真紀は『恋かもしれない』という。その言葉が、藍華を混乱させていた。

「藍華はそれが恋じゃないって思ってた？ 違うよね。心の中で、恋だっと思ってた。しかも、許されない恋」

それは恋か、恋じゃないか関係なく……藍華の感情を抑制してるんだよ。その記憶が。

「男の人への感情を、ある一定で抑制してる。恋じゃないって、言い聞かせてる。そんなふうに、私は感じるよ」

「そうか、なあ」

不安そうに言う。まだ分からない。自分が持っている感情が、何なのか。

「智先輩に感じるの？」

唐突な問いだった。

「信頼と、朔ねえを裏切ったら許さないっていう気持ち」
すつと答えが出てきた。

「日下部くん」

「信頼してて、勉強ができる憧れ。尊敬、かな」

これもまた、答えは出てきた。

「藤田蒼也先輩」

「優しくて、心配性で、春ねえが大好きで、いい人。本当のお兄ちゃんみたいなの」

少しだけ、迷わなかったといえは嘘になる。それでも、『お兄ちゃんみたいなの』には違いなかった。

「じゃあ」

言い淀むように真紀が口ごもった。

「亮は？」

「真紀の思い人？」

聞き返すと、少しだけ間が空いて『大切には思ってるよ』と小さく返ってきた。受話器の向こう側で、静かに微笑んだことを感じる。「怖そうだけど、かっこいい感じ。あと、真紀を見たときの笑顔がすごくいい」

描きたいくらい。そう言うと、『亮はダメよ。写真に写るときとかも眉を顰めるの』と笑われた。

「最後」

ずっと、声がいつもよりずっと冷たくなった。冷静になったのだと、藍華は感じる。

「菊池先生」

菊池優斗さんを、あなたはどう思う？

「優しくて、意地が悪くて……不真面目なところがあつたり、それでも生真面目だつたり」

二年にも満たない思い出が、流れ出るように思い出された。初めて会ったときも、今もあまり変わらない。ただ分かっているのは、見た目よりもずっと優しいということ。

「生徒から人気のわりには地味な格好してて、『ちよつと冴えないよね』って言われたり」

メガネをして、そしてスーツも地味だ。

「絶対に告白できないように逃げ回つたり」

どうしてそんなに逃げるのか、少し分からないけれど。

「いつも、『口止めだ』って言つてアメくれたり」

何故か、唐突に涙がこぼれた。声が、揺れた。直そうとするのに叶わず、涙声になった。

「失恋話したときの顔が……」
「すごく痛そうで。」

「この人は恋をすることを諦めていそうな人だと思った」

「それで、最終的にその気持ち全部をひっくりめると？」

促すような声は抗いがたい響きを持つ。何かをいざなうような、

声だった。

「藍華？ もう、出てるよ。答え。後はね、それを認めるだけ」

それが一番、難しい。それは私も分かってるよ。

「私もまだ、認められていないよ」

答えは出ている。出そうと思えば、今すぐにも出せる。

だけど出したいくないから、心の中に収めたままにしている。いつか出そうと思っているけど、それがいつか、なんて分からない。

分からないから、見ないふりを続けてしまう。

まだ分からない、と思う。

「早く、認めちゃえば……きつと楽なんだろうね」

だけど認めちゃえば、色んなものが変わってしまうから。たくさんのものが、めまぐるしく色を持って回りだしてしまうから。

だから、その覚悟を決めないと自覚なんかできないと思ってしまう。

「でも、私心の中で分かってる」

真紀の聲がわずかに震えた。何かを思い出すように、小さく小さく震えた。藍華は何も言わずに、その言葉を待つ。それしかできないと分かっていた。

「多分、私と藍華の中にある感情は、認める認めない　じゃないんだよね」

それはもう心の中にあって。なかなか捨てられるものじゃなくて、表に出すのはとても簡単で。むしろ隠すほうが難しい。

いつの間にかあふれていて、止めようがないくらい増え続ける。

それは涙にもなるし、言葉にもなるし、行動にもなる。

「難しいね」

ただその人を大切に思うだけじゃダメなんだもんね。

「難しいね……」

同じことを繰り返して、真紀は黙った。何も言えなくなったようだった。

「真紀」

静かに呼びかけると、真紀は返事をした。

「大丈夫」

大丈夫だよ。

「だって、私も藍華も　ちゃんと分かってる」

分かっているから、逆に苦しくなるんだけれど。

「分かっているからこそ、大丈夫だって言いたい」

私にも、藍華にも、もう少しだけ時間が必要だね。よく考えて、よく言い聞かせて……それで出た答えならば。きっと。

「きっと正しい答えだよ。誰に何を言われても、私たちにとって
は」

他の誰が『間違いだ』と言っても、それは『正しい』。

「そういう、ものでしょ？」

私と藍華が持つてる感情なんて。

「他人にとやかく言われるものじゃないでしょ？」

むしろ他人に何か言われたら、不快に思うよ。少なくとも私はね。

「真紀は強いよ」

「藍華も強い」

強いと他人に分かるぐらい、強くあるうと振舞っている。だから。

「藍華は弱いよ」

「真紀も弱い」

強さは目に見えるものではないから。きっと目に見える強さを持つ
つあたしたちは弱いのだろう。

「藍華。もし……もしも、本当にそうなら」

あなたが本当に、菊池先生のことを想っているなら。

「私より、辛い思いをするのかもしれないね」

おやすみ。

真紀はそう言って電話を切った。

ツーンと音のする携帯電話を持ったまま、藍華はじつと携帯を見つめていた。いくつかのボタンをいじれば『菊池先生』と書かれた電話帳の一件に行き着く。

ボタンを一つ押せば、電話は繋がってしまう。自分の意思に関係なく、繋がってしまう。

こんなに薄い、生徒と先生の関係なのに。繋がりは確かにあって、余計落ち込んだ。こんなにまでも薄くて、今にも切れそうな繋がりが。そして理由がなければその繋がりにすぎることさえ許されない。

藍華はごろりとベッドへ寝転がる。そして携帯を投げ出した。オレンジ色の携帯が月明かりを反射してキラリ、と小さく光る。その光がわずかに目にしみて、藍華は目を閉じた。

「目を瞑っても……消えない」

その光が目を瞑っても侵入して、瞼裏をちかちかと照らす。その光から逃げるように藍華は寝返りを打った。

「バカみたい」

分かっているはずの感情から目をそむけるように、携帯に背を向けた。何も見えなくなってしまうばいいと、きつく目を瞑り続ける。そうすることでしか、その侵入を防げないというように。

「何であたしが」

そんな感情を持たなくちゃいけないの。

「そんな感情を持つには」

少し傷つきすぎちゃったよ。

もうそんなものに幻想なんて抱けなくなっちゃったよ。

「好きってだけじゃ」

いけないこともある。

「大切ってだけじゃ」

どうにもならないことがある。

唐突に、随分と前に春華が言っていた言葉を思い出した。

『諦めなきゃいけない恋』

それはいつたい、どんな恋だろうとぼんやりと思った。藍華にはまだ分からない、諦めなければいけない恋と、そうでない恋。実る恋と、そうでない恋。幸せな恋と、そうでない恋。

何がどう違うから、そう言われるのかまるきり分からず、しかしそういう恋があるということだけは知っていた。初めから、そんなこと知らなければよかったのに。

「もしコレが恋なら」

もしもこの感情が恋だとしたら。

「恋なんて……」

恋なんて。

「しなければいいのに」

しないのが一番だと思ってしまう。

「しないのが一番幸せなのに」

なのにどうして、人は何百年何千年もの間、恋をし続けるのだろう。

「この感情は、恋っていうのには痛すぎて
憧れというには甘すぎる。」

第二十話 『茶色チョコレート』

自覚と言うのは突然で、そしてそれは一気に胸を占める。

必然か偶然か、それは日本が恋色一色に染まる日にやってきた。

……つまりはバレンタインデーに。

幸か不幸か、それはいつもの場所で行ってきた。……つまりは美術室で。

「おはよー。藍華ちゃん」

「おはよう、詩織。元気だね」

二月、まだまだ防寒具が手放せない十四日。世間は、というか若い男女は浮かれている。隣にいる友人も例外ではなさそうだ、と藍華は隣を見つつ思った。

“藍華”という名前とは裏腹に、姉が藍華に買ってくるものは全てオレンジ色で統一されている。

家では朔華のものはピンク、春華のものはブルー、藍華のものはオレンジ、と決められているらしかった。

その例に漏れない淡い色のマフラーに顔を埋めつつ、藍華は白いと息を見つめた。

「詩織は誰にあげるの？ チョロ」

「え、誰にもあげないよ」

きよとん、と首を傾げる詩織を見て、藍華も首を傾げ返した。

「日下部くんには？」

「駿くん？ ああ、でも彼興味なさそうだから。こついう行事」

逆に、義理なのに気を遣わせちゃいそうだから。そう言って詩織は苦笑いする。それを見て、藍華は再び首をかしげた。この友人、随分と日下部駿介のことを気に入っていたのに、どうしたのだろうか

か、と。

「何かあった？」

わずかに躊躇した後そう聞くと、詩織は小さく目を見開いた後首を振った。何かを隠しているようにも感じたが、藍華はそれ以上追求せず、『そう』とだけ返す。

「藍華ちゃん、時々人の心が読めてるんじゃないかと思っちゃうよ」それでも詩織はどうしてか、話を続けた。詩織の発言に一瞬だけ振るえ、藍華は『読めるわけないよ』と返す。なんとなく、分かっってしまうことならある。だけど『読める』といえるほど完璧なものじゃない。

「駿くんね。好きな人がいるんだけど、『好き』って言えないんだって」

始めからね、そう言われてたから恋なんてしなかったんだよ。

藍華の疑問を読み取ったように、詩織は言う。『詩織のほうが心読めてるみたい』と言い返すと、『藍華ちゃんが珍しく表情に出したからだよ』と笑われた。

「その『好き』っていけない理由は聞いてないんだけど、告白する勇気が出ない、みたいな悩みじゃなさそうなんだよね」

だから、わたしは駿くんの相談役だよ。

「それにわたし、親戚のお兄さんが初恋の人っていうくらい年上好きだし」

にこっと笑った笑顔からは何も分からなかった。そう、何も。誰だって、いつだってある感情の色は何も感じられず、何も感じさせないようになっているのが分かってしまった。

だから藍華は何も聞かず、全く違う問いを口にした。

「五歳くらい上がいいの？」

「もつとかな？」

笑いながら登校する。それはいつもどおりで、それは普通どおりだった。

甘い香りは苦手。同級生の女の子たちが浮き足立って、ソワソワしているのを見るのは嫌いではないけれど。

しかし赤く染まる頬も、きれいにラッピングされたチョコレートも、甘い香りも、それに続く言葉も、自分には不相応な感じがして苦手だった。

自分には関係ないと知ってしまったているから。どうしてもそれに賛同しようとは思えなくなってしまう。

その瞬間までいつもどおりで、何の変わりもなく、その瞬間まで明日もまたこういう一日なのだ、と信じていた。

だって、そうだと信じて疑わなかったから。自分には縁のないものだ、自分とは関係のないものだと思っていたから。だからその瞬間まで、いつもと変わらない今日だと信じていた。

「先生、タバコ、吸わないんですね」

「教室で吸ったら、こもるだろ、煙」

寒いために閉めている窓を見つめつつ、菊池は面倒くさそうに答える。冬の間滅多に吸わなかったのはそのせいなのか、と妙に納得して藍華は頷いた。

確かに冬の間は吸っている姿を見ていない。というか、多分、一回も吸っていない気がする。

「それに……絵が傷む」

付け加えるかのように言われたその言葉を聞く。タバコの煙は絵にとって大敵だ、と随分前に言ったのを思い出し、藍華は思わず微笑んだ。

「覚えてらしたんですか」

「お前よりは記憶能力上だからな」

にやり、といつもどおりの笑みで返されて、藍華はむつと眉を寄せた。こちらとしては褒めているつもりだったのに、皮肉にでも受け取ったのだろうか、と邪推する。

そう思いつつも、人物を塗り上げてしまった絵を見つめた。

一人の少女が夜空に右手を上げている絵だった。少女の手から零れるように星が煌いている。

月の明るい夜、少女は何を思い、夜空に手を伸ばすのか……それは藍華にも分からない。しかし少女が伸ばした手の先には、唯一動かない北極星がある。

何千年かに一度、それでも変わってしまふ北極星。現在の北極星はポラリスと言う名前だった、と藍華は思い出す。

いつだったか、北斗七星について話してもらった。自分の名前にちなんで、ということらしい。こぐま座の中で最も明るい星であり、北斗七星の先にある北極星は天の北極に一番近い星。

なぜだかこの絵を描くときに、思い出したのはその星だった。

人物を塗り上げた後は背景を塗るのだが、これはよく乾かさないとできないので今日は無理だ、と結論付ける。その代わり、新しいものでも描き始めようかなどと思ってしまふ。

よいしょ、と腰を上げ、画材置き場に足を向けた。

「ちよつと、奥に入ってますね」

そう声だけをかけると、菊池は分かっていたのか分からないのかひらりと手を翻すだけだった。

「さて……」

ぐるり、と見渡すとこれから使うかどうかも分からないガラクタ……と言って差し支えない程度のもものが溢れ返っているのが見て取れる。先生が帰ってくるまで片付けたら驚くかなあ、と独り言のよ

うに眩き、奥へと入っていく。

照明が少し暗く、両脇の柵一面に並べられた画材が光を覆い隠してしまう。画材に気を遣ってかいつもカーテンが閉められているそこはいつも居心地がいいとは言えない場所だった。

煙るような、籠もるような絵の具の匂い。そして木の匂い。

藍華はそれが嫌いではなく、むしろ落ち着くものだと思っている。そんな中、どんどん足を進め、ついには突き当りまで来てしまった。そして目当てのものを見つけて、それを手に取った。他のものより小さいのを取り、くるりと画材置き場の出口へと向かう。

そして扉に手をかけた。そこまでは……いつもどおりだった。その最後の瞬間でさえ、いつもと変わらなかった。

「先生、好きです」

そう聞く瞬間までは、何一つとして代わり映えのしない毎日だった。

扉にかけた手をそっと聞く。早く、聞こえない場所まで下がらなければいけないと自覚はしているのに、何故か足は動かなかった。

指一本も動かず、画材を持ったまま固まった。

まるで何かに固められたかのように、動かないからだが酷くもどかしくなった。

「好きです」

もう一度、同じ言葉が繰り返される。去年の文化祭の人だ、とすぐさま思い出した自分に若干の驚きを向けた。

どうしてその人の声を覚えていたのだろうか、と自問自答するも自分でも何故だか分からない。

「先生、私は」

「俺は教師だ」

随分と、冷たい声が聞こえた。

一瞬誰の声か分からないほど、いつもの声と違っていた。いつもはもつと落ち着いた、少しだけ甘い声だ。思わず聞き入ってしまうほど、優しい声をするときだつてある。

なのに何故か、今の声は冷え冷えとしていて冷たかった。少しだけ恐怖を感じてしまいそうになるくらい、冷たくて、そして泣き出しそうになるくらい不機嫌な声だった。

「俺は生徒と恋愛ごっこするつもりじゃないんでね」

皮肉の混じるその言葉は、本性のように感じられる。先生は悔やんでいるのだろうか、と唐突に疑問が浮かんでくる。あいまいな態度が何年か前の生徒を傷つけたのなら、そうなのだろうと思う。

だからもう、あいまいな態度をやめたのだと藍華は思った。

「恋愛、ごっこをするために先生に言ったのわけではありません」
それでも生徒は頑なに言い張った。敬語は崩さぬまま、見えないけれど、多分まっすぐな視線を菊池に向けたまま。

「私は、先生とどうこうなりたくてこんなことを言ってるわけではありません」

それは、いつそ痛々しいくらいまっすぐで、キレイな気持ちの欠片。崩さないまっすぐな姿勢は彼女の決意の現れであるように藍華は感じた。

立ち去らなくてはいけない、これ以上聞いてはいけない。

そう思っているのに依然として足は動かないままだった。

「私は、気持ちを受け取ってほし……」

「受け取ってほしいわけでもないって？」

生徒の言葉をさえぎって、菊池は再び言葉を紡いだ。先程と変わらない、冷たい声のままだった。優しさを見せることなく、つけこ

む隙を与えることなく、ただただ言葉を紡ぐだけ。

「随分と勝手ないいわけだな。お前の想像通り、俺は気持ちを受け取らないし、同情もしない」

「だけどな、と一瞬だけ声が揺らいだ。」

「俺も人の子だ。罪悪感ぐらい感じるんだよ」

「弱い声だったと思った。」

「今まで聞いたことがないくらい、弱い声だった。」

「お前は満足だろう。俺に言ったし、それですっぱり諦められるかもしれない。卒業したら忘れるかもしれない。もう終わった恋だつてすつきりするかもしれない」

「だけど、それじゃあ、俺はどうなる？」

「俺はお前を傷つけたことを覚えとかなくちゃいけない。お前の泣きそうな顔を覚えとかなくちゃいけない。それで俺はどうする？」

「お前の自己満足につき合わされる俺はどうなる？」

「俺は絶対に、もう少し言い方があったんじゃないだろうか、とか、どうしたら傷つけずにすんだんだろうか、って思い続けなくちゃいけない」

「この人は、少し優しすぎるんだな、と藍華は思った。いつの間にか足の力は抜け、画材を持ったままその場にへたり込んでいた。そして知らないうちに、涙を流していた。」

「どちらにとつての涙か分からない。」

「叶わぬ恋を持った少女への同情の涙かもしれない。」

「記憶に苦悩する菊池への同情の涙かもしれない。」

「だけど分かることは一つだけ。」

「どうしてこんなにも人は悲しい思いを抱えていくのか、という疑問だけ。」

第二十一話 『涙色告白』

「だから俺は、お前たちが嫌いなんだよ……」

途方にくれたような声が続いた。

「自己満足で、他人を傷つけて、それで被害者面してる」

「そんなんっ」

少女が言い返そうと口を開き、それからその言葉は止まった。

「いいえ、そうです。私は自分が傷ついた分、あなたにも傷を残そうとしてます。そうしなくちゃ、先生の心には残らないって知ってるから」

寂しそうな声は、それだけで心を突いた。

「先生の心に、残りたいと思っただんです。想いが受け入れられないなら、せめて私の言葉が少しでも傷になればいい」

一生消えない、傷になればいい。そう言って、少女は静かに涙を流すのだろうか。

「最低だな」

「最低です」

何の言い訳もせず、少女は淡く笑ったようだった。顔を見たこともないのに、きれいな泣き笑いの表情がとっさに浮かんでしまう。

藍華はそれをかき消すように頭を振った。

頭から追い出すように、耳を塞いだ。

「キレイに、失恋くらいさせてください」

けれど入ってきてしまったその声は、懇願するような声ではなかった。痛々しいほど弱いものでもなかった。どこか、きっぱりと同情はいらないとでも言っているかのような声だった。

「お前と、どうこうなるつもりもない。俺は教師だ」

だからこそ菊池も、最後は優しく言ったのだろう。最後の情けだとしても言うのだろうか。……それで少女が納得するはずもないのに。むしろそのことで少女は傷つくのに。

「先生、ありがとう」

初めて……少女は敬語を外した。少女は静かに、それ以上何も語らず、教室を出た。

菊池の顔が、見たくないと思っってしまった。それに気づき、藍華はうなだれる。もう、あれだけ言い聞かせた言葉が無駄だと悟ってしまった。

『これは、恋じゃない』

そう言った言葉が、無駄だと。

「悪い……」

「いえ」

へたり込んだまま、帰ってこない藍華を心配してか菊池は画材置き場の扉を開けた。そこにいた少女は小さく肩を揺らし、菊池の言葉に返しただけ、それっきり何も行動をとろうとしない。

「平田？」

手を差し出すも、手を取ろうとしない。それどころか、菊池を見ることがなかった。そっと肩に手を乗せると、大げさなくらい肩が震える。それからゆっくりと顔を上げた。

「平田……」

もう一度名前を呼ぶ。涙で濡れた藍華の顔は、何年前の生徒と重なった。彼女は決して泣かなかったのに、なのにその少女の泣き顔と藍華の顔が重なった。

「あっ」

小さく、声が漏れる。何かに気がついたかのように目を見開き、そして再び涙を流した。一筋、涙がまた流れて、顎から一滴床に落ちた。

床に落ちた水滴はすっと広がり、そして小さな水溜りを作る。

「じゅめつ、なさい」

ひくり、と小さくのが動いた。搾り出すような、そんな声だった。

「お前が、謝ることじゃないだろ」

菊池の声を聞いたたびに、藍華は肩を震わせる。そしてまた涙を流すのだ。痛々しく、弱々しい姿を見たのは、初めてだった。

何かにおびえるように、その何かから必死に自分を守るように、藍華は体を小さくしていた。

「平田……だい」

「大丈夫です」

菊池の話を遮るように、藍華は言った。そして涙をぬぐい立ち上がる。

「同情、しただけですよ」

言い訳するように、藍華はそう言っただけだった。その他は何も語らず、菊池を見て優しく微笑むだけだった。そしてカバンを手に取り、教室から出ようとした。

「今日は、帰ります」

菊池の方を見ずにそう言い、ドアに手をかけ横にスライドさせた。早くここから出て行ってしまいたかった。なのに。

「平田」

強い力で呼ばれた。それだけで、藍華の足は止まってしまつ。まるで糸が切れたように、ピクリとも動きはしなかった。まるでさきほどの画材置き場の中のように、何もできなかった。

「どうした」

優しく聞かれる。ついさっき、冷たかった声が今はとても温かくて、それだけで涙が出そうになった。

この人は優しい人だ、と藍華は思う。いくらどんなふうに言おうと、結局は自分が傷ついている。

それでも、この人は 傷ついていないふりをする。
「痛かったです」

ぼつりと言葉が零れた。それから口火を切ったように次々と言葉が零れた。

「どうして、泣いているのか分からないんです。だけど、痛くて」彼女の気持ち全て理解したわけじゃない。そんな厚かましいこと言えない。だけどその片鱗を見て、妙に心が痛くなった。自覚した感情があふれて、涙になった。

「『恋』は……。受け止められない想いは、迷惑なだけですか？」それならば、それは、その想いは。

なんて悲しいんだろう。

「先生にとってさっきの生徒は、迷惑なだけなんですか？」

彼女の思いも、純粹な気持ちの欠片も、まっすぐな視線も全て。

「迷惑だよ」

応えられない想いなんて、面倒以外の何物でもない。

菊池の声が、妙に心に突き刺さった。突き刺さって、取れなくなつて、藍華の気持ちが毒に侵されたように弱っていく。

それが分かり、藍華は眉を寄せた。泣き出す寸前のようだった。やっと止まった涙が、また溢れ出してしまいそうだった。

『恋ってそんなもんだらう？』

随分と前に、そう言った菊池がいたのに。『初恋』だという自分に対して、『初恋はこれからするもんだ』とそう言った菊池がいたのに。それがとても遠くなつた気がした。

『恋愛って、持つ感情の中で一番きれいなもんだらう？』

そう言ったあなたは、嘘を吐いたの？

「帰ります」

菊池が手を掴んだ。それを振り払って、藍華はもう一度同じ言葉を紡いだ。さきほどよりずっと強い声で、それでも泣きそうな顔はそのままに。

「帰ります」

帰って、ベッドに入って、寝て……明日、真紀に電話する。そうすればこの傷は癒えるんじゃないだろうか、そんなことを藍華は考えた。

「さようなら、先生」

痛みを押し殺して、笑った。

そうしなければ、泣き出して、菊池に言ってしまいそうだった。

『あたしはあなたが好きです』と。

「気付いたの？」

「かもしれない」

「はつきりしないわね」

電話向こうの人物は、小さく唸った。しかし次いで急に笑い出す。「それにしてもねえ」。何もこんな日に自覚しなくなっただけなのに、自覚した途端のその言葉でしょ？ 運悪いわね。

遠慮がない分、すつきりとした言い方だった。今日つけられた傷が小さくうずき、藍華は眉をそつと下げる。電話の相手はそれに気がついたように声を穏やかにした。

「多分、先生は気付いてないんだよ」

何に、だろうか。

「元生徒さんに、恋してたこと」

話してしまっていた。先生の過去を。いけないと分かっていたのに、他人の過去なんて安易にばらしてはいけないと知っていたのに、いつの間にか話していた。

そうすることで、救われようとしたのかも知れない。

「抱きしめたくなくても、キスしたくなくても、『恋』だったんじゃない？」

だから自分に嘘を吐いてる。『生徒に恋するはずない』って言い聞かせてる。

「先生つて、意外に臆病者」

真紀が笑った。菊池を嘲笑するような笑い方だった。

「藍華が認めたんだから、いい加減、先生も認めればいいのに」

認めれば楽だつて、言つてあげれば？

「できるわけないでしょ！」

「そうよね。他人の色事なんて首を突つ込まないのに限るわ」

そういつつ、相談に乗ってくれるこの友人は、実はとってもお人よしのだと気がついた。

「ねえ、藍華。ソレ、後悔しないの？」

あなたの今もっているその想いは、後悔しない『好き』ですか？

「分かるわけないよ」

「……そうだったね。ごめん」

少しだけ、何かを呑み込むようにコクリとのを鳴らし、藍華は言った。『自覚』が体中にめぐっていくのを感じる。

もともと予感していたものがすごいスピードで体になじんでいくのを感じた。

「少しは楽になった？」

「どうか。自覚した途端、『迷惑』って言われたんだよ」

「それは、今日告白した生徒からの想いにでしょ。それは、少しは痛いかもしれないけど」

慰めるような響きは微塵もなく、ただ事実を言っているようにしか感じられなかった。そして不思議と、真紀にそう言われると納得してしまいそうになる自分がいる。

「多分、そういう想い全部が迷惑なんだと思う」

「分からないじゃない」

珍しく、真紀が言い返してきた。いつも相談しているときは話を黙って聞いてくれる真紀が、『違う』と反論してきた。

「その生徒からの想いが面倒だからって、藍華の想いも面倒になっ

ちやうわけ？ それ、おかしいよ」

後悔したくないんなら、その気持ちを大切にすればいいじゃない。
「報われたから、後悔しないの？ 付き合うようになったら、それは全部後悔しない恋なの？」

わたし、それは違うと思うよ。

「報われなくても、後悔しない恋はあると思う。反対に、付き合うようになって後悔する恋はあると思う」

結局は藍華がどう思うかの問題でしょ？

「そう、だね」

でも報われない恋は痛いと思う。傷つくと思う。もう恋なんてしたくないと思ってしまうかもしれない。

「藍華を振るような節穴男は、藍華のほうから願い下げでしょ！」
そう言えるのは、美人である真紀だけだよ、とは言えなかった。

『先生、あたしは先生に恋をしました』

第二十二話 『苦色自覚』

「でねっ、告白しちゃった」

「え、で、どうなったの？」

「OKだった」

恋をする女の子は可愛くて、キラキラしてて、一生懸命に真っ直ぐ生きている。

そう見える。

「昨日ね、一緒に帰って……」

「ほんと、好きだよ、彼氏のこと」

「好きだよ」

そんなふうには、素直に言えたらいいんだと思う。

そう言えば、付き合い付き合わない別にしても、少しはまじな恋をした、と自分に胸を張れるんだと思う。

「昨日、別れちゃった」

「どーして……」

「それがね」

そしていつかはそんなふうには人に言える日が来るんだと思う。

ねえ、自覚したら、少しは苦くなくなるんだと思ってたの。

気持ちの正体を掴めば、何かが変わると思ってたの。なのに、結

局何もできなくて、むしろ苦しさは増えて、泣いてしまいそうになる。

そんな自分がひどくいらだたしくて、自分に言い聞かせた。

『恋』なんかにふりまわされてどうするの？ 理性を失ってまで、追いかけてしまえるほど価値があるの？

ないでしょう。一時の気の迷いでしょう。少し優しくされたから、勘違いしたんでしょう。

先生があまりにも、優しくて、甘えてしまったんだ。今までいな
いタイプの男ひとだったから、恋なんて勘違いしてしまったんだ。

「そうだよ……」

そうじゃなきゃ、説明できないよ。

「どうして、絵が描けないの？」

どんなときだって紙と描くものさえ与えられていれば心は落ち着いたのに。

今はシャーペンを持つ気にさえならない。真っ白な紙を目の前にして、何を描いていいのか分からなくなった。

何を見ても描く気なんて起こらなくて、代わりのように思い浮かぶのは『迷惑だ』というひどく冷たい言葉だけだった。

「大丈夫だよ」

自分に言った。

「もうすぐ、春休みだから」

そうしたら少しは落ち着いて、もしかしたらこの気持ちは消えているかもしれない。

少し冷静になれば、この気持ちの本当の正体が違うものだと思っ
かもしれない。

「帰ろう」

それでも美術室こに来てしまうのは、少しだけ期待しているせいかもしれない。もしかしたら菊池が来るかもしれないと思っているのかもしれない。

来てほしいと、思ってるのかもしれない。

顔を見たいと、声を聞きたいと思っているのかもしれない。

藍華は席を立ち、今日も真っ白のままだった用紙をしまおうと画材置き場へ向かおうとしたとき、ドアがスライドした。

はっとして慌てて画材置き場へ入ろうとするが、目が合ってしまった入ることができなくなった。

「こんにちは」

いつもはしない挨拶をした藍華を菊池は見る。どことなくいつもより不機嫌そうだった。

「平田。俺なんか、したっけ？ お前に」

気まずそうな口調に藍華は一瞬だけきょとんとした。そして苦笑う。普通に接していたはずだったのに、どこかしらばれていたらしい。

「いいえ。何でも。少し調子が悪いだけです」

嘘じゃない。だけど本当のことでもない。だから罪悪感なんてあるわけがない。

「送ってやるうか？」

だけどダメだ。感じてしまう。自分が悪いんだと思ってしまう。

そして菊池の優しさの元を邪推してしまった。そしてそのまま菊池へとぶつけた。いつも思っていたこと、だけどどうしても言えなかったこと。

言うてはいけないと思っていたこと。

「先生、ずっと……思ってたんですけど」

傷つけてしまうかもしれない。

「あたし」

あたしは。

「あたしは……先生の元の生徒じゃないですよ？」

あたしに優しくしたって、その生徒が救われるわけじゃないんで

すよ。

「先生がいくら、いくら悔やんだって」

その生徒の傷が、先生によって癒されるわけじゃない。

「先生が傷つけて後悔してるなら」

その生徒にすればいいじゃないですか。

「先生のせいで、あたし」

そこから何も言えなくなり、教室から出た。

菊池は止めようと伸ばした手を下げた。

「バカか、俺は」

恋ではないと言い張った。恋ではないと、今も思っている。

なのに、どうして彼女はそう思ったのか。後悔していないといえ
ば嘘になる。傷つけたことへの罪悪感だつてある。

もう、癒えていてほしいとだつて思う。

だけど、彼女と重ねているなんて考えたこともなかった。考えた
くもなかった。

「でも、傷つけた」

彼女に優しくしたのは、償いなどという崇高な思いからではない。
だけどその思いの底を聞かれると困ってしまう。なんと言えばよ
いか分からぬ感覚がいつだつて心を占めるのだ。

彼女に優しくしたからつて、自分の過ちが帳消しになるなどと思
っているわけではなかった。

自分の甘さが生徒を傷つけたという自覚を、いつまでも持ってい

なければいけない、そう思うだけだ。

「もう、二度と」

あんな過ちは犯さない。そう決めた。

中途半端な感情が誰かを傷つけるのならば、そんな感情の元を挟み込まなければいい。実際、そうしてきたはずだ。しかし彼女だけ、別だったのかもしれない。

少し、気になっていた。

恋とも呼べない感情に苦しんでいた彼女に、勝手に親近感を持っていたのは自分だ。

一緒だと、勝手に感じたのは自分なのだ。もしかしたら、生徒に持っていた感情が何なのか分かるかもしれないと思った。

結局。

「傷つただけだ」

もう過ちは犯さないと決めたのに。

生徒を傷つけないと決めたのに。

もう、あんな感情感じたくないと思ったのに。いつの間にか、またもってしまったのだろうか。だとしたら……。

「俺は本当のバカだ」

傷つけるだけ傷つけて、それでまたあの彼女も『過去形』の告白を残して去っていくのだろうか。『好きです』でもなく、『付き合ってください』でもなく。また……。

「『好きでした』か」

もう終わってしまった感情だけ、告げられるのだろうか。

「平田……」

誰もいない教室で、彼女の名を呼ぶ。だけど物足りなくて、呼びなおした。

「藍華」

初めて単体で口にするその名は甘く、甘く響く。

生徒の名を、呼びたいと思ったことなどなかったのに。

こんなに、甘く響くことなんてなかったのに。その名を紡いだ自分の唇さえ甘くなった気がした。

「なあ、俺はお前が好きだと思うか？」

元生徒への後悔からではなく、まして重ねて見ているわけではなく、平田藍華という人物を、好きだと思うか？

「お前は、俺に恋してると思うか？」

もしもそうなら、自分はどうするだろう。

そう考えたとき、ついぞ動くことのなかった心の底が疼いた。もう忘れてしまいうくらい長い間、高鳴ることがなかった心が動いた音がした。

「バカらしい」

そう呟いて、席を立った。そのときふと思いつき、画材置き場へ足を向ける。

むっとするような絵の具の匂い、少し古びた紙の匂いが充満していた。そういえば彼女はそんな匂いさえも好きだと言っていた。

しばらくその中を彷徨い、きれいに整頓された一角に目をつける。そしてその一番上に積まれたスケッチブックを手に取った。

見慣れたスケッチブックだった。いつも彼女が持っていたもので、その表紙をさらりと撫でる。

他の女生徒とは違う、少し大人びた字体の名前を撫でるとき、少し指が震えた。

『A i k a . H』と書かれた字は流れるような字体だった。よく

見る丸文字ではなく、少しだけ角ばったそれでも読みやすい文字。そつとそれを開くと、見知ったタッチの絵が無数にあふれ出る。描かれた絵の近くには描いた日、時間、場所などが書かれており、そのときの様子などもメモされている。

「こまめなやつ」

くすりと笑いをこぼすが、少しだけ切なくなつた。まるでそのときを切り取るかのような、忘れてしまわないように一生懸命な彼女が見えてしまった気がした。

イスに座りなおし、一枚一枚見る。

その中のほとんどが人物画で、そして彼女の大切な姉妹たちだった。笑っている顔、寝顔、怒っている顔、落ち込んだ顔。

彼氏に見せるだけの、とても優しい顔。どこまでも、安心しきつた顔。そのどれもが彼女の感情を読み取るかのように描かれている。モノクロなのに、何よりも鮮やかにその笑顔が焼きつく。

最後のページは、『少女』の泣き顔だった。この前自分に気持ち传达了、少女の泣き顔。彼女からは見えていないはずなのに、その泣き顔は本当にそのままだった。

『2月14日 16時30分頃 家にて

今日の美術室でのこと。頭にこびりついて離れない。自覚してしまつたかもしれない』

一瞬、止まつた。

その文字が何を意味しているのか分からない。彼女が何を思つて描いたのか、分からない。それでも……。止まってしまうくらいには、何かが流れた。

痺れるような感覚が、体をめぐつた。

「何が」

離れない？

「何を」

自覚した？

その答えが知りたくなっただが、知らなくて言いと思っている自分がいる。まだ自分が自覚するには早い気がした。恋心だと、言うにはまだ早い気がした。

第二十二話 『苦色自覚』 (後書き)

長くなってしまってますみません。完結が見えない……。いえ、最終話の構想はできてるんですけど、そこまで行く道のりが見えません。

気長にお付き合いくだされば幸いです。

第二十三話 『疑色質問』（前書き）

前話から大分、時間が経ってしまいました。すいません、お話に関係するお知らせを、一番下に載せています。

第二十三話 『疑色質問』

「藍華どうしたの、その顔!!」
心配そうな顔が、今日に限って気に障った。いつも心配はされている。

友達に話すと、笑われるくらい。お姉ちゃんたちはいつも、あたしの心配ばかりしていた。

自分よりも、あたしを大切にしてくれた。

だけど、今日に限って、腹立たしくなった。

「春ねえには関係ない」

「関係あるわよ!!」

ぐいっと肩をつかまれ、無理矢理顔を向けさせられた。

自分と少ししか似ていない顔が、一番上の姉と似通った顔が、すぐ近くにあった。

穏やかな顔をしていれば、姉と大差ないのに、こうした瞬間の顔はどきりとするくらい鋭い。

そしてそれこそがこの人の本当の表情だと思った。

「何があつたの。何で今日こんなに帰ってくるの早いのか?」

矢継ぎ早に尋ねられるそれは、触れられたくないものでしかなく。

「藍華? 大丈夫? 泣き……」

「煩い!!」

思わず叫ぶと、春華の顔が強張った。

今まで見たことがないくらい、シヨックを受けた顔だった。最低だと思った。自分の感情もコントロールできず、大好きな姉を傷つけた。

でも止まらない。

「どうしてそうやって聞くの? ほっといてくれないの? お姉ちゃんだって、言いたくないことくらいあるでしょ!! あたしだつてあるんだよ!!」

「藍華……」

確かめるように呼ばれて、次いで抱きしめられた。少しだけ小さな姉の頭が頬に当たる。

「ごめんね。でも心配だよ」

傷ついていないか、泣いていないか、心配でたまらないよ。

「藍華が元気になるまで、勝手に心配させて」

そうしたら、もうお姉ちゃん、何にも聞かないよ。

お姉ちゃんのほうが、泣き出しそうな声だった。

「春、ね」

「大丈夫、だよ」

最後に、それだけ言った。そして笑う。近頃よく見るようになった、優しい笑顔だった。

「うっ」

「……」

「うっ」

「平田？ 姉の方？」

ぎゃっと少女が飛び上がった。見知った少女とどこか似ているその姉は、少々……というかかなり変わっている。

妹と違って、しっかり者という評判をよく聞くが、どこがか、と聞きたいくらい落ち着きがない。

妹のことになると、という制限つきではあるが。それさえ除けば、勉強もできるし、人間関係もそつなく形成しているようだ。

加えて、彼氏もしっかり者だったりする。似たものカップルなのだ、見知った少女が言った。

「き、菊池先生」

物理準備室の前で百面目をしていた少女、春華は気まずそうに目

をそらせた。

そして制服の裾をじっと見つめた後、何か決心したかのようにこちらを見る。

見知った少女と似ているが決定的に違う、偽りを許さない瞳だった。

見知った少女は偽りを見抜こうとしない。人を信じているからだろう。

だから、人の奥を見つめているはずなのに、何故か偽りを見抜けない。人の感情は分かりすぎるくらいなのに、何を隠しているかは分からない。

ただ隠そうとしている、と分かるだけだ。けれど、こちらは違う。

それは初めて会ったときから分かっていた。最初は、似ていると思った。人の深奥を見つめるその瞳が。次いで全く違うものだと感じた。彼女は決して偽りを許さない。

吐くことも、吐かれることも。

自分の中に疚しいものが何もなければこそ、相手にだってそれを求める……そういう人間だと感じた。

彼女とは違う。姉に負い目を負っていた、あの少女とは違うのだ。とてもよく似ているけれど。その自分が隠しているもの全部を見抜いてしまいそうな瞳は。

「質問？」

「いえ、えっと、ハイ」

少し迷ったように言いあぐねる。そして頷いた。随分とはっきり

しない。いつもなら用件だけ言って帰って来るのに。

「少しお時間よろしいでしょうか。多分、そんなにお時間をとるようなことはないと思います」

そう言いつつ、また迷っているようだ。

終始落ち着かない様子であちこちに視線を彷徨わせる。そして両手を組んだり、止めたり、指を組み合わせたりする。

「ここでどうぞ?」

「ええっと。できれば、入らせてもらえませんか?」

目が泳いだ。人の嘘が許せないということは、自分の嘘も許せないということ。

……隠し事が天才的に下手だということも、彼女と違う。彼女は無意識のうちに一番ふれられたくないことは隠すから。

「何、用件って」

この少女が姉妹バカだということは知っている。と、いうか、結構有名な話だった。

まさか、と思うが、それはあくまで予想に過ぎない。

彼女が口を開いて初めて、事実が変わる。口に出していない今は、まだそれは予想だった。たとえそれが、どんなにありえそうだったとしても。

それしか考えられないとしても。

今は、まだ。

「先生に、お聞きしたいことがあります」

受験ももう終わり、あとは卒業式を迎えるだけ。

自由登校の中、三年生が来ていると非常に目立つ。……志望校に合格し、遊びたい盛りだろう彼女たちが学校（い）に来ることは当然ないと。

次に会うのは、卒業式の日だと思っていた。

「藍華のことなんです」

予想が、事実へと変わった瞬間だった。

「わたしが、とやかく言うのは、多分、間違ってるんだと分かります」

ぎゅっと、こぶしが握られた。

あふれ出る言葉を抑えるように。暴れる感情を押し込めるように。妹を心配する、自らの心を殺すように。

「それでも、わたしは、先生にお聞きしたいことがあるんです」

強い瞳だと思った。いつそ冷たささえ孕んでいる、その瞳に射抜かれる。そらすことを許されなかった。年齢にしてみれば、自分より幾年も遅く生まれてきた……子供といってもいいような少女に。鋭く光る瞳の中の明るい光に、恐れさえ覚えた。

そして、やっぱりほんの少しだけ、この少女は彼女に似ていると思った。

姉妹だからではなく、面差しが似ているからではなく、本質が、その核が、同じだと思った。

「先生、藍華は……先生に惹かれているんでしょうか」

「何で、俺に聞く？」

やっと答えられたのはそれだけで、喘ぐような返事だったと自分でも分かった。

ばれると思った。自分の気持ちが。あのスケッチブックを見てから離れない、ある可能性が。

この少女に見破られると思った。

「先生なら、ご存知かと思いましたが」

「あいつの気持ちなんて、知るわけないだろう」

それは本当だった。もしかしたら、という可能性はある。だけどそれは可能性で、前のような憧れかもしれない。

「お前の彼氏に向けた、憧憬かもしれないだろう？」

「ふざけないでください……っ！」

ふわりと怒りで空気が動いた気がした。

それほど、強く感情が表に出た。しかし空気が僅かに動く程度の静かな怒りだった。じりじりと迫る、触れるものを傷つける。そして自らの体さえも傷つけるそんな怒り。

「確かに、蒼に向けた感情は、憧れだったかもしれません」

「ただどあれは、間違いなくあの子の初恋です。」

「恋と呼べなくても、恋とかけ離れた感情でも、あの子が『そんなのかな』と疑った時点で、ソレは恋です」

「恋じゃないと言い聞かせることが、証でしょう？」

「わざわざ言葉にしないと、納得できないような、そんな感情だったんです」

もし今回の感情が、またそんな感情だったとしたら。

「それも、間違いなく恋だと思いませんか？」

「少なくとも、わたしはそれが恋だと思います。」

「わたしも、何度か『恋じゃない』って言い聞かせました」
それで納得するかどうかは別として、言葉にすると、本当にそんな感じがするんです。

「淡い、色のない感情だと、先生はお思いになってますか？」

「知らないって、言ってるだろう」

揺れる。揺れる。

恋？ 恋じゃない？ それはどこがどう違うの？ その違いって何？

どこからどこまでが恋なの？ どうなったら恋ではないの？ どう思うことが恋なの？

誰が決めるの？ どうやって決めるの？

「先生、恋って何ですか」

淡い笑顔が、優しい声が、儂い問いかけが。

揺さぶって、どうしようもなくなって、心の中をさまよっていたものを形にしていく。心に浮かぶ少女はただ一人で、それでもその感情の正体を未だ掴めずにいる。

「先生、妹は、藍華は」

先生に、惹かれていると、わたしは思っています。思ってるだけで、本当かどうか分からないけど。

「だからって、先生にどうにかしてほしいって言ってるんじゃないんです」

藍華の問題に、首を突っ込むのは間違いですから。今の行動も、間違いですから。

「先生の、気持ちまで知りたいわけじゃないんです」

ただ、わたしは知りたかったんです。

「藍華が、どう思ってるのか」

ただ、それだけを知りたかったんです。

「妹の気持ちくらい、知つとかなきゃ、協力できないですから」

せいぜい、悩んで、迷って、苦労してください。

「わたしは、妹の味方ですから」

ねえ、恋って何？

第二十三話 『疑色質問』（後書き）

始めは数話で終わる予定だったこの話。予想に反して、随分と長くなってしまいました。

そこでプロットから練り直したいと思っております。もちろん、話のあらずじ事態を変えるつもりはありませんが、藍華の学年や選択科目なども視野に入れなければいけなくなったのです。

人物についても、これを機にしっかりと捉えられたら、と思っております。

ということ、以前に増して更新がのろのろ、そして書き直し多数になると思います。

しかし、藍華や先生が大好きですので、完結だけはしたいと思っております。

よろしく願います。

第二十四話 『変色心理』(前書き)

長々と更新なくつてすみません。ちなみに改定作業は全くといっていいほど進んでません。

申し訳ないです。とりあえずこれで、卒業までいってから、改定しなおそうかと。

結末が分かればやりやすそうですし。

夏休みも中盤といつこのごろに春なんて書いてすみません。もう少しお付き合ってください。

第二十四話 『変色心理』

「ねえ」

その声をかけられた。声変わりしたらしいのに、少し高さを感じる声だった。

声をかけてきたのはかつこいい男の子。明らかに、あたしより年下と分かるけど。深い色を湛えている黒い二重の目がこちらを向いていた。見つめられて、目をそらしたくなる。

どこかあの人に似ていると思った。あの人よりずっと小さいのに。あの子のほうが、ずっと冷たい表情を作るのに。この少年を見てはじめて思い浮かんだのはあの子の顔だった。

「何か？」

学年が変わった。可愛い一年生も入ってきた。

……この子も、多分一年生だろうと思う。美術部に入る気があるんだろうか。それにしても、話しかけ方がなれなれしい気がしないでもないけど。先輩になる人間に向かって。

「あんたの絵、面白いね」

その少年はただ一言、そう言って美術室から出て行くこととする。

ぼかん、と口をあけ、あたしは慌てた。なにこの子、二つも年上のあたしに向かって、『あんた』とか。そして『面白い』って。少し、いや、かなり失礼じゃないだろうか。

上手いじゃない、綺麗でもない、『面白い』と、そう言った。いや、悪い気はしないけど。一応気に入ってくれたみたいだから。気に入ってくれたのなら、嬉しいけれど。

絵をほめられるのは、とても嬉しいことなただけ。

「ちよつと、何しに来たの。入部希望者？」

咎めるようなあたしの声を聞き、その子は笑った。笑うと少しだけかわいいかもと、思ってしまう。光を受けて天使の輪が出来た髪が羨ましい。

「よろしく、センパイ」

そう言って、今度こそ出て行つた。不思議な子だと、そのときはそう思っただけだった。そのときは、と限定しておく理由がわかるのは、もう少し先の話だと知らなかった。

桜がそろそろ散ろうかという四月後半。

風はまだ少し寒く、しかし確実に暖かさも含んで藍華の頬を叩く。そんな中、藍華はペンを持ったまま、ぼうと外を眺めていた。

舞う桜の花びらが窓に張り付く姿が美しく、我知らず見とれていった。

最近気付いてしまった……とはいえ、もう二ヶ月以上たっている感情はその形を変えることなく、だがその色だけを強くしていた。

消し去ろうと思えば思うほど、はつきりと心に強く映る。

存外に、やつかない想いを未だ藍華はコントロール出来ずにいた。冷たくて、優しくて、一緒にいると落ち着かないあの人への気持ち、確実な色を持ち始める。

「平田」

「っ……！ はい」

急に呼ばれて、びっくりと体が勝手に反応する。声が出ないことが僅かな救いだった。少し肩が跳ね上がったが、それは驚いたといえは何かかなるだろう。

危うく落としかけたペンをしっかりと握り、平静を装って振り向いた。髪は、変ではないだろうか、菊池の顔を見て、大丈夫だろうかと言うように、最近悩みが多くなっている。

恋する乙女、というやつだろうかと、真紀に話すと『そうかもねえ』と笑いながら返された。これが恋する乙女のことなら、恋する乙女とは以外に面倒なものだと思う。

「入部希望者、今年五人だつてな」

「あ、はい。坂野先生、もうすぐ帰ってらっしゃるってことで、それを聞きつけた子たちが受験してきたみたいですよ」

例の変人画家の先生が帰ってくる。しかも、外国ですごい賞を受賞して。

それを藍華が知ったのはつい最近だった。それを聞きつけた、県内の生徒たちが受験してきたらしいのだ。五人、多分すごい才能の人ばかりなんだろうな、と今から楽しみにしていた。

そんな人が、この教室で絵を描く。自分のすぐ近くで。考えただけでも顔が緩みそうになるのを慌てて堪えた。今から楽しみだ、というより、うずうずと落ち着きがなくなってしまう。

「去年、実際ここに来て描く人は一人もいなかったから、楽しみです」

「だろうな」

どことなく、居心地の悪い、ぎくしゃくとした話し方だった。

それをお互い自覚しつつ、どう反応していいのか分からない二人は、ただまごついていてた。どうやってたら元の関係に戻れるのか、方法も分からず、手探り状態が続いている。

特別、何がどう変わった、と言うのがない分、解決するのに時間がかかりそうだった。

「描かないのか？ 絵」

「ちよつと、今は……」

そして、絵が描けないのも続いていた。

描きたいものが浮かばず、思い描けばいつも同じ人物を浮かべている自分に気がつき愕然とする。描きたい、そう思うことが駄目だと分かっていた。

そして、描いてしまえばこの感情がより一層、鮮やかに胸に灼きつくということは無意識のうちに知っていた。

「描きたいものを、探してます」

描いても、大丈夫な物を探してるんです。

それが何かは分からないけれど。見つかるかどうか、知らない

けど。

「そうか」

藍華はちらりと、と息のように呟いた菊池の横顔を見た。

見た瞬間、ぱつと顔をそらす。夕日に照らされた横顔が、見たこともないほど寂しく映った。孤独な人だと、なんとなく最初に思ったあのときと変わらない印象だった。

その孤独の理由を、あたしは少ししか知らないけれど。

「見つかると、いいな」

「はい」

こうした瞬間、何の前触れもなく、この人が好きなんだと自覚する。

それはもう、予想もしないくらい突然に、なんでもないこの瞬間に。涙が出そうになるくらい、泣きたくなるくらいそう思って、そして絶望するのだ。

叶わないんだと、叶ってしまったてはいけないんだと、そう知って絶望するのだ。この想いは、邪魔なだけなんだと、同じくらい突然思ってしまうのだ。馬鹿馬鹿しいくらい、それは突然に。

残念なことに、藍華を襲うこの感情が現れるのはいつだって、菊池が目の前にいる瞬間なのだ。家ではどんなに思い浮かべても、好きだと言う感情は浮かんでこない。

変わりに、『迷惑だ』という言葉だけが浮かんでくる。そして静かに涙を流すのだ。ほろりと一筋だけ。ぽたりと一滴だけ。

好きだと、そう言えばいいだけのことではない。その一言が、どんな影響を及ぼすかなんて考えたくもない。だから今日も、またその感情にふたをして見えないようにする。

できれば、そのまま消えてしまえと思いながら。

できれば、そのままなくなってしまうと願いながら。

また一つ、涙を零すのだ。

青色……涼しい色。空の色、悲しい色。澄んだ色、嘘がない色。

大好きな、二番目の姉の色。そしてその彼の色。二人の色。少し前までは、涙の色。

桃色……優しい色。花の色、柔らかい色、包んでくれる色。ほんの少し、厳しさも含んでいる色。

大好きな、一番目の姉の色。そして、先生がくれた、アメの色。切なささえ、持っている色。

黄色、緑色、白色、黒色……。世界が色づく。色づいて、目に映って、涙になって、外に出る。なら、この恋の色はいつたい、何色だろうか。何色で、表せるだろうか。

この目に映る世界は色鮮やかで、美しく、そして悲しい。その悲しささえ愛しく、全てを紙の上に閉じ込めたくなる。閉じ込めた瞬間、その世界は変わってしまうけれど。

元の世界のような色鮮やかさは失われてしまうけれど。それでもあたしはその世界を閉じ込めるためにペンを動かす。少しでも近づけど。少しでも覚えておけるようにと願いを込めて。

次の瞬間にはなくなっている世界の色を、慈しむように。その色すべてを、目に焼き付けておけるように。

いつか変わってしまうこの心も、消えてしまいかもしれないこの切なさも。

すべて紙の上に吐き出して、胸の中は空っぽにしたい。そうしたら、いつか懐かしんで紙を眺めることができるだろう。

今は見たくないこの感情も、いつかは眺めることができるようになるだろう。

この切なさは深い群青。

この愛しさは桜色。

この涙は水色。

この痛みは激しい赤色。

この感情の正体は、変幻自在な無色。

あたしの心を映して、幾色を称える。無限の色を、作り出す。

「そうだ。平田」

ぼつり、といきなり菊池が話しかけてきた。

「何ですか」

何気ないように装いつつ、胸の動悸を鎮めるように胸に手を当ててそつと深呼吸した。そうでもしないと、動悸の音が外に漏れ出てしまいそうになる。

「俺、お前の絵がほしい」

突然の、話だった。

「はあ」

言っていることがよく分からず、疑問形で帰す。どういう意味で言っているのか、見当もつかない。このときばかりは気まずさなど吹き飛んでしまった。

「平田が描いた絵がほしい」

「な、んでですか」

自分の絵がほしいと、そう言われたのは初めてで驚いた。小さく、うれしいと思う反面、どういう意図でかと疑ってしまう。多分、この人にしてみれば、何てことない話なのだろう。

「いや、何となくほしいと思って」

お前の色使い好きだし。

「び、美術に興味がない先生がそれを言いますか」

「いいだろう。こういうのは、好みの問題だって、平田が言ったんだから」

そつぽをむいたまま菊池はそう言い、懐から鮮やかな包み紙に包まれたあめをこちらへと放り投げる。

いつも貰っている口止め料だ。最近はタバコをすってないのに、それでも毎日くれるのだ。

「それ、絵の代金」

「あたしの絵はアメ一個分ですか」

からかい気味にそう言いつつ、ドロップの包み紙から桃色のそれを取り出す。コロンと手の中に躍り出るそれを指先でつかみ、口に含んだ。甘すぎる砂糖のような味が口に広がる。

舌の上で、ゆっくりと小さくなっていくのが分かった。

「いつになるか分かりませんよ」

「いいよ」

卒業までなら。

そう言った彼の口調がいつもと違うような気がしたが、知らないふりをした。どうしたんですかと、問うような関係ではないと思いつ出した。

『卒業』という言葉で、あたしは生徒なのだと、当たり前のことを認識した。

「では引き受けます」

どうせ描くのなら、今迄で一番素敵な絵をあなたに。

第二十四話 『変色心理』 (後書き)

まだ最終話までとおいですが(下書きあと十数話)、お付き合いく
ださいませ。

第二十五話 『焦色追跡』 (前書き)

お待たせいたしました。あと十話くらいで、本編完結です。……先が見えない。

第二十五話 『焦色追跡』

「こんにちは」

キャンパスに向かって座り、ぼーっと窓の外を見ていると後ろから声をかけられた。

はっとして慌てて振り向く。

つい最近、ここへ来たあの少年だった。藍華はばっと、席から立ち上がり、口を開く。

「あ、なた……」

「西岡 行成、よろしく。平田先輩」

にこり、と邪気のなさそうな笑顔が向けられた。

あまりに眩しくて、『はあ、こちらこそ』としか返せない。”君、この新入部員？”とこの前聞けなかったことを聞こうと思ったのに。

「え、あたしの、名前……」

藍華がどこで、と聞こうとしたとき、再びドアが開き、もう一人人物が入ってきた。

「平田。こいつ、新入部員な。よろしく」

菊池が男の子を指し示すと、にしおか、と名乗ったその子は藍華にぺこりと一礼した。その動きに従い、真っ黒で艶やかそうな髪がさらりと揺れる。

「えっと。にしおか、くん。平田 藍華です。三年生で、一応部長やっています。よろしく」

そういえば、と藍華は呟いた。

自分以外の人間はみな幽霊部員なので、自分が一応部長をやっているのだった。そういう自覚がないので、部長と名乗るには少々抵抗がある。

「で、坂野先生が顧問で、ここにいる菊池先生が副顧問。用具は適当に使っていいし、相当奇抜なものじゃなかったら、何描いてもい

いよ。

あとは年に数回、何らかのコンクールに出すと、部活動としては認められてるから」

質問は、と振り向くと、またもや素敵な笑顔を向けられる。ぱつと見れば随分幼げな顔をしていると思っただが、よくよく見れば作りが少し中性的なだけだった。

笑顔のよく似合う、しかし多分、無表情であつても人目を引く顔立ちだ。その顔が藍華のほうを見て、口を開く。

「俺、去年のコンクールで先輩の絵を見て、それでここに入学したんで」

そのところ、よろしく。藍華先輩。

「えっ。それってどういう、って、名前で呼んでいいって誰が言ったの?!」

可愛らしい??

藍華は始めに思い浮かんでいた思いを打ち消した。

「え、ダメ?」

可愛いよね、先輩って。

その言葉を聞き、藍華は眩暈を覚えた。

このテンションには覚えがあつた。長女の……朔華の彼氏殿のテンションだ。ありえないほど女慣れしていて、そして自分に自信がある。

自分の言葉で、女の子はみんなイチコロとか考えてるんなら、一発殴つてやる、と心のどこかが笑つた。もちろん、これは智の第一印象であつたりするのだが。

そしてそれを実行したのは藍華ではなく、春華であつたのだが。そつえば、春ねえ、智さん殴つたんだっけ、とぐらぐらする頭で思つ。

現実逃避に思えていけなかつた。

「えっと。お世辞はいいから、とりあえず絵、描いてみたら? 中学生のころ、どこかに出展したりしたかな?」

とりあえず、さらりと聞き流すのが得策だと思った藍華は、話を
変えつつ菊池を見た。

さすがに面を食らったらしく、ついで藍華に同情の視線を送って
くる。藍華はそれもさらりと見なかったように振舞った。

助けてくれなかったのは、どうしてですか、と聞く気にもならな
かった。

この場合、傷つくのは明らかにこちらだと分かっているからだ。
わざわざ分かっていることを、証明する必要はない。

「何度か応募した。見たことない？」西岡 行成』。こつこつ字、
書くんですけど」

そう言つて、置いてある藍華のペンを持つと、机に書き付けた。
柔らかそうな、達筆の字で『西岡 行成』と書かれる。その字に藍
華は見覚えがあった。

と、いうよりも、よく覚えている名前だった。

「『西岡 行成』つて星光中のっ？！あなの。『星の屑』の？！」
「有名なのか？」

藍華の歓声に、菊池が不審そうな顔をした。

藍華は、自分の顔が知らず明るくなつていくのが分かる。字だけ
を見ていたために、今までの名と、この後輩の名が一致していな
かった。

その名を知らないなんて、と思いつつ、藍華は菊池に向かって話
しはじめる。興奮していたのが、自分でも分かった。

「去年の、アレ。何て言つたっけ、すつごく大きなコンクールで審
査員特別賞とつたんですよ！！あたし、最優秀賞より好きだった
んですよ」

「『南が丘 星空の眩き』つていうコンクールですよ。

あの絵は自分でも気に入ってるんです。俺はアレが好きですよ。『
夕暮れは黄色』二人の表情が見えないのに、仲がよさそうで……」

あんな色使いが出来るんなら、どんな絵を描いても楽しいだろう
なあ、と思つて。

その笑顔がまた眩しくて、そして思いもかけず自分の絵が褒められて照れた。藍華は『ありがとう』と慣れない称賛に答えて、キャンパスに再び向かった。

「でも、先輩失格なことに、今現在、何も描けないんだよね」

「どうして？」

「どうしてって、どうしてか分からないけど」

ふうん、と少しだけ興味がなさそうに行成は頷き、次いで藍華のほうを見てにやりと笑った。

「まあ、俺は絵が好きで藍華先輩のいるここへ来たけど、これからは先輩自身も見たいから」

よろしく、っていうよりも、覚悟してて。

どきりとした、なんて、きつと勘違いだろうと思う。その笑顔が随分と魅力的で、びっくりしただけだ。こんな表情を出す人が描きたいなど、本当に久しぶりに思った。

そして心の中で笑う。理由は分かっていた。菊池に、似ているのだ。不敵そうな笑顔とか、人を翻弄させる言葉とか、そして何より接し方が。

西岡くんの方が、少し馴れ馴れしいかなと思いつつながら。

それからだ。

一人でやっていた部活動が、一人でやる部活動でなくなった。大抵の場合、一年生の方は授業するが少ないので、行成に越されている。

よくて同時、いつもは迎えられる。

そんななれない関係が続いた。

「ああー。また」

「こんにちは、先輩」

SHRが終わると同時に走ってきたのに、そこにはもう彼がいた。

既にクロッキー帳を出し、なにやら描き込んでいる。鞆も机に置かれていて、長い間そうしているのが分かった。

「いつ、来たの？」

「今日は五時間目まででしたから、一時間くらい前ですかね」

がくり、と扉を開けた瞬間肩を落とした藍華を見て、行成は小さく笑う。勝ち誇ったような顔は生意気そうで、思わずその頬を横へ思いつきり伸ばしたくなった。

「可愛くない」

「ご勝手に」

しかも口調も可愛くない、と藍華は行成を睨んだ。

「藍華先輩」

「んー??」

自分の鞆をいつもの定位置 前から二番目の一番窓側 へ置

き、藍華は部室からスケッチブックを取り出した。

自分にはクロッキーなどというものは似合わない、と藍華は思う。そもそも早く描くのが嫌なのだ。的確に、素早く、そんなことは時間をかけて描く自分にはできないのだ。

「藍華先輩」

「何」

いつの間にか、名前で呼ぶことも許している。と、いうよりも、注意しても直さないの、放置しているといったほうが正しい。いちいち言うのが面倒になったただけだ。

藍華はスケッチブックのページをめくり、何も描かれていない白い画面を見つめる。

相変わらず、きちんと描くことはできない。しかしスケッチ程度ならできるようになった。描きたいものではなく、目に付いたものを描くように心がけている。

たとえば空。たとえばグラウンドの生徒、窓から見える町の風景、校舎、部室の備品。それから目の端に止まるアメの包み紙。

「先輩はさー。何で絵を描こうと思ったの？」

「お姉ちゃんたちに持ち上げられて、誤解したまま育ったから」
「はあ？」

自分から聞いておいたくせに、と藍華はスケッチブックから顔を上げて行成を見た。

びっくりしたような顔をして、行成は藍華の方を見る。思わず噴出しかけて止めておいた。

「小さい頃に絵を描いて、お姉ちゃん二人にめちゃくちゃ褒められて、『あたしってうまいんだ』って勘違いして、今に至る、と」

なんでもないように言ってから、小さく自嘲気味に笑った。今思えば馬鹿らしいが、それが始まりだった。

「行成くんは？」

「俺？俺は、人の絵を見て、こんな色使えるんなら、描いてみたくなって思ってた描き始めた。」

だから、そうだな。その人は俺の存在意義みたいになってる。描くっていう行為自体、その人への憧れだから」

ちよつとロマンチックじゃない？

そういう目の前の少年を、藍華は眩しそうに見つめた。そんな始まり方が羨ましい。自分はそんなことなかったから。そう思いつつ、再びスケッチブックに目を移す。

そういえば、菊池に絵を描いてほしいと頼まれたな、と思い出した。

思い出すと、口の中が少しだけ甘くなる。

いつももらうアメの味を思い出した。砂糖の塊のような、甘いだけの味。自分を甘やかしてしまいそうになる味だと、いつだったか思った。

どんな絵を描こうか、今はそう思うだけで満足だった。構成も何も考えていない。しかし今は春だし、卒業までまだある。じっくり考えようと自分に言い聞かせた。

どんな色を使おうか。

どんなものを描こうか。
どんな思いを込めようか。

少しでも、この心を混ぜてしまったらばれるだろうか。いらないと、言われてしまうだろうか。

あの人は鋭いから。何でも見通してしまっから。

「その人ね、って 先輩聞いてないでしょ」

「え、あ、ごめん。何か描こうか迷ってた」

嘘を、ついたのかもしれない。絵ではなく、考えていたのはあの人のこと。あの人の心のこと。どうすれば、いいのかということぐるぐると考えていた。答えなど出るはずがないのに。

「先輩って絵のことしか考えてないの？ この前は描けないとかいつてたくせに」

「スランプもどきだったの。今は少しだけ描けるようになった。悪かったね、絵のことしか考えてなくて」

不満げにいうと、行成はにこりと笑う。少しだけ幼く見えて、もしかしたら菊池の学生時代はこんなふうだったのかもしれないと、見れないその時代を思い浮かべた。

「でも、好きだよ。そういう人。一つのことを一生懸命にやってる人は尊敬する」

「そう？ お世辞として受け取っておくから。まあ、嬉しいけど」「嬉しいなら、それだけ言えばいいのに」

「余計なお世話」

少しだけ、軽くなるのだ。彼と話していると。

少しだけ、忘れていられるのだ。自分が誰に恋しているのかということを。自分がどれだけ、無謀なことをしているのかということ。を。

絵を描けるようになったのも、行成くんのおかげだ、と口の中で呟いた。菊池がいなくて、行成しかいないときなら、何かを描ける。息が吐けると言ったほうがいいかもしれない。

緊張もしない。何を描いても笑われない。その絵に何をこめようが、ただ小さく笑っただけだ。

「また考えてるでしょ。絵のこと」

「うん？」

「まあ、絵のことだけじゃないのかもしれないけどね」

笑いを含みつつ言われたその言葉を、いつもどおり聞き流した。

もしかしたら、聞き流してはいけなかったのかもしれないと、後になって思う。そのときになって思い出す。ああ、あのときの言葉は、ここに繋がっていたのかと。

「そろそろ帰れよ、お前ら」

「わ、先生」

「えー、もうですか」

それでも、このときは何も思わず、何も気づかず、仮初のような空間に身を任せていた。息が吐けると、ただそれだけで無邪気に喜んでいた。

第二十六話 『曙色帰路』

「藍華つてさ、好きな人いるの？」

それは唐突な質問だった。

藍華は一瞬その意味することを図り取れずぽかんと口をあけ、それからかつと頬を熱くさせる。しかし藍華はそれを気にせず、行成に食ってかかった。

もちろん、頬は赤いまま。

「なつ、せめて先輩つてつけなさいつ。あとくだらないこと言わない。そんな暇があるなら描く」

いつの間にか後輩から名前前で呼ばれている。

それさえももう、違和感の対象ではなくなっていた。それくらい、毎日会つて、話して、笑っているということ。

……それだけ、あの人のことを考えずにいられるということ。それは楽だけれど、その後のことを考えると、楽だとばかり言っていられない。

考えないのは楽。だけど、その後はその前より菊池のことを考える。今日は来てなかった、明日はどうだろう、その次はどうだろう。そんな、くだらない考えばかり浮かぶ。

「だつてさー。坂野先生が帰ってきたあたりから変だし」

ちようど、菊池がお役ごめんになってここへ来ることが少なくなつたときのことだ。

「そんなことない」

「そうかな」

「そうだよ」

敬語のつかない会話が続き、藍華はため息を吐く。先輩の威厳はどこへやら、同級生とでも話しているような感覚だ。

自分が幼いせいか、相手が無駄に大人びているせいか分からないが、全くもっておかしく感じない。

顔に出ないうちに、と思つてスケッチブックを持って立ち上がる。もうすぐ顧問がここへ来る時間だった。

六時をいくらか過ぎた頃、外はもうとつぷりと日が暮れていて冬が近いことを示していた。曙色ももうちらりとしか見えない。

誤魔化したつもりだった、のに腕をつかまれる。

「思つたこと、言つていい？」

「……どうぞ？」

真剣な瞳に気圧される。拒否を許さない瞳に恐れをなして、腕を引いた。しかし力が強くて引き抜くことはできない。

「藍華は、好きな人、いるよね」

「そんなんっ」

「だから、未だに何も出してないよね、今年。完成作品。俺思っただけど」

藍華の好きな人つて。

「菊池先生？」

「っ……！」

表情が、勝手に変わった。先ほどとは比にならないくらいの紅さが藍華を染め上げる。体の心から何かに犯されたように、赤く、赤く染め上げていく。

誤魔化せばよかったのだ、とやってしまった後で気づく。

それでももう、どうしようもなく、そこから逃げ出したくなつた。ここまで顕著に反応しては、もう何を言つたつて手遅れだと藍華自身分かつていた。

「やっぱり、ね。藍華は先生が好きだから、絵を描かない。違う？他のものを描きたくならないんだ。あの人が、描きたくてたまらない」

でも覚えておいたほうがいい、そう言つて、行成は笑う。

同情したような、慰めるような、愛おしささえ含んだ、そんな笑顔だった。笑つたまま、行成は言葉を紡ぐ。ゆっくりと、はつきりとその言葉を発した。

「あの人は絶対に振り向かない。何より面倒ごとが嫌い、恋愛もしない」

「どうやったってあの人の心は手に入らない。」

「それくらい、分かっているんだろ？ 藍華」

「分かっている」

「ずっと前から。」

「じゃあさ。俺にしとかない？」

まるでなんでもないように提案してきた。慌てて視点をあわすにつこりと笑われる。中性的な顔が、今は何故か『男の子』の顔だと思った。

「俺、藍華に憧れて絵を描き始めて、藍華に会いたくてこの学校に入ってきたんだ」

びくりと肩が震える。

再び手を引つ張るとあっけなく手を離された。藍華はその手を自分の胸へと引き寄せる。掴まれていた手首だけが、異様に熱い気がしていた。

「考えといて。忘れることはできないかもしれないけど、失恋の傷は舐めあえるんじゃない？」

俺は既に藍華に失恋してるんだし。

「変なこと、言わないでよ」

「俺は藍華の絵を見たときから、ずっと藍華のことを考えてたよ」
二年前からずっと。

「よく、考えてよ。藍華。事実、俺といたら、少し忘れてたでしょ」
はつきりと、言われた。核心を突かれた。

一番、言われたくないと思っていたことを、いとも簡単に見破られて、指摘された。自分の甘さを突きつけられて、『あなたの気持ちなんて、こんなもんだろ？』と言われた気がした。

「そんなのっ」

「いいんじゃない、辛いことを忘れたと思うのはごく自然の心理でしょ。誰も責めてないよ」

優しく、人を駄目にするような笑顔。甘やかして、ドロドロにするような笑顔。その笑顔から、逃げ出した。

「後輩からいきなり告白ねえ。やるわね。その藍華と会って、数ヶ月後に呼び捨てし始めた後輩くん」

「笑い事じゃないし。他人事だと思って」

電話向こうで相手が笑う。

国を超えた電話だったが、今回は相手が電話代を持ってくれるらしい。『他に使い道ないから、お小遣い』と笑いながら電話をかけてきた友人の声はいつもどおり凜と響いた。

「他人事なもの」

「真紀」

全くもって同情のかけらも無い声に、不満の声を上げる。

するとまた真紀はからからと笑った。一度気配が遠のいて近づいたので、受話器をどちらかの耳に移したのだと分かる。

「いいじゃない、言わせておけば。百回でも、二百回でも。それで藍華の気持ちが変わるわけでもないし」

「だけど」

「痛いところ突かれたからって、揺れてる？」

笑いを含みつつ、確実に今一番相談したいところを突かれた。

今日はよく核心を突いてくる人間と話す、と空を仰ぎそうになった。藍華は一度ため息を飲み込み、それから会話へと戻る。

「そうじゃないけど。多分、あたし自身が同情してるんだと思う。行成くんに。叶わないのは、あたしも同じで、思い続けているのも、一緒だから」

真紀はふうん、と意味深に相槌を打った。

あの美しい顔が少しだけ歪んでいるのだろうと、簡単に想像がつく。いつだってこちらの想いや、苦しみを感じ取って、それでも決して簡単に答えをくれない。

そういう人だと思う。

「傷を舐めあつて、少しでも救われたいのなら……、菊池先生を少しでも忘れていたいのなら、それもありだと思つわ。

あなたは菊池を忘れられる。あつちは好きな人が手に入る。悪い話じゃないわね」

わざとらしい、突き放し方だった。

「違うよ」

甘えたいという思いは、いつだってある。救われたいと、いつだって望んでいる。

だけどそれは叶ってしまえば多分、凄まじい喪失感に襲われるのだろうとも、また分かっているのだ。

だから諦められない、忘れ続けることなんてできない。藍華は小さく唇をかんだ後、自分に言い聞かせるように言った。

「あたしは、菊池先生が好きなの。だから、それを諦めてまで、救われたいと思わない。楽になりたいとか、思わない」

「そうね。菊池の気持ちはさておき、藍華の気持ちは確認しとかなくちゃね」

それがきくと、指針になるのよ。迷ったとき、そこに帰ればいつだって、行く道はおのずから見えてくるものだ、真紀は笑いながら語った。

何もかも知っているような話し方に少しだけ意趣返ししたくなる。

「真紀の方こそ、気持ちは指針になってるの？」

そつと向こうから苦笑いの含んだ薄笑いが返ってきた。

「私は、そうねえ。指針、になつてるといいわね。亮を想うこの気持ちが、少しでも自分の進む道にあれば、いいね。

でも反対にこうも思つよ。この想いは間違っていて、それに従って行く道を決めてしまった私は、間違つた道に進んでいるんじ

やないかって」

今更、この道を変えようなんて思えないけど。

指針はいつだって心にあるのよ、と笑う声が聞こえた。そしてそれに従って振り返る。少しだけ懐かしい、あの人が立っていた。

「平田、久しぶりだな」

「ですよ。坂野先生帰ってきてから、先生とあまりお会いしませんでした」

普通に会話をして、普通に笑っている。

そこに恋愛感情を挟む余地などないとも言つように。それに少しでもこの距離で話せることを嬉しいと感じる。

藍華は苦笑いを含んだ笑顔を引つ込め、教科書を握る手の力を強くした。教科書の厚さに指の付け根がチリリと焼けるように痛くなる。それが藍華の思いを自制させていた。

「あー、役目なくなつたしな。鍵かけるの坂野先生だろ」

「はい。先生が帰ってこられたおかげで、一年生もよく出てます」
一瞬、脳裏に浮かんだ像を振り切る。今考えるべきなのはそれではないと言いつけた。

「西岡、お前が好きだからなあ」

「あたしの人徳がなせる業ですね」

ふざけたような笑い合いが妙に痛くなった。

先生、『好き』って、それ本当なんです。彼、本当にあたしにそう言つたんですよ、そう言いたくなる気持ち飲み込む。

「いやいや、人徳ある人間が名前、呼び捨てされないだろ。二つも年下に」

「フレンドリーなんですよ」

本音を悟られないように、ひたすら嘘の笑顔で話していた。

このことに、菊池は気づいていないだろうと、嘘の笑顔でまた思う。気付いて欲しいわけではない。それについて、問いただして欲しいわけではない。

何をしてほしいかなんて、自分でも分からない。分からないけど、何かを確実に求めていた。

「平田」

「はい？」

「何かあったか？」

「え……」

泣きたくなつたのは、どうしてか、それさえも分からない。

「何で、ですか？ 何かあったように見えます？」

「いや、ただ、なんつーか。今日の笑顔はいつものとは違うと思つて」

「そうですかー？」

そんな微妙な変化に気付くぐらいなら、あたしの気持ちに気付いてよ。

それで迷惑だって、突き放して。それで先生自身も傷ついて。あたしが泣いた分だけ、先生も悩んで。

そうしたらきつと、あたしは泣いてあなたを嫌えるだろう。もしかしたら、泣いて縋るかもしれないけれど。それでも、今の状態よりはずっといい気がしてならなかった。

気付いて。気付かないで。

突き放して、突き放さないで。

迷惑だって言って 分かったって苦笑いで答えて。

こんなワガママ、どうやったらなくなるの。自分勝手なこの願いは、いったいどこへしまえば消えたように思えるの。

消えないことは分かっている。ならせめて、隠す方法くらい知って

いたい。

もし気付いたら、先生はあたしにどんな顔を見せてくれる？

「いつもどおりですよ。今日も絵、描きますし」

「俺にくれる絵は？」

「何でそんなにほしいんですかー」

「記念に。有名になったら売ろうかと」

「最低だ」

「嘘だつて。大切にする」

ならその絵に精一杯の恋心を込めて。

第二十六話 『曙色帰路』（後書き）

本編、あと六話……。頑張って書いたあとには、もれなく加筆修正が待っています。

しかも半端なく直す予定です。加筆修正というより、むしろ書き直しに近い気がしてきました。

と、いうことで、まだまだとろとろと進んでいきます。

第二十七話 『潤色警告』

「気、変わった？」

「何の？」

「今日も、昨日のように、明日も、今日のように、こんな不毛な会話をするのだろうか。」

「知らないふりをして、気付かぬふりをして。見なかったふりをして、平気なふりをして。馬鹿らしくて、どうしようもない。」

「俺と付き合う？」

「付き合わない」

「振られちゃった、と彼は笑った。その顔の中に、隠しきれないわずかな悲しみが浮かぶ。」

「あ、傷つけてる。そう思うのに、取り繕う言葉が見つからなかった。自分でも、どう言えばいいのかわからない。」

「先生も、こんな気持ちだったのだろうか。」

「自分ではどうしようもない、だけど確かに人を傷つけるこの行為に、嫌気が差してしまったのだろうか。面倒だと、割り切ってしまうくらいに痛い思いをしたのだろうか。」

「藍華が傷つくなんて、見たくないよ」

「あたしは」

「負けるな、怖気づくな、下を向くな。」

「あたしは……っ」

「泣くな、縋るな、弱くなるな。」

「菊池先生が、好き」

「好きだ。好き。どうしても、諦めきれないくらい。どうしようもないくらい。」

「だから？」

「先生が、こつちを……」

「言いかけた言葉を止められた。目の前に大きなキャンバスが出さ

れる。行成くんが見えなくなる。急に不安になって、キャンバスをどかそうと手をかけた。

どうして、止めたりなんかしたの。少しでも口にすれば、この心にたまる想いを吐き出せると思ったのに。

「これ、見て」

行成くんがキャンバスにかけていた白い布を取る。一枚の絵が現われた。

今まで風景しか描かなかった彼が、初めてあたしに見せてくれたのは一人の少女の絵だった。重そうなスケッチブックを抱え、画面のほうを向いて微笑む彼女。

風の吹く中、一人でいる少女は、乱れている髪をもう一方の手でそれを押さえている。

画面の方向に誰がいるのか、と思うほど、その少女は柔らかく笑っていた。どこかにはかみつ、それでも嬉しそうに目を細めるのだ。

その顔は……。よく見る自分の顔。

「初恋の人。藍華だよ」

そっけなく、彼は答えた。見つめられて一步下がる。その瞳はいつも苦手だった。何も恐れない強さがある。

真実を、恐れない人間の瞳だ。そこに何があるかと、受け止める目だ。

「画面の方向に、誰がいると思う？」

分かっている。彼が言いたいことなんて。一步、また少年から離れた。

「先輩、分かる？」

「いつもみたいに、呼ばないんだね」

何かの言い訳のように話を変える。彼はそれに気付きつつも、その話に乗ってきたのだ。

「藍華だって、『先生』っていう記号でしか呼ばないから」

そういう代名詞で呼べば、少しは気持ちを抑えられるのかなって

思って。

「でもダメ。何も変わらない」

そんなの、当たり前だよ。そういたい自分を押さえつける。そんなことで、何か変わるなら、あたしはとっくに『先生』とも呼ばなかっただろう。

「藍華、名前、呼んでよ」

ポツリ、外で雨が降り出した。その雨音は一体、どちらの心を表しているのかひどく激しく、悲しかった。窓に当たるその音が大きくなり、どんな声を出したって外には漏れない気がした。

「行、成くん」

「うん」

彼がこちらへ手を伸ばす。それは今まで感じたものとは少し違う。いつものように、からかうような感じではない。そこに恋愛感情は含まれていないことを感じ、そのまま彼を抱きとめるように手を伸ばす。

しがみつくように、彼が力を入れた。すがり付いてくるような腕を、あたしは振り払えなかった。迷惑だとも、もう思えなくなっている。

ただ、同情と、恐怖と悲しみと……全てが入り混じって真っ黒になつた感情が支配する。

「好きだ」

だけど、その口から出てくるのは、愛を告げる言葉。

「藍華が好きなんだ」

自分でも、どうしてか分からないけど、どうしようもなく、藍華が好きなんだ。切なく、痛々しく、彼はあたしに告げた。あたしは目を逸らさない。それが唯一できることなのだ。

「ありがとう」

「でも、この『好き』が届かないって知ってる」

だから一回だけ。

「弟みたいでもいい、後輩としてでもいい。……同情でもいい。力

ツコ悪いって知ってる。だけどつ。『大切だ』って言って。藍華、お願いだから」

それで諦められるから。藍華の好きな人が振り返らないように、藍かも俺を振り返らないって知ってるから。ちゃんと、自覚だけはしてるんだ。と、彼は笑っていった。

あたしよりずっと大人びた笑顔で、あたしよりずっと、痛々しいだろう笑顔だった。

「お願い」

「行成くん」

からからに渴いた喉が痛い。ここまで想ってくれる人の気持ち痛み。だけど自分は、あの人じゃなきゃダメなんだと、改めて思った。

そしてあの人にもこれから、もしかしたらこんな思いをさせるのかもしれないと思った。

「行成くんは、大切な人だよ」

大好きな人だよ。

「こんなつ」

涙がこぼれて、今度はあたしが行成くんにしがみつく。

痛い、痛い、痛い。何もかもが痛くて、でもどこが痛いのかなんて明白には分からなくて、だからどこをどうすればいいのかも分からない。

ただ抱きしめて、抱きしめられていれば、少しでもそれが緩和できるんじゃないかと思った。これは恋じゃない。だけど、どうしようもなく、痛い気持ちではあった。

「こんなあたしを……きって。好きって言うてくれて、嬉しかった！」

「ただど違うの。同じ大切じゃないの。同じ『好き』じゃないの。」

「痛い。辛い。何度もイヤだって思う。だけど数分経つと、馬鹿みたいに全部忘れてまた好きになっちゃう。どんどんどんどん、止められなくなっちゃうの」

どうにもならないくらい、あの人が好きです。

「どうしてかな」

彼は笑った。静かに、優しく、穏やかにこちらを見て笑って見せた。どうにもならない悲しみなんか忘れてしまおうくらい、にっこりと笑った。

こんな風に笑えれば、先生にも誤魔化しが利くんだろうか、と思っってしまう。

行成くんは涙の跡を拭うようにあたしの頬へ触れ、体を離れた。どうしてこうややこしいのかな、と彼がまた笑う。

「どうして好きなだけなのに」

ただその人が好きで、仕草一つ一つで無闇に動揺して、馬鹿なくらい泣くんだろう。その人のことを考えるだけで、痛くなって無性に声が聞きたくなって、目でその人を探すんだろう。

「馬鹿らしいな。こんな感情」

なくなつて、しまえばいいのに。

「そうだね」

消えたら、この涙は何に変わるのだろう。もしかしたら、行成くんが描いてくれたような、はにかむような笑顔に変わるだろうか。自分でも驚くくらい優しい笑顔になるんだろうか。

「藍華だつて、そのうち泣くんだから」

「うん」

覚悟はできてる、なんて大人な台詞は言えない。きつととても泣くだろう。人目もはばからずに涙を流して、声を上げるだろう。耐えられなくなつて、友人に泣きつくかもしれない。

「振り向いて、もらえなくてもいいんだよ」

うん、うん、そうだね。そうやって、彼は相槌を打つ。彼の感情もそういう類だった。叶えばいい。だけど、叶わないことは十分知ってるから、せめて自分の決心がつくまで想い続けたい。

「ただあと、数ヶ月好きでいたい」

せめて、卒業まで。それまでは。

「先生がこっちを見なくても、面倒だって思っても、せめてしつかり見ていようと思うよ」

それしかできないから。そう言ってしまうえば簡単で、自己満足でしかないんだけど。先生にしてみれば、いい迷惑以外の何物でもないんだけど。

「この気持ちにだけは、嘘をつかないように。揺るがないようにすることは、あたしにもできるから。あと数ヶ月、この痛みに耐えられるくらい、できる気がするから」

「そっか」

なら、大丈夫だな。

「大丈夫だよ」

「じゃあ、帰る。この絵、気に入ってるから次のコンクールに出すんだ。いい線行くと思わない？」

行成くんはなんでもないように言って、キャンバスへ白い布をかける。そしてもとあったのだろう位置へ戻し、またこちらを向いた。ゆっくりと近づいて、あたしの頭を一度、二度軽く叩いた。

「慰めるくらい、してあげるけど？ 後輩として」

「すっごい、泣くかもね」

笑って、そして別れた。美術室に一人、取り残された。これ以上泣かない、と唇を引き結ぶ。そのとき後ろで扉が開く。行成くんが帰ってきたのかと振り向いた。

そして扉から入ってきた人と目が合う。くるりと、その人はこの教室の鍵を指で回してこちらを見た。鋭い瞳はそのままに、どこか楽しむような口元が目に入る。

「せん、せい」

「辛気臭い顔してんな、平田」

ああ、この人には、多分わかってるんだな。だからこんなにわざとらしく、こちらへ話しかけるのだ。最近少し気遣うような話しかけたかだったのに。バレバレだよ、と小さく口の中でもらした。

「余計なお世話です。いつもどおりですー」

「そうか？」

「そうですねー」

でも少しだけ軽くなった気がする。でも少しだけ、重くなった気がする。それはどうしようもないことだけど。もう半分、諦めていることだけだ。

「絵、描けたか？」

「まだまだです。まだ下書き段階ですよ」

少し、あれから少し、考えた。この人に渡す、絵の内容を。何を描いたら、この人は喜んでくれるんだろう、と。だけど結局そんなことは思いつかなくて、鉛筆を持ったまま考え込んでしまった。

「何かいて欲しいんですか？ 大体」

「何でも」

「何でもじゃ、分かりません！」

そして一つだけ、案を思い出した。自分にしては随分と性格の悪い案だと思いつつ、現在その内容で下書きを進めていた。どうせこの人に聞いたって、答えは『何でも』に決まっているんだ。

「お前の絵が欲しいんだから、内容はいいんだよ。お前が書くんだから、何かしら意味はあるんだろうし。そういうことは、素人が口出しするもんじゃないだろう？」

「そんな、ことは」

こんな信用している人上げる絵。なににあたしは、一番残酷な方法でこの気持ちを伝えようとしている。それが分かったが、今更止めようなどとも思えなかった。

先生に渡す絵。それは先生自身を描いた絵。

昔の、恋とも憧れとも、つかぬ感情にがんじがらめにされて動けぬ彼を。

いつまでも、そうやって自分の中に閉じこもっている彼を。恋は

面倒だと、生徒なんて関係ないと割り切ってしまったっている彼を。

「楽しみにしててください」

傷つけることを許して。だけど、それには決して恨みなんてこもつてないから。ただこの気持ちをも、ありつただけの恋を、その絵に写し取るだけだから。

あなたが、大好きです。それを、伝えたいだけだから。卑怯で、幼い恋しかできないあたしを許してください。

第二十七話 『潤色警告』（後書き）

もう、長々とすみません。あとグダグダで申し訳ない。今、一話目から書き直す準備をしておりますので、もう少しお待ちください。

残りあと五話になってきました。

あと五話でこんな悲恋チックなモノがはたして、ハッピーエンドで終わるのか。……私が知りたいです。

でも、先生目線をおんまり書いてないので、先生がどこら辺で藍華を見る目が変わるのか分かりませんね。

書き直しを行う際、その辺も考慮に入れようと思っておりますので、もしよかったら『何話目、先生どう思ってたのー』と聞いていただくと嬉しいです。

あと数ヶ月（もう決定）お付き合いください。

第二十八話 『心配色お守り』（前書き）

ちょっと不安を煽ってしまう内容かもしれないので、センター前の方は回れ右。センター終わってから見てください。……とか言いつつ、書いてるとちょっと胃が痛くなる学年のいつきです。

第二十八話 『心配色お守り』

「お姉ちゃん、どうしよう。明日だよ、明日」

「知ってるわよ。明日でしょ。センター」

金曜日。

怖くて怖くてたまらない。なのに机に向かっていても、何一つ頭に入ってこない。もうすぐなのに、明日なのに。勉強しなくちゃいけないのに。どうしよう、何もできなくなりそうで怖くなる。

「どうしよう……」

「どうもしなくてよろしい。自分のできることをしなさい。大丈夫よ。まあ ちよっと、いや、かなり疲れるけど」

姉がげっそりとした顔をした。秀才で通っていた姉にそこまで言わせるセンター。

長いのは知ってるし、模試とかでもやってるけど、やっぱり違うものなのだろうか、本番。どうしよう、いきなり問題分からなくなったら。

特に化学！！ あたしの行きたい大学は理科二教科受けなければいけないのだ。

「失敗したらどうしようー」

「すぐに菊池先生に連絡して、志望校変更、かな。うち、浪人させてあげられるほど、裕福じゃないし？」

「まあまあ、春ちゃん。藍ちゃんを脅さなくてもいいでしょ。春ちゃん、大丈夫だよー。お姉ちゃんたちが一緒に行つてあげる」

春ねえの言葉が妙に真剣だったので、思わず顔から血の気が引く。そのあたしの顔を見て、朔ねえが慌てて間に割つて入った。隣で『妹脅すなよ』と？さんの声も入ってくる。

「どつちにしろ、やらなきゃいけないんだから。勉強できないくらい緊張してるんなら、散歩してきなさい。神社、行つてくれれば？気分転換にはなるし、合格祈願できるし、ちよつどいいでしょう。」

「時間くらい歩いてきなさいよ。ただし、風邪引いたら元も子もないんだから、マスクして、暖かくしなさい。カイロももって」

「ときばきと用意してくれる姉は本当に真ん中っ子なのだろうか。長女に見えて仕方がない。むしろお母さんの域だと思う。『私も』とパタパタその後ろを付いていく長女を見ればなおさらだ。」

「?さん」

「ん?」

「緊張、しました? 去年」

「恐る恐る、聞いてみる。経験者がたくさんいるのだ。聞いてみる価値はあるだろう。」

「あー」

「?さんが、頭に手をやりながら、こちらを見てにこりと笑った。さわやかだが、何かを誤魔化そうとしているのが丸分かりだ。」

「よく覚えてない」

「どうしてですか」

「追い討ちをかけるように聞くと、?さんはまた照れたような笑顔を見せる。確かに可愛いが、こちらは真剣なのだ。」

「春華と、喧嘩したまんま受けたから、実はそれどころじゃなかった」

「ノロケなら他でやってもらえませんか。あたし、真剣なんですけど」

「無理やり聞いた自分を恨む。むしろ勘付けなかった自分の鈍感さに腹が立った。」

「この人たちはこういう人だった。そういえば去年、真っ青な顔をした?さんと妙にすっきりした顔をした姉がいたことを思い出す。」

「まあ、いろんな意味で疲れたよ」

「姉と喧嘩して試験なんてどうでもよくなっただって、素直に言ったださってもかまいませんよ。それで有名な学校に行っちゃっ?さなんだって、あたし知ってるし」

「少し、意地悪な言い方をしてしまったが、こんな頭のあたしと違

い、姉もこの人も優秀なのだ。それが恨めしくなって、ふいつとそばを向いてしまう。

それに気付き、？さんは慌てたように春ねえからマフラーを受け取った。

「藍華ちゃん。風邪引かないように、気をつけて」

ふわっと首に巻かれる。オレンジ色の少し派手めなマフラーに顔をうずめた。

少しだけ、心が高鳴ったのは事実だ。だけど明らかにあの人に感じるものとは違った。ああ、これはもう恋ではないんだと思うと、素直に『ありがと』『と？さんに言えた。』

「いつてきます」

「「「いつてらっしゃい」「」」

この空間が気持ちいい。この空気が肌になじむ。

だから無理をして恋とか、愛とか言わなくてもいい気がする。別に、先生のことだって諦めてもいいと、一瞬だけ弱い自分が思った。ふられても、自分には家族がいるんだ。保険をかけるような考えに嫌気が差しつつ、姉たちはきつと何も言わずに話を聞いてくれるだろうと思った。

まあ、春ねえ限定で先生への報復が恐ろしいが。

「長い……」

階段を上りつつ、そう思った。

初詣ももうとくに過ぎた今日、ここにいるのはあただけ。明日センターだから、あたしのような人がいるのではないだろうかと思っていたのに、期待外れだ。まあ、多くいても人に酔うだけだからいいんだけど。

近所の小さい神社、初詣に訪れる人もそんなに多くはないだろ

う。少し遠くに大きくて、有名な神社があるから、初詣にはそちらへいく人が多いのだ。

もちろん、うちも例に漏れず、先々週そっちへ行つた。

「こんなに小さいのに、ちゃんとお守りとかあるんだよね」

絵馬やおみくじがたくさん目に入る。

鈴から垂れ下がっている紐を左右に揺らすと、重い音がガラガラと鳴った。思いつきり振らないと、なかなか音が出ず結局先にこちらが音をあげてそれを離れた。

それからお賽銭を入れて……二十円入れておいた。

去年は十円を入れて、姉たちから『遠縁（十円）になつたらどうするの?!』と言われてしまったからだ。意外だが、姉たちはそういうことに詳しい。

それから二礼してから手を合わせる。右を少しずらしてから打つなんて、去年初めて知つた。それから『とりあえずいい結果が出ますように』と神様からしたら、あやふやなことこの上ない願いを心の中で呟き、最後にまた一礼。

それから慌てて思い出し『平田 藍華です』と名前を付け足した。名前を言つと、願いが聞きとげられやすくなるらしい。去年姉が言っていた。（案外日本の神様つて人間っぽいな、と思つたのは秘密だ）

しばらくそうしてからやっと顔を上げる。冷たい空気を肺一杯に吸い込むと、胸が痛んだが気にせず深呼吸を繰り返す。ちよつとだけ落ち着いた気がして帰ろうと振り返つた。

「あつ」

声が重なるのと同時に、ああ、半年くらい前におんなじことをしたと思ひ出す。

あのときも互いに驚いたように見つめあつたのだ。相手は煙草を吸っている現場を見つげられて。あたしは、教師の立場にある人が煙草を吸っている現場を見て。

お互い『まずい』と思つたのは事実だろう。

まさかこんな想いを抱えるようになるうとは、あのとときのあたしは想像もしていなかったに違いない。いや、これから一年、関係が続くとも思っていなかった。

「菊池先生」

「平田……」

互いの名を呼ぶが、こちらの声は存外に小さかった。

きゅうつと喉が絞まったように声が出ない。苦しくなつて、賽銭箱に手を付いた。それに比べ先生はただ単純に驚いているようだ。夕方の冷たい風にも負けない声はつきりと響いた。

「どうした？」

「先生こそ、こんな人気のない神社に何のようですか」

神様、怒らないでください。これは売り言葉に買い言葉というやつです。

そう言い訳しつつ、こちらから近づこうとは思わない。ただ逃げ出すことも叶わず、その場に貼り付けられたように足が動かなかつた。

「俺は、生徒たちの成功を祈ってお守りを買いに」

「初詣、行くの面倒だから？」

「まあ、人ごみが嫌いだから」

言い訳のようにそういつて、くるりとお守りについてある紐に指をとおり一回転させた。

どことなく信用してなさそうなので、飾りだろうと思う。それでも、生徒のためにそういうことをする彼は少し珍しく、『先生』だと思わせる。

「先生でも、こういうことをするんですね」

「一応、『先生』だからな」

苦笑いしつつそういう彼は、本当に本物の『先生』だ。自分とは違うものだと再度確認する。今更確認したつて、何が変わるというわけでもないのに、そう思いつつ手を握った。

「平田は？」

「あたしは……」

一步、足を踏み出す。が、思いの外緊張していたせいか、夕方で足元がはつきりしなかったせいか、つるりと足が滑る。そしてそのままその場へどすんと転がった。びっくりしすぎて声も出ない。

「平田っ?!」

先生の声が響き、やっと自分が転んだだと分かった。肘とお尻が痛い。強かに打ったらしい。それよりも気になるのは。

「お前、大丈夫か。その、受験生が」

「転んだ、滑った、落ちた……。明日センターなのに」

あたしはもともと信心深い人間ではない。かと言って、占いその他もろもろを全く信じないわけではないのだ。むしろ『そうかも』と知らず知らずのうちに思ってしまう人間だ。

つまり、今回のも信じているわけで。

「しっ。失敗したらどうしよう……」

座り込んだままそう漏らす。

あたしらしくないと思いつつ、やはり不安に押しつぶされそうになった。こんなこと迷信だと、いつものあたしならわけもなく言い切れるだろうに、今回に限ってそんな言葉は口から出てこなかった。

「お前も、信じるんだな。そういうの」

「だっ、て。怖いじゃないですか!」

すっとな手を差し出される。先生の顔を見つめると、早く手を取れ、と顎を少し上げた。

大人しく手を取ると、危なげもなく引つ張りあげられる。腰を抜かすという暴挙はなく、ほっと息をついた。

「大丈夫だって。と、言っても安心しないんだよなあ」

「当たり前です。人生決まっちゃいそうで怖いです」

先生が笑う。そして何かを思い出したように、自分の持っているお守りを差し出した。

「やろうか?」

「いいです。初詣のとき、買ったから」

違う神様のところのお守りを持つと、喧嘩してしまうらしい。ご利益がなくなつては大変だと、鞆につけられていたお守りを見せた。お姉ちゃん二人が選んでくれた、真っ白くて小さなお守り。花が刺繍されていて、可愛らしかった。

「あー。そうか。なら、こっちなだな」

先生がポケットを探る。よくよく見るとまだスーツだった。

いつも身につけているはずの白衣がないから、てつきり別の服だと思つていた。そしてそのポケットから手を出す。握つたままこちらに差し出すので、両手を上向きに出した。

ぼん、といつもどおりカラフルな包み紙が手に乗る。

「お守り」

「え？」

いつもと何も変わらない、何の変哲もないただのアメ。

それを差し出して、彼はにやりと笑つた。いつもどおりの『菊池先生』の笑顔でこちらを向く。急にここは学校ではなく、二人つきりだという事実を思い出した。

思い出さなくてもいい事実を思い出し、少しだけ決まりが悪くなる。それでも、散歩に出かけてよかったと思つてしまうのも事実なのだ。まったく安上がりで、現金なたちだと思つた。

「ご利益あるぞ」

「何ですか」

きゅつとアメを握る。融けてしまふんじゃないかと思つくらい、きゅつとぎゅつと強く握る。

「俺は優秀だったから」

「理由になつてません」

それでも、笑えるのだ。彼のおかげで。少しだけ、不安から解放されてしまふのだ。馬鹿なくらい。

「大丈夫？ 藍華」

「藍ちゃん、大丈夫だよ。頑張ってるんだから、大丈夫」

真つ青な二人の姉を目の前に、やはり自分も緊張しているんだと自覚する。

それでも鞆につけられたお守りを握り、にっこりと笑って見せた。昨日、先生にしたように頑張って笑顔を作る。

随分不恰好な出来だとは思うけど、自分にできるのはこれくらいしかないのだ。

「行って来ます」

「頑張つて！」

「藍ちゃん、ファイト!!!」

そしてお守りから手を離し、ポケットに手を入れる。

誰にも分からないように、その中にあるものを握った。頼りたくはない。彼に頼ってしまったらまた、あの重く苦しい想いに捕らわれてしまいそうになるから。

「食べちゃお」

ぴりつと少しだけ融けてしまって、包み紙から離れにくいアメをどうにか剥がし、口に放り込む。ゆっくり口の中で液体になっていくそれはいつもどおり甘くて、小さく笑ってしまった。

「大丈夫」

昨日、帰り際言われた言葉を思い出した。ひどくまじめに、彼はこちらを向いていったのだ。

『平田なら、大丈夫だ』と。優しく笑って、それからちょっとだけ眉を寄せて。でもこっちはその意味を図りかねた。

「あたしは、大丈夫」

「だけど最後に、頼らせて。」

やっぱり、不安に押しつぶされそうになるから。せめてこのアメが溶けるまで、あなたとの記憶に頼らせてください。

そうすれば、弱くなりそうで、実はほんの少しだけ強くなれそう

な気がするから。

少なくとも化学は、あなたの声を思い出して勇気が出るから。だからどうか、苦しいけど、辛いけど、あなたの声と黒板を滑っていて、実は優しい指先で描かれた式たちを思い出させて。

苦くなっていく口の中に涙が出そうになったが、両手を頬に打ち付けて正気に戻した。

「よし」

がりつとアメを噛んで、嚥下する。口の中に味が少し残ったが、気にしないまま歩き出す。空を見上げて、そこでようやく今日がよく晴れている日だと知った。

第二十八話 『心配色お守り』（後書き）

あと、四話……??

これ、本当にそんなもんで完結しそうですか。少し不安になってきた。

第二十九話 『群青色煙』（前書き）

このシリーズも後数話です（修正待ちですが）。

……キャンバスとイーゼルの存在を始めて知ったきっかけ。キャンバスにサイズがあるなんて、これを書くまで知りませんでした。

第二十九話 『群青色煙』

描くのは大好きな人。

いつの間にか好きになっただけで、今ではもう忘れられなくなっている人。ずるいな、と思うくらいときどき優しくなっただけ、あきらめようと思つたたびに無理だと思ひ知らされる。

絶対に手が届かなくて、それを自覚しているのに手を伸ばすことをあきらめられない。部屋にあるキャンバスをさらりと撫でる。本格的に受験勉強を始めようと思ひに決める前に描いたものだ。

正確に言えば、これを描きあげてから、勉強しようと思ひに決めた。

せめて自分の中で決着をつけてから取り掛かろうと思ひ決めていたのだ。それでもどうしてだろう、あれだけ決着をつけたつもりなのに、今でも思ひ出せば心のどこかがうずく。

「明日はもう、卒業式だよ」

絵に問いかけてみても、何も返つてはこない。

絵の中の先生はこちらを向いてはくれない。微動だにもせずただひたすら、自分が描いたままの格好でいるだけだ。

そつと指でなぞつても、その絵からは何も感じれなかった。

恋心なんて籠つていないように見えてしまう。描いているときは、あれだけこめていたのに。どうか届きますようにと、どうか一欠片でもいいから伝わりますようにと。

それなのに……。

「もしかしたら、初めからないのかもしれない」

こんなに心狂わせる想いも、泣きたくなるくらいいたい気持ちも、何もかも初めから自分は持ち合わせていなかったのかもしれない。

それほど絵からはなにも伝わらないように見えた。絵にこめてしまえば、そこまで薄くなつてしまった。

絵へ指を滑らせる。ずいぶん前に筆を滑らせたそれへ、今度は自

分自身の指を当てる。筆の後をなぞるように動かせば、あの頃と何も変わらずにいる自分がいた。

「せ、ん」

ぼろぼろと涙があふれた。

あれほど安定していた心があっけなく崩れていく。どれほど強がっても、やはり自分は弱くて、どうしようもない人間なんだ。考えただけでこんなに涙が出るんだから。

「せつ、せい」

涙があふれて、どうしようもなくなって、絵に涙がつかないように絵から離れた。

ベッドに倒れこみ、涙を止めようとして息を止めた。それでも次から次へと出てくる涙と嗚咽にたまらなくなり、ベッドに顔を押し付ける。

「明日はっ」

明日はもう、卒業式なのに。

卒業してしまったら、もう二人の間には何の関係もなくなってしまふのに。ただの他人になってしまふのに。

「あきらめ、られる……？」

涙を流しながら、それでも絵のほうへ視線を向けつつ問いかける。

あの人が纏うのは、タバコの少しだけ煙たい匂い。

あたしには似合わない、大人びた匂い。初めは絵が痛むし、健康に悪いしで大嫌いな臭いだった。その原因を作る先生も、少しだけ苦手だった。

なのにいつの間にか、少しでも香ると安心した。近くに来ればすぐ分かれると、そう気づいたときから少しずつ好きになっていった。

わずかに香るだけでときりとして、想いを自覚させられて、離し

てくれない匂いはあの人がこちらを見ているような気分させられる。

今では少しだけ好きだ。あの人がそばにいる気がする。

そう思いつつ手を伸ばした。絵のほうへ、届かないと知っていながら手を伸ばす。

目を閉じれば、描いたときのことが昨日のように思い出すことができる。まだ少し暑さを含んだ、それでも秋の気配を感じさせる季節だった。

あの人に似合う色はなんだろう。

そんなことを考えながら下書きをしていた。いつもみたいに手は勝手に動いてくれないから、何かを確かめるように慎重にペンを滑らせた。

初めて出会った化学準備室の様子を脳裏に思い描き、一つ一つ画面においていく。

あの人自身を描くとき、手が震えてしまったことはあの人には絶対に話せない。

髪を描けば、体育祭で走っていたことを思い出す。白衣を描いていけば、あのポケットから出てくるあめを思い出す。

手を描けば、授業中にチョークを持ったときや、ときどき頭に触れられた感触を思い出す。

何をしていても思い出してしまって、『自分はなんて溺れているんだろう』と思ったのだ。

自分は彼に思い出されるようなことを何一つしていないのに、自分は絵を描いてさえいても、彼のことを思い出す。

あの人に似合う色は、黒色。

秘密の色、触れてはいけない先生の色、彼の裏の気持ちの色、深い深い彼の本音の色。

青色。

外側の顔の色。さわやかな笑顔の色。体育祭で見せた、運動が大好きだという笑顔。クールで誰にも惑わされない色。

濃い紫　竜胆の色。

あのにやりとした、何かをたくらんでいるような顔。ときどき見せる、大人の笑顔。あたしを捕まえて離さない、彼の魅力。

どれも落ち着いた色合いを画面に置いたのだ。彼を思い出して選べば、必然的にそういう色ばかりになってしまった。深い、さわやかな青色には程遠い群青色を彼の周りに置いた。

群青の色がタバコの煙を混ざり合って、彼の周りをたゆう。あの人を捕まえて離さない、思い出の色。

「ねえ、そろそろ」

そろそろ離してくれませんか？

「あなたのせいで、先生はあたし自身を見てくれないんですよ」

あたしを見ているようで、いつもいつも先生は傷つけてしまったあなたを見ているんですよ。

まるで罪滅ぼしのように、ときどきとても優しくなるんですよ。とても、つらいんです。代わりにさせられると。

せめてあの人、一時でもいいからその思い出を忘れてしまえばいいのに。

そうすれば、もしかしたら、こちらを見てくれるかもしれない。そんな願いを込めて、あの人足元へ飴玉を降らせた。

あの人、一歩を踏み出すことを邪魔しつつ、それでも思い出から逃げてほしくて一面に飴をおいた。甘い色、優しい色、少しだけ切なくて、それでもあきらめたくない色。

これはあたしとの思い出の色　桃色。

「藍華ー。あんた午後から卒業式の練習でしょ？ そろそろ出ないでいいのー？」

階段下から春ねえの音が聞こえて慌てて時計を見る。そういえば制服に着替えたから、こんなことを考えてしまったのだ。そう言い訳しつつ、キャンバスを持って立ち上がった。

いつもより少しだけ小さめなのにして助かった。

「今から行くところー」

「早くしなさい」

どたどたと慌しく階段を降り、ダイニングルームへ続く扉を開けてそこから顔をのぞかせた。

「春ねえ、と？さん」

「早くしなさい。遅れたらどうするの？」

「卒業式に寝坊しかけた俺らが言っても、説得力ないだろうなあ」
姉とその彼氏がマグカップを持ちつつこちらを向いた。

「？さんの発言を聞き、姉は眉を吊り上げるが、？さんはあくまで余裕の表情を崩すことはない。そんな仲睦まじい二人を見ているとうらやましくなった。

「？さん」

「ん？ 藍華ちゃんが俺に用事なんて、珍しいな」

「どうしたの？ 藍華」

ここで覚悟を決められたら、あたしはあの人をあきらめる第一歩を踏み出せるかもしれない。

「あのね」

それでも、こういうことがいいことなのか悪いことなのか分からず躊躇する。気分を害してしまわないだろうか。

「あたしの、初恋は、？さんだから！！」

「？さんの驚いた顔が目に入る。ついで姉に視線を向けると、こちらにも驚いたような顔をしていた。

「な、どうした？ 急に」

「びっくりした……」

二人が同時に口に出すので、小さく笑いが出た。それから言い訳のように口を開く。

「初恋はかなわないから、願掛けみたいな」

それでも望みを捨てられない自分があるんだ。もしかしたら、と思ってしまう自分があるんだ。

「あ、そう」

「何言われるのかと思ってびっくりしたよ」

「うっん、勝手に言いたかっただけだから。言ったらすっきりすると思って」

そういうと、姉が笑って席を立った。

そしてこちらへ向かってきて、ぎゅっとあたしを抱きしめる。まるで何かを分け与えようとするかのような抱擁に、油断していた自分は涙が出そうになった。

「？を初恋にして、あんたは誰を手に入れたいのよっ」

それでも姉に比べたらまだましで、姉はすでに泣いていた。

あたしよりちょっとだけ小さいその体を抱きしめ返して、笑う。

大丈夫だよというには、信用が少し足りないから。

「あたしの諦めが悪いだけだよ」

姉がこちらを向いて、それからくつと目に力を入れた。

「明日、わたしも、朔華ちゃんも一緒だからね！ 自分が思うとおりにやるんだよ」

「思うとおりにって言ったって……」

「最終的に、それがいいかどうかなんて、十年後くらいに分かるんだから」

姉の言っていることがいまいち分からなかったが、とりあえず頷いておく。そうすると姉は満足したように『よし』といい、あたしの背中を押して玄関までついてきた。

「？さんっ。混乱させてたらごめんなさい」

最後にこれだけは言わなくてはいけないと思い、後ろを向いて言

った。

「別にいいよ。ちょっと照れたけど」

「そうよねー。わたしより可愛くって性格もよくなって、女の子らしい藍華に告白されたほうが、気分いいわよねー」

姉の言葉に『からかうなよ』と返す？さんを見ても、もう何も思わなかった。

ただただ、二人がそのまま幸せであればいいと思う。二人が出会って、離れて、再会して……。それをすべて『幸せ』と呼ぶにはまだ早いと知っているけれど。

「あだし、ずーっと二人が大好きだよ」

「ありがとう」

姉が本当にうれしそうに笑うから、？さんもやわらかくこちらに微笑むから、ほんの少しだけ気分が軽くなって、玄関から出た。

まだ三月に入ったばかり。ようやく暖かくなり始めたけれど、それでもまだまだ上着を着ようか迷ってしまうくらい寒い。

そんな時期だけど、昼間近くなので暖かいので、元気よく外へ出た。太陽がまぶしくて目を細める。

世界はこんなに色づいて、綺麗で、いとおいしい。

恋をすれば世界は変わるといっけれど、それは案外本当なのかもしれない。

前も十分色鮮やかだった世界が、恋をしてより一層艶が出た。自分の見ている世界が特別綺麗だと思ったことはないが、それでも綺麗だと思う。

誰もが、綺麗になったと感じると思った。

『お前の見る世界は、多分、俺が見てる世界より綺麗なんだろうな』

そう言われたとき、心の底から嬉しかったと、あなたは知っていますか？

第二十九話 『群青色煙』（後書き）

ちよつと文章少な目です。

ただ、次話⇨卒業式の文章は長くなります。完結に見せかけて、続
くのであと二、三話お付き合いくださいます。

第三十話 『惜別色握手』（前書き）

これで完結にしてもいいかな、と思っていたのですが、あまりにもあやふやなので付け足すことにしました。

あと二話?? ほどお付き合いください。
ちょっと長いです。

第三十話 『惜別色握手』

「南が丘高校の全過程を終了する者」

少し長い祝辞も、在校生からの送辞もそして答辞も、終わってしまえばあっという間。

明日からはここにいないんだ、とうすぼんやりとした自覚が、じわじわと胸を占め始める。自由登校が始まって、学校にこない日が増えても、ここが自分の学校だと疑うことは何一つなかったのに。

三年間過ごしたここから、居場所がなくなるのだと、そういう実感がわいてくる。

一斉に立つ練習を昨日して、そのとおりに流れをなぞる。動き自体は昨日と全く変わることはないのに、揺れるはずもない心が揺れて、滲むはずもない視界が、自分らしくもなく揺らいだ。

昨日、決意をしてから美術室に絵を置いたのに。

『泣かない』と。卒業式が終わるまで、家に帰るまで、絶対に泣かないとそう決めたのに。何があっても、決して泣かない、と。

「平田 藍華」

「はい」

ここでは名前を呼ばれ、立つだけ。卒業証書は教室で渡される。今自分の名を呼んだ、あの人から。

「……三年間培ってきたものはもちろん大切だが、もっとたくさん
のことを経験してほしいと思う。教師っぽいことを言ったんで、今
から卒業証書渡すぞ」

「先生、軽っ!!!」

生徒の突っ込みも虚しく、一番最初の生徒が呼ばれた。つくづく

暗い空気がいやな人なんだと思う。本人にその自覚はないのかもしれないけれど。

「池田 佳奈美」

「はい」

友人が席を立つ。もう涙で顔がぐしゃぐしゃだった。

そんな顔でも彼氏にしてみれば可愛いんだろうな、と僻みにも似た感想を持つ。事実、斜め前の席のその彼氏は、頬を緩ませてその様子を見ていた。

「せつ、せんせー」

「おまつ。……俺まだ何も言っていないし」

「だ、ってー」

あせる彼に笑いが漏れる。

「あー、はいはい。落ち着け。この三年間、よく頑張った。人に優しい池田が、これからもそつであることを祈るよ。卒業、おめでとう。これからも頑張つていけよ？」

そつやって、皆に言つもの？

『卒業したこと』が嬉しいと？

「次、上野 幹」

「はい」

あたしが呼ばれるまで、まだ時間がある。それまでに、心を決めなければいけない。あの絵を本当に彼に見せるべきか、否か。

「平田 藍華」

「は、い」

緊張した声が、教室全体の空気を揺らした。カタン、と立ったせいで揺れたイスの音が、やけに大きく響いたように感じる。

教卓までの距離がとても長く感じて、どうしようもなく心細くな

った。

「三年間、嫌いな理科をよく頑張った」

できずに落ち込んで、諦めなかった平田が、何事も諦めずにこれからもやっていくと信じてる。

「諦めることは確かに楽だが、そうしない平田を俺は尊敬してる。絵も、またどこかで見てみたいから、描き続けてほしい」

頑張れ。

そんなことを言われたら、これからやることを戸惑いますよ、と口の中で呟く。それでも本人に言うことはできずに、差し出された右手を小さく握った。

この右手が好きでした、という気持ちを込めて、小さく力を入れて握り締める。

チヨークを持って、難解な化学式を書くとき。美術室で小テストの採点をするとき。もうあたしの前ではほとんどないけれど、煙草を吸うとき。

補習のとき、シャーペンを握りながら教えてもらったのが、もう随分と昔のことのように思えて仕方がない。頭をクシャリと撫でられたのは、いつのことだっただろう。

気まぐれに触れる指先も、鉛を転がす仕草も、よくよく覚えている。あんな手で、もし絵が描けたならそれさえ画^えになるな、なんて始めのほうではよく考えていた。

その右手を描きたいと思ったことは言えない。それはそのまま自分自身の恋心だ。

多分、このクラスでこんないろいろ思いながら握手しているのは自分ひとりだけ。

「先生」

「うん？」

「こつやって、聞き返すときの相槌も、言いよどみつつ言葉を紡い

うとすれば待つてくれるその眼差しも 全部。

「前、絵が欲しいっておっしゃいましたよね？」

「言ったな。かなりしつこく」

欲しいと、熱心に言われた。だから描いた。諦めるという気持ちを含めて。諦めるのが難しいという、気持ちも込めて。

「先生。あたし、諦めずにいるほど強くないから、だから絵を描いたんですよ」

美術室においてあります。

「え？」

「あたしから先生への、傷、かな」

ゆつくりと慎重に笑った。涙がこぼれないようにそっと、気持ちが分かってしまわないように小さく。それは今までで一番美しく、そして見たことがないくらい儚かった。

「ありがとうございます。先生」

どうか最後は笑いたいから、だから何も聞かずに頷いて。

がらり、と美術室の扉を開けて、目に入ったものへと駆け寄った。イーゼルと最近知ったばかりのものに立てかけてあった絵は遠めにも鮮やかで、そして見慣れたタッチ。小さな画面の前には一つのドロップと、メモ用紙が一枚。

いつも手渡しているドロップを渡されることに慣れず、手のひらの上で転がる明るい包み紙を見つめた。

ころりとそこから出たドロップを口に含むと甘く、口元に持ってきた指先にさえ、味を感じてしまう。口の中で転がるそれは体温で解けて小さくなる。

不意にドロップが苦く感じた。手の中にあるメモ用紙が、手の熱でクシャリと歪んだ。

「っ」

名を呼ぼうとして失敗する。

「あ、いか。藍華」

苗字をつけないで呼ぶその名は、ドロップよりなお甘く、自分の心を揺り動かす。

甘く、甘く頭に響いて、それ以外考えられなくなる。馬鹿らしい、ありえないと笑ってみても、その事実は変わらない。

手に入れられないからこそ甘いのか、と自問した。

それからノロノロとメモ用紙に視線を移す。メモ用紙には、少し長めのメッセージが、見慣れた文字で書かれていた。どくり、と『あの時』のことを思い出す。

ああ、また。

『過去形』で彼女は手紙を書いてくるのか。

『先生。“drop”って涙の雫って意味らしいです。絵の中のドロップは、いったい誰の涙なんでしょうね。』

本当は、過去形の告白をして、先生を傷つけてやろうと思っていたのに、それは無理だから、好きですって書きます』

……過去形ではない告白。

鮮やかな色彩の絵が一気にくすんだ気がした。絵は見覚えのある化学準備室の風景。奥にある机も、そこにおかれた灰皿も、自分がよく使うものだ。

その床に一面、敷物のように隙間なく落ちているのはドロップだった。包み紙が鮮やかな、自分がいつも彼女に渡していたドロップ。この量がもし涙なら、自分ではないだろうと思った。

もしこれが、誰かの涙なら、それは間違いなく彼女の涙だろう。

ドロップに埋もれた一室で、一人の男が扉の前に立っていた。

決して扉を開けないようにか、ドアノブをきつく握っている。

奥の机の上にある灰皿から立ち上る煙は、ゆらゆらと男の周りを

漂っていた。扉の向こうには、何故か彼女がいるような気がする。それでも絵の中の男は　自分は、煙にとらわれたまま、扉を開けることはない。鍵を閉めて、誰も入れないようにして、我が身を必死に、愚直に守っている。ひたすら、過去に囚われている。

『好きです』と、未だ終わることのない想いがここにあるのに自分は。

前のように放っておけば、いずれは過去になるのだろう。あのときのように、諦めれば。あのときのように、恋ではないと言い聞かせればいずれ。

「でもっ……!!」

でも、本当はそういうことではなくて。

「今っ」

今、まさに。いずれは過ぎ行く、今。

「忘れられないんだ」

『今』、会いたい。『今』、伝えたい。ならば。

「走れってか」

自嘲は何に向けられたのか、美術室の扉がボタンと音を立てた。

「藍華、おめでとう!!」

「あ、真紀。来てたの？」

「もちろん」

はるばる海を渡り、帰ってきた友人はカメラ片手に笑っていた。同じ年にもかかわらず、私服なので人目を引いている。まあ、服装のためだけではないとも思うけど。

「もう、帰るの？　佳奈ちゃんたちに、会っていくんじゃないの？」

「うーん、まっ、まだ会ってないんだけど、やることはやったし、ね」

怪しい笑みは、妖しい。文字通り、妖しいのだ。何かやりきったようにすつきりとはしているものの、それが誰かのためになっっているような気は一つもない。

むしろ、誰かをぐさりと刺してきたような気がする。

「それより、藍華も帰るの？」

「あー、うん。真紀と一緒に。やることはやったから」

お姉ちゃんたちは先に帰って、もうパーティーの準備をしているのだろう。

「真紀も来る？」

「え、いいよ。親子と彼氏水入らずでしょ。一人身にはつらいのよー。だからおとなしく退散するわ。飛行機の時間が近いから、じきに捕獲部隊が来るだろうし」

捕獲部隊と言っるのは少々不穏だ。彼女が困ったようにしているところを見ると、どうやら本当らしい。

「真紀の？」

「まあね。私は珍獣なんかかつ、てちよつとつっこみたいけど」
そう言いつつ、真紀はこちらの手を引っ張った。そのまま校門のところまで止まる。そこには一際大きな桜があった。まだ咲いても、蕾さえつけていない桜は妙に寒々しかった。

「何？」

パシヤリ、といきなりシャッターをきられる。そしてすまなさそうに小さく真紀は笑った。

「ごめんね。藍華。お節介焼いて」

「ん？」

彼女の言っていることが分からず、首をかしげると、なんでもない、と返された。

「頑張つて!!」

そして何故か笑われる。ぽんぽん、と彼女はあたしの頭をたたき、カメラをくるりと指で回して、歩き出す。

「真紀ー??」

「いいから、少しここで待ってなさい。とっておきの、卒業祝いだから」

にっこりと笑った真紀の笑顔があまりにも年相応で、わけも分からず頷いた。

ぼーっと校門の前に立つ。人もまばらになってきて、卒業式の終わりも近い。ああ、本当に、卒業式が終わってしまったんだと、いなくなっていく人たちに思う。

後ろを振り向くと、美術室の窓が見えて切なくなった。今あそこに、彼はいるのだろうか。

「帰ろう」

帰って、美味しいものを食べて寝る。そうすれば涙を流す暇もなくなるだろう。顔を見なければ、あの人を想う時間も少なくなるかもしれない。くるりときびすを返す。

真紀には悪いが、もうこれ以上は待っていられなかった。

だいたい、何も言わない真紀も悪い。と、真紀のせいにして立ち去ろうとする。

「ちよつと待った」

手を、握られる。

「捕まえた」

思いの外熱い手を感じ、体が震える。聞き間違えるはずもない。

彼の声だ。

「言い逃げなんて、できると思ったのか？」

「そんなんっ」

言い逃げと言う言い方はないだろうと振り返った。振り返ってはいけない、と置いていたのに。

しかし真剣な瞳に息がつまり、何も言えなくなる。いつだってそうだった。いざ何か言い出そうとするとき、この瞳と出会って押し黙るのだ。

「返事も聞かずに、お前は」

「返事は、必要ないですけどっ。もし、先生にもう一度会うならもし、もし追いかけてきてくれたなら。自分本位な想像でしかないけど、もし追いかけてくれるなら、それなら、言いたいことがあった。」

それは好きだと伝える言葉ではなく、自分の想いの丈を吐露するものでもなく。

「あたしの初恋は」

初めて好きだと思った人は。

「やっぱり、？さんです」

菊池はわけが分からないと言う顔をした。自分に告白したはずの少女が、違う男の名を口にする。しかも一昨年からよく聞く名。小さく菊池が眉を寄せる。

「初恋は、叶わないんでしょう？」

お姉ちゃんたちのように、初恋が成就することなんて滅多にないんですよ。なら、あたしの初恋は？さんです。

「先生が、初恋なら……：失恋が決まっちゃうから」

それなら、先生が初恋なんて絶対に思っでなんかやらない。

初恋なんて、あの見るだけで満足だった憧れのような淡い想いにくれてやる。この想いは、初恋にしては色がずっと濃くて、痛くて苦かった。

だけど最後に思うのはやはり、振り向いてほしいということ。少しでもいい。一瞬でもいい。この人の心がほしいと思った。こちらを向けばいい、あの瞳が。そう思うのだ。

「初恋は、あつけないくらいすぐに、消えちゃったけど」

あの淡い想いはもう、どこを探してもなくなってしまったけど。

「この気持ちは、そんなに簡単に消えませんか」

消えてくれないんです。

「ごめんなさい」

忘れられなくて、卒業してまであんなことして。

「でも、少しでもいいから」

心の隅でもいいから。

「先生の心に残りたかったんです」

それがたとえ傷でも。忌々しい記憶になったとしても。

あつかましくて、卑怯で、汚くて、どうしようもないようなこの感情は、もう恋なんて名前ですらないのかもしれないと、何度も何度も思っただけだ。

「先生の心にずっといたあの生徒さんがうらやましくて、嫌だったんです」

「ごめんなさい。」

いつの間にか涙が出て、訴えかける声は震えていた。人なんかもう見えなくて、泣きながらこんなこと言うなんて卑怯だと思った。

それでも、これが最後ならば伝えられた。

「先生が、好きです。好きなんです。まだ好きなんです」
過去形ではなく。

「好き、です。先生」

あなたのことだ。

「それだけか？ 言いたいことは」

彼の声は冷たくて、びくりと肩が反応する。

これから来るであろう言葉に備えて、身を縮めてうつむいた。叱責なら、受けるつもりでいた。彼がまた冷たい言葉を口に出し、自分も彼も傷つくことを予想していた。

『お前は生徒だろう』

そう言われることを覚悟していた。多分、ずっとずっと前から。

しかし実際くると、また泣いてしまいかもしれないと思う。

「平田、あのな」

「すみません、勝手にしゃべって。もう、満足しました。帰ります」
菊池が口を開いた瞬間、我慢できなくなって逃げようとした。

これこそまさに言い逃げだ。今度ばかりはそう言われても仕方がない。菊池の前から姿を消そうと身を翻す。が、それを読んでいたかのように手を掴まれる。

ぐつと手首を掴む菊池の手の強さが怖かった。

「先生」

「二回目だ」

逃げたのが、だろうか。

「俺を動揺させておいて、逃げようとするのが、だ」

がっつと引き寄せられ、体が硬直する。じつと真剣な目で見つめられ、それから目をそらした。その様子を見てか、菊池はそつと笑う。口角がわずかに上がっているのが分かった。相変わらず、意地悪そうなのに、人を惹きつけてやまない表情だった。

「返事は、聞きたくないのか」

「聞きたく、ありません」

だから放してください、とそう言う声はもう出てこない。

「どうして」

「失恋は、一つで十分です」

とても大切な恋をしました。だから、失恋するのが少し怖いですが、はぁ、と菊池のため息が上から降ってくる。何を言われるのか、それだけが気がかりだった。

「お前、失恋前提の話、展開しすぎだろ」

「そんなの」

当たり前じゃないですか。

思わず、菊池のスーツを掴んだ。不意にそうしないと、自分が立っていられないような気がする。そしてこの人が突然、影も形もなくなつて自分の前から消えてしまうんじゃないかと、そう思った。

「俺の意見は聞くまでもない、と？」

「そうです」

そう言った瞬間、スーツを掴んでいた両手を反対に掴まれた。そしてその腕をよっぱり上げられる。自然と体も菊池の方へ引き寄せ

られた。

最後の意地で、顔は上げない。今その顔を見てしまえば泣く、と変な自身があつた。

もう放してほしい。構わないでほしい。ただでさえ、惨めなのだ。自分勝手だとは思うが、いい加減許してもらえないか。

何度恋をしても叶わない。こんなに想いを抱えているのに、口に出すことさえ、相手に伝えることさえ戸惑うのだ。愚かしい、想いのだと自分でも重々承知している。

「こつち向け、平田」

「嫌です」

「平田」

「無理ですっ」

ずるずると両手を掴まれたまま、膝が崩れる。

膝がつく寸前で、体は支えられたがその体をつっぱねた。体をしっかりと支えられた代わりに、両手は自由になっている。

「平田……頼むから」

「何も、聞きたくありません」

腰に回された腕は意外に力強く、瘦身だと思っていたのを訂正する。

「先生に、ご迷惑はおかけしません。だから」

もう少しだけ、好きでいさせて。

「ちゃんと、割り切りますから、忘れますから」

顔を上げていった瞬間、まだ言い募ろうと口を開いた瞬間、その口をふさがれた。驚くほど顔が近くて、少しだけ煙草の匂いがして、少しだけ、甘かった。

「平田、目を瞑るのが礼儀だろ。こつちの場合」

「なっ。何、何をっ……！！」

慌てて辺りを見回す。誰もいなかった。

でも、一番大切なのは、そんなことではなくて、呼吸が一瞬止まって、口も回らなくなる。とりあえず、彼の腕を振り払い、数歩の

距離をとる。

「まあ、とりあえず予約？」

「はい？」

意図が分からず、首をかしげると、またふつと笑われた。

ポケットから携帯を取り出し、一度二度軽く振る。何もついていない彼の携帯を見たのは、これで二度目だとぼんやりと思った。携帯で、何かするのだろうか。

「四月一日、答えを教えてやるよ」

何の、答えだと言うのだろうか。その携帯で、教えると言うこと？

「俺をここまで走らせた、感情の正体」

ニヤリ、と自分が補習のときに見たあの顔を見る。答えの分からない、出来の悪い生徒を見る目だった。まだ生徒に見られているのだと思う。

「まあ、ヒントはさっきのキスだけだな」

さて、彼を行動させたのは何でしょう。

「あと、黒田 真紀に連絡しておけ。やることはやった。俺を殴ったこと、謝りに来いって」

「ええっ！！」

真紀、あなた先生に何をしたの、と問い詰めようと携帯を取り出す。ここは校内だとか、先生が目の前にいるとかは一切気にしない。「殴ったんですか……？」

「『この腰抜け。またそれで後悔したら、今度は平手じゃすまない』だつてよ。『あんたがもし、やるべきことをやったなら、いくらでも謝ってやるわよ』とも言ったな」

想像できて怖い。

「でも、おかげで目が覚めた」

何が言いたいのか分からない。

「分からなくていい。まだ。さつさと帰れ。姉さんたちが待ってる」

「そうですね」

帰れ、ともう一度言われる。そう言われてしまえば、何も出来なくなるわけで、おとなしく持っていた携帯をしまい、校門の外へ出る。

納得いかないさまざまなことについて、考えなくてはいけないのに思考はまとまらず同じところでループする。

「忘れるなよ。四月一日」

キスしたことも、先生の言う『答え』も、今聞かなくてはいけない気がするのに、何も出来なくなった。うまく丸め込まれたような気もする。

それでも、今は一人でゆっくり考えたかった。

ゆっくり考えれば考えるほど、怖くなるなんて考えもしなかった。

「あ、の。えっとじゃあ、さようなら」

「はい、さようなら」

別れ方だけは、いつもの先生と生徒の距離だった。

第三十話 『惜別色握手』（後書き）

び、微妙すぎる。けどどうにもこうにも、收拾つきたくて、こんな感じに。

もう先生が何をどう思っているのかは、迷宮入りになるかと……。

ばっ、番外編とかで先生目線をたくさん書きますっ、きっと。

第三十一話 『闇色着信』（前書き）

一ヶ月ぶりくらいですか。お久しぶりです。ラスト一話を残して、UPです。やっと、やっとここまで来た！。

あとは最終話を甘く書き上げるだけです。最後までお付き合いください。

第三十一話 『闇色着信』

ぐるりとベッドの上で寝返りを打ってから、携帯に手を伸ばす。ベッドにおきっぱなしの携帯を手にとって時間を確認した。現在、三月三十一日、午後十一時五十分。もう少しで四月一日だと自覚したとたん、携帯を投げ出した。

卒業式から約一ヶ月が経とうとしている。

彼が口にした『四月一日』がもう目の前に迫っているのだと思うと、知らず布団を握り締めた。『怖い』と意識しないで思った自分がいて、少々驚いた。

彼に追いかけられたとき、それはそれで怖かった。何を言われるのか、という意識が心を支配し、随分と情けない様を見せてしまったような気もする。

が、あのとときの怖さとは比にならない。あれから考える時間があっただけ、その怖さは増大した。

彼の言葉はまるで暗号で、それでも色濃くあたしの中に残った。

どんな色よりも鮮やかに、どんな風景より綺麗にあたしの心を占めてやまない。あれから繰り返し、繰り返し、彼の言葉を繰り返し続けた。

「予約つて、何？」

からかわれた、のかもしれない。先生あの顔が、頭にこびりついて離れなかった。

もとも悪いほうに考えるたちではないと思っていた。でも、今回のことで自分は存外臆病で、マイナス思考の人間なのかもしれないと思い始めた。普通の女の子なら、もう少し夢のある想像をするんじゃないだろうか。

たとえば『先生もあたしのこと好きなのかも』とか。

……ありえなさすぎて、笑えるが。

「菊池先生」

あなたは、何がしたかったんですか。ただあなた自身が、傷つきたくないから、ああいう方法で断ろうと思ったんですか？

だって、四月一日に何か連絡がなくても、あたしはあなたにかかわろうとは思えないから。

ただ。

「ただ、断るだけならなんでっ」

何で、あんなことしたの。

唇を指でなぞる。それからぎゅっと手を握り締めた。そしてまた時計を確認する。ああ、あと五分で四月一日だ。あれからずっと考えていた。四月一日、という日付を。

「四月一日」

そして一つだけ、心当たりがあった。

あたしはまだ、高校生なのだ。あと五分間だけ。正確に言えば、三月三十一日までは。それをすぎれば、あたしは『高校生』ではなくなる。

あの学校から、先生の心から、完全に切り離されて、新しい位置に収まる。

つまりは『大学生』という身分に。『高校生』とは少し違う、大人まであと少しの位置。それが……何を示すのかはわからないけれど。

高校生、でなくなったから、どうするのだろうか。

高校生でないから、遠慮も何もなく、断れるという意味だろうか。それなら、あのキスは何なのだろう。分からないことが多すぎて、くらりと寝そべっているはずなのに立ちくらみのような感覚を味わう。

蛍光塗料の塗られた時計の針が、淡く緑色の光を発する。

そのふたつが少しずつ、少しずつ重なるうとしていている現実に気がつき目をそらした。怖い、怖い、怖い。

「こわい」

漏れる声は震えていて、布団を掴む手は強張っていた。

緊張するなというほうが無理なのは百も承知だが、緊張するのは着信があつてからでもいいんじゃないかなと自分なりに言い聞かせた。そのとき、聞きなれた着信が響いた。

慌てて携帯を掴み、ボタンを押して耳に押し付ける。ついでに目を閉じて、一気にまくし立てた。画面を確かめようなどと、思いもしなかった。だって、怖いし。

「せつ、先生っ。四月ー」

「あ、ごめん。私、真紀です。期待させたみたいだね。着信あつたら、名前出ると思つてただけど」

携帯から出た声は、友人の声だった。一ヶ月前聞いた、あのときのままの声。

「真紀っ。び、びつくりするから、お願いだから、こういうことしないでよ」

最後のほうはもはや涙声だ。この緊張感を、あともう一回はしないではいけないのかと思うと、電源を落としたくなる。

「ごめんねー。心配になつて電話したんだけど。まあ、意地悪もかねて?? 今十一時五十九分だし」

ぱつと時計を見る。針はほぼ重なっている。それが何を示すのかすぐに分かつて、脱力した。

そうだ。こういう人なんだ。彼女って。もう何度目かにもなるその認識を毎回しているはずなのに、肝心なときに忘れるのでその認識がタメになつたことはない。

「三月一日のあと、学校行つたのよ。謝りに」

あのあと、あたしは一番に彼女に連絡して、先生が来たことを伝えた。

すると彼女は『ああ、行つたんだ。腰抜けが』とだけ答え、電話を切つたのだ。

彼女が高校一年生のときの担任だったはずの『先生』に、どうし

たらそんな態度が取れるのかと、ただひたすら不思議だったが、今回もその理由を教えてくれそうにない。

「一応、約束だし。もう一発くらい殴るところかな、と思って」「なっ。真紀、また殴ったの?! 先生を? 平手でっ?!」

携帯を両手で握る。生徒ではもはやないにしろ、彼女はそれで大丈夫なのだろうか。先生殴るのつて。いつの間にか激しい動悸は治まって、代わりに何とも言えない嫌な予感が胸を占めた。

「いや、平手で殴るわけじゃないでしょ。謝りに行ったのに。思ってたんだよ」

「そ、うだよ。殴るわけじゃないよね。わざわざ謝りに行ったのに、謝る理由増やすわけじゃないよね。思ったただけだよ」

どちらかといえば、確認というよりもむしろ願いだ。彼女があれ以上の暴拳に出るなんて考えたくもない。

「殴ってないとは言っていない。グーで殴ってきた」

「なんでっ?!」

「何でって、」

『女の子泣かせて、苦しめて、それで何? 四月一日に連絡するつて、いったい、どっとう了見なの? 顔が少しいいからって、からかってんの??』

つて、過去にとらわれてばかりのお馬鹿さんに言ってやりたかったから

ぐらぐらとめまいがする。そのとき、時計が目に入って、十二時を過ぎたことを知った。

「真紀ー」

どっという意味よ、と問うと、彼女は笑って、『菊池先生にでも聞いてみれば?』とわざとらしく言う。それがまた憎らしくて、簡単に携帯の向こうの彼女の顔が想像できて、『意地悪っ』と返した。

「菊池『先生』がね、大っ嫌いな理由、教えてあげるよ」

真紀が笑いながら答えた。少しだけ大人びた声で、こちらをからかうように少しだけ甘く。

まるで大切な秘密を、たった一人だけに伝えるように。思わず耳を済ませると、ふふつと小さな笑いを漏らした。

「私に、似てるの。すつごく。私が、似てるのかもしいないけどね。とりあえず、似てるのよ。私と、菊池は。もう、自分でも嫌いなのに、目の前にもう一人の自分がいるみたいですごく嫌だった。

過去にとらわれてるって言うか、執着して、頑なに他人の侵入とか阻んじゃって。ときどき、自分は『加害者です』みたいな、罪を背負っているような顔なんかしちゃって」

大つつ嫌い、と彼女は笑い混じりに言ってから、ほうつと息をついた。

それから声を落ち着けて、再度語りだす。今度こそ、秘密を漏らすかのような、ささやかな声だった。

「だから……ううん、『でも』かな。彼が走っていったときは、心底ほつとしたよ」

あたしと別れた彼女は、その足で美術室へ行き、先生の頬を張ったらしい。

そして彼があたしに話したせりふを言った。どういう意味なのかは、二人とも教えてくれなかったけれど、彼女なりの声援だったのではないかと思っっている。

「まあ、ちよつと、仲間が減って悲しいけどね。結局、腰抜けは私だけになつちゃったわけだし」

彼女の言う『腰抜け』がはつきりと分らないけれど、彼女が腰抜けなら、この世の中の人皆腰抜けなんじゃないだろうかと思う。

「真紀が腰抜け？」

「そう。腰抜け。過去に執着して、いつまでも過去の中で生活がしたい、ただの腰抜け。

亮との関係も、何もかもを、昔のまま保っていたと思う。何も変化なんて訪れないで、ひたすらに甘くてぬるい平凡さを求めている」

変化なんていらぬ、とそう言ったくせに、彼女は今日日本にはいない。高校を辞めて、何を求めるのかと思っただけれど、少なくとも

『変化』ではなかったらしい。

平穩を求めるために、仕方なく変化を甘んじて受けた、ということだろうか。

「理解しなくていいよ。きつと藍華には分かんないだろうから」

「子ども扱いしてる？」

「してないよ。ただ、藍華には絶対分らないと思うよ。私と違って、素直で、賢くて、しっかり者だからね」

からかわれているような感覚になるが、彼女がそういう類の冗談を好かないことを知っているので、黙って聞いていた。

「さて、そろそろ切りますか。菊池のやつもイライラしながら待ってるだろうし？」

「ええっ!! もう切るの? もう少し話してようよ。一ヶ月ぶりなんだし。もう少し、いいでしょ??」

『菊池』の名を聞き、及び腰になるあたしを感じてか、真紀は携帯の向こう側で『何言ってるのよ』と小さく笑った。

「四月一日はもう訪れてるのよ。まあ、私のところにはまだだけど。日本はもう、過ぎてるでしょう? 十二時。菊池の出した、答えが聞けるよ? 聞きたくないの? 『模範解答』」

「きつ、聞きたくないよ……」

何で、わざわざ振られるようなこと、待ち望まなくちゃいけないのよ。

そう返すと、すぐには真紀は返事をしてこなかった。しばらくして、はぁーと長いため息をつかれ、こちらは少しだけ困惑してしまふ。今のため息、どういう意味だろうか。

「ねえ、もしかして『振られる』なんて思ってないでしょうね」

「振られなかったら、どうなるって言うのよ」

まさか、先生があたしを好きな分けないでしょうに、首を横に振りながら言い返す。

そのあきれたような口調、どうにかありませんか。真紀さん。不快感が増えてきてるんですけど。

「キスされて、予約って言われて、四月一日にヒントが『キス』の模範解答をもらうのに、どこに振られる要素があるのか、私に説明してよっ!!」

どこをどう間違えれば、そこまでされて『A・振られる』なんて答え出でくんの??」

「むしろあたしは聞き返したいよ。絵を描くのが好きな、幼い女子高生を、どうやってあの『菊池先生』は好きになるの?? つか、どうしてキツ、キスとかっ、予約とか知ってるのっ!!」

まくし立てるあたしの顔はもはや真っ赤になっているんじゃないかなろうか。

キスとか、予約とか一切語っていないのに、どうして彼女は知っているのだろう。ただ『先生は追いかけてきてくれたよ』と言っただけなのに。

「ん? 秘密。女の子は秘密があつてこそ、なんだから」

『真紀、電話が入りましたよ。菊池さん、という方かららしいのですが』

電話の向こうで、もう一つの声がした。『菊池』に反応してしまっ自分がつくづく憎らしい。

「あー、無言で切つて。いや、いい。こっちにちょうだい。藍華、ちょっと待つて。すぐ戻る」

真紀の声と気配が遠くなる。しかし、その声は凜としているのでよく響いて、遠くで語っている内容は携帯を通してこちらにまで来た。

『もしもし?』と外行きの声が流れ込む。猫の仮面をかぶった雌豹とでも表現するのだろうか、この場合。

『分かってますって、すぐ切りますよ。うるさいですね。あんたが悪いんだから、このくらい当然でしょ? 一回、思いっきり振られたほうがいいんじゃないんですか?』

人間、一回挫折を味わわないと、成長しないんですよ。せんせ』
びくん、と肩が震える。『せんせ』と真紀が言ったということは、

真紀の電話相手は間違いなく『菊池先生』なのだ。

「藍華ー。ごめん。やつぱり、切るわ。うるさいやつがはやく電話切れ、ってうるさいから。まったく、もう。藍華は自分のもんだとでも思ってるのか、あの元腰抜けヤロー」

最後に悔しげな声が聞こえ、唐突に携帯は切られた。

パタン、と携帯を閉じると、すぐに携帯が再び音を奏でる。登録して以来、一度としてくることのなかった着信が、一度として映すことのなかった名前が液晶画面に映る。

思わず電源を落としてかけて、やめた。

いつまでも逃げてるなんて、自分らしくないだろう。少なくとも、困難からずつと目をそむけることはよくないはずだ。それならいっそ、出てはつきりさせたほうがいい。

そうして、真紀に『振られたよ』と言えば、真紀も納得するだろう。

とりあえず、先生があたしのことを好きだという意味のない、妄想を止めてくれるはずだ。誤解だってきちんと解けるだろう。

「はい、もしもし。平田です」

「遅い」

開口一番、一言目がそれ。

先生らしすぎて、笑ってしまう。本当に、この人はあたしが緊張して電話に出た人だろうか。この人と話すのは、そんなに緊張することだっただろうか。

「あー、菊池です。一ヶ月ぶり。まったく、黒田のやつ、やっと電話切ったか」

苛立ったような声に肩が震えるが、自分の中にある勇気を最大限引き出して、あごを引いた。負けるな、下を向くな。いつか自分に言い聞かせたことを再びつぶやく。

「どうして、真紀の電話……」

「ああ?? 池田に聞いた。連絡名簿って、意外に役に立つな」

佳奈美に聞いたのか、と納得しつつ、こんな時間に連絡したのか、

と小さく不安になる。……常識ないですね、先生。

「 昼間。電話かけたの。もしものときのために、保険。今お前完全に俺のこと、『常識がない』って思ってたろ」

思ったより、緊張してない。むしろいつもどおりの会話に、ほっとしていた。

何一つ変わらない、生徒と先生の関係。二人とも、境界を越えようとしていないのだから、きっと大丈夫。何を言われても、電話口で涙を流さないようには出来る。

「まさか、深夜に電話がかかってくるなんて思いませんでした」

ウソ。あなたなら、そういうことをするかもしれないと、そう思っていた。

四月一日になってすぐ、電話してくるんじゃないだろうかと、薄々感じていた。約束は守る人だし、何より、一回口に出してからその主張を簡単に引つ込めるような人じゃない。

「夜分遅くに」

「いえつ。あたしも振られるんなら、早いほうがいいと思ってましたから」

謝ろつとしているのが分かり、言葉をさえぎる。

早口になっているのが分かるのに、直そうとも思えなかった。準備が出来ているとは言いがたい。だけど準備なんて、振られる用意なんて、きつといくら時間があつたとしてもできないんだろつ。

それならば、一刻も早く、少しでも早く、そう言っただけだった。

「お前さ、やつぱり振られること前提なの？」

「他にどんな前提があるのか、あたしは聞きたいです」

携帯を耳に押し付け、息を吐き、やつとこのことで言葉を押し出す。『早く、早く』とこんなにも願っているのに、まだそのときはやっつてこない。まだ、引き延ばすというの？ この苦しい時間を。

「もし俺が、高校生には手を出せないから、この日まで待ってた、つて言ったら。お前はどつする？」

それは、何を意味するの？ からかっているの？ あたしの反応は、

そんなに面白い？

「……………」

「沈黙はどう受け取ればいいんだ。平田」
「お願いだから、そんな声で呼ばないで。」

「甘く囁かないで。」

「期待させないで。」

諦めようと、ちゃんと決めたと伝えたはずなのに。この人はあたしに諦めさせてはくれないのか。

いつも意地悪そうに、何か企んでいるかのような声を出すのに、ときどきドキリとするくらい甘い声で囁かれる。

そうされるたびに、甘く呼ばれるたびに『好きなんだ』と言いつつになっていた。伝えたいと、唐突に思ってしまうのだ。

『あなたが、好きなんです』と声を大にして。この心にある気持ちを含めて、色にして出してしまえたらいいのと思うくらい。

「先生は、恋をしない人だと、聞きました」

「ウソじゃない。『恋を、しなさそうな人だね』といつか言われた。」

「誰に」

「春ねえと、真紀に」

「あの二人か。また」

平田その二と黒田がそろいもそろって、と苦くつぶやかれる。

『平田その二』の言い方が、あんまりな言い方だったので、思わず噴出した。緊張もこれと一緒に流れてくれればいいのに。

「迷ったんだよ。平田 春華にも、黒田 真紀にも言われた。『傷つけるくらいなら、始めから何もしないで』って」

二人はどこまでも、あたしを中心に行動してくれていたらしい。少し、恥ずかしいけれど。

「『大人だから、我慢できるでしょ』って、お前の姉さんに言われて、『自分が臆病者だと、まだ気付いていない愚か者が、誰かを幸せに出来るんですか？』って、黒田にも言われた」

「ただ、と先生は続ける。

「どんなことを言われても、お前を忘れられなかった。からかったり、変にかまつたりすることを止められなかった。手紙をくれた生徒に重ねてたわけじゃない。

確かに、境遇は似てたけど、俺はお前とあいつを同一視するほど器用じゃない」

静かな声が、胸に響いて、ちよつとずつ、あたしの思考回路をとめていく。深く考えることが出来ないように、回路を一つ一つ、丁寧に閉じていかれるような感じを味わった。

「『傷つけるくらいなら、近づくな』か。……正論だな。まったく、恨めしいくらいに」

あなたはまた、一人傷ついているんですか？

どうしようもなく、痛々しい顔をして、あたしに電話をかけているんですか？

あたしは、そんなことのために、あの絵を描いたはずではないのに。

傷でもいいと、いいながら、やっぱり先生に傷ついてほしくなかった。あたしなんか、残ってほしくなかったのかもしれない。

「『それでももし、本当に触れたいと思うなら。もし本当に、手に入れたいと思うなら。そのときは、はっきりと目に見える形で落とし前をつけて見せて』だよ。黒田のやつ」

男前だよ、真紀。腰抜けだなんて、誰も思わないし、思えない。ありえないから。ここまでの発言を言う人が腰抜けなはずがない。

「そう言われて、やっと、自分が犯しそうになっていた二度目の失敗に気がついた。また、おんなじことを繰り返すところだった」

ああ、俺はお前を気に入ってたなと。

逃がしたくないと。

できれば捕まえておきたい、と。

「絵を見て、触れて、お前の目にはこんなふう映ってるのかと思うと、どうしようもなく、引止めに行きたくなった」

「先っ」

「とりあえず聞けよ。自分の過去話と失敗話は、かなり語るのに勇気がいるんだぞ」

ぎゅっと布団を握り締めて『はい』と返事を返す。携帯の向こうの彼は満足そうに息をついて、それからそつと話し始めた。

「何もせずに、ただ後悔するのは一度で十分なんだ」

知りたくないんです。実は。あなたの昔の恋なんて。

あなたが辛そうにすればするほど、それほど深く、誰かを想っていたのかと考えてしまうから。自分では敵わないと、実感してしまうから。

「だから行動を起こした。でも言うておく。前のは恋じゃないから。初恋はやれないけど、手紙をくれた生徒に恋はしてなかったから。あと」

お前の初恋は藤田じゃない。

「なっ、先生にそんなこと、何で言われなきゃいけないんですか」

「まだ分かんないのか」

先生が少しだけ笑った。物分りの悪い生徒に教えるときのような声にどきりとする。化学を教えるときの先生の声だ。

「お前の初恋の相手は俺」

んでもって、最後の恋の相手も俺。

「分かったか」

「……」

「返事は」

「……はい」

嬉しいのか、混乱しているのか、何なのか。

分からない感情が胸を締め付ける。それでも前のような、ドロドロした真っ黒い感情じゃなくって、どちらかといえば暖かい暖色だった。

「まだ、言うてなかったよな」

先生が息を小さく吸い込んだ。何を言われるのか、本当はもう、

分かっているのかもしれない。

「言いたいけど、まだ言つてやらない。携帯越しの告白なんて、惜しいだろ？ 最初で最後だしな。お前にとって」

勝手に決めないで、と言つてやりたいのに、思考回路は麻痺して何も言えなかった。

「だからそうだな。とりあえず」

お前が何を想つて、この絵を描いたのか知りたい。

「学校に来いよ、明日……じゃなくて、もう今日だな」

欲しいのは、そんな言葉じゃない。だけど、それでもいいかな、と思つてしまふあたしは、あなたに溺れてるんだと思う。

だから願わくは、明日、言葉をください。

できればあたしが贈つた『過去形でない』言葉のようなものを。

まだ少し、あなたを疑つてしまつているあたしが、信じてしまえるほどの言葉を。

「先生」

「ん？」

何といつて伝えればいいのだろう。この気持ちを。この心にあふれている色を。

「色がたくさんありすぎて、なんて言つたらいいかわかりません」

大丈夫、伝わってるよ。

「お前が言いたいことは、絵で伝わるから。どんな色でも、ちゃんと伝わる」

この前まで、絵なんて分からなかったくせに。

イーゼルなんてものがあることさえ、キャンバスにサイズがあることさえ、知らなかったくせに。木炭を見て、『有機物を完全燃焼させると……』とか言つてたくせに。

それでも、自分の絵を見るときの瞳はひどく真剣だった。その絵に向けられる瞳がこちらを向かないかと、少しだけ期待していた。

「もう、切る。夜遅くに電話して悪かった。おやすみ、藍華」

ぷつん、と通話が切られて、プーという電子音だけがあたしの耳

に響いた。

急に呼ばれた名前を反芻し、やっと自分の名前だと自覚する。それと同時に、ふつつつと体内の温度が上がってきて、ベッドに転がり込んだ。

「あつつ」

体中が火照って、体温のともっていない枕に顔を押し付ける。そうしなければ、叫びだしそうになっている自分がいた。

甘い甘い声から、逃げ出すことなど不可能なのだ、そう思いつつ、目を閉じた。

朝起きて、携帯を確認して、それで彼からの着信がちゃんとあったのを確認したら、学校に行こうと思った。

第三十二話 『恋色ドロップ』

しんと静まった学校に足を踏み入れた。もう少し騒がしいかもと思っていたが、思ったよりずっと静かで驚く。

そういえば、まだ始業式を迎えていないのだったな、と思い出した。靴箱に向かう道を歩いている途中で、そこに『平田』の文字がないと理解し、足を止めた。

くるりと向きを変え、改めてどこから入ろうか迷った。この場合、正面玄関から入るものなのだろうか。

今までしたことなかった心配をしている自分が、ひどく滑稽に見える。どこから入るか、なんて考えたこともなかった。

そろそろと、まるで不審者のように正面玄関へ入る。あら、と声をかけられて頭を下げた。事務室の職員の人だ。

「どうしたのー。卒業したのに」
まさか、と心配そうな顔をされたので、『美術室に忘れ物です』
と言い訳した。

いや、嘘ではないが。すると、その人は目を和ませ、大変ね、と小さく笑った。大変なのはこれからです、と言いたかったが、この人に言ってもいけないだろう。

「職員室に行つて、鍵、とりに行かなきゃ行けないですからね」

彼は、『どこに』とは言わなかったので、とりあえず職員室に向かうつもりだ。

事務室を通り過ぎ、三階までの階段を踏みしめるように歩く。いつもは長いと思っていたその階段はひどく短くなった気がした。こんなに早く着くなんて、心の準備がまだなのに。

中棟の三階にある職員室に向かい、一步踏み出し、一度くるりとその場で回れ右をした。

「平田ー。どしたー？」

「あ、有田先生。こんにちは。えっと、美術室の絵を取りに来たん

です。おきつぱなしって、恥ずかしいから」

すごい、自分で褒めてあげたい。

ここまでのでまかせがさりと出てくるなんて、人間危機に晒されれば、きつとなんでもできてしまうだろうと、今実感した。

嘘をついている罪悪感半分に、あいまいに笑って見せると、『そうか』と返された。

「でも、坂野先生、今日来てないぞ。副顧問って、誰だっけ」

「えっ、とー。菊池、先生です」

ちよつと途惑ったのはご愛嬌。ここまで平常心を保てたら、先生にあんなみつともない姿なんて見せなかった。

「菊池ー、は。今いないな。どこ行った、あいつ」

今すぐ、美術室に行きたくなる。走って、彼に問い詰めたいことがたくさんある。

それなのに、足も動かない。うまく笑えてる自信がない。職員室の蛍光灯がにじみそうになる。慌ててうつむくと、後ろからぼんと頭をはたかれた。

「いるよ。ここに。有田先生、さっき生徒進路室に行くって言いませんでしたっけ？」

「おー、言ったかもな。嫌味止めるよな。いかにもな敬語」

「年上に敬意を払っただけですが？」 『有田先生』」

「悪かったって」

有田先生が短い髪をガシガシとかき乱し、こっちを見て小さく笑った。

子供のようなその笑顔に、少しだけ安心する。そうだ、ここはただ何も変わっていない。あたしが『生徒』だったときと、何一つ。

この先生にしてみれば、あたしはまだ『生徒』なのだ。

なら、彼にとって今あたしは、何なのだろう。

不意に思い、ちらりと彼に視線を返す。しかし菊池先生の顔からは何も読み取れず、思わず顔を伏せた。目が合うと非常に気まずいのはどうしてだろう。

「で、平田。美術室でいいか？」

「あつ。はい。お願いします」

慌てて頭を下げると、彼は職員室へ入り、鍵置き場から一つ鍵を取り出す。

坂田先生が買って来た、よく分からないキーホルダーがついているそれは、一際目を惹くのだ。それを見ていると、横からこっそつと有田先生がつぶやいてきた。

「卒業式前後くらいから機嫌悪くってさー。卒業式の次の週くらいがピークで、めちゃくちゃ怖かったんだって。でも、なんか昨日くらいから機嫌よくなって……」

よく分かんないよなー。あいつ」

生徒がいなくなって寂しい、とかか？ と呟きつつ首をかしげる有田先生に、むしろあたしが聞きたい。彼が不機嫌な理由が。彼の機嫌が悪くなった理由が。

もし、その機嫌の良し悪しに、あたしが関係あるなら、嬉しいけど。

「ほら、行くぞ。一人で持って帰んのかよ。本当に」

あきれたような声で言う彼の後に続きつつ、有田先生に頭を下げる。いい事を聞いたことにしよう。

「気いつけて帰れよ」

「はい」

無性に、今逃げたい。

無性に、彼に触れたい。

無性に、『好きです』と告げたい。

そのどれもが自分の中に確かにあって、少しだけ怖くなる。自分が自分でないような気がして、どこか地に足が着いていないような気がして。

会話のない空気はもう慣れているはずなのに、妙に居心地が悪くて何度か声を上げようと口を開く。それでも、その背中がどこかあたしからの会話を拒絶しているような気がして、口を閉じた。

大人しく着いていくと、四階の美術室についた。

絵を置いたときと、何にも変わっていなくて怯えるように足を引く。部屋へ入るのを止めようとしたあたしに気がついたのか、彼はあたしの手首を掴み、そのまま引っ張って中へ入れた。

「ど、して……、あのときのままなんですか」

「どんだけ俺が驚いたか、体験してもらおうかと思って」

わざわざ出してきたんだよ。嘘までついて、と彼が苦笑った。

とん、とイーゼルに立てかけてあるその絵に手を置き、彼はこちらを向く。そしてあたしの顔を見て、眉を寄せてこっちを向く。

「平田」

「っ」

怯えるように、一步下がる。

何がそんなに恐ろしいのか、悲しいのか分からないのに、体が震えてどうしようもなくなる。自分を抱きしめるようにして腕を掴み、肩の震えを止めようとするのに、どうにもできず首を振った。

「何が怖い」

「先生の、沈黙」

何か話して。黙らないで、何も考えないように、矢継ぎ早に言葉を発して。

そうしてくれないと、何を言われるのか考えてしまう。

「じゃあ、早速本題から入るか」

先生の声が、深みを帯びる。甘くも、厳しくも、何ともない。

ただすつと、授業で出す、よく響くだけの声ではなくなつた。その違いが何なのか、分からないけれど、正しくは言えないけれど。ただ違うとは言い切れた。

「お前は、何を想って、この絵を描いた？」

知ってるくせに。そう口に出そうになる。

心の中に溜まる、彼を責める言葉がいくつもいくつも口から零れそうになる。自分を守るための言い訳か、単純に彼の行動を責める悪口か。そんなことはどうでもいい。

「……言わなきゃ、ダメですか？」

卒業式の日、確かにあたしはメモ用紙に書いたのに。

彼の足元に積もったドロップが、何を示すのかは知らせぬまま。自分の気持ちを、幼くも押し付けたはずだ。本当は『過去形』で書いてやるうと思っていたのに。それはできないから。

「あたしはっ」

「俺は、お前を手放したくないと思った。できれば、そばにいたいと思った。そばにいて欲しいとも、確かに思ったよ。今追いかけてきゃ、それは絶対に叶わないから、だからお前を追いかけた。迷ったけど、殴られて目が覚めたし」

唐突に、そう言われた。

「何て言ったら、お前に通じる？」

お前みたいに言葉以外ではつきりと伝わる術を、俺は持つてから……どうしたらお前に伝わるか教えてもらわないと、俺にはどうしようもない。でも、いい言葉が思いつかないんだ」

何年も、日本語話してんのにな、と先生は苦笑う。

「お前に伝えてもらった気持ちを、きちんと分かって、受け止めてるって理解して欲しいんだ」

何て答えるのが、正解なんだろう。どう返せば、いいんだろう。

あたしも先生が好き、先生もどうやら嫌いではないらしい。だから?? だから、どうするのがいいの？

「あの……、えっと。先生は、あたしのことが『恋愛感情的』な意味で好きなんだろうか？」

物事には、雰囲気とか、その場の勢いとか、多分そういうことで出来上がっている要素があると思う。

でも、こういう聞き方って、多分スマートな聞き方ではないんだろう。その証拠に、先生はしばらくぼかんとしたようにこっちを見た。

ああ、もう穴があったら入りたい。というか、今すぐここから消えてしまいたい。

そろそろと扉のほうへ近づき、そのままダッシュで美術室から飛び出したくなった。もう先生の目を見ていられる自信がなかった。

「あのっ、間違ってるんならいいんです。あたし、物分り悪いみたいで、先生の言葉がいまいち伝わってないんでっ。どういふふうに先生の言葉を、受け取って……」

言葉が止まった。先生がこちらへ手を伸ばし、そのままあたしを引き寄せたからだ。

何故か今日は白衣なんて着ていなくて、いつもは脱いでいる、スーツの上着を着ていた。ネクタイが頬に当たったところでやっと抱きしめられているという事実に行き着く。

慌てている心情半分、どうしてここで抱きしめられたのかという疑問を持っている冷静な自分がいる。

「ちゃんと」

先生の、吐息のような声の上から降ってきて、心臓がびくりと跳ね上がった。

こんなに密着していたら、ばれるんじゃないだろうか。自分の気持ちとか、彼に対する感情とか全部。体を通して、伝わっていくんじゃないかな、と思う。

「伝わってるんなら、そう言えよ」

ちよつとだけ不機嫌そうに、それでも隠し切れない喜びをあらわにして、彼は腕の力を強くした。それが何を示すのか、やっと分かった気がして、おずおずと顔を上げる。

「先生、あたしは、先生が好きですよ」

また、涙がこぼれ始める。卒業式のように、制限なく涙がこぼれた。

『好き』という言葉だけでは、たった二文字だけでは表すことのない理想が、次から次へと目から零れる。

絵の具でも、何でも表せない気持ち、涙となって彼のスーツに吸い込まれていった。

出来れば、彼にもこうやって伝わって欲しいと。涙がスーツにし

みこむように、心が彼にしみこんで欲しいと思った。

思っていることが全部でなくてもいい。

一番伝わって欲しいことだけ、それだけでも、くつついた場所からしみこんでいけばいいのに。そうすれば、言葉にしなくとも、絵にしなくとも、お互いに分かり合えるのに。

「絵でも、言葉でも、表せられないくらい、先生が好きです。先生が追いかけてくれたとき、期待しちゃうくらい好きです」

言葉の選び方も、伝え方も、まだまだ未熟で。

ただ単純に『好き』としか、言えない。どんなふうに好きなのか、どれくらい好きなのか、そんなこと伝えられそうになかった。

大人になれば、うまく伝えることが出来るんだろうか。

「もし先生が、『恋愛感情』で好きなんじゃなくて、あたしはっ『好きだ』

あたしの言葉に覆いかぶさるように、彼は言った。

それから笑って、『照れるな』と頬を赤らめる。そんなところが、どうしようもなく切なくなつて、また涙を流した。目も赤いし、涙声だし、鼻の頭だつて真っ赤だろう。

そんなあたしを見て、そういう言葉を出してくれる彼が、たまたまなく愛しくなつた。

「お前のことを考えると、年甲斐もなく温かくなつたり、お前の初恋を考えて嫉妬したりした。それくらい、お前が好きだ」

『好き』つて言葉、あんまり好きじゃないんだけどな、と先生は笑う。

「そういう言葉が、得意じゃないんだ。あんまり。型どおりで、定型句みたいで、それさえ言えば『恋人』みたいな感じで」

だけど、これ以外にあんまり言葉つてないんだよな。恋愛感情恋愛感情を表すときに。

「お前が藤本を『初恋の人だ』つて言ったとき、どんな気持ちだったか分かるか？」

嫉妬なんて、随分してなかったのに、冷静でいられなくなつたな

んで、お前知らないだろう？

「お前の初恋は、俺。あれは初恋じゃなかったって、言っただろ？」
「だって、初恋は叶わないって言うから」

叶わないと、始めから言われるのはいやだった。

自分でもそう思っているのに、そんなこと言われなくなかった。

だから『初恋は？さんだ』と言ったのだ。

彼に向けた強がりだが、こんな形になって戻ってくるとは夢にも思っ
ていなかったけれど。

「叶うからいいんだ。俺が初恋、そうだろ？ 藍華」

こんなときに、その声で、顔で、あたしの名を呼ぶのは反則だろ
う。

「違っつて言ったら、どうするんですか？」

最後の悪あがきをする。しかし先生にはそんなことはお見通しだ
ったようで、まだあがくか、と小さく呟かれた。

そして目を見開く間もないまま、先生の顔が近づいて、あたしの
唇にそっと触れた。

「目、瞑れ」

甘い、命令口調の声に抗う術などあるはずもない。

必死に目を開けていようとしていたのも、ほんの数秒で、最後に
は大人しく目を閉じた。その一瞬前、先生が満足げに笑う姿が瞳に
映ったが、見なかったことにする。

なんだか、馬鹿にされている気がしないでもない。だけど、目を
瞑らないという選択肢は与えられていないのだ。始めから、あたし
には。だから仕方がない、と諦めるように体を預ける。

少しだけ触れて、離れて、また触れる。

どこか遊んでいるような印象を受ける肌同士の触れ合いは少しだ
けくすぐったくて、身をよじった。恥ずかしいのか、どうなのか。

それさえも分からず、くらりとめまいがする。

「次にそんなこと言ってみる。今のじゃすまないから」

どうするんですか、とは怖くて聞けない。今すぐ実践されそうで

聞けない。それでもうなずかず、先生の腕からするりと抜け出す。

あつけないほど離れていく先生の腕が少しだけ悲しかったが、いやならすぐ逃げ出せるようにという、彼の小さな配慮に気がついた。そんなつもりは、始めからないのに。

「先生」

「何だ？」

「もう一枚、描いていいですか？」

先生が、怪訝な顔をする。それに笑いかけて、イーゼルに立てかけてあつた絵に駆け寄つた。

「描き直したくなつたんです。先生に渡す絵を。これはあたしから先生への『傷』ですから」

できれば、それが優しく、ただ甘いだけの『想い』になればいい。嫉妬でも、ただ重いだけの『感情』ではなく。

「これは返さないぞ」

「どうして？ これは先生のために描いたものじゃないですよ？ あたしのために、先生を傷つけて、先生の心なかに残るためだけに描いたのですよ？」

傷ついて欲しくない、それでも傷ついて欲しい。忘れて欲しくない、傷でもいいから一生彼を縛りたい。

愚かで、醜くて、どうしようもない。

だけど、決して、彼を傷つけるためだけのものじゃなかったはずだけど。だけど、彼にはそうとしか思えないような、彼の一番痛いところを抉るような絵だったはずだ。

「お前から逃げ切れなくて、分かったから。もう、落ちてるんだなって、思った絵だから」

お前の思惑通り、お前は一生俺の心なかに戻るよ。傷じゃないけど、痛々しい記憶で、縛られるわけではないけど。

「俺もお前を縛りたいから、ちようどいいだろうっ？」

これを描いたことで、お前も俺を忘れない。ある意味、どっちも縛られるんだよ。この絵で。

新しく描くなら、『好き』よりも甘く、『愛してる』よりも深く、彼を縛れるような優しい戒めの心を込めて絵を描こう。

まるで真綿で包むように、彼にさえ、気付かれぬように。できれば、あたしさえ気付かないように。

この気持ちを線にして、この涙を絵の具にして、絵を描こう。絵で気持ちが全て伝わるとは思えないけど。それでも、一片でもいいから伝わればいい。

「あたしの初恋は、先生です。間違いなく」

今思えば、朔ねえも、春ねえも初恋を叶えているのだ。あたしだって、叶う可能性があるはずだった。

「最初っから、そう言えばよかったんだ」

先生の勝ち誇ったような笑顔が少しだけ悔しくて、意趣返しの意味を込めて彼の名を呼ぶ。

「好きです。優斗さん」

意趣返しは、想像以上の威力があったようで、彼はびっくりしたように目を見開く。そして、にやり、と笑って、再びあたしを引き寄せた。

ぞくり、と背筋に何か今まで味わったことのないようなものが走り、体が震える。

「いい根性してるな。お前。俺を驚かせようとか」

「……びっくりしたんなら、よかったです」

強がりはずぐに見破られて、『びっくりした』と形だけの言葉を返される。

ずっと近づいてくる先生の顔を見つめて、今度は何か言われる前に目を瞑る。彼の存在が近づいてくるのが分かる。ふるりと震える体を引き寄せて、先生は笑った。

「いい子だ」

吐息が唇にかかる。彼が首を傾けて、そっと触れてくる。雰囲気ですれが分かった。が、そのとき。

「菊池っっ!!」

「藍ちゃん、無事??」

「藍華、つて……えつと、ごめんって謝るべきかな? それとも、そのバ力を張り飛ばすべきかな?? どっちがいいですかね。春華さん、朔華さん」

がつと先生があたしの体を抱きしめなおす。

先生の腕の中から見えたのは、すさまじい形相の春ねえと心配そうな朔ねえ、それから とても綺麗に笑う真紀の姿だった。

「殴り飛ばす!!!」

「えつとお。とりあえず、殴ってもいいんじゃないかな」

「じゃあ、決定ですね」

言うが早いか、真紀はこちらへ歩いてきた。

ぱりつと音が出そうなくらいの勢いで、あたしと先生を引き離す。あたしを春ねえと朔ねえに渡すと、にっこりと再び笑う。

そしてわずかに引きつった顔をした先生のネクタイを掴んで、自分のほうへ引き寄せた。

「先生。誰が手を出していいって、言いましたっけ? この、元腰抜け」

「現在進行形で腰抜けなお前に言われたくないな。ほつとけ。俺は言っただし、藍華はそれに答え……」

「いつから、藍華って呼ぶようになったんですか?!」

言うが早いか、真紀は手を振り上げる。頬を張るのかと思ったが、先生は予想に反して膝から落ちた。

「つつてえー。お前、人が覚悟してんのに、蹴るか? 普通。俺が悪いから、甘んじて受けるつもりでいたのに」

「甘んじて受けるつもりだったんなら、黙ってればいいんじゃないですかね」

先生がこちらに手を伸ばし、春ねえの手からあたしを奪うように引き寄せる。それから髪にキスを一つ落として、それから人が悪そうに笑った。

キヤーという春ねえの悲鳴が聞こえる。

「俺はこいつが好き。こいつも俺が好き。それでいいだろ？」

「「「よくない!!」「」」

それはもう暖かい、季節。

春色の強い、風が吹く。鮮やかな色彩が瞳に映る一番好きな季節。けれど、今年もう一つ好きな理由が出来た。この空気の色そのままに、この気持ちそのままに、大好きなあなたに、『大好き』だと伝える絵を描こう。

そうすれば、あなたを縛れるのかもしれないから。ずっとずっと、この気持ちを伝えられる気がするから。

「うるさいな。お姉さん方は」

「「お義姉さんじゃないっ!!」「」

「先生、あんまりからかわないでください。お姉ちゃんたちが可哀想だから」

先生の頬へキスを一つ。

お姉ちゃんたちの悲鳴が聞こえるけれど、それを無視する。『振られるかも、とか言ってたバカが』という、真紀の声も。

大好きですよ、と先生の耳元で呟いて笑った。

「嬉しいことを言ってくれたから、これやるよ」

そう言って手渡されたドロップはいつもどおりのもの。

彼からもらうそれが、大好きで、笑いながら受け取った。

そのドロップのピンク色は、ただただ甘いだけの恋の色。

第三十二話 『恋色ドロップ』（後書き）

最終話でした。

一応、菊池の尻尾を掴んだということ、完結でした。まあ、これから校正していったり、菊池視点で書いていたりしますが。

あとがき（前書き）

ネタバレに配慮なしの例のあとがきです。ご注意ください。

あとがき

と、いうことで、完結しました。長々と続きましたが、ここに載せてから、一年ぐらいいなですね。書き始めてからは一年半くらいにはなると思うのですが。

最初はもっと甘く、甘く、と思っていたのですが、菊池自体、意外に理性と常識のある人物だったので（書いてみて、初めて知った事実）、そんなにべたべたしないな、とか、生徒との関係は淡泊だろうな、とか思いつつ、書いてました。

藍華ちゃん、始めはもう少し、自覚が早くて告白もちやちゃっとやってしまいうイメージで書いてました。が、菊池の性格が発覚したとたん、大人しくなりました。

で、？くんが好きだったという事実を真剣に考えるようになりました。

最初は、『初恋は隣のお兄さんだったんです』くらいの気持ちだったのに、ここまで重いテーマに。

実はこのお話、前にいくつかのお話があります。

一番初めに書いたのは、真紀ちゃんのお話。

真紀ちゃんと幼馴染の亮くん（『drop』にも名前だけ（？）登場）のお話。彼女が外国に行くまでのお話。佳奈美ちゃんもここに出てきます。

二番目は、春華ちゃんと？くんの話。？くんですが、漢字悩んでいます。？にすると、携帯で見れないという事実を友人から聞いたので、途中から『蒼』に変えました。

が、？で統一してもいいかなあ、と迷い中。だから、お話の中でところどころ変わってます。すみません。あ、あと彼の本名は『？』です。いっつも、『也』がつかないので、誤解されます。

で、三番目は朔華さんと智くんの話。これが量的に一番少ない。そして書いてて微妙でした。……やまなし、おちなし、意味なし、的なの。自分の中で消化不良でした。

また、ここに載せるときに書き直したいなあ。

で、ここまで書いて、やっと末っ子に目が行きました。

一番上の相手は年下、二番目は同級　じゃあ、最後は思いつきり年上がいいな、相手は　それなら、今まで書いていなかった感じがいい　先生でいいじゃない！！

みたいな流れです。

校正にあたり、いくつか明記しておきたいところがあります。

・藍華ちゃんと先生との出会いを一年、春、としていましたが、二年の春、にします。

理由は……先生が何故、藍華ちゃんの名前を知っていたか、ということに関連します。

・藍華ちゃんの友人として出てきた詩織さんとしゅんくんですが、彼らはまた別の機会で書かせてください。

これ以上の登場人物増加は、読者の方々の負担になる気がして……。
意外にこの二人のお話も重いし。

・美術館ネタにあった黒い女の人の絵の話もカットです。これはの伏線です。

・でも美術館ネタ自体は残します。携帯電話の番号交換に必要な

ので。

・真紀ちゃん、佳奈美ちゃんの登場を早くします。詩織さんたちの代わりに、彼女らが藍華ちゃんの友人役です。

校正が終わったら、彼女らのお話も載せるつもりです。今年中はきつと無理ですが。（受験のため）

・後輩君の登場も早くなります。藍華ちゃんが二年になってから入学ということに、なるかな。

ライバルで先生にあせってもらうのが、目的です。尻尾を掴みやすくしてやるっ！

・修学旅行ネタを入れます。

・話の順序が変わります。例を挙げれば、『ベージュ色絆創膏』が『秘色笑顔』のあとになったりします。

・校正中、もしかしたら、閲覧できないっ、みたいなことになるかもしれません。同じ内容が出てるよ！！ということに、なりかねないので。

・藍華さんは二年生からなので、物理はありません。彼女は理系の化学、生物選択者です。美術の授業は一年生までです。

ごめんなさい。プロット一切なしで書いたら、色々変なことになってたので。

ご迷惑は重々承知です。が、私もただ好きなことをするだけではない時期に入り、『勉強しろ！！』といわれる学年になります。今年一杯は校正で一杯一杯かもしれません。

菊池の尻尾を掴むことを諦めるつもりはさらさらありませんが。

あとがきというより、言い訳になってきましたな。

校正作業が終わったら、ここも書き直します。いろいろ裏設定的なものがたくさんあるお話ですので。

素直さだけが愛じゃない(前書き)

お題はFortune Fateさまからお借りしました。 <ht

tp:/fofa.topaz.ne.jp/>

不器用なふたりで七題 5

素直さだけが愛じゃない

素直さなんて、ない。

素直じゃ、ない。

素直になんてなれ、ない。

そんなあたしは、オンナノコとしてどうなんだろう、と不意に思った。

「藍華^{あいか}？」

「あーいちゃん」

「イヤだ、イヤだ。嫌だ！」

「い、かない」

「行かないって、あんた。もう来てるんだって、せんせ……菊池さん」

「そうだよ。先生が来てるんだよ」

「行かないってば！」

ぐっと手に力を入れて、精一杯声を出す。ちなみに手の中にある布は汗で湿ってる気がする。

「大丈夫だって。可愛い可愛い」

「だって私たちの妹だもん。ね、はるちゃん」

「朔ねえも、春ねえも嫌い!!」

その発言に、下の姉がムツとしたのが分かった。怖い、怖いですよ。春ねえさん。

「?、藍華^{そら}を連れてってくれる?」

「春ねえ！」

「春華……」

ほら、?さんだって困ってるし。年頃の女の子を力づくで連れて

行くなって、抵抗あるし。

「藍華が出て行かないと、わたし今日心配で映画なんか行けない」

あ、ずるっ！

「藍華、どうする？ 俺も無理にそんなことはしたくないんだけど
？」

？さん、あたしもイヤですよ。先生の前に引きずり出されるなんて。

「お姫様抱っこ、肩に担がれるの、どっちがいい？」

「どっちも遠慮します……」

気を遣って選択肢を増やしてくれるも、慰めないこと分かっていますか？ ？さん。

「どうするの？ 彼氏の前に別の男にお姫様抱っこで現れるのがいいのなら、それでもいいけど？」

「まあまあ、はるちゃん」

春ねえが凄むので、朔ねえが慌てて間に入る。

「じゃあ、せめて下に何かはかせてよ！」

「いいじゃないミニスカート。よく似合ってるわよ。藍華」

にこつと笑う春ねえは可愛く見えるけど、これ、かなり機嫌が悪い証拠。……ここまで来たら逃げ道はない。

「自分で、行く」

「……いつてらっしやい」「……」

これだから下の人間は辛いんだ。

「で、ぐずった理由ってそれが」

先生はめんどくさそうに（もうこれが普通なのだが）、こちらを見る。

「別にぐずって……」

「行かないって言ったの誰だっけ？」

あたしの発言を滅多に遮らない先生が遮った。怒ってる？

「聞いてたんですか!？」

「聞こえたんだよ」

さらに、とあたしの発言を訂正して、車に先に乗ってしまった。

『早く来い』とも何とも言われないので黙っていると、『置いていくぞ』とだけ言われた。

「どこ行く？」

この発言だっけいつもどおり。いつもならなんでもないとこへ行ったりするのに、今日はそんな気分にもならない。

「どこへでも」

丈の短いスカートを精一杯引き伸ばしてそう言つと、となりからクスリと笑い声が漏れた。

「先生」

「悪い」

不機嫌そうな声をそのままに呼びかけると、先生は笑ったまま…

…というよりむしろ晒ったまま、あたしを見た。

「そんなに变なら、お姉ちゃんたちがいるときにそう言つてください。そうしたら、あたしだってこんな恥ずかしい格好しなくてすむんですから」

夏だろうと何だろうと、こんな露出の高い（とあたしは思う）格好をするのは初めてだし、まさか自分自身がこんな格好をするなんて思いもしなかった。

若い子はするだろうなあ、という感覚だ。自分が着ないと分かってるからこそ『可愛い』と素直に思える。

自分が着るなら露出が少ない、動きやすい、かつ絵の具がついても平気なものを選ぶ。まかり間違つても、どっかに引つ掛けやすいこんな服選ばない。

「似合ってるよ」

「そういうことをいう先生は嫌いです」

素直じゃないな、とは思うが、今更この性格は変えられない。まあ、変える気がないと言ってもいいと思う。

褒められて悪い気はしないし、それが好きな人になら嬉しいだろう。実際、絵を褒められたときは本当に嬉しくなる。

が、それとこれとは別の話。

「で、どこ行きたい？」

「人の目を気にしないところがいいです。こんなのを知り合いに見られた日には、あたし切腹します」

真剣に言い切ると、先生はまた笑った。高校のときからだ、あたしはよく笑われていると思う。……そんなに自分が変だと思わないので不思議だ。

「じゃあこっちなな」

なにがこっち、なのかは分からないが、黙った。変に発言すると自爆するというのは体験済みだ。

ぼんやりと外を見やると、太陽の光がちらりと目を刺した。

「描きたいなあ……」

独り言のようなその発言を、聞いているとは思わなかった。

「先生の部屋って、生活感ないですね。なさすぎ……ショールームか何かみたい」

落ち着いた、モノトーンの配色は少し暗くて、太陽を入れてもこの無機質な感じはぬぐわれない。

「きれい、とか片付いている、とかいう表現が出てこないところがお前らしいな」

かたん、とコーヒーを置かれたので口に含んだ。コーヒーとはいえないぐらい甘い代物。

「おいしい」

「コーヒーって呼ぶのが可哀想だけだな」

ちらりと見ると、深く濃い茶色……黒と表現してもいい色がカッ
プの中に漂っている。いかにも苦くて、美味しくなさそう。

こういうところでも、多分あたしは『差』を感じてしまうんだと
思う。お姉ちゃんたちに言わせれば『いいじゃない、甘やかしてく
れそう』とらしいけど。

春ねえにいたっては『まあ、犯罪じゃない程度の年の差はいいよ
ね。包容力とがありそうで。菊池先生は勘弁だけ』と言っている。
隣にいた？さんの顔が強張ったことを、多分春ねえは気付いてい
ない。？さん可哀想。

「こういう空間にいると、寂しくありませんか」

話題を変えたくて、部屋を見回した。

「いや、家帰っても本当に生活に必要な最低限のことしかしないから。
仕事も学校でやって帰るし。あとは本読んだりするだけ」

見れば机の上にも大嫌いな『物理』や『化学』の文字が。

「よく趣味であれに目を通そうと思えますね」

「俺に言わせれば、よく休日になんか美術館行く気になるな」

どうして一緒にいるんだろうと思うくらい、あたしたちは違うん
だと思う。

理科の先生（何が専門か聞いても分からなかったのであたしの中
ではいつまでも理科）と絵を描くのが好きな、そして理科が苦手な
あたし。

共通点は……、なんだろう。

素直じゃないあたし、どうして今ここにいるんだろう。

「今なに考えてた」

「素直じゃないなあって」

急に聞かれたので、ほぼ条件反射で答えていた。

「っ！！」

口を押さえたのに、言葉はもう返ってこない。取り戻そうとして
はいけない。

分かっているけれど、それでも取り戻そうとした。

「忘れてください」

ダメだ、今日はどうもダメなことが続く。思わぬ失敗で、先生と目をあわせることも避けなくなった。

もう、帰りたい。今なら春ねえと？さんは映画だし、朔ねえは彼氏の花屋だろう。

何も考えず、とりあえず出ようと思つて立つた。そのとき、手を捕まれ無理矢理座らされる。

「今なに考えた？」

さつきと同じ質問なのに、声質が全く違つてびっくりと肩をそびやかした。

この人の声は同級生の声とは違う。『男の子』の声ではない……

『男の人』の声だ。

沈黙が続くのが辛くて、いたたまれなくて、しかし他にどんな方法を取ればいいのか分からず黙つていた。

「藍華」

ここでそれは反則だろうと思う。平田としか呼んでいなかった人が、名前で呼ぶのは反則。

赤くなるのを必死に抑えようとして失敗した。体温が上がるのもお構いなしに、立ち上がるうと抵抗する。

「素直じゃないから？ それで？」

ダメだ。本当にこの声は。

「どうして……ここにいるのになつて」

答えないようにしていたことが、しまおうとしていた言葉が、その声に引きずられるようにして口から出て行く。

出て行った先から、先生に捕まえられる。

「素直なだけじゃ、面白くないだろ？」

多分、これがこの人の余裕。

「素直だけがとりえだと、からかい甲斐がないしな」

そしてこれが、あたしへの救いだろ。

「そうやって余裕そうな顔の先生は嫌いです」

だから、先生の言葉に従って、少しだけ素直じゃない行動を取ってみる。

もしかしたら、自分の心に素直な行動かもしれないけど。そう心の中で言い訳して。

「優斗さん、好きだよ」

素直さだけじゃ足りないというのなら、素直になってなんかやらないから。だから、当分、こんな言葉言わない。

……というか、恥ずかしくて言えない。

「で、どうしてそれからこんなに夜遅くに帰ってくるようになったのかな？ うん？」

春ねえの顔が怖かったとだけ、付け足しておきます。

素直さだけが愛じゃない（後書き）

……うん、最初はこういうノリの本編だったんです。言い訳させてください。

拍手採録（前書き）

拍手に載せてたしょうもないネタ。

基本、本編のイメージとは異なるバカ話。

拍手探録

無法地帯というのは、ここをさす言葉だと思っ……。

「智く〜ん！ もう一本ちようーだい」

「そーうー。好きー」

「せんせー、おいしい？ これ」

三姉妹、上から朔華^{もとか}、春華^{はるか}、藍華^{あいか}はそろって片手に缶を持っている。

そんなにアルコール度の高くないチューハイなるもの。

「朔華さん、もうやめようね、危ないから」

「春華、お前飲みすぎ」

「それはアルコールが高いからダメだ」

対して、男たちはあまり酔っていない。というか、まったく酔えない。

「……どうしてよ……」

三人が三人とも完全に理性を失っているからだ。

ついさっきまで、『あんまりおいしくないよね』と言いながら飲んでた酒を、今は争って飲んでいる。

「いいじゃない！ あたしが成人したんだから。先生はずっと飲んでるんでしょ?!」

藍華は缶を片手に叫ぶ。

「ほつといてよ〜、？。私、もう二十一よ？ 大人よ？」

「いやいや、酒に飲まれてるうちはまだ子供だろ」

春華の言葉に？也が反論するが、次の瞬間には黙らせられる。

「？、何で、そんなこと言うの……」

もう、なし崩しもいいところ。

「智くん、もう一本だけ、ダメ？」

こちらもこちらで上目遣いに負けている。

「だ、だめ」

「本当に、ダメ？」

ほら、もう負けるまであと一步。

「これで、終われる？」

「うん！！」

もう落ちた。

「平田、お前、今日はじめて飲んだんlar? もう、絶対駄目だ」

「ほっといてください！ あたしを『平田』と呼ぶ菊池先生に用は
ありません！ 学校に帰ったら良いじゃないですか。菊池先生」

こちらはケンカ一歩手前。雲行きが非常に怪しい。

「平田！」

「また呼んだ！ 菊池先生、あたしの何なんですか！！」

ベこり、と缶がへこむ。それを菊池は取り、ゴミ箱に放った。

「あー、はいはい。恋人です」

何気なく言うと、藍華は満足したように笑い、菊池に抱きつく。

「よくできました」

にこーと笑って、……そのまま落ちた??

「寝落ちかよ」

小さな突っ込みも届かぬまま。

「智くん、大好き！！」

「ありがと、どうせ明日には忘れてるけどね……」

苦笑いの智と上機嫌の朔華。

「????。おんぶして」

「ああー、はいはい。お前、そのくせ、直せよ」

しゅしゅ(だけど嬉しい)?也と、春華。

「おい、二階に上がれ」

不機嫌そうな菊池と、藍華。

そんな少しはた迷惑な、三女の成人日。

「もうお前には酒飲まさない」

「朔華さん、お酒弱いなあ。可愛い」

「酔ったら甘えるだけ甘えて、忘れるんだ……こいつら」

三人の男の気苦労を知らぬまま、夜は更ける。

酔いネタ。この三人は酒癖が悪そうでしたんで、書いてみました。
一番の苦労人は、普段甘えてこない春華の世話をする？也くんです。
(ご愁傷様)

一番楽しんでるのは智くん。

SOMETHING FOUR

Something old, something new
Something borrowed, something
blue

And a silver sixpence in your
shoe (BY マザーグース)

何か一つ、古いもの 何か一つ、新しいもの
何か一つ、借りたもの 何か一つ、青いもの
そして……六ペンス銀貨を靴の中に……

古いものは、母からの指輪。祖母からのもらい物らしい。

新しいものは、白い長手袋。

借りたもの、幸せな結婚生活を送る姉から真っ白のハンカチを。

青いもの、衣装を止めるガーターにリボンを結ぶ。

六ペンス銀貨、廃止されたので随分と姉たちが探していた。……
これも借りものらしい。

「そろそろお時間です」

「あ、はい」

白いドレスは小さい頃から憧れていた。でも、自分は果たして着れるのか少し心配だった。

姉たちが幸せそうにしているのを見て、いつかあんなふうになれたら良いとは思ってた。

「……結婚はとても遠くて、手の届かないものかもしれない
って、思ってた。」

「大丈夫？」

姉が心配そうに聞いてくる。大丈夫、と返したいのに緊張から声が出なかった。

「『誓います』って言えなきゃ、結婚できないよ？」

もう一人の姉が、笑って言った。それに笑い返すと、大丈夫と返される。

「もしダメでも、帰ってくる場所はある、って言ったら……縁起悪
いかな？」

その隣に、素敵なだんな様がいるくせにそんなことを言う。

「優斗さんは、大丈夫だから」

答えると、のろけてる、と姉二人は笑った。

「まあ、私たちが用意したものがあから、大丈夫だよ」

「何渡すか、本当に迷ったもん。わたし」

「まあ、大丈夫だよ。結婚おめでとう」

よくシンク口する二人だったが、今日もそれは健在だった。

「お父さんとお母さんは？」

「ああ、最後の要も嫁入りしちゃうから泣いてるらしいよ」

「わたしのときは『覚悟はしてた』とか言ってたのに」

姉の言葉に少し涙ぐんでしまった。

それを見て、怒った顔をするのは下の姉だった。

「お化粧落ちちゃうでしょ？ 新郎にそんな顔見せちゃダメよ」

そういいながら、一番泣いてたのはその姉なのに。

「春ねえだって、泣いてたじゃない」

「それは……？ が変なことというから」

『一生、後悔させないから』

そんなこと言われて、泣かない姉ではないな、と思いなおした。

「これまで、お世話になりました」

そう言うと、二人の姉は一齐に抱きついてきた。

「もう！ 我慢してるのに」

「やっぱりあんなやつに藍華を渡したくない！！」

二人の言い分に笑いながら答える。

「だって、好きなんだもん」

「分かってる（わ）よ。そんなこと」

それからやっと部屋から出た。

「藍華、おめでとー」

下の姉の夫が笑う。

「おめでとー」

上の姉の夫は少し苦笑いだ。さっきの言葉が聞こえていたらしい。

「ありがとう」

「春華、昨日、本当に泣いてたからなあ」

「朔華さんは笑ってたけどね」

二人の言葉を聞き、少し想像通りなことが起きていたことを知った。

「結婚、後悔しない？」

そういうと二人は驚いた顔をして、そして最高の笑顔を向けた。

「「しない」「」

断言する二人に励まされて、前へ進む。

父親の顔を見ると、本当に不意に泣きそうになった。

「お父さん」

「娘が三人というのは……やっぱり悲しいな」

ほそりと言うので、組む腕に力が入った。

「幸せになるからっ」

「ああ、お前のお姉ちゃんたちもそう言ったよ」

つくづく三姉妹はたちが悪いな、と少しだけ笑う。

「いい人だから……っ、何の心配もしてない」

嘘ばかり、そう思ってしまう。心配で、仕方なくせに……。

扉が開けば、きつと目に入るのはあの人だけ。

心配事も、不安な気持ちも、少しだけ忘れるのだ。

だって、この日の姉たちは二人とも幸せそうで、誰よりも綺麗に写ったから。

HAPPY WEDDING

きつとここから始まる物語だってあるはず。

藍華ちゃんの結婚式でした。お姉ちゃんたち二人が一番張り切りそうだったので……。

『something four』は西洋から長く伝わる花嫁さんの言い伝えです。四つのものを身につけて結婚すると幸せになるとか。

『白雪姫』

王妃様 朔華さん（『三姉妹シリーズ』） 鏡 菊池先生

ある日、それはそれは綺麗な王妃様が鏡に向かってこう唱えました。

「鏡よ、鏡よ、鏡さん。世界で一番美しいのはだあれ？ 春ちゃん？ 藍ちゃん？」

あー、智くんも肌綺麗だよな。あつ。？くんもかっこいいし」

それは一番といいませんよ、朔華さん、と突っ込む人は誰もいない。

その代わり、めんどくさそうな声が聞こえた。

「はあ？ そんなの人の主観だろ。たかだか鏡に聞くなよ。俺、今テストの採点中だし」

「ええー。せんせ……じゃなかった鏡さん。ちゃんと答えなさい。私は怖い魔女の王妃ですよ」

全然怖くありませんよ、という突っ込みは入れないことにする。

「ちゃんとやってくださいよ。そうでなかったら、お話進まないんだし」

「じゃあ、藍華」

事も無げに言うので、王妃様は小さく眉をひそめた。

「そこはもつところ、なんて言うんですか。」

雪のように白い肌、とか黒檀のように黒い髪、とか褒めてくださいよ。うちの藍華ちゃんを褒めるんですから」

怒らないんですか、朔華さん、とついに隣から声が聞こえた。

あまりにも遅いので、狩人役の少年が出てきたのだ。

「だって、智くん。先生がすっごくやる気ないんだよ？ ダメですよ！ー！」

「藍華の髪、黒髪じゃないしな。しかも白雪姫って当初七歳の女の子だろ」

今でも犯罪くさいのに、これ以上年齢下げてどうする、と突っ込む鏡。

「あー。そうですね。今でも十分、犯罪っばいですもんね！　口リコンって疑われてますもんね」

「池平、卒業したからって態度がでかいぞ」

もはや白雪姫の題名はどこに、と突っ込む人間はいないのだ。白雪姫役が誰かも本人たちは知らない。

「きく……。鏡さん、その藍……。じゃなかった、白雪姫のほうが私より綺麗なの。まあ、許せないわ。こ、ころ……」

台詞がとまる。

「朔華さん？」

「智くん、私、言えないよー！　殺しておしまいなさいなんてー！　そもそもこの人が王妃に似合わない誰か言う人はいなかったのだろうか。」

オマケ

「ねえ、？、わたしが白雪姫役なのに、何でみんなで藍華の話してるんだろっね」

「いや、俺、一人七役だし（小人役）」

「春ねえ、どうやってキスの真似するの？　（王子役）」

「先生もね、台本手元にあるんだから、白雪姫って答えればいいのよ！」

何で、藍華って言うのよ。まあ、確かに？　藍華のほうが可愛いし？　美人だし？　何せ恋人だし？

わたしなんてね、？がいなきや彼氏なんてできなかつただらうっしね

「おーい、毒りんごに酒入れたの誰だあー！　」

春華が酔って、絡んでくるぞ」

「あ、俺。それ」

「池平、お前馬鹿だろ」

「ごめんねー。藍ちゃん。殺しておしまいなさいって言いそうになつてー。こんなだめなお姉ちゃんを許してー」
「は、はあ？ 朔ねえ、大丈夫？ 智さん、お姉ちゃんを何とかしてください」
こつして劇は崩れていく。

白雪姫が城から出ることもなく終わってしまった。

……鏡が先生と決めたときから、お話進まないとは思っていたけれど。

『人魚姫』

「わたしはしない」

「えー。どうして」

春華の言葉に、智と朔華が声をそろえる。

「だって、？はそんなことしないもん」

「のろけかよ」

今度は優斗と藍華が笑った。ちなみに話に出てきた春華の彼である？也は赤くなって下を向いていた。

「藍華がすればいいじゃない」

「え？ あたし？」

今度は春華が藍華を指名した。自分の顔を人差し指で指し、大人数の優斗が少しかつと傾ける。

隣の優斗が少しだけ苦い顔をした。

「えー。いいけど」

「……いいの？ (かよ)」「」「」

他の一同が目を丸くした。すると藍華がにこつと笑う。

ああ、可愛い、と妹バカな姉二人は思う。もちろんそんな彼女たちの性格を知っている彼氏、sは苦笑っていた。

いつものことなので、もう慣れてしまっただらしい。

いざとなったら、自分たちは妹以下だろうという自覚があるのだ。それでもいいと思ってしまう自分たちの馬鹿さ加減にも呆れている。

「だって優斗さんだったら、助けたあたしのこと忘れないもん。だからあたしが泡になる必要もない」

もしかしたら、人魚から人間にならなくてもいいかもしれない。

「海にいたってきつと見つけてくれるよ」

「あつそ」

にこつと可愛らしく笑う藍華の顔を見て、春華は眉をひそめて気のない返事をした。もともと姉と妹に変な虫がつくことを嫌っていたのだ。

それがすぐに改善されるとは思わない。

「何それー。朔ねえはどう??」

「うーんとねー」

あごに人差し指を当て、上を向いて思案する姿はまだ幼い。六人の中で二番目に年上だと、知らない人は信じないだろう。

どう見たって優斗？也 智 藍華（三女） 春華（次女） 朔

華（長女）の順だ。

「智くんは私が助けなくても大丈夫だよー。あ、でもときどき海面にできて会えるから、きつと仲良くできるよね」

「朔華さん、もう、大好き」

「勝手にやってる」

？也のつつこみは的確かつ厳しかった。

オマケ

「先生」

「あ？ 何だ、いつきか」

「今回、どーしてあんなにノロケばかりなんですか？ そもそも人魚姫、劇してないじゃん！！」

「だって」

「だって？」

「彼女バカであり、彼氏バカだから」

「あ、もういいです。あてられる話なんて聞きたくないんで」

「ああ？！ お前が聞いてきたんだろ」

「ノロケなんて、一分で充分です」

ノロケ、ノロケ、ノロケ。

お腹いっぱい。

『ラプンツェル』

「絶対ダメっ！！」

「何で」

「何でも」

台本片手の春華が、藍華に向かって叫んだ。台本を取ろうと、藍華はもがくが、春華は逃げ回る。

春華の方が小さいので、高いところへ持っていくという手は通用しない。

「春華」

「？はどいてて」

嗜めようとする？也は簡単に押し切られる。？也はしょぼん、と肩を落として近くのイスに座る。『嫌われちゃったのー？』と空

気を読まない朔華が慰めるように肩を叩いた。

「何やってんだ」

「優斗さん」

「菊池先生は黙っててください」

やっと登場した優斗にも春華は冷たかった。

「わたし、絶対反対です。『ラプンツェル』の姫役が藍華で、王子役が菊池先生とかっ!!」

「あ、知ってるー。それ」

春華の激昂の理由がやっと分かって、朔華は口を挟んだ。

「あのねー。昔、あるところに子ども出来ない夫婦がいたの。

それで、ある日妻がやっこのことで妊娠するんだけど、魔女の家のラプンツェルが食べたいとかわけの分からないことを妻が言い出して、夫は魔女の家を探りに行くの」

「あー、お姉ちゃん」

春華が止めようとする。この姉、いまいち言っていることと悪いことの境界線があやふやなのだ。しかもこういうことになると思わない。

「夫は魔女に見つかるんだけど、魔女と自分の子どもと交換に好きだけラプンツェルを採っていいって言われるの。それで、生まれてすぐ女の子は魔女に引き取られちゃってー。」

で、女の子の長い髪を梯子に魔女は毎日上る。

……髪が伸びるまでどうしたのかな？　もしかして、絶食？　しかも髪で上るって、絶対痛いって」

「朔華さん??」

智も止めようとする、が。

「で、ある日王子様が見初めて、同じ方法で、ラプンツェル、あ、女の子の名前ね、この子に会いに行くの」

そろそろやめさせた方がよくないですか、皆さん。

「でー。ある日、ラプンツェルがにん……」

「わあー！。そこまで、もう分かった。先生にはやってもらわない

から」

「智が焦って、朔華の口をふさぐ。春華はきつと菊池をにらんだ。

「非常にお似合いではあると思いますよ？ 七年間も失明したまま行方不明の王子様？ ご自分のしたことへの責任も取らないなんて最低っ！」

「おいおい、俺はちゃんと」

「わあーっ。生々しいこと言わないで！！」

「お前が無責任とか言うから」

「まだまだ続く、よく分からない会話。」

オマケ

「じゃあ、誰がする？ 藤田がよくない？ 絶対、変なこと出来ないし」

「あー。いいかもー。？くん、優しいからね」

「あの、朔華さん。褒められてる気がしないんですけど」

「褒めてるよー」

「褒めてないよ、きつと」

「こんな感じの雰囲気ばかりだ。」

初恋印象（前書き）

久々に『drop』更新。他のヒーローと違って、一人称が難しい。

初恋印象

ねえ、教えて。どうして、名前を知ってたの？ どうして、名前を呼んだの？ 覚えてたの？

ねえ、教えて。

「優斗さん」

「んー」

彼女が自分のことをこうやって呼ぶのは、たいていめったに聞かないお願いをするときだと知っている。それに気付いたのはもう随分前だったが、今でもそれは彼女に知らせていない。

知られたら、もうこんな甘い声で自分の名を呼ぶことはないだろうから。

「知りたいことがあるんですけど」

彼女が聞くなら、何でも話そうと思う。……それがたとえ、昔のいたーい失恋話だろうとも。

「どうして」

彼女が小首をかしげる。

柔らかそうな、色素の薄めな髪が肩から零れ落ちる様は、彼女の描く絵のようだと思った。光を吸い込んだ髪は天使の輪を作り、毛先がくるんとカールを作る。

それに指を絡めると、彼女は恥ずかしそうにうつむいた。

「どうして、あたしを知ってたか、聞いてもいい？ ほら、初めて会ったとき」

彼女が思う、『初めてあったとき』は二年生の春。ああ、自分はタバコを吸っていたところを目撃されたのか、そう言えば。

「あのとき、優斗さん、あたしのこと名前で呼んだでしょ？ まだ

……授業担当でもなかったのに」

化学準備室を開けた一人の少女、ノートを持って、こちらをびくりしたような顔をして見つめていた。大人びた顔立ちだったのに、随分と幼い表情だった。

それを思い出し、クツリと喉を鳴らす。

すると彼女は気分を害したように、眉を寄せた。そして流れている髪の毛を耳にかける。そういう仕草はやけに大人びて見えて、今度はこちらが眉を寄せた。

……「つたく、こつちの気も知らないで。」

「名簿見て、覚えてた、じゃ通用しないか？」

「通用しない。優斗さん、なかなか生徒の名前覚えてなかったじゃない」

そうだった。どうも興味のない人間の名前を覚えるのは苦手で、生徒の半数は一ヶ月以上経って覚えてたんだ。

もっとも、彼女の顔と名前は、一目見たときから覚えてたけど。

「あー、それはな。まあ、色々あるんだよ。俺にも」

「それを、聞いているんだけどな」。答えられない？

いつの間に、そうやって自分を惑わせることができるようになったんだろう。小首をかしげ、髪を耳にかけて、にっこりとこちらへ笑いかける。

ぐらぐらと、堅いはずの口が軽くなりそうになる。大体、俺はいつたい、何をそんなに隠そうとしてるんだ。

「答えられない、こともない」

「なら教えて。お願い、優斗さん」

彼女の畏に嵌ったふりをするのもいい。

耳元で甘く囁いているつもり、俺を陥落しようとして一生懸命な彼女の、精一杯に乗ってみるのもいいだろう。可愛い彼女の畏に嵌っているふりをして、畏に嵌めてみるのもいいだろう。

「分かった。来いよ、藍華」

どちらが、畏に嵌ったのか。そんなことは分からない。

それはまだ桜の咲いている日だった。

春休み課題の提出率はすこぶる悪く、『出しすぎだろ、あのおっさん』と先輩教員の悪口を呟く。その先輩教員は『悪い、今日妻の誕生日なんだ』と笑い、さっさと帰ったのだ。

その際、『多分、放課後になって持つてくる奴いると思うから、ここで待つてくれる?』と言った。……あのおっさん!!

ちつと舌打ちをして、懐からタバコを出す。イライラしていたせいか、単に注意散漫だったせいも、タバコに火をつけた。

あー、喫煙室は確か四階だったな、なんて今更気付いても仕方ないことを思い出した。

そのときだ。

「失礼しま……」

ぴたり、と言葉が止まった。タバコに添えていた指が動く。驚いた顔の少女がいて、こちらも『ばれたな』とタバコから口を離す。

「「あ……」」

と、見事に八モる声が準備室へ響いて、瞠目した。

どうして今日に限って生徒が来るんだ。どうして今日に限って、準備室に入ってすぐ見えるところに座っているのか……どうして、あのおっさんは今日ココへいないのか。

そんなことが頭をめくった。

そして目の前の少女に見覚えがあつて、目を見開く。そしてそのまま呼びかけた。頭の中に残っている記憶と、照合させるように。

「平田」と。

振り向いた彼女は怪訝そうな顔をしている。

それはそうだろう。去年自分は彼女のクラスを受け持っていなかったし、まして去年も今年も彼女の担任ではない。

とっさに自分の名を呼ばれるなんて、夢にも思っていなかっただろう。確かに、自分でもそう思った。たった一度、名前を確認した生徒の名前がとっさに出てくるなんて思いもしなかった。

「さて、どうしてだと思う？」

「えっ。何で急にやめるのっ！ 楽しみに聞いてたのに」

彼女が不満そうに声を上げる。

……や、まあ、彼女の言う『初めての出会い』を語ったわけだけど、肝心なのはこの前の話だった。そう、俺の言う本当のところの『初めての出会い』を。

彼女が覚えてもいない、何気ない出会いを。

「聞いても仕方がないだろ？」

「仕方なくない！ どうしてか、すごく気になるっ」

むーと頬を膨らましてこちらを見る彼女は、いつもどおりまだ幼かった。

それは彼女がまだ一年生だったとき。

夏の補習のときだ。自分は早々にプリントを配り終え、暑い教室から逃げ帰ってきていた。

何気なく、窓の外を見れば同じように補習のプリントを配っている化学教師が一人。

どこのクラスも一緒だな、と思いつつ、机においてあるコーヒーを一口含んだ。それからため息を一つ。どうして補習に来るような

点数を取るんだらうか。

このくそ暑い中教室でプリント学習をするくらいなら、自分は期末前に勉強する。

それができないから、ここに来てるんだという事実も忘れて、今教室でブツブツ言っているであろう生徒たちに悪態をついた。

お前らだけじゃなくって、俺も嫌だ。こんな暑い中、お前らに付き合っけてプリント採点とか。

まあ、幸い化学準備室には扇風機があり（職員室は冷暖房完備）、今はもう一人の化学教師もいないので、それを独り占めしているわけだが。

「職員室に行こうかな」

そう呟いてすぐ、生徒に『プリント終わったら、化学準備室な』と言ったことを思い出した。

「くそっ」

職員室と言っておけばよかった、と思いタバコに火をつける。先輩教師はそれを見ると眉をひそめるわけだが、（曰く、『妻が嫌いなんだ、タバコ』）今はいいし。

ふわり、とタバコの煙が教室へ広がる。

健康に悪い、と言われても、税金が上がるうともなかなか止められるものではないのだ。特に生徒の相手をしていると、ストレスがたまる。

「何で俺、教師になっただんだ……今更だけど」

もう新人と言われる年齢でもなくなつた。それでも未だに時々思おう。

何のために自分はこの仕事に就いたんだらうと。特別子供が好きなのでもない。人へ教えるのがそんなに上手いわけでもない。

やりがい、全く感じないわけじゃないが、教師じゃないといけないという理由は見当たらない。

そう思いつつ、ばやいてみるとタバコを吸うのも面倒になってきた。じりっと揉み消して、扇風機の風を強める。

髪がなびいて、汗ばんだ首筋に張り付いていた髪が取れる。不快感も少し軽減され、前にかかる髪を掻き揚げてネクタイを締めなおした。早いヤツはそろそろ来るだろう。

「菊池さん、ちょっといいかな」

「はい？ 何ですか」

先輩教師はその人の良さそうな顔をほころばせて、こちらを見る。……嫌な予感を感じるのは俺だけだろうか。いや、そんなことはないはずだ。何かすごい不穏な空気。絶対面倒ごとを押し付けられる。

「頼みがあるんだけど、あのさ。もう一人来るんだけど、そいつのプリント受け取ってもらえない？ 採点はするからさ」

『俺、これからちょっと妻とデート』と言いつつ、いそいそと帰る準備をしているおっさんこと先輩教師は、こちらを見て再びにこっと笑った。

「あの、もう二時間ほどたってるんですけど。まだ来てないやつがいるんですか？ ってか、それ、もう帰ってるんじゃない」

プリントといたってA4のサイズで、補習の人間用なんだから教科書を駆使すれば一時間もかからない内容のものだ。

二時間って言うことは、もうサボって帰ってるんじゃないだろうか。

「いや〜。それはないな。そいつは帰る人間じゃない。まあ、さすがに二時間かかるとは思ってたけど」

「誰ですか、それは……」

「んー、ああ、菊池さんは知ってるんじゃないか？ ほら、平田春華の妹だよ。今二年生の、なかなか優秀な」

ああ、と生返事をする。

名前は分かるが、顔がいまいち思い出せない。が、なかなか優秀

だったのは認めよう。しかし、その優秀な人間の妹がどうしてそんなんだ。姉さんに教えてもらえばいいだろうに。

「出来が悪いんですね」

「いや、理科全般がダメなだけで、他は姉同様なかなかだぞ。ま、姉には劣るが、どうしようもないくらいバカというわけじゃない。理科がてんでダメなわけだけど。サボるようなヤツじゃあない。

美術部員で、いい絵を書くことでも有名だったはずだ。ほら、あの坂田先生が認めるくらいだから。平田 藍華、面白い子だと思うけど」

真面目だからねえ、と苦笑い、じゃっ、よろしく、と言い置き颯爽と帰って行った。

「あー」

呼びかけてみてももう遅い。

ルンルンと音が聞こえてきそうな足取りの彼は、もうこちらを気にしている余裕もないらしい。まったく、何がそんなに嬉しいんだか、と言ってみると、なんだか僻みにしか聞こえなくてやめた。

それからその理科だけダメな、少女のことを考えてみる。

「平田、藍華ねえ」

不思議なことに、その名前は妙に頭へ残って、染み付いた。

「失礼しまー……す。あれ、あの」

「ああ、聞いている。プリント、机においとけばいいから」

「は、い。失礼しました」

平田、藍華。

それが、彼女の名前。

「なんだかあたし、結構ヒドイ評価だったんですね」

「ま、そうだな。今から思えば、全く過大評価ではなかったわけだけど」

おっさん……の言うとおり、理科全般は全くダメだったわけだ。
「ひどい。あるときだって、ちゃんと勉強してから受けたのに。テスト」

「ああ、お前の担当してんだから分かってるよ。真面目にしても、補習に引つかかる頭なんだって」

「優斗さんっ！！」

怒る彼女の手を引き、腕の中へ閉じ込める。さて、畏に嵌ったのはどっちだったんだろう。

「教えてやったんだ。今度はこっちの質問」

「えっ。な、何？」

ひくつと彼女の喉がなる。緊張しているのか、体がこわばる。それにニヤリとしてしまう自分は、ヒドイ人間なのかもしれないけれど、仕方ない彼女が可愛いから。

彼女の髪に指を絡ませ、そつと近づけて抱きしめる力を強める。

「なあ、藍華」

彼女が名前で呼ばれることに弱いことは知っている。

耳元で囁くと、赤くなって口をパクパクと閉じたり開いたりすることも知っている。それがとても……可愛らしいことを、よく知っている。

「お前はいつ、俺を好きだって自覚した？」

ピクン、と体がはねる。

「そつ。そんなの優斗さんはいつなんですか」

それでも気丈に聞き返してくる彼女が楽しくて、つつい耳元に寄せた唇を首筋へ移動させた。

「俺？ そつだなー、いつかな」

自覚をしたのは、彼女とよく話すようになった随分と後。

その前から、予感のようなものはあったけれど、まさか自分が生徒に恋するはずがないと思いついていたから、自覚に結構時間がかかったのを覚えている。

それでも、今から思い起こせば、彼女の名前が一瞬で頭に入って

きたときから、『もしかしたら』はあったのかもしれない。

運命というには、随分と陳腐で頼りないことではあったけれど、それでももし、そう呼ぶことを許されるのなら、自分はそれを『運命』と呼びたい。

「優斗さんが言ってくれたら、あたしも言っ」

「ん？ そんなこと、言うようになったんだ。藍華は」

ちゅつと音を立てて、彼女の首にキスを一つ。

シャツからのぞく、鎖骨から背中から、うなじから目に入るところ全てへキスをする。それでも花はつけない。赤い花はよく目立っし、見つかったが最後彼女が外出禁止になるかもしれないから。

……何せ敵はあの、妹大好きな姉二人だ。油断は出来ない。

「ほら、早く言わないとこのままだぞ」

「~~~~っ。バツ、バレンタインデーっ!!!」

大声で言っつて、彼女はくるりと体を反転させて、胸へ顔をうずめた。耳まで真っ赤に染めて、随分と恥ずかしかったらしい。シャツを握る手の力は強く、下へ引っ張られる。

「バレンタインデーに、先生に告白した子がいて……それで、自覚しました。彼女の絵を描いて、自覚したんです。先生が、好きだな、っつて」

いつの間にか、名前は『先生』に戻っていて、敬語になっていて、あの頃へ帰ったようだなと思った。

「とても、悲しくて、辛くて、でも諦め切れなくて、？さんのときのほうが、どんなによかったんだろうっつて」

「お前の初恋は俺だろ？ 藤本は関係ない」

自分は、大人気ない。

たった一言、彼女が他の男の事を言い出すだけで、その男への想いが『初恋だった』というだけで、何とも言い難い不快感に襲われる。

彼女の恋心は、自分へ向けられる分だけでいいと。

「そうだけど、やっぱり」

やっぱり、憧れなのかどうかなんて、今も分からないままで。

もう消えてしまった想いを、確かめる術はもうない。今ならば、恋がどういふものか分かった今ならば、それがどういふ意味を持つ感情なのか分かるのに。

そう言つて、彼女は笑つた。

「それが、どういふ感情が分かつたら、いいのかもしれないですね。先生」

先生呼びはそのまま、敬語もそのまま、それがどうにも寂しくて、彼女を再び抱きしめた。

「俺の自覚も、それぐらいだよ。きっと」

恋心は、多分ずつとずつと前にあつたはずだけど。彼女を大切だと想う気持は、ずつとずつと心の中にあつたはずだけど。

「お前よりは、早かつたかもな。恋に落ちる瞬間」

「えー！ そんなことはない。絶対にない」

あたしだつて、恋に落ちたのは自覚するずつと前だよ！！ 優斗さんよりは、絶対に早かつた。

「本当か？」

「本当」

「なら、いつ？」

うつと詰まつて、彼女は視線をさまよわせる、そしてきつとこちらを睨んでから、口を開いた。

「餌付けされたときから！！」

それなら、きつと勝てる。自分が恋に落ちたのは多分、初めてあつたその瞬間。

もしかしたら……名前を聞いたその瞬間かもしれないから。それでも何も言わず、『あたしのほうが早いでしょ？』と言つ彼女へ、キスを一つ、贈つた。

それは自分だけの秘密。自分のほうが、恋に落ちるのは早かつた。

過去形文字（前書き）

『淡色便箋』の中に出てくる手紙の全貌。全く誰も見たくないと言
うのは百も承知でやります。

先生の失恋話だと思ってくだされば。（本人は否定しますが）

先生は一回、手酷く振られればいいと思う。（作者としてあるまじ
き言葉）

ブログより、加筆修正あり。

過去形文字

菊池先生へ

卒業式の日こんな手紙を渡すんだから、中身は大抵想像がつくんじゃないでしょうか？

これまでのお礼か、はたまた……、ときつと思ってるんだろかな、と思いながら書いています。でも先生のことだから、読んではくれないと信じています。

先生、変なところで律儀だから、そのまま捨てるなんてこと、ないと思います。ライターで火をつけて、即抹消だと、私は泣きますよ？

この手紙の意図、正直に言えば後者、でも建前は前者と言うことにしておきます。先生、一年間本当にお世話になりました。

突然、今日になって、卒業式の前日になって『もう会わないんだなあ』という実感がわいてきました。

もう先生のところまで課題を持っていくこともないし、日直の仕事を手伝ってもらうこともないし、口止め料にアメをもらうこともなくなるんだな、と思っています。

クラスの中で唯一最後まで敬語だった私を、先生はどう思っているのでしょうか？ でもちゃんと理由があるんですけど、ここには書きません。びっくりするだろうから。

先生に忠告することが一つ。

タバコは学校で吸わないように。見つかると絶対困ると思います。というか、クビ？ うちの校長先生大っ嫌いだから。

アメ一つで、生徒が口をつぐむなんて思ったら大間違いですよ、

と見事に餌付けされた私から忠告しておきます。

説得力ない、って笑ってます？ でも、クビになってから後悔しても、遅いでしょう？

それとも、『俺がバレるようなへマするとも？』って笑ってるのかな。

遅くて早い一年間でした。悩んで、先生にあたって、怒られてばかりだった気がします。こう書くと、結構な問題見みたい。

書くと、いろんな出来事が思いだして、少し大変です。すごく長くなりそう。

でももう、これで全部終わるんですね。明日で。先生が読むでる日で。

先生のことを考えるのも、これが最後だ、と思うと感慨深いです。

と、ここで本来の目的を書いておきます。いまさらながら緊張している自分がいて、目の前に先生がいなくてよかった、と心から思っています。

目の前に、もし先生がいたら、私はきつと恥も外聞もなく、泣いていると思うから。絶対に泣かない、と思いつつ、泣いてしまおうと思うから。

私は先生のが好きでした。

驚いてますか？ それとも結構、バレバレだったかな？ でもそれも最後です。

先生、今まで本当にありがとうございました。

先生がクビにならないことを心より願いつつ。

一介の生徒より

P・S

いつか先生が、この手紙のことを忘れてくれることも、祈つて
ます。

アメ、私も好きになっちゃったみたい。もし会うときがあれば、
この手紙の『口止め料』ということでお渡しします。

過去形の告白は、男の手から滑り落ちて地に付いた。

男はそれを拾い上げ、タバコを取り出す。それを口元に持っていき、眉を寄せて片付けた。変わりに出したアメを口に含むと、まるで苦いものを口に入れたかのように渋い顔をする。

力のはいった手の中で、紙は歪み、ぐしゃりと音を立てる。

それが合図だったように、男は校門から中へ入った。

「追いかけるかよ……」

だって手紙の中に綴られていたのは、過去形の言葉。

自分に向けられて、もうどこにも残っていない、過去の中だけで
生きるもの。

それを突きつけられる勇気も、確かめる気持も、ここにはないの
だから。

過去形文字（後書き）

く、暗い。

何、この人。暗すぎる。……ってか、何年も引きずるんなら、
き
っぱり諦めるか振られるかすればよかったのに。

波色嘲笑（前書き）

先生が藍華ちゃんを追いかけるまで。

平手打ちの真相……って感じですよ。へタレな先生が書きたかっただけです。すみません、カッコ悪いヒーローばかり好きで。

代わりに強がり、というかカッコいい女の子が多いです。

……この短編を書き上げるのに、一週間以上かかったのは、ここだけの秘密です。だからテンションがまちまちなんです。

先生の口調なんて、覚えてないよーと言いつつ書いた覚えがあります。

渋色嘲笑

「お久しぶり。『菊池先生』?」

「随分な口を利くんだな、黒田」

「につこり笑った彼女は、学校こいを出て行く前と全く違う。

目の中に冷めた色を残したまま、それでも道から外れないようにと真面目な生徒の仮面を被っていた彼女はどこにもいなかった。いるのはただ、妖艶に微笑む女性としての彼女。

彼女は外国あつちに行つて、自分の中の『何か』を自覚したんだらうか。あの頃のように、前髪を下ろして、ひたすら目立たないようにと俯いている彼女ではなかった。

まあ、あの頃同様、冷え冷えとした声を持つてはいるが。今の彼女は髪を上げ、ドアに寄りかかるようにして立っていた。

「あら、敬意を払っているつもりだったんですけど? お気に召さなかった?」

「なら言い直します。お久しぶりです。『腰抜け』さん。藍華を放つておいて、今更ここで何してるの?」

彼女はいつか、あなたと私は似ている、と言った。

何が似ているのか、まだ分からないが、間違つてもこの臆病さではないだろうと思ってしまう。臆病者は、相手の臆病に寛容なはずだ。事実、俺は他人のそういう部分を見ないようにしているから。

「何つて」

「藍華の描いた絵を見て、藍華のことを思い出して、感傷に浸つて? それで? あなた、何を望んでるの? 藍華をどうしたいの? 思い出の中の藍華を、愛してるの?」

痛いところをつかれて、つい顔を歪める。そうじゃない、とさらにと返せばいいのに、『彼女』を失ったことは予想以上に痛く、顔に出た。喪失感、というものを久々に感じた。

するり、と黒田が寄りかかっていたドアから離れる。

近づいてくる彼女を睨みつければ、『怖い顔しないでください』と笑われた。その笑顔は柔らかく、一瞬だけ彼女が友人へ向ける笑顔と一緒に見えた。

黒田はこちらの目の前に来て、先ほどと全く違う種類の笑顔を見せる。

「私は、あなたの幸せを願うほどお人よしではないんです。

……だけど、友人の幸せを願うくらいには、友達思いですよ。友人の恋が叶えばいいと願う程度には、人並みの愛情を持っています」

彼女の絵を見て、黒田は笑う。まるで自分の一番痛いところをつかれたように、切なさをにじませた。

もしかしたら、もしかしたら彼女もまた……弱い人間なんだろうか。全く、そうは見えないけれど。

「もし、あなたが、手紙をくれた女の子のように藍華を見てるんなら、今すぐ忘れて。

そんなことで覚えていられたら、藍華に迷惑だから。今まさに追いかけてようとしてるのも、それじゃあ無駄でしょ？ 藍華の恋が叶ったって言うより、あなたの後悔がなくなったただけだわ」

「そうじゃっ」

答えられない自分を見て、黒田は笑った。馬鹿にしたような色もなく、怒ったような色もなく。

「じゃあ、何？」

黒田は笑って首をかしげる。

あなたの心の中にある感情、それって一体、何？

自分から離れていった彼女を、わざわざ追いかけて引き止める、その想いつて何？

その心に、何があるから、彼女を側に止めときたいと思うの？

そう、聞いているようにも見えない。

「分かんないのに、藍華を引き止めて、何が楽しいの？ 先生」

私も分かるよ。相手のことを、『どう思う？』と聞かれて戸惑う気持ち。相手を傷つけると分かっているのに、相手を弄んでいるよう

にも見えてしまう行為。

彼女は厳しい言葉の中に、同情の色を含ませた。

「分かんないから、引き止めるんだよね。本当は。」

もし、手を放してしまえば自覚したとき、手に入らなくなった事実
に耐えられないから。だから、卑怯でも、その人を傷つけても、引
き止めておきたくなる」

その気持、ちゃんと分かるよ。

彼女はそう言って、自分の心の中にあるものを暴いた。何でもな
いように、全てを知っているとでも言うように。優しく、残酷に一
番痛いところをついて笑った。

「分かるけど、藍華は止めて。それは、藍華を傷つけることにしか
ならないから。他の人間なら、私には関係ないけど、藍華はダメだ
よ。先生。他の人間なら、黙ってるけど」

藍華だけは、絶対にダメ。傷つけないで、お願いだから。

「私の友人が、私がしたことと同じ理由コトで傷ついて欲しくないの」
「随分と、勝手な言い訳だな。黒田」

自分も、お前も、腹が立つほど、自分勝手だ。

「知ってます。自覚もあります。……だけど、それで友人が傷つく
のは絶対に、ヤダ」

自分は、彼女をどうしたいんだろう。引き止めて、どうする？

『平田 藍華』という人格を、どう思ってる？ どうすれば、自分
は満足するんだろうか。

「そんなの……」

ああ、今まで自分はどうして、こんなに頑なに気持を否定してい
たんだろう。

認めてしまえば、ひどく簡単で、温かな感情なのに。今まで感じ
たことのない、柔らかな想いなのに。

「俺は、あいつに恋してるよ」

いくら否定しても、『恋かもしれない』という思いは拭いきれな
かった。

いくら違つと言い聞かせても、彼女と接触するのを止められなかった。それは多分、紛れもない『恋』というものなのだろう。

「だけど、引き止めるのは怖いな、今更」

彼女に触れるのが、怖い。引き止めて、拒絶されるのがひどく怖い。拒絶された後、自分は一体どうなってしまうのだろうか、不安に体が揺れそうになった。

「そう」

黒田は一度だけ優しく笑い、次いで手を上げた。

パン

一際大きな音がして、じんわりと痛みが頬を伝う。

その痛みはすぐに熱さへと変わり、頬を熱する。手のひらを当てるとそこだけ熱く、ああ、殴られたな、と人事のように感じた。

これで罪が消えるんなら、どんなにか楽なことだろう。これで全てが許されるなら、どんなにか安い贖いになるだろう。

……だけど、これは罰でもなんでもないんだ。

「このっ、腰抜けっ！！」

彼女は泣きそうになっていて、そこでようやく我に返る。

「私はっ、私はもう後悔しても、こっちに帰って来れないっ。……」

亮の、側にもう、いれない」

それが彼女の『腰抜け』の理由だろうか。

「いくら悔やんだって、こっちにいたいと思つたって、あの頃のことを思えばこれが最善だつて分かつてる！！　これが、一番いい方法だつたって、今だつてはつきり言える！」

それが、悔しい。

それが『正解』だと分かっているから、完全な後悔にはなりはしない。間違つていれば、『あの時、こうすればよかった』と悔やめるはずなのに。

「またそれで後悔して、先生、それでいいんですか？」

平手じゃ、すみませんよ。後悔して、一人で被害者面して。叶わない想いを漂わせて、感傷に浸るなんて許さない。

「後悔するって分かってるなら、今すぐ藍華に会いに行けばいい。会って、それで振られればいい。それが嫌なら、無理矢理にでも引き止めればいい。それだけでしょ」

何がそんなに、難しいの？

ただ『好きだ』ということが、まだ難しいというの？

「言えるときに言わないと、本当に後悔しますよ。先生」

泣いたって、言えなくなっただときにはもう遅いんだから。

「私みたいに、強がったって、……腰抜けには変わらない。そうでしょう？」

バンっ、と彼女を越えて、扉を開ける。

走る足が絡まって、今にもこけそうになる。震える足は、搾り出す吐息は、何に向かっているのかさえ、自覚するのが難しい。

だけど自分は、彼女に伝えるべきことがあるはずだ。

まだ伝えていない『想い』があるはずだ。

それが受け入れられるかどうかは、全く別の話だけど。伝えなければいけない気持なのだろう。

「あんたがもし、やるべきことをやったなら、いくらでも謝ってやるわよ」

後ろから聞こえてきたその声はもう、不敵で不遜な態度だった。

それに笑い返し、足を速める。どうか彼女を引き止められるように、と。惹き止められるように。

「バカみたい……」

『正解』を選んで、後悔している自分が、ひどく惨めに見える。

『間違い』を選んで、『彼』の隣で笑っていたいと思っっている愚かな自分があることを自覚して、唇を噛んだ。

「好きなら、そういえば言いただけなのに」

好きだと言えば、変わっていったのだろうか、彼と彼女のように。

泣きそうになった瞬間、再び美術室の扉が開いて、慌てて振り向いた。今は泣きそうだから、もう菊池にだけは見られなくなかった。一番似ている彼には、泣き顔を晒したくなかった。

「見つけた……、やっと」

だけどそこにいたのは、菊池ではなく彼で、我慢していた涙がこぼれる。

「どうやって、見つけたの？」

「さつき、チラッと見えたから」

ああ、自分は菊池と同様で、相手から逃げられはしないんだと再認識する。

それと同時に、後から後から涙がこぼれて、嗚咽が漏れて、顔を手で覆った。惨めな自分が、彼の目に入らないように。

「どうした？ 真紀」

「後悔、してた。今、後悔しても仕方ないことを、心の底から悔やんでた」

行かなきゃよかった。

亮の側にいればよかった。

好きだと言えばよかった。

ずっと、一緒にいたいと願えばよかった。

「どうして？」

「うらっ、羨ましかったから！！ 一緒にいられる二人がっ！！」

自分で焚きつけたくせに、羨ましくて仕方なくなった。

一緒にいられない自分が惨めで、いたたまれなくなった。だから、

言わなくていいことを言っつて、菊池を傷つけたのかもしれない。

「一緒にいればいいだろ、そんなの」

何でも無いように言いつつ、亮がどんなに考えてその言葉を出したか知ってる。

知ってるから、その手を取るなんて愚かなまねは出来なくて、自分の手を握った。彼の手に縋りつかないように。理性で押しとどめた。

「俺は、ずっと後悔してる。お前を止めなかったことを、この一年、ずっと後悔してた」

戻っつておいで、と何でも無いように言っつから、笑っつてその手を握っつて放した。

「亮」

ねえ、もう少しだけ強がらせて。

もう少しで終わりだから。もうすぐ、帰っつて来れるから。

だからもう少しだけ、強がっつていさせて。腰抜けでいさせて。：

…臆病者のままで、あなたを好きだと思わせて。

渋色嘲笑（後書き）

……え？ 真紀ちゃんたちの恋路？ あんまりしっかり考えてないんですよー。

一応書いたけど、あんまり納得しなかったし、もう5、6年前に書いたものなんで、今更披露できる代物でもないし。

いつかつ、いつかしっかり考えて書き直したい。（元は単なるラブロメディーだったんだけど、書くうちにシリアスになった）

あと、数話書いたら一応完結。

正直お姉ちゃんたちが書き足りないのので、あたらしく二人の物語を連載として載せるか、『drop』の番外編として載せるか迷っています。

謝罪と制裁（前書き）

……どこまで書いてもきりが無いんで、一応今回ので完結ということにさせていただきます。

またネタが浮かんだら、載せたいなあ。

が、わたしが書くものは、どうしてか甘くならないので、ご注意。先生と真紀ちゃんの絡みを書くのが一番楽しいからしょうがないのかな。

謝罪と制裁

「先生」

柔らかい声。そう、これは外行きの声だと知っている。回りの先生方は、気付いているのかいないのか、『おお、黒田』なんて親しげに声をかけている。

「菊池先生に用か？ 何だ何だ、仲いいのか？」

「いいえー。有田先生、そういう話好きですよ。わたしの好きな人知ってるのに」

有田先生、あんまりつつこみすぎると、そのうちざっくり刺されますよ、と声も出さずに主張する。まあ、あの先生なら、生半可な嫌味は通じないか。

「美術室開けてください。藍華の絵を取りに行くんで」
「につこりと可愛らしい笑顔で小首をかしげ、彼女は『女』を演出する。」

「平田の？ ああ、まだ取りに来てないな。頼まれたのか？」

「いいえ。好きなの、一個持ってっていいって。もう帰りますから。イギリス（あつち）に」

そんなの嘘だつて分かってる。彼女の本当の目的が何なのか。分かっている、逃げられないから、仕方なく鍵を手にとって席を立ち上がる。その後ろから、小さな声が聞こえた。

「おめでと。腰抜け卒業したらいいですね？」

ああ、こいつはこいつ奴だよ。

「で、何しに来た」

そう言った瞬間、黒田は頭を下げた。

「ごめんなさいっ。殴っちゃって」

許してくれます？

「……他の奴なら騙せんのにな」

「だから嫌いです。菊池先生」

涙目でこちらを下からのぞきこむ彼女にやりと笑うと、小さな舌打ちと共にいつもどおりの声が返ってきた。

「一応謝りに来たんです。自分の発言ですから」

「全然嬉しくないけどな」

美術室のイスに座りながら、黒田を見つめる。すると小さく苦笑いして、彼女もイスへ座った。

「で、付き合うことになったんですか？ それともすっぱり、きっぱり『好きでした』って言われたんですか」

二人にとって、『過去形』はもつとも辛いもの。

もはやそこに、影も形もないのだと、思わされる『過去形』の言葉が一番その身に沁みる。だから彼女はわざわざ言ってるのだ。『好きでした』と言われたのかと。

「言われてねえよ」

「じゃあ、付き合うことになったんですか？」

あいつから聞いたんじゃないのか？ と問えば、顛末まであの子が詳しく語ってくれると思いますか？ と真顔で返された。

なるほど、あいつが語るわけないか、と思い直し、なら俺なら話すと思ってるのか、と少々おかしくなる。

「いや」

「イヤって何……??」

声が少しだけ、低くなった。ぐっと、部屋の温度が下がった気がした。

「あいつ、まだ高校生だから」

「だから、何ですか？ まさか、4月1日になったら言う、何て甘いこと考えてませんよね」

甘いこと、と言ったかこいつ。

「黒田、お前なあっ」

「また藍華が変なこと考えて、振られるとか思ってたらどうするん

ですかっ」

「……」

しばらくの沈黙のうち、もう一回、聞きなおす。今聞いた言葉が嘘ではないか確かめるために。

「黒田、もう一回」

『振られる』？ 誰が、誰にだ。

「藍華が、あんたに、ですっ!!」

だん、と机が叩かれた。

「何て言っただんですかっ!？」

「4月、1日に言おうと思って」

「思ってた？」

何で俺は、10程も年若なこいつに怒られてんだ？

「電話しよ……」

言い終わる前に、今度はグーで殴られた。

「ばっかじゃないの?!」

「おい、黒田」

「あんたみたいなのが好きな、藍華の気が知れないっ。今まで散々傷つけておいて、それでまだ待たせるんですか?! ふざけてんのっ。この腰抜けっ!!」

……ただ好きな人に好きというだけが恋じゃないと言うことは知っていた。ただ友人が最難関って。

call (前書き)

短編のファイルから出てきました！。書き始めた当初に、こういうその後になればいいと思って書いたものです。

……ので、ちょっと雰囲気違う?? かもです。この二人でキスさせるのは好き。何か可愛いから。

なんてことないデートだった。

大学帰りの先生の部屋、それが毎日のデートコース。何気なく手渡された鍵を片手に部屋へ急いだ。エレベーターが来るのを待つことさえ出来ず階段を利用する。

まだ少し寒さが残る中、体がほんのり温まった。

『菊池』の表札を見るとどきりとする。わけもなく汗が出て、鍵をさすのに戸惑った。何からくる不安なのか、分かっている。

九歳、年が違つということ。先生がどう、とかいうのではなく、多分自身への不安だと思う。

「で？ お前は人ん家の前で何やってる？」

「ひゃあ！」

「色気ねえー」

突然後ろから声をかけられて飛び上がった。そして振り返る。

そこにいたのは紛れもなく今考えていた人物だった。少し着崩したスーツがだらしなくて、本当に教師か疑ってしまう。

これで生徒指導？ 指導される生徒が気の毒だ。

「鍵持った不審人物が誰かと思つたら」

何？ 毎日こんなことしてんの？

「し、してません！！」

そういうと先生は”ふーん”と笑った。どう見ても信じていない目だ。ときどき先生はこういう態度をとる。あたしの気持ちや考えていることなんてお見通しの癖に知らないふりをする。

いつもより、先生の部屋へ入ることに抵抗があった。

玄関に入った瞬間、壁に押し付けられた。

「先っ」

「で？ 俺の部屋を空けるのに手間取ったのはどうしてか、教えてもらおうか？」

ぴたりと体同士がくっつく。吐息がわずかにかかり体をこわばらせた。

顔の両側にある手のせいで、顔を背けることさえ出来なかった。追い詰められている自覚は一応あったが、それだけだった。

「何を、迷ってる？」

トン、と頭の上に壁が先生の右腕が押し付けられた。それにより顔がさらに近くなる。甘い声が私を逃がさないというように、耳元で囁かれた。

「あたし、みたいな子どもを相手に」

最後まで言えなかった。

気づいたら唇をふさがれていて、いつもよりずっと深い口付けを受けた。目が回ってわけが分からなくなって、そして膝がガクリと崩れたことでやっと自分が先生に支えられていたと知った。

ずっと床に座らされ、先生があたしを放した。それを少しだけ寂しく思ってしまう。

「……悪い。大人気なかった」

くしゃり、と髪をかきあげる。そしてメガネを外して、靴箱の上においた。いちいち様になっていく姿が妙に憎たらしい。

「今日、少し離れてる」

そう宣言して、あたしから距離をとった。そうはさせまいとスーツの裾を引っ張る。先生が苦々しい顔をしてこちらを見た。どこか苛立っているような、困っているような、そんな顔だった。

「お前な。自分が子どもだ、子どもだ、言うけど、周りから見たらそうじゃないんだよ」

「え？」

「子どもだと思ってんなら、こんなことしたいって思わないって言ってるんだよ」

ひょいっと軽々と、本当に軽々と抱き上げられた。いや、持ち上げられた。靴を脱がされ、一度しか見たことのない寝室へ。以前入ったときは、部屋案内だった。

ボスン、と生活感のない部屋に音が響いた。シーツが冷たい。目の前にはすぐ先生がいる。発言は許されない。抵抗なんてもつての外。そういう鋭いまなざしだった。

「先せ……」

口を開いた瞬間口付けられる。

先ほど同様、眩暈がするような口付けだった。思わず抵抗するが、あつけなく頭上で拘束される。手際が、よすぎる。先生は腕一本であたしの両手首を掴んでいた。

「その目、誘っているようにしか見えないと思う俺は、ただの変態だな」

「なっ」

触れる、奪う。

上手く息継ぎが出来なくて、やり方なんて先生は教えてくれなくて、ぐったりとした。もうムリ、そう伝えたくてネクタイを引っ張った。思ったより簡単に締まる。

「苦しいよ、バカ」

先生が笑う。

そしてネクタイを緩めると、しゅっと簡単に外れた。ベッドに長いネクタイが落ちる。

「先生……」

「さつきから何度も。いつまでそれで呼ぶんだ。俺は犯罪者にでもなった気分になる」

ああ、そうか。この人もまた不安なんだ。

「優斗さん」

そう呼ぶと嬉しそうな顔をして、そしてあたしの首筋に口付けた。"甘い"と自分の唇をなめる。扇情的って、こういうことを言うんだ。そう思うと喉がなつた。瞳が潤んでいるのが分かる。そして

自分から初めて口付けた。

吐息も、何もかも落とさないとというような、長い長い口付けの始まりだった。自分からこんなことをするなんて、一年前では考えられないだろう。

二人で互いの瞳を見つめる。そしてまた、唇が合わさろうとした瞬間、電話がなった。

「電話」

「放っておけ」

取り付く島もない。が、鳴り止まない。

「ああ、クソ」

ベッドから立ち上がり通話ボタンを押……。

『藍華!! 帰ってきてないんです! どういうことですか。ま、さかつ。手、出したんじゃ』

「平田うるさい」

受話器は確か、ハンズフリーにはなっていなかった、ということは、姉の声が大きすぎるんだ。

『あと五分でそっちつくんで』

「はあ、お前今どこ?」

『車です! ?の!』

ダン、という電話の向こうからすさまじい音も聞こえる。

「迎えに来てるのか」

『当たり前でしょ。襲われたらどうすんの?!』

「いや、一応、合意のうち……」

『聞きたくないって言ってんでしょ!!』

うわ、もう、ダメだ。帰ったら外に出してもらえないだろう。自分。

会話が筒抜けで怖かった。そして先生は半ば無理やり電話を切り、こちらへ向かってくる。

「あー。生殺し」

「ス、ミマセン」

小さくなると彼は笑い、あたしの髪を撫でたあと、その先へ口付けた。それだけで今まで何をやっていたのかを思い出す。自分がさつきしたことも。

「まあ、少し進歩したし、バカなこと言わせないようにしたからヨシとする」

さてさて、先生が報われる日が果たしてくるのだろうか、というお話。

call (後書き)

報われない彼が好きです。

もちろん、色っぽい彼も好きですけどね。彼、基本的に可哀想な人のポジションなんで。

t r i c k o r t r i c k ? (前書き)

拍手用を書いて、そのまま載せずにファイルに沈んでたものの発掘。いくつか書き下ろしてみました。

『お菓子くねなきやイタズラするぞ?』なんて可愛いものじゃありません。

trick or trick?

『花束とイタズラ』

イベントごとは稼ぎ時であって、それはここ『Le petit fleuriste』（小さな花屋）でも同じこと。ハロウィン仕様に飾られた花達が飛ぶように売れていく。

可愛らしいデザインのカードには『Trick Or Treat?』と書かれていて、小さく笑った。

「何が悲しくて、実家でバイト……」

「文句ある?」

「いえ、お母様」

わざとらしい返事をしつつ、昨日の晩話した彼女の声が浮かんでくる。彼女の家では毎度毎度、こういう行事を見つけては楽しんでいるらしい。

『智くんも来る?』という誘いはとても魅力的で、ぜひ願きたかったんだけど。

「……行きたかった」

「この時期の客を、あたし一人で捌けと?」

母一人にこの大勢の客を任せるわけにも行かない。父はすでに役立たずで、レジだけ任せている。……花屋の癖に、センスの欠片も持ち合わせていないのだ。

「親父のアホ」

「いいの。可愛いから」

にこつと笑う母に、笑い返す。『可愛いから、いいの』とはまさに自分が彼女に思っていることと同じだ。

他人に『天然だ』『世間知らずだ』『何だかんだと言われても関係ない。可愛いから、いいのだ。』

「朔華さんに会いたい」

「終わったら会えるでしょ？」

そうなんだけどさあーと零しつつ、入ってきたお客さんに笑顔を向ける。俺だつて彼女にお菓子とか花束とか送りたい。

「夕方じゃないとゆっくりできないじゃん。夜になったら平田が怖いし」

彼女の朔華さんも平田だけど、ここでの平田は彼女のことじゃない。朔華さんの妹である、平田春華のことだ。姉妹至上主義の彼女は、自分の姉妹に悪い虫がつくことを、他のこと嫌う。

「ああー。ほら、騎士^{ナイト}だし」

「それ、一応彼氏の役目」

彼女にだつて、一応付き合っていると見える幼馴染がいるはずであるのだが、どーもそれとこれとは話が違つらしい。

「門限？ 5時」

とさりと答えてくれた朔華さんは可愛かつたが、正直それって今時小学生でもないと思うんですよ。朔華さん。

「だつてね、はるちゃんが危ないから早く帰つて来るんだよつて」

誘拐されないのになえ、と呟く彼女を見て乾いた笑い声を上げたのはいつたい、どのくらい前だつたか。

「あんたつて本当に春華ちゃんに警戒されてるねー」

「まあ、『元』遊び人ですから」

その罪は、きつと重いんだろう。彼女にとっては、姉が許しても許せないことなんだろう。それは当然だと思つし、簡単に許されたら、逆にこつちが色々考えてしまう。

だから、彼女くらい敵しくてもいいんじゃないかなあ、と思うんだけど、やっぱりこういふときは身に沁みるわけで。

「傷に塩塗りこまれた気分」

「それは自業自得だよ」

ははつと他人事のように母は笑つた。『いつたい誰に似たのかねえ。お父さんはあんなに一途だつたのに』と頬に手を当て幸せそう

に語る。

……余計なお世話だ。

「さっさと終わらせて平田家に行く」

「いつてらっしゃい」

間に合わないのは百も承知。だってあと少しすれば会社員さんが多くなる時刻で、『こんな日くらい、妻に……』なんて言う人を見れば、選ぶこちらもやる気が出る。

『そういうところ、好きだよ』と言ってくれる彼女の信用を無碍にする真似はできない。たとえ今日彼女に会えなくなるうとも。

「……それにしたって」

「お疲れー。残念、間に合わなかったね」

時刻はすでに9時を回っている。今からお邪魔するのは気が引けるので、メールだけにしようか。ああ、でも。

「花 渡したかったなあ」

花を渡すと、まるで蕾が開くみたいに笑う彼女が好きなのだ。自分が好きなものを、当然のように好きでいてくれる彼女が大好きなのだ。だから、今日彼女のために作った花束を渡したかったのに。

暖色、特にオレンジと黄色の花を使って作ったそれは、柔らかな彼女をイメージしたもの。

少し小さめな気もするが、ジャック・オ・ランタンが軽やかに動くそれはきつと彼女も気に入ってくれるだろう。

オレンジの薔薇の花言葉に込めたのは、ちょっとしたメッセージ。

『無邪気』と『愛嬌』であらわされるそれに、黄色い薔薇も入れる。

『無邪気で愛嬌のあるあなたに恋しています』

それは、いつもなら素直に伝えられないけれど。

『家族の信頼と絆に、小さな嫉妬をしています』

それは、絶対に言えないけれど。

暖色の花と、濃い緑の包装紙。母に『かぼちゃみたいね』と笑わ

れたけど、ねらいはむしろそれなので喜ぶべきことだろう。

「あーあ、会いたかったなあ」

「うん。会いに来たよ」

空耳まで聞こえ始めたよ。本当に重症だよなあ。

「智くん。こんばんは。トリック、オア、トリート!!」

ひょいっと長い髪を揺らして、それとともにスカートも揺らして、黒い服を着た彼女と目が合う。

「なっ。朔華さん!!」

「えへへー。来ちゃった」

来ちゃった、じゃない!!

「一人で?! 危ないでしょ??」

「ううん。?くんが送ってくれた」

はるちゃんが頼んでくれたんだ。送っていくだけでいいからって。

「藤本が」

ああ、そうだ。平田が大切な姉を夜遅くに一人で出すわけがない。しかも今夜は仮装しているんだから、余計可愛いし。

「こんばんは、朔華さん」

「こんばんは。智くん。可愛いでしょー、魔女さん」

あのね、はるちゃんとあいちゃんがすごく可愛いんだよ。それでね。今日のお夕飯ね、かぼちゃ尽くしで、あ、お菓子もあるんだー。パンプキンクッキー。

それでね、それでね。

「トリック、オア、トリート」

「はい。お菓子じゃないけど、お花」

こっちのほうが好きでしょう? と問うと、見る間に明るくなる顔。ああ、可愛いなあー。やっぱり。

「わあー、ありがとう。可愛いー。かぼちゃだ」

「ごめん、平田。限界。」

「もう、朔華さん大好き」

ぎゅっと抱きしめて、頬にキスをして、くすぐったそうにする朔

華さんのあごを掬い取る。こういつときだけ、彼女は勘がよいらしく、につこりと笑って目を閉じた。

「教えたの、そういえば俺だっけ。」

「大好き」

「ごめんね、朔華さん。お菓子たぶんくれるんだろうけど、イタズラさせてください。」

「私もだよー」

花言葉で伝えて、言葉で伝えて、あとは……行動で伝えるしかないでしょう？

お菓子がイタズラか、なんて選ばせません。どうせならどっちもあげよう。

『イタズラなんて』

できません、イタズラなんて。なんたって彼女は姉妹の中で一番料理が美味いから。

「お姉ちゃんー？ 朔華ちゃん？ まだあー？」

「もうちょっと待って、もう少しで智くん来るかも」

ぴしり、と春華の身体が硬直する。そしてお玉を持ったまま、ぎぎと音がするくらいぎこちなく、こちらを向く。

「？、来るの？ 池平」

「いや、店が忙しいだろう」

適当に話をするものの、あいつのことだ。どうにかして来ようとしても不思議ではない、はずである。彼女はあくまで否定しているが、あいつはあいつなりに朔華さんを大切にしている。

それは疑いようもない事実だし、そろそろ認めないわけにもいか

ないだろう。いくら頑固な彼女でも。

そうは思うものの、こちらとしては何が悲しくて彼女の機嫌を損ねなければいけないのか。大人しくあいまいな返事にとどめておいた。

「朔華ちゃん、あいつは来ないよー。来れないって昨日言ったんでしよう?」

「言ったけどー」

来るかもしれないって、言ったもん。

いじいじとスカートの裾をいじりつつ、朔華さんは言う。三姉妹は揃いも揃って、魔女の衣装に身を包んでいた。何でも、海外ドラマで魔女三姉妹のドラマがあったらしい。

それにちなんで、ということだろうか。よく分からないけれど。

朔華さんは膝丈のスカート。ふわふわと広がる裾は、本人の年齢からしたら少々幼いのだが、彼女が着てみれば存外似合っている。

対照的に少し長いのは春華で、こちらは飾り目が少なく、機能的着替えてから夕食を作ると計算した上での判断だろう。何と言うか、主婦だなあと思ってしまう。

「お姉ちゃんー。帽子どこー?」

「箒の上にあるでしょー。よく見なさいよ。まったく、浮かれてるんだから」

頬を膨らまして末の妹に文句を言う春華。それでも短めなスカートと膨らんだ袖が可愛らしい、とさつきから妹に目じりを下げっぱなしだ。

お前はどごその父親か。

「先生、来るかな」

「約束してんなら来るでしょ。ああー、もう!! じつとしとかないと怒るわよ!!」

ダン、と騒がしい二人を一喝してから台所に戻る。父親兼母親と言ったところか。

「春ねえが怖いー」

「はるちゃん、機嫌悪いねえ」

二人の姉妹がちよっとだけ笑った。

「ただいまー」

「おかえり。ありがとう。寒かったでしょ？」

朔華さんを池平の家まで送り届けて帰ってきた。帰りはやつが送ってくるだろうと見越してのことだ。春華は『池平の家に恨みはないが、行きたくない』と拒否し、家にいたのだ。

「あれ、藍華ちゃんは？」

「先生とデート」

「許したのか？」

「口で言い負かされた」

悔しそうにいじける姿がなんとも可愛いのだが、ここでそれを言ってしまうと部屋に籠ってしまうので何も言わない。代わりにぽんぽんと頭を撫でて、ソファの隣に座った。

「？」

「ん？ 何だ」

「『trick or treat?』」

「はあ」

静かに、まるで何でもなしのように呟かれたその言葉に目を丸くする。まさか彼女がこの行事にのってくるなんて。しかも姉と妹がうるさく言うから仕方なく、ではなくて。

「お菓子、いるのか？」

「んー。まあ、そんなところ」

そう言いつつ、まったくと言ってやる気はなさそうだ。どちらかと言うと、暇だから言ってみた、みたいな。そういう口調。心底お菓子がほしいわけじゃないんだろう。

「何でまた、突拍子もない」

「持っていないなら、イタズラね」

くるり、とソファの上で彼女はいきなり向きを変える。それから俺に向かって手を伸ばしたかと思うと。

「うわっ」

思いつきり抱きついてきた。

「どうした?!」

「イタズラ」

くすぐってやるーとまるで幼子のようにじゃれ付いてくる彼女。おかしいぞ、こいつ。今のこいつは明らかにおかしい。

「春華?」

「だって」

しゅん、と落ち込むように頭を垂れる。

「誰もいなくて、寂しかったんだもん」

妹は彼氏に取られるし、彼氏は姉と一緒に外いるし。

「お前も来ればよかっただろう?」

「池平の顔なんて見たくもない!!」

お前それ、仮にもクラスメイトに向かったの発言じゃないだろう、とは突っ込まずにおく。ここでそれを言うと、地雷になりうる。

「じゃあ、俺も、trick or treat?」

「え」

彼女の動きが固まる。

「?、お菓子いるの?」

「ないのか?」

「ないよ。さつき自棄食いしちゃったもん」

何かあったかなあーと席を立とうとする彼女の腕を捕まえる。ちよどいい口実ができたというところか。

「なあ、春華」

「ちよつと待って! あるかもしんないから」

「今ないならいいよ」

イタズラするから、と言うと彼女は面白いくらい赤くなった。

「何っ、何!? イタズラって」

握られている手を外そうともがきつつ、少しずつ距離をとろうとする彼女の腰を引き寄せた。カアっと一気に赤くなる彼女が愛しい。「なあ、目瞑れば？」

囁きかけるように耳へ顔を寄せると、ぎゅっと効果音が出そうなくらいの勢いで目を瞑る。こういうところだけは素直だから困る。自製のタイミングが。

ここでキスするとそれだけじゃすまない気がして、瞼にキスを一つ。

「ふえ？」

「ん？ なんかあった？ イタズラ、だけど」

期待してた？ と言うように首をかしげると、また一段と顔を赤くした彼女が『もうっ！！』と怒って腕から抜け出した。

うん、どうせなら口にしたかったのはこっちのほう。だけどそれをしたが最後、お前に嫌われそうな気もするから、今はまだお預け。今度、明るいときにしような。

さもなければ、誰かが来て止めてくれるような、他力本願だけど。

「？の馬鹿！」

「ふうん。春華、やり直そうか？」

「結構ですっ！！ お皿片付けるから手伝って！！」

赤い顔を隠すように台所へ行く彼女の後を追う。もう少し、お前のペースに付き合ってもいいよ、と思いつながら。

こういうイタズラの仕方もありますか？ どうせなら、盛大にしたかったんですけど。

『イタズラかイタズラ』

こういうとき、自分と彼女は年齢が違っただなあと実感する。

「先生ー？」

「ああ、ちよつとな」

タバコに手を伸ばそうとして、禁煙中だと思い出す。タバコは家にあるだけで、持ち歩いていない。絵が大好きな彼女は、その絵の天敵であるタバコをひどく嫌う。

先生の匂いとしては好きですよ、と笑いつつも、その煙が絵の近くに漂うとむっとしたような顔をする。分かりやすいんだから、素直にやめて、と言えばいいのに。

「お前らの世代は、こういうの普通にするんだなあ」と

「先生の世代はしないんですかっ！」

驚いたように声をあげる。自分の学生時代の思い出を記憶から引っ張り出すのが、元々興味がないのか本当に時代のせいなのか、八口ワインをした記憶などない。

有名になつてきた最近でも、どこか他の国の出来事として遠くから見ているだけだった。

「勿体無い！ お菓子ももらえるのに」

「甘いもの、苦手なんだよ」

そう言いつつ、彼女からもらったクッキーは食べてしまった。美味しかった、と思う。

「春ねえはそういうところも得意だから、美味しかったでしょう？」

「他人の功績を我が物顔で語るな」

ただし、彼女の姉が作った代物だったが。

信号で止まったので、ちらりと彼女の服装を見やる。あれだけ嫌がっていたのに、今では少し慣れてしまったのか、丈の短いスカート履いている。後ろの席には、必要のないのに箒と魔女の帽子。

ちなみに今彼女が履いている靴も魔女仕様だったりする。あそこまで先が丸まっているわけではないが、こちらから見れば十分奇特な服装だ。

袖の膨らんだ服から伸びる手にはひじ丈の手袋。寒そうだな、と

上着を貸してやるも、『車の中は平気ですよ』と笑顔で返してきた。
「お前、寒い。見るからに」

「そうですか？ うーん、そうでもないですよ？」

ひらひらと、スカートを持ち上げて、意外に暖かいです、と笑う。

「スカート丈、短くても平気になったのな」

「え？ ああ。丈？ 素足にこれはいやだけど、今日は下にストッキングあるから」

黒いそれを指差しつつ、笑う。素足はダメだけど、履いてたらいいのか？ 出してんのは一緒なのに？

「女心をわかつてませんねえ」

「余計なお世話だ」

くすくすと笑う彼女を横目に、また車は走り出す。平田春華には遅くならないうちに戻すと言ったはいいが、どこに行くのか決めてもない。

ただあの姉と向かい合っている空間が耐えられなかったのだ。

何と云うか、妹を汚す男、と言う目で見られていた。まあ、事実だから反論のしようもないわけだが。

「先生」

「あ？」

彼女が、少しだけ笑った。

「あんまり、春ねえを嫌わないでくださいね」

「嫌ってるのは、お前の姉さんだろう？」

ふるふる、と首を振る。幼い表情をして、こちらを向く。こういうとき、自分は何ていたいけな娘に手を出したんだ、と苦いものが広がるわけだ。

ああ、子供に手を出したな、なんて後悔しない自分が憎らしい。

「お姉ちゃんは、ちゃんと先生のこと信用してますよ。じやなきや、夜に出してくれない」

だから、ねえ、大切なお姉ちゃんを邪魔だなんて思わないで。

「思ってたねえよ」

「だって、先生ときどき、お姉ちゃん避けるから」

それは、多分見透かされるのが怖いのだ。あの鋭い瞳で、声で、今までのことを非難されるのが。

彼女が大好きな姉に、彼女を一番愛する姉に、『あんたはあの子の傍にいるべきじゃない』なんて言われるのが。

「嫌ってないし、避けてもない」

「本当に？」

「信用ないな、俺」

確かに、今までの行動で信用しろというのが無理な話なのかもしれない。

「そうじゃ、ないんですけど」

齒切れの悪い彼女は、こちらの視線から逃げるように窓の外を向いた。それから、きゅっとスカートの裾を握る。そこで握ったら、微妙に捲れるっていう自覚はないわけだ、こいつには。

厄介なお子ちゃま。そんなお子ちゃまに、翻弄される自分は愚かだ。彼女が、ただの子供に見えない自分は、飢えているんだろうか。

「藍華」

ひくつと彼女の肩が震える。滅多に呼ばないその名を、口にするのは彼女を縛り付けたと思うってしまうとき。どこにも行かせないように、どこにも逃がさないように、愚かにも彼女の自由を奪い取るようにする。

「せんっ」

「名前、呼べよ」

囁く声が甘くなる。彼女の目がわずかに潤み、誘うように揺れる。これを無自覚でやっているのなら、本当に始末に終えない。

「藍華、ほら」

「優斗、さん」

彼女の甘い声は震える。まるで誘惑するみたいに。イタズラ、するみたいに。

「藍華。『trick or trick?』」

「へ？」

イタズラか、イタズラか。どっちにしても、待っているのは甘い……。

「選択肢、ないじゃないですか」

「じゃあ、イタズラだな」

どこかの駐車場。まわりに人はいない。そのことに今更気づいたらしい彼女は、顔を赤くしてうつむいた。

「先生、ズルイですよ。お菓子、上げたのに」

「お前の姉さんが、な」

あごに手をおき、上を向かせる。潤んだ瞳は、こちらを映して、閉じられることなく見つめ続ける。薄っすらと開いた唇に口角が上がった。

「言えよ。藍華。どっちが、ほしい？」

お菓子が、イタズラか？ そんな選択肢あると思うなよ。

「お菓子」

「イタズラ、な」

一度、唇をあわせる。イタズラにもカウントされないであろう、小さな口付け。

「優斗、さん」

魔女の仮装か。俺にはさながら小悪魔にしか見えない。

「目、閉じないのか？」

またふわりと口付けて、彼女の反応を見る。蕩けるような瞳は、見続ければこちらがもたないと知っているのだろうか。

「物足りないって、顔してる」

「んなことねえよ」

物足りないのは事実。イタズラなんかで満足できるか。

彼女の頬をなで上げて、わずかに上がる肩を引き寄せて、シートベルトなんて無視して抱きしめる。苦しげに寄せられる眉だとか、何かを求めるように開く唇だとか、そんなものに翻弄される自分のほうがよっぽど。

「ガキか」

「え？ あたし？」

「いや、俺のこと」

キスを再開しつつ、ちらりと車の時計に目をやる。どうせならシンデレラみたいに、12時きっかりに魔法が解ければあと1、2時間には余裕なのに。

「お前を、帰したくないって」

そう思ったただけだよ。

選ばせてやれる余裕なんてない。いつだって、彼女に夢中だから。

trick or trick? (後書き)

ハロウィンネタでした。お粗末様。

『勿忘草』をテスト用紙に裏に書いてたら、どのテストで書いたのか忘れて紛失。一話丸まるおじゃんです。

ハロウインの機会に、載せる予定だったんだけどなあ。

ということで、代わりに『drop』でした。彼女馬鹿な彼氏達を楽しんでいただければ幸い。

甘いものはいかが？（前書き）

チョコレートとかマシュマロとか。甘いものはいかがですか？

甘いものはいかが？

< 藍華の場合 >

チョコレートというものは、甘いものだ。つまり、彼は好きではないと思う。

「思う、だけであって、別に嫌いって言われてないんでしょ？」

「いやっ。でもチョコレートだよ。好きなわけではないというか、むしろバレンタインデーにはトラウマがあるというか」

彼を知って、二度目のバレンタインデーだ。去年のバレンタインデーは散々な目に遭ってしまい、あまりいい思い出がない。むしろ……少々忘れたい思い出しかない。

「あら？ だって、藍華、去年まで我関せずだったじゃない。トラウマになる思い出なんて あー、その去年か」

姉が頭を抱えて言った。それから、『そうよねえ、トラウマにもなるよね』と一人で納得するように頷いた。反論することもできずに、あやふやな笑顔に流した。

去年まで、それは自分には関係のないものだった。

甘い匂いも、可愛らしいラッピングも、あちらこちらで起こる色恋沙汰も、全てが遠い世界のものだった。自分には関係ないと、信じきっていた。

痛くなるくらい切ない、あの想いを自覚するまでは。

「藍華？ えっと、大丈夫」

「大丈夫じゃ、ないかもしれない」

思い出すのは、籠った絵の具の匂いと、古い紙の匂い。それと、長い間動かされることのなかったキャンバスの匂い。気持ちのいい、すっきりとした匂いではなかったが、自分にとっては安心できるも

のだった。

それは今も変わらないが、それと共にある焦燥感が浮かぶ。

あの人を、彼を、取られてしまっくんじゃないかという、いやな感覚。あの頃には思いもしなかった。手に入れたばかりの『自覚』に一杯一杯で、そのとき感じた焦燥感など目も向けなかった。

自分の中に育っていた『想い』は重すぎて、醜い心に気付く余裕もなかった。だから、今更になって思うのだ。彼を、誰かに持って行かれてしまっくんじゃないかと。

手が震える。

あのとときの女の人、の声を思い出して。彼を傷つける声を、思い出して。彼の震える声は、もう遠くの方で囁くだけだ。

あの頃何度も再生したその声は、今ではこちらをからかうような声に上書きされている。だから、今はつきりと思い出せるのは、苦しさを内包した女の人の声だけ。

痛々しいまでに鮮やかに、はつきりとした恋の欠片たちは、忘れるには余りにもキレイすぎた。今自分自身が持つ想いよりずっと綺麗で、穢れを知らない。

「藍華、あんた本当に大丈夫？」

大丈夫じゃないって、言ってるじゃない、と笑いながら絞り出す声が、苦しげな息に紛れる。こんな酷い顔、彼に見せることができな^いよ。

だって、今、絶対変な顔してる。泣きそうな、叫びそうな、そんな顔してる。

「チヨコ、作るのやめる？」
やめない。

そう言い切れない自分が不甲斐ない。だけど苦しくて、悲しくて、ただ彼に見せられない顔をして、彼を求めた。

会いたいというよりも縋りたくて、助けてほしくて、無責任にも名前を呼んでしまいたかった。一年も前の記憶に怯えて、ありもしない腕を恐れた。彼を攫って行くかもしれないと思っ^ひた女の腕。

「市販でいいじゃない。付き合って一年目なんだし、ほらちょっといいチョコとか買ってさ」

励ますように抱きしめてくれる姉の背に腕を回して、きゅっと力を込める。

「チョコじゃなくてもいいしね。ネクタイとか、明日一緒に見に行ってみる？ 朔華ちゃんも誘って、久しぶりに三人でデート」

「……いいね、それ」

泣きたい、とかいうことじゃない。だけど一生付きまとうこの行事に、自覚しなくてもよかったのと思う。だって、きつと毎年思うのだ。

彼を取られてしまつ、と。彼が離れて行ってしまつ、と。

毎年毎年、それは繰り返し。

「会いたいなあ」

ただ、会えればまだ強がっていられる気がすると思った。

<優斗の場合>

「うわっ。うしろっ」

「うるさい」

落ち込んでいるのは自分でも分かっている。情けないことではあるが、一ヶ月前のことを気に病んでいるのだ。そんなこと、目の前のやつには言えない。

「あのー、つかぬ事を伺いますが。……チョコじゃないことを気に

してる、とか？」

「うるさい、黒田。帰れ、俺は忙しいんだ」

可愛いところがあるんですねえ、と呆れたような声に続いて、ネクタイだったのが嫌だったんですか？ と更なる問いかけをされた。

そういうことではないと、彼女なら分かっているだろうに。何て意地悪な質問なんだ。

「嫌とか、そういうんじゃないよ」

そういうことではなくて。

「藍華は、そういうことを気にする人間だと思ってたから」

前までの印象は、イベントに流されない人間。しかし今は、存外イベントごとに気を配る人間だということを知っている。それは姉達の影響もあるのだろうが。

「あー、あそこは色々楽しそうですもんね。家族単位というか、彼氏を巻き込んだの祭り状態というか」

納得するように頷いて、『それで』とにやりと笑った。綺麗なのかもめれない、だけど全く持ってそんな風に見えない笑顔。

人に嫌味を言い、弱みを突くことが何より楽しいと思っているんだと、疑わざるを得ない諸行の数々を思い出すと、自然と腰が引けてしまう。こいつを敵に回してはいけない、と本能が告げていた。

「それで、チョコレートを渡すという、日本でも指折りのイベントだったにも拘らず、ネクタイだったということについて悩んでいるのですか？」

いいじゃないですか、毎日身につけるものですよ？ 何の不満が？」

あんた甘いもの得意じゃないでしょうに、と呆れた呟き付だ。余計なお世話である。別に食べられないというわけでもないのだし。彼女にだって、嫌いではないと告げてある。

「何も言いつもりないぞ」

「結構ですよー、意地でも聞き出す。しゃべらざるを得ない状況を作ってるわ」

頑なに抵抗の意思を見せると、彼女はまたネコのような笑みを浮かべて携帯を取り出した。何をするのか、分かった気がする。

「黒田っ」

「藍華に電話しようかなあ。先生が、チョコレートについて悩んでるよって」

それともあれか、ネクタイが気に入らないらしい、とか？

「おまつ。止めるよ。それで泣くのは藍華だぞ」

「先生が大人しく言えば済む話です。で？ やっぱりチョコレートでないから？」

そうなのか、そうじゃないのか、分からなくて口を紡ぐ。ただ気になっていただけかもしれない。一週間前にあれだけ元気だった声が、ネクタイを渡すときは僅かに沈んでいた。

その理由を聞こうとして、失敗した。何と声をかけていいのか分からなかった。

「怖いの？ ようやく手に入れたモノを失うことが？」

「お前、容赦ないな」

「容赦なんて、する必要がありますか？ あれだけ彼女を振り回して、傷つけて、今もまた不安にさせてるかもしれないあなたに」

手厳しい言葉は、逆に目を覚ましてくれるかもしれない。

「不安に、させていると思うか？」

「あなたの過去の行動一つ一つが」

キツパリと答えた彼女に、お前なあとはくと、笑われた。

「でもその不安を消すのだって先生のお仕事でしょう？ 違うんですか？」

そして、先生の不安を消すのは藍華の仕事です。わたしの仕事じゃない。

「愚痴る暇があれば、そのケーキ持って行けばいいと思いますけど。わたしも、佳奈美にケーキ持っていくんで」

ちょうど同じ時間、同じ店に居合わせた元担任に言う言葉ではないだろうと思いつつも、ケーキの箱を持って車に戻るうとする。

「先生ー？」

「あ？」

「言葉でちゃんと言わなくちゃ、不安になることだってあると思いますよ。まして彼女は長らく、『片想い』だったわけですし」

「揶揄するような『片想い』はこちらの意気地のなさを責められていたような気がして、そつと肩を竦めた。そんなつもりはなかったんだが。」

「女の子から告白したんですから、自分ほど相手は自分のことを好きじゃないのかもしれない、なんて思ってるかもしれないですよ」

「……やつがそれを言うか」

「だって、先生はあまり認めないから」

惚れた腫れたなんて。

「俺、付き合い始めたら結構のめり込むぞ」

「知ってますけど」

「しかも、気になったきつかけだけなら俺のほうが先だぞ」

「それは知りませんが。藍華がそれを自覚しているかどうかは別じゃないですか」

確かに、と思うと同時に、心の中で相手に向かって叫んだ。

『俺はお前が思っているほど無関心なわけでもないし、のめり込んでないわけじゃないんだぞ』

もっーっ叫ぶとしたら。

「俺は、予想以上に藍華に溺れてるよ」

「それは知ってます」

これを彼女に伝えるのが難しいのだ。

甘いものはいかが？（後書き）

二人が会わないうちに終わるって言うね。ただ久しぶりに悩んで
いただきたかった。

バレンタインデー辺りの話を読み始めて、文章の書き方が違
いで泣きたくなった。読み返すものじゃないね。恥ずかしい。

真紀ちゃん好きです。あの子はティアより使命感に燃えず、三姉
妹より強い。そしてただのイタズラ好き。時々弱い。

振り回して、振り回されて（前書き）

どっちが、どっちだろう、なんて。
そんな二人です。

振り回して、振り回されて

優斗さんはよく、あたしを『人を振り回すやつ』と苦笑う。そのたびに否定するし、それは優斗さんのほうだと思った。

「藍華！。門の前にさ、イケメンさんがいるらしいよ」
「ふうん。で？」

授業が終わり、帰り支度をする。今日はこの後にあるはずだった授業が休講になったので、いつもより早く帰れるのだ。

その旨を昨日連絡しておいたから、今日は優斗さんの家で彼の帰りを待てる。それはすごく、幸せなことだと思った。

「何？ 興味ないの？ イケメンだよ？ ここにはいない、男だよ?!」

「いや、この学科にいないだけだし。大学自体に入るでしょ」
そんなこと言いつつ、携帯を出して見る。

不在着信？ 朔姉だろうか、春姉だろうか。そう思ってボタンを押すと、不在着信をするはずのない人の名前が現れて、あわてて携帯を耳に押し当てた。

『あー、藍華？ 今日お前、早めに終るんだろ。迎えに行くから、終ったら連絡な』
これが一件目。

『藍華。お前、まだ携帯見てないのか？ はあ、相変わらずだよな。今大学まで来てるから、終ったら門のところ』
これが二件目。

「ねえ、そのイケメンってさ」
「あ、やっぱり興味ある？」

友人に問いかけると、にっこりと笑われる。
イケメン自体に興味があるかと言われたら、人並みにはある。が、

わざわざ見に行くほどでもない。あたしの興味を引いたのは、そのイケメンが知っているかもしれない人だからだ。

もっと言えば、彼氏かもしれないからだ。

「スーツだった？」

「そう、だね」

スーツ姿で着たのかな。学校は、どうしたんだろう。いや、自分の彼氏だからと皆が皆あの人をイケメンと認定するのかどうかは気になるけど。

でも少なくとも、整っているような気がする。

「……車近くにあった？」

「いや、どうだろう。よく見てないけど。メガネかけてて、ちょっと冷たそうな感じで。不機嫌そうに煙草ふかしてたけどって、藍華?!」

「ごめん、帰る!」

教室を飛び出し、階段を下りる。一階に下りてすぐさま携帯で番号をリダイヤルした。

鳴り始めてすぐに取りられ、彼がどれだけあたしのことをまっくれているかと言う事実を知った。

「お前なあー」

「ごめんなさい! 今向かってるから。すぐだからっ」

電話を切って、足を速める。門までの道が長い。まだ遠い。こんなに走っているのに、どうしてこんなに遠いんだろう。

早く、早く彼の顔が見たいのに。

「平田」

そう思ったとき、後ろから呼び止められた。振り向く時間さえ勿体無く感じてしまったが、聞き覚えが一応ある声だったので返事をした。

「あ、戸田くん」

同級生。ついでに言えば同じ美術部（サークルじゃなくって、部）の人。

学科は違っけど、何度か賞を取ったことがある人で、絵の趣味も合うから何度か話したことがある。

とても気さくな人で、男女分け隔てなく接してくれる。……今回はばかりは、その性格が恨めしい。

「あの、急いでるから、えっと」

「あー、すぐ済むんだけど。今度の美術部の部会の話」

彼が済まなさそうに言ってくれる。言ってくれるくらいならさっさと済ませてほしい。彼が待っているから、と素早く断れないのは、『彼』という単語を使うことに慣れていないからだ。

彼が悪いわけではないと重々承知しているので、何とか文句を飲み込んだ。

優斗さんも、もう少しくらいなら待ってくれるはずだ。あとでたくさん謝ろう。

「あ、部会」

「うん。今度先輩達がどこかでお茶しようって。お酒絡みだと夜遅くなるし。そうしたら出れない人多いだろう？ だから」

確かに。夜が遅くなるともれなく門限のおかげで辞退せざる得なくなる。なので、あまりそういう類の集まりに出ていなかった。先輩達が気を使ってくださったのだろう。ありがたいことに。

それを、今日話すのが少しだけ恨めしいだけだ。

「そっか。いつ？」

「来週の土曜。部員全員に声かけるからって。で、平田、たまには飲み会にも来いよー。一年は俺とお前だけで寂しいからさ」

「うーん、そうだね。次は、行こう……」

『行こうかな』と口に出そうとした瞬間、ふわりと体が浮き上がった。

それはもう、何の前触れもなくて。戸田くんからの距離が急に遠くなり、焦って体をばたつかせれば怒ったような声が聞こえる。

心の奥まで震えてしまっ、深い声だ。

「お前なあ、藍華。人待たせとして、飲み会の相談とはいいい度胸だ

な

「せつ。優斗さん！」

先生と言葉を飲み込んで、慌てて名前を口にした。

目の前の戸田くんはぼかんとした後、くしゃりと顔を崩して笑った。人懐っこそうな笑顔は前々から好感を持っていたが、さすがにここまで笑われると少し恥ずかしい。

「平田、ごめん。急いでたって、彼氏来てたんだ」

「いやっ、あのー！」

言い訳しようとするのに、優斗さんは体を離してくれない。抱き上げられた体は熱くなって、顔まで真っ赤になっているだろう。

下ろして、と小さく交渉してみるも、彼はどこ吹く風で聞こえないふりをした。

いつもみたくないな、余裕そうな笑顔はなくて、怖いくらいの爽やかな笑顔だった。そう、まだ高校生だった頃に『怖い』と思ったあの笑顔だ。

絶対怒ってる。すごく怒ってる。あとでめちやくちや怒られるに違いない。そんな笑顔。

「いいって。彼氏さんが嫉妬するのも分かるし。あー、だから飲み会に来なかつたんだ。平田来るの楽しみにしてたのに」

「悪いな、予約済みだ」

彼の不機嫌そうな声が響く。何人かの生徒が、物珍しそうにこちらを見ていた。明らかに好奇の目にさらされているのに、優斗さんは全く気にしていないらしい。

それとも何か、この手の視線には慣れているのか。

「ちよっ、優斗さん！」

「飲み会その他、お断りだ。先輩にも言っとけ」

それだけ言っつて、優斗さんは歩き出す。戸田くんはまたあの笑顔を浮かべて、こちらに手を振ってきた。来週から、あたしどんな顔で彼に会えばいいの??

「ゆっ、優斗さん。下ろして、皆見てる」

「いいんじゃないか？ お前が誰のものか、一目瞭然だろ」

静かな声にびくつと体が跳ねる。低くて、冷たい声だった。嫉妬とか、そんな可愛らしいものじゃなくって、あたしの心をかき乱すような声だった。

「怒ってる？」

「当たり前だろ。折角仕事を早く切り上げてきてみれば、携帯に連絡はないし。女子大生は煩いし、探してみれば好青年と彼女が話してんだぞ？」

怒らない理由がどこにあるんだ」

それは、そうなのかな。でもただ話してただけなんだけど。本当に、それだけなんだけど。

「言つたろ、かなり前に。嫉妬って、本当はこういうもんなんだよ。お前が平田次女やその彼氏に向けた感情とはワケが違う。そんなに綺麗じゃない。理屈も存在しない。」

「つたく、本当に分かってんのか、お前」

俺はお前に惚れてるんだぞ、真面目に。

恥ずかしげもなくそう言われて、思わず彼の肩に顔を埋めた。

「恥ずかしすぎて、彼のほうを向けない。もう下ろしてもらわなくてもいいかもしれない。今彼に顔を見られたら、憤死する自信がある。」

「優斗さんでも、嫉妬するんですね」

「当たり前だ。俺はお前の彼氏で、お前は俺の彼女だぞ。いい加減、自覚しろ」

車が見える。キーでロックをあけた先生は、片手で助手席の扉を開いて、あたしを下ろした。

その手つきは口調の割には優しく、丁寧だった。そっと置かれて彼と離れば、にやりと笑われた。悔しい、こういう顔で見られると。

「お前、顔真つ赤」

「なっ。だって」

嬉しかったなんて、どうして言えるだろう。そんなこと、言えやしないと思う。

でもそれもそれでなんだか申し訳なくて、仕事が終わってすぐ来てくれたんだらうと分かるスーツの裾を掴んだ。

「優斗さん？」

「何だ」

「あの、好き、ですよ？」

謝ることもたくさんあるし、不機嫌にさせてしまったことへの言い訳もある。

何でこんなに早く仕事が終わるのかと言う疑問もあるし、女子大生が煩いってどういうことだと問い詰めてやりたい気持ちもある。とりあえず、たくさん口に出すべきことはあるけど。

言いたいことは唯一つだった。

「お前、真面目にときどき性質タチ悪いのな」

その言葉に問い返すより早く、彼が私の視界を塞ぐ。肩を掴まれて、唇を奪われた。大学の近くのなにも、色んな人がいるのに。

それなのに抵抗もできずにいると、彼はそつと離れて運転席に向かった。触れるだけの口付けは、最初の頃でこそ一杯一杯だったが、今では少しだけ物足りなくも思う。

完全に彼のせいだ。

「初めてさ」

「はい？」

運転席に体を沈み込めて、彼は苦いそうなそうじゃないような不思議な笑みを浮かべて肩を揺らした。

「大学生に戻りたいと思ったわ。マジで」

「そうですね？」

そりゃそうだろ、と優斗さんが煙草を出しかけてやめる。副流煙とかに気を遣ってくれるのか、あたしの前で彼は煙草を吸わなくなつた。

ほんの少し感じていた、煙草の香りさえなくなるのは寂しく思う

一方で、健康にはいいことだと思った。

煙草の煙を感じるたびに、『先生』を思い出していたけれど。

いつか、煙草の匂いと先生を結びつけなくなったら、他のものの匂いと優斗さんを結びつけるようになるのかもしれない。

「藍華？」

「何ですか、優斗さん」

「今日、泊まっていくか？」

冗談交じりのその言葉に固まれば、『意趣返し』とにやりと笑われた。あたしを遊んで、面白がっている。

「帰りますっ！」

「そうか、残念だな」

全く思ってたなさそうな声で言われても、からかっているようにしか聞こえなくてそっぽを向く。

そうやって、彼はときどきあたしを子ども扱いして楽しんでるんだ。

分かっているけど少し悔しい。

「じゃあ」

意趣返し？ されたらやり返しますよ、先生。

あたしはもう、あの頃のように何もできない高校生じゃない。

今はあの頃より少しだけ大人で、少なくとも優斗さんと付き合ってもいいような大学生で、それで外泊だってできるかもしれない年なんですから。

「今日、泊まります」

「へえ　って、それ本気？」

「もちろんですっ」

からかうような声が真剣みを帯びる。それに耐え切れなくなる前に返事をして、そのまま窓の外を見るふりをして彼から視線を外した。

多分、今顔中が真っ赤だ。手も震えてる。ばれるかもしれない。だけど、子ども扱いばかりじゃ、あの頃と何も変わっていない。

だから、『泊まる』なんて。

「藍華」

「何ですっ」

「何ですか！ と強気に問い返そうとした瞬間、後ろから引き寄せられた。」

シートベルトしてればよかった、なんて後の祭りで、助手席と運転席の間にある様々なものを通り越して彼はあたしを抱きしめた。

「あんまり、からかうな。手加減できなくなる」

「望むところです。あたしは、もう、高校生じゃありませんから無理やり後ろを向かされて、無理な体勢でキスされて。頭はくらくらとした感覚に襲われて、ここがどこでもいい気がしてきました。」

この感覚さえあれば、ここがどこだろうと関係ないなんて。彼の舌に翻弄されながら思う。

深く絡むとふわりと煙草の匂いがして、ああやっぱりあたしがいないところでは吸ってるんだと、そんなことを考えた。

やっと開放されるともう頭は酸欠状態で、息を吸うことだけで精一杯になる。彼がどんな顔をしているだとか、自分の体勢がどうなっているだとか。

そんなことは二の次三の次になっていた。

「俺を、翻弄するな。年下のくせに」

悔しそうな彼の声が聞けたから、今日はもう、それだけでいいかもしれない。

いつも振り回されてばかりだから。いつもあたしだけ、振り落とされないように必死にしがみついているから。

たまには、そう本当にたまには、あなたが振り回されてもいいと思いませんか、優斗さん。

振り回して、振り回されて（後書き）

大学生の藍華ちゃん。少し大人な二人。

そんなリクエストを（別々の方から）頂いたことがあったので、さらつと書いてみました、が。菊池、お前は菊池じゃないだろ。そこにいるのはどこの偽者だ。

そんな出来になりました。

相変わらず口が悪くて済みませんでした。菊池先生はお口が悪いです。（設定に書いてある）そこはかとなく、色気を追求できませんでした。

藍華ちゃんが思う以上に、藍華ちゃんは色んな人を振り回しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4224g/>

drop

2011年10月18日03時19分発行